

きみにとどくまで

1

V i v a e e

-前編-

笹竹颯夜

登場人物の紹介

＊はじめに＊

この小説は、２０００年から２０１１年までウェブサイトで公開していたものを一部改稿したものです。（ウェブサイトは２０１１年４月に閉鎖）

あらかじめご了承くださいませ。

２０１３年秋 笹竹颯夜

＊登場人物紹介＊

- ◆浅倉ヒカル...音痴だがひまわりが咲いたような笑顔が特徴的なお祭り娘。
- ◆群竹颯土（むらたけそうじ）...無口で無愛想、ネクラなムラタケと言われるヒカルの隣人。
- ◆水沢あかね...ふんわりとした雰囲気を持つ女の子。泣き虫でおとなしいが恋にはいつも一生懸命。
- ◆結野麻耶（ゆいのまや）...見かけは可憐な美少女。剣道の達人であり性格もシビア。
- ◆伊藤祐輔...真面目で友達思い。剣道で麻耶に勝つことを目標にしている。
- ◆大久保勇斗（はやと）...女好きでイイカゲンなように見えて実は一途。空手の達人で黒帯をしめる。
- ◆風間 響（きょう）...金髪長髪で校則破りの常習犯。口が悪い暴走魔。
- ◆田村優作...響の親友。仲間や後輩思いの`いい人`。
- ◆松山太郎...軽音楽部の先輩。やんちゃでお祭り好き。
- ◆松山次郎...軽音楽部の先輩。太郎の双子の弟。
- ◆柏木直弥...軽音楽部の先輩。知的で詩的な美少年。

狭い袋小路をバックで進入していたトラックが停まると、左側のドアが勢いよく開き、まだ幼さの残るふたりの姉妹が次々と道路に飛び降りた。

「はぁ……っ。息が詰まった…」

妹がおもむろに胸を押さえて道に屈み込んだ。

「家とか車とか人とかやたら多くて、窓から見える景色に全然隙間がなかったから目が回っちゃったよ」

妹は屈みこんだ姿勢のまま目の前の家に目を向ける。

「うわぁ…、これまた随分こじんまりとした家だね。うちの家族みんな入りきるかなぁ？」

両脇の家に、きゅうっと圧縮されたように見える新しい我が家を見て、家までせせこましい…、と妹は文句を言った。

確かに、道には人も車も溢れていてトラックの走り方はのろのろだったし、街道にもその奥にも家やビルなどの建物が隙間なく立ち並んでいたから、息が詰まる、目が回るという妹の意見には姉も同感だった。物心ついた頃から長い間、緑と土の香りが当たり前にあった長野の田舎町で育ってきたため、コンクリートやアスファルトばかりが印象的な都会の環境には違和感だらけだ。

だけどー。

姉は、たった今トラックで曲がってきた道路の向こう側を見た。だが、淡いピンク色がもやがかかるように続いているその場所を確認する前に、視界の中に入って来たのは姉妹の両親と兄弟が乗った乗用車だった。車は家の前に停まり、すぐに母親が降りてきて家の鍵を開けた。すると、トラックのドライバーは荷台を開き、荷物を運び入れる準備に取り掛かる。

「ねえねえ、お母さん！隣んちとの間がこんなちょっとしかないよ？長野の家は隣んちに行くまでに一分ぐらいは歩いたのに、ここ一秒だよ、一秒！」

妹が隣の家の門とこれから住むことになる家の門の間を、たった一步で移動しながら訴えた。

「うちのみんながドタバタしたら、隣通り越してもっと向こうまで響いちゃうね？」

「そうよ。だからあんたたちは少し、おしとやかにならないとね？」

「言う相手を間違ってるよお母さん！あたしたちじゃなくて、つよにいと哲平でしょ？」

母に続いて車から降りてきた兄と小さな弟は、いきなり指をさされて戦闘態勢に入ろうとするが、

「ほらほら、そんな話は後でいいから。荷物を運ぶのに邪魔よ。そこをどきなさい」

空気を察した母が阻止。姉妹に部屋の窓を開けてくるように言いつけた。そして兄弟には荷物運びを指示する。姉妹の方は家の中に、兄弟はトラックの荷台へと回った。

越してきた家は、建てられてからずいぶんの年月が経っているようで決してキレイでも今時のお洒落な造りでもない。二階に上がる階段は狭く、ふたり並んでは上れない。競い合うようにし

て二階に到着した姉妹は、カーテンのかかっていない小さな部屋に飛び込んで窓を開けた。ここが、これから姉妹が共同で使うことになる部屋だ。

「見てよ！隣んちの窓がこんなに近い！これじゃ、カーテン開けられないね？」

「なんで？」

「覗かれる」

「うそ。カーテンが開けられないのはいやだなあ」

姉は窓から身を乗り出して、隣の家との間の、狭い幅の向こう側を覗いた。遠くの方に見えたのは満開の桜並木だ。

「ねえ、あの公園は何ていう公園だろ？」

「墨田公園ってお父さんが言ってたよ」

父親から聞いた公園の名を妹が姉に教えた。

「ってことは、公園沿いに流れてる川は隅田川だね。歌で習ったことある！」

「どんな歌？」

「は一るのーうらーらーのーすーみーだーがわぁ～って歌！まさに、春のうららの隅田川じゃない！桜が満開に咲いてるし」

「……どーでもいいけど音程になってない歌はやめて…。なんて歌だかさっぱり分からないよ、それ…」

あまりにも調子っぱずれな姉の歌に、妹はやや辟易した。

「あれ？この歌聴いたことないの？」

そんな音程の歌は聴いたことありません…とキッパリ告げる妹の言葉にはかまわず、姉は話を続ける。

「家の近くに、こんなに桜がいっぱい咲く公園があるなんて嬉しくない？家から見えるんだよ？」

「そんだけ体を乗り出さないと見えないけどね…」

「まったく、あんたはいつもそういう言い方ばかりしてさ…。可愛くないよ？」

さっき、トラックが桜の公園前の道に差し掛かったとき、新しい家がこの近くならいいな、と姉は思っていた。だから、公園のまん前の道を曲がって停まった時は嬉しかった。

「桜がこれだけ咲くってことは、花見の客もいっぱい来るってことだよ？頭にネクタイ巻いた酔っ払いのおっちゃんたちに夜遅くまでドンちゃんやられたらたまらないよ」

シニカルな妹の物言いに姉がやれやれとため息をつきながら、ふと視線を向けた先に――。

「ねえ？これ何だろ？」

姉の言葉に妹も傍に寄り、ふたり一緒に壁の柱に注目した。ずいぶん年季が入った木の柱に、天然のものではない傷が二本ついていて。位置はちょうどお腹の真ん中あたり。低い場所に五センチほど高低差がある線がギザギザと二本ついている。

「あーあ。しっかり傷になっちゃってるよ。こんな目立つ場所の柱にいたずらしたヤツは誰だ」

妹は指で傷をなぞりながら不満気だ。

「誰だって、そりゃ前に住んでた人でしょう。古い家なんだし、多少の傷はしょうがないんじゃ

ない？」

「これが多少？こんなに目立つ傷があ？まるで子どもがいたずらにつけたみたいじゃない」
言われてみればそう見えなくもない傷だ。線は無理やり引っかいたようだし、真っ直ぐではないし。

「ここ、子ども部屋だったのかなあ。だったらいいなー」

子どもがこの部屋で遊びまわっている情景を想像して、姉は少し嬉しくなった。子どもは好きだ。どんな笑顔が泣き顔が、この柱の傷に刻み込まれているのだろう、と思う。

「ヒーねえは寛大ですね。あたしはお子様は苦手です。ウチのチビだけで十分」

「自分だってまだお子様のくせに、生意気言うもんじゃないよ？」

「失礼ね。あたしはもう子どもじゃないよ！中学生になるんだし」

そんな時、ふと。

向かい側の窓にかかるカーテンが揺れたような気がして、姉は二メートル先の窓を見つめた。だが、カーテンはしっかりと閉じられていて開く気配はまったくない。太陽が真上に来ているこんな時間になってもカーテンが開かないなんて、よっぽどの寝ぼすけか明るい光が苦手なネクラさんが住んでいる部屋か、そうじゃなかったら物置部屋にでもなっているのかな、と頭の片隅のところで思った。何にしても、やはり距離は近すぎる。こちらも厚手のカーテンが必要だな、と思う。

「さーて。頑張って荷物を整理しちゃおうよ！それが終わったら桜を見に行こう」

川沿いの公園で咲き誇る桜や、これからの新たな生活を考えると心が春のそよ風に吹かれるようにウキウキしてくる。だから、

は一るのーうらーらーのー

妙な旋律の歌を元気に歌ってしまう。妹がおもむろに耳に指を突っ込んでいるのも気にせず、上機嫌の姉は自分の荷物たちを部屋に次々と運び入れる。開け放たれた窓から吹き込む春の暖かな風が心地よいから、作業はスイスイとはかどった。

――私はきっと、この家もこの街も、そしてあの公園も大好きになる。そんな気がする。

そう思ったら、顔の筋肉も自然に緩んでしまい、

「無意味にニヤついてないでよね。不気味だから…」

妹の辛辣な言葉が飛んできた。

一九九一年、春。

父親の異動に伴い、長野から東京の向島に越してきた浅倉家は両親と四人の子どもたちの家族だ。

二男二女の子どもたちは全員この春に入学、入園を控えていた。引っ越しの翌々日にまずは長男剛（つよし）が大学生になり、昨日までに次女久美子の中学入学、次男哲平の幼稚園と続いた。そして今日は長女ヒカルが高校生になる日なのだが、浅倉家の朝は、

「ヒーねえくーねえ、おきろ！」

の声と、バーン、という炸裂音から始まるのが日課。四才の弟哲平が、耳元でおもちゃの鉄砲

を目覚まし代わりに鳴らすのだ。ふたりが飛び起きると次は一番上の兄を同じ方法で襲撃する。哲平は兄と姉たちを起こすのは自分の使命だと感じているようだが、起こされる三人は朝からほぼ瀕死。その度合いが一番ひどいのは剛で、鼓膜が破れるだの大学生は早起きしなくていいんだのだと、哲平の暴挙を許している母親を責めまくる。そこに久美子が一言、

「でっかい図体してるくせになっさけない！」

なんてことを言うと、その売り言葉を景気よく買ってしまう剛との兄妹ケンカという名のプロレス試合が始まる。これもだいたい毎朝のことだ。そして、この修羅場を収めるのはヒカル役目。

「兄貴、あんたは大学生でしょ！いちいち応戦しないの！久美子は女の子なんだから少しは恥じらいなさいよ。パンツ丸見えだから！」

やっと朝食にありつける頃には、せっかく着た制服も整えた髪もよれよれに乱れてしまった。今日はこれから高校の入学式があるというのにそんなことはお構いなしの家族たちだが、ヒカルはため息など吐かずに元気に家を飛び出した。

満開を過ぎた墨田公園の桜は春の風に花びらをひらひら泳がせている。浅倉ヒカルは、肺いっぱい朝の空気を吸い込んでから麗らかな風の中に颯爽と自転車を走らせるのだった。

公園の桜並木を後にして大通りを向こう側へと渡りほどなくしたところにある東京都立本城高校。その門を潜り抜けたヒカルは中庭に貼り出されているクラス編成表で自分のクラスがF組だと確認した。

その後始まった入学式は一部を除いて滞りなく進んで終わり、今日はもう高校生活三日目の朝だ。ヒカルはクラスメートたちがまだ数人しか集まっていない教室をぐるりと見回し、校庭が見える窓際の席に着いて話をしている少女たちふたりで視線を止めた。それから、よし、と心の中で気合をいれる。

ふたりの名前はもう知っている。長い髪を綺麗に編みこんで耳の上でふたつのおだんごを結っているのは水沢あかねという子。そして、透明な肌にエキゾチックな美貌を輝かせている少女は結野麻耶という名。可愛さ美しさがクラス内で際立っているこのふたりと是非とも仲良くなりたいと、ヒカルは入学式の日から思っていた。今日、初めて声をかけてみる。

「水沢あかねちゃんに結野麻耶ちゃん、おはよう」

あかねがゆるりとこちらに顔を向け、ふんわり微笑みながらおはよう、と返してくれた。

——か、可愛い……っ。

あかねの微笑みにヒカルは一瞬、眩暈がしそうになり、無駄に顔も熱くなってきたがそれは嬉しい気持ちからくる興奮だ。いきなり名前を呼ばれて驚いたように目を大きく見開いている麻耶も、あかねにワンテンポ遅れておはよう、と返してくれた。

「名前覚えてくれてたの？嬉しいな！」

こちらは美貌に似合わずカラッとした口調が心地よい。

「だって、ふたりはクラスの中で目立って可愛いもん。すぐ覚えちゃったよ。私は浅倉ヒカル」

「うん。知ってる」

麻耶とあかねが頷き合って笑う。

「私の名前も覚えてくれてたの？」

「浅倉さん、初めてのクラスなのに不安とかなさそうで、いつもニコニコしていて、しっかりしているなーって思った」

遠慮のない麻耶の言葉に、ヒカルは、あはは…と乾いた笑いをしてから考え込んだ。頼りない兄、お転婆な妹とやんちゃな弟の間に挟まれ、上の面倒も下の世話もこなしてきたヒカルは、昔からご近所さん親戚一同友人知人たちにしっかりもののヒカルちゃん、と言われてきた。褒め言葉には変わらないが、女の子として欲しい賞賛の言葉はいつも省かれている。

「あれ？何か気にさわること言っちゃったかな？」

「浅倉ヒカルちゃんってかわいいね、はやっぱり無いんだな…と思って」

心のつぶやきが思わず口に出してしまうと、あかねと麻耶は顔を見合わせて吹き出した。

「ヒカルちゃんはニコニコ笑顔がとっても可愛いよ。ひまわりみたいだもん」

「ひまわりか…。ずいぶん顔がでっかいなあ」

ふたりは今度は声を出して笑った。

「ごめんごめん、そういうつもりじゃないから！ほんと、最初から思ってたんだよ？笑顔がいいなーって！」

「ありがと！あたしね、三月に東京に越してきたばかりでまだ友達がいらないの。白状すると、入学式の時からふたりとは仲良くなりたいなーって思ってた。だから思い切って声かけてみた！」

「それじゃ、あたしとあかねが東京での友達第一号だね！」

「やった！ありがとー！」

柔らかな可愛さを漂わせているあかねとスパイシーな美貌を持つ麻耶。たった今言葉を交わしたばかりだが、このふたりとはきっと仲良くなれると確信できたヒカルは、それがとてつもなく嬉しい。

「ヒカルちゃんって、ほんとにとびきりの笑顔をする子だね」

まるで太陽のように顔をキラキラと輝かせるヒカルにつられて、あかねと麻耶も笑顔になる。予鈴が鳴り、やがて教室にはクラスメートたちが続々と集まり始めた。まだ、ほとんどがよそよそしい同級生たちだ。同じ中学からきた友人同士がぼちぼちとかたまっているような状態のクラスの中で、ヒカルと麻耶とあかねは既に意気投合を果たしていた。

◇

しばらくしてホームルームのために教室に来た担任の千田先生が、今日は君たちに決めてもらいたいことがある、と告げた。千田先生は少し薄くなった髪に白いものが混ざりはじめた男性で、のんびりとした話し方が特徴的な優しい雰囲気を持っている先生だ。

「本校では新入生入学早々恒例の行事でホームルーム合宿というものがあります。これは君たちに一日も早く学校とクラスに馴染んでもらうための合宿なんですよ」

そんな先生の話にヒカルの目は輝いた。昔から、学校行事やお祭りごとは大好きだ。

「一泊二日の日程の中、すべての行動予定は君たちに決めてもらいます。何をやってもいいのです。ただ、行き先だけは決まっています。福島県の猪苗代・磐梯高原です。それでですね、その実行委員をこのホームルームで男女三名ずつ選出してもらいたいのです。やりたいという人、この人にやってもらいたいという人がいたら手を挙げてみてください」

――これはやるしかない！

新しい友達を作るいいチャンスだし、何をやってもいいというのも魅力的だ。お祭り大好きなヒカルは、実行委員のスペシャリストと呼ばれていた中学時代を思い出し、ここでも早速挙手して立ち上がったのだ。

「私、やってみたいです！」

「えーっと、君は...」

千田先生は出席簿とヒカルの顔を見比べる。

「浅倉ヒカルです」

「はい。では浅倉さん、よろしくお願い致します。他には...」

ヒカルはあかねと麻耶に目を向けた。瞬間でヒカルの思惑を察知したのは麻耶の方だ。

「えーっと...、それじゃ、とりあえずあたしやります。この子も一緒に」

麻耶に腕を取られたあかねの方は、えっ...、と声を詰まらせた。そして、困り果てた顔でヒカ

ルを見る。

「一緒にやってみようよ。きっと楽しいよ？」

「ヒカルちゃん...」

ひまわりが咲いたようなヒカルの笑顔を心強く感じたあかねは心を決め、やりますと控えめに手をあげた。

「はい、それじゃ女子は決まりですね。男子の方はどうですか？女子にリードをされていますよ？」

千田先生はクラスをぐるりと見回す。

「じゃ、僕やります」

姿勢よく挙手して立ち上がったのはスポーツ刈りの少年だった。

「ゆうちゃん、立候補なんてすごいじゃな〜い！頑張れよ〜〜！」

一列おいた隣にいるツンツン頭の少年が大げさに拍手を送ると、

「がんばるのはお前も一緒」

ゆうちゃんと呼ばれたスポーツ刈り少年は、さっき麻耶があかねにやったようにツンツン頭の腕を取った。

「嘘お？オイラは実行委員なんてガラじゃないし」

「ガラは関係ないから」

「ええー。かんけーあるでしょ、思いっきり」

二人のやり取りにヒカルは自然と笑みがこぼれた。実直そうな印象を受けるスポーツ刈り少年は学級委員になりそうなタイプでツンツン頭の方はややいい加減に見えるが、そんなちぐはぐなふたりが面白いと思う。

「僕は伊藤祐輔です。こっちのごねている方は...、自己紹介ぐらい自分でしろよ！」

「オイラは大久保 勇斗（はやと）！でも実行委員なんて無理無理〜...」

「大久保くんも一緒にやらない？」

ヒカルは思わず勇斗に声をかけていた。

「え？オイラ？」

「ほら、浅倉さんもこうやって誘ってくれてるし」

まんざらでもなさそうな調子で、どうしようかなあ...と考え込むフリをする勇斗は、ヒカルの顔をマジマジと見つめてから、既に実行委員に決定しているあかね、麻耶と視線を流した。

「...えへへ。オイラ、やっぱりやってもいいかな〜とか思ったよ、今」

麻耶のところで視線を止めたまま惜しげもなく鼻の下を伸ばす勇斗に麻耶はもちろん、クラス中の女子たちがおもいきり引いているが、勇斗にはその空気が読めていないようだ。

「なにはともあれ...、これで男子もふたり決まりですね。あと一人お願いしたいんですけどね」

千田先生が再びクラスを見回す。が、誰も手を挙げる者はいない。

「困りましたねえ。なるべくなら自主的に名乗りをあげて欲しいんですけどね...」

と、生徒たちの顔をひとりひとり見つめ流す先生から視線をそらしたり、下を向いたりする男子たち。

「仕方ないですね。ではこちらから指名しますか…」

千田先生が出席簿を開いた時、後ろの扉がガラッと開き長身の男子生徒がうつむき加減に入ってきた。

「……遅れて…すみません…」

低い声で詫び、千田先生に向かって頭を小さく下げてからその生徒は自分の席についた。

――出た。ムラタケソウジ！

ヒカルは窓際に近い席に着いたムラタケソウジを、廊下側の席から眺めるように見つめた。

入学式の日、式典で新入生ひとりひとりの呼名が行われた際、生徒一人に対して一回だけ呼ばれるはずの名前を、五回以上連呼されていた名前がムラタケソウジだ。おかげでヒカルの脳みそは、あかねや麻耶の名前よりも早く、その名をしっかりとインプットしてしまっていた。静粛な入学式の流れを滞らせた一部、その張本人の顔も一緒に――。

「群竹くんだね？入学式に引き続いて今朝も遅刻ですか…」

千田先生がため息交じりに言うとおりの、入学式に遅刻し、自分の名前が何度も呼ばれていたタイミングに、寝癖が立ったまま堂々と入場してきたその人がムラタケソウジ。

「はい…」

「では最後の一人は君にしましょう。入学式と今日の分のペナルティです」

「は…？」

「ホームルーム合宿の実行委員ですよ。さあ、自己紹介をして」

「ホームルーム合宿の実行委員……？俺が…？」

「いやだとは言わないでくださいよ。さあ、お願いします」

不服そうな反応をする颯土に対して千田先生の口調が少し厳しい。

「群竹颯土…」

そう不機嫌につぶやいて颯土はプイと横を向いた。

「それでは授業に入ります。ああ、それから群竹くん」

颯土はうつむいていた顔を上げた。

「あとで生徒手帳に遅刻の理由を書いて、職員室に出しに来てくださいよ？」

「理由………」

――どう見ても寝坊…だよね。

今日も素敵に直立している後頭部の寝癖。思わずじいっと見入ってしまうヒカルだった。

そして放課後――。

教室の窓際の席に、颯土を除く実行委員のメンバーは集合した。ホームルーム合宿まであと三週間しかないため、すぐにでも一年F組の行動予定を決めなくてはならないのだが、まだ入学して三日目で、実行委員同士も親睦がはかれていない状態だ。

「群竹くんにも言ってあるよね？」

あかねが壁の時計を気にしながら祐輔に訊いた。

「さっき伝えたよ」

「彼、凄くイヤそうだったから来ないんじゃないの？あんまり協力的な人には見えないし」

「それはわからないよ？人は見かけじゃないから」

颯土に対してシビアな発言をする麻耶と、弁護をするヒカルだ。

「そのうち来るんじゃない～い？ほら、カバンもあるし、帰っちゃった、ってわけじゃないみたいだし」

呑気に颯土の机を指差したのは勇斗。

「そうだな。じゃあ、はじめてようか」

最初に祐輔がカバンの中から手帳とペンケースを出し、他のメンバーもそれになった。

が――。

「……とりあえず、何すればいいんだろう？」

ペンとノートは出してみたものの、何から実行委員会をはじめたらいいのか分からず、一同は首を傾げた。

「それじゃ、まずは自己紹介をしようよ。あたしたちが仲良くなないと、クラスの親睦をはかる企画なんて考えられないし」

「浅倉さんの言うとおりでな」

じゃあ、言いたしっぺのあたしから…、とヒカルは自分の紹介を始めた。

「浅倉ヒカルです。三月まで長野に住んでいたの。今の家はすぐ近く、隅田川のほとりです。趣味は読書とお茶とお華…、」

うそっ？！と、叫んだのは麻耶とあかねで、へえ…と感心したのは祐輔と勇斗。

「……とか言えたらカッコいいのだけど…、体を動かすこと楽しいことを考えてやるのが趣味。勉強は、数学は全然ダメ。国語はまあダメ。英語はかなりダメ…だけど体育と音楽は大好きです！どうぞみなさん仲良くしてね」

自分の紹介が終わると、ヒカルはにこっと笑った。つられて勇斗も、にこにこっと笑い、

「オイラと趣味も不得意学科もおんなじじゃん！個人的に仲良くしようよ～」

と、ヒカルに擦り寄った。

「はーい。そこまでな！」

すかさず祐輔が勇斗の後頭部をパシンと勢いよく叩き、やや身を退いているヒカルから引き離れた。ひどいよ、ゆうちゃん～、とベソをかきながら勇斗は後頭部をさすり口を尖らせる。あか

ねと麻耶は半ば啞然としながら男子ふたりを傍観していた。

「僕は伊藤祐輔。このあほと一緒に二中から来た。趣味は剣道。部活も剣道に仮入部した」

「あ、私も剣道部」

手をあげたのは麻耶だ。

「え？本当？」

「うん。私は結野麻耶。こっちの水沢あかねと一緒に三中から来たんだ。部活は剣道。得意な教科は体育で不得意はそれ以外」

祐輔と勇斗がほとんど口を開けた状態で無遠慮に麻耶を見つめていた。

「なに？どうかした？」

いや...、とやや赤くなった祐輔を、今度は勇斗が無意味に叩く。

「麻耶ちゃんは中学の時、都大会の個人で優勝して関東大会にも出てるの」

「うわ、顔に似合わず凄い！」

「マ、マジ...？」

ヒカルと祐輔が同時に感嘆の声を上げた。

「そう？べつに普通でしょ？」

イヤミなくあっさりと言う麻耶に、ヒカルはアップレ〜と拍手を送り、普通なのか...、と肩を下げる祐輔は、地区大会ですら優勝経験がない。

「まあまあ、そう肩を落とさずに。麻耶ちゃん目指してゆうちゃんも頑張ればいいよ。あ、ちなみにオイラは空手部ね。趣味は遊ぶこと。苦手は喧嘩」

勇斗はひょうひょうと自己紹介をして、さっきと同じようににこにこっと笑った。その時、颯土が無言で教室に入ってきた。白い胴着を着ている。

「.....」

颯土は一同をぐるりと見回すと、無愛想に、それでも遅れて申し訳ないといった様子で小さく頭を下げた。

「部活、初日だったから...」

ぼそぼそと言い訳をして颯土は適当に空いている席に座った。

「その胴着、もしかして...？」

勇斗が颯土を指差す。そしてその直後、

「あ〜っ！オイラもだよ〜！忘れてた！」

頭を抱え込んだ。中学の運動部で励んでいた生徒にはオリエンテーション前の仮入部が認められているため、颯土や勇斗の部活は今日が初日だったのだ。

「もう、部活終わっちゃった？」

詰め寄る勇斗に颯土は迷惑そうに身を退きながら答えた。

「いや...、ホームルーム合宿の実行委員会があるって顧問に言ったら出してくれた。これが終わったらまた戻る」

「だったら今日のところはさっさと終わりにしよう。群竹くん、みんなの名前覚えてる？」

ヒカルが颯土の傍らに立ち訊ねると、颯土は無言で首を振る。

「私は浅倉ヒカル。先月東京に来たばかりなの。友達を作りたいくて実行委員に立候補したんだ。そして結野麻耶ちゃん、彼女は剣道で関東大会に行ったキャリア持ち！水沢あかねちゃんは...、そういえばまだ聞いてなかった」

「私は実行委員をやるなんて思ってなかったしできるかどうかまだ不安...。部活はまだ決めてないの。中学の時はブラスバンドやっていたけど、この学校にはないからどうしようかなって...」

あかねは言い終わると祐輔に視線を送った。

「僕は伊藤祐輔。結野さんと同じく剣道部。実行委員はなんとなく勢いで手を挙げてみた。きっと理由は浅倉さんと同じだと思う。で、こっちは...、」

「大久保勇斗！キミと同じオイラも空手部なんだぜ～」

颯土は勇斗を横目で見て、フンッと鼻を鳴らした。

「簡単だけど私たちの自己紹介はこれで終わり。次は群竹くんのことを教えて？」

ヒカルの目は興味津々といった具合に輝いている。ほぼ無理矢理に脳内にインプットされてしまっていたムラタケソウジの詳細はいかに！だが、

「...教えてって...、」

何を...、と颯土は無愛想につぶやいた。

「え？だから群竹くんのこと。同じ実行委員になったんだし、色々知りたいから」

「名前なら...今朝言ったし、あんたたち覚えてるじゃないか」

颯土は面倒くさそうにため息をついてからつぶやき俯く。正確には今朝よりも前から覚えさせられていた名前だが、颯土に自覚はないらしい。

「ふーん...。まあ、今日は時間も無いからいいか。これから一緒にやっていくんだし、群竹くんを知るチャンスはいくらだってあるもんね！」

颯土は一瞬顔を上げてヒカルを見、再びうつむいた。

「空手部の二人は忙しいようだから話し合いに入ろう！私が仕切っちゃって悪いんだけどいいかな？」

ヒカルが実行委員のメンバーを見回すと、皆うなづく。

「クラスの親睦を深めるためのホームルーム合宿のようだけど、何もその日まで親睦を深めることを待ってることはないと思うんだ。まだ日があるし合宿までに親睦が深まったっていいわけでしょう？」

「そうだよね～」

「私たち実行委員はとりあえず企画を考えるけれど、でも中身はクラスみんなで決めていくのがベストだと思うの！」

「そんなの絶対に決まらないよ。実行委員を決めた時の男子たちの態度見たでしょう？結局人に任せて賛成か反対をするだけだよ」

麻耶がまたシビアに言う。

「だから、そこを私たちが考えるってのはどうかな？みんなが自然と実行部に参加していくようにしむけるの。そうすれば合宿までにきっと一年F組の親睦はなっているよ」

「どうやってしむけるの～？」

「それは企画次第かな。全員参加がないと実現できない企画を考えるの。たとえば班単位で何かをやるような、そんなやつ」

なるほど、と祐輔が頷いた。

「企画にみんなを巻き込むってわけだな？」

「そう！せっかく行くホームルーム合宿だもん。親睦がなった上でのクラスで楽しもうよ。面白い企画を考えてさ」

「今の浅倉さんの提案に異議のある人は？」

祐輔が一同を見回すと、何故かみんなの視線は颯土に向く。

「群竹もそれでいいかい？」

祐輔はうつむいて話を聞いているだけの颯土に向かって確認をとった。

――めんどくせえ…。べつに親睦なんかどうでもいいぜ…。

とは颯土の本音だが、どういうわけか実行委員の一員になっているから仕方なく、

「…ああ」

と、応えるしかない。もちろん、おもいきり無愛想に、だが。

「じゃあ決まりね！今日はここまでかな？」

「そうだね～。オイラも部活行かなくちゃ！仮入部の一年が初日からサボるわけにはいかないでしょ」

「続きは明日の昼休みでもいいんじゃない？」

麻耶が提案して、颯土を除いた一同が同意した。

「大久保くん、群竹くん、もう部活に行って！」

ヒカルが二人を促がすと、勇斗は慌てて教室を飛び出して行った。続いて出て行こうとする颯土にヒカルが声をかけた。

「群竹くん、部活わざわざ抜けて来てくれてありがとね」

颯土はピタリと足を止め、

「べつに…、」

無愛想につぶやき教室を出て行った。

「空手部って感じ…。すごい硬派…。ちょっと怖かった」

「硬派というより、ネクラって感じがするんだけど…」

あかねと麻耶が遠慮なく颯土に対する感想を述べ合う。

「彼、きっと浮くだろうな。何だか可哀想になっちゃうよ。遅刻してきたばっかりに…」

「大丈夫！群竹くんは無愛想だけど責任感はあるんじゃないかな！案外いいヤツって気がするし」

「名前なら今朝言ったし…、な～んて無愛想に言うヒトがいいヤツ？」

麻耶は、体を斜めに構え、低い声を出し、うつむきかげんな姿勢で颯土の口真似をした。あかねが似てる似てると笑う。

「……まあ確かに、ちょっと付き合いにくそうな感じはしたけど、実行委員はやるつもりみたいだしいいんじゃないか？わざわざ部活を抜け出して来たしね」

本人が消えた途端、印象の噂話からモノマネまで始まってしまった女子に、やや慄きを感じながら颯士を弁護する祐輔だ。

「部活といえば、大久保くんの空手部っていうのも似合わなくて笑えるんだけど…」

「あいつ、ああ見えても空手にかけちゃ一流だよ。黒帯だもん」

「黒帯？！嘘でしょ？全然そんなツワモノに見えないんだけど！ナンパだし」

飛び上がって驚いたのは麻耶だ。もちろん、ヒカルもあかねも驚いた。

「でも、こんなに可憐に見える麻耶ちゃんだって剣道の達人なわけだし、人は見かけじゃないよね。もしかしたら、群竹くんだったただのネクラじゃないかもしれないよ？入学式の日から寝癖つけて遅刻してきた度胸の持ち主だし！」

実行委員で集まったメンバーたちは、颯士も含めて一癖ある面白い面子ばかり。

高校は面白い。何もかもが楽しみ。やっぱり実行委員に立候補して正解だったと改めて思い、思わずにんまりとするヒカルだった。

あかねと麻耶は電車通学だが、ヒカルは自転車で通学している。実行委員の女子三人は、学校帰りに駅前の喫茶店に寄り道をした。ヒカルの家と駅は学校を真ん中にして方向が真逆だから、ヒカルにとってはかなりの遠回りになったが、喫茶店に寄り道、という高校生になったらやってみたいことナンバー５に入る素敵な誘惑の前にそんなことは大した問題ではなかった。三人でオレンジパフェを食べながら一年F組の話、ホームルーム合宿の話、クラスメートたちの話で盛りあがり至福の時を過ごしたヒカルが駅であかねたちと別れ、再び学校の前を通りかかった時。

もう薄暗い校門から自転車に乗って通りに出て来た颯土とバツタリ鉢合わせた。

「群竹くんも自転車通学なんだ？」

ヒカルは颯土の横に自転車を並べた。颯土はチラリとヒカルを見て、無言で発進。

「あれっ？無視ですか？ちょっと待ってよ！」

ヒカルは追いかけるようにしてペダルをこぎ、二人は同じ方向に自転車を走らせる。

「部活、今終わったの？」

「.....ああ」

面倒くさそうに答え、颯土はヒカルを引き離すように前に出て先を走る。

「はいはい。分かりましたよ...」

ヒカルはしつこく追うのをやめ、ややスピードを緩めた。ところが、どこまで行っても二台の自転車が道を分かつことはない。同じ道を颯土が前、ヒカルは後ろを走り続けている。そういえば後頭部の寝癖、いつのまにか直っているなあ...と、前を走る颯土の頭を何気なく見つめながらどこまでも。

——ところで、群竹くんちってどの辺なんだろう？

とうとう隅田川の川べりに出た。もうそこにヒカルの家が見える。颯土はスピードを緩め、ヒカルが曲がろうとしている角を先に曲がっていった。

——この辺なのかぁ。うちと近いんだな。

そう思っているうちに、二人は同時に同じ場所で自転車を止めていた。ヒカルはただポカンと颯土を見るしかない。

「何だ、おまえ？」

颯土の方はあからさまに不機嫌な顔と声だ。ヒカルがずっと自分の後ろをついてきていたことは気がついていたが、まさかこんなところまで来るなんてどういうつもりなんだ、と。

「何だと言われても、ここ、あたしんちだし...」

ヒカルは自分の家を指差した。

「なっ?!」

颯土はおもむろにギョッとし、おそらく、ヒカルが知るこれまでに初めてであろう大声を上げたのだ。

「なに、そんなに驚いてるの？」

「いや、べつに。いいから早く家の中に入れよ」

「そりゃ、入るけど…」

ヒカルは颯土の顔をチラチラ見ながら家の敷地に自転車を入れるが、颯土はその場から動かず顔をそむけて足だけをイライラしたように動かしている。

「群竹くん、なんでそこに立ってるの？」

「べつに！」

颯土の足はますます速いリズムを刻む。ヒカルは格子の垣根を挟んで向かい合っている隣家の玄関を見た。そして、ドアの横にある表札を確かめて――。

「あーっ？！群竹くんち、ここなんだーっ」

表札を指差し、颯土の顔と交互に見て叫んだ。ヤバイッ！といった顔をして、颯土は自転車をしまおうとそそくさと家の中に消えて行った。

「ちょっと！何で逃げるのよ！群竹くん！おーい！でてこーい！こらぁ～！」

――出て来いってなんだよ！行くわけねえだろっ。

颯土は心の中で叫び、さっさと二階に駆け上がった。ほとんどカーテンを開けない自分の部屋に――。

「しょーがない。また明日ね～！」

仕方なく諦めてヒカルもやっと家に入った。が――。

――あの寝癖の遅刻魔が我が家の隣の住人だったなんて！

もしや、カーテンの開かないあの部屋が彼の住まいなのか？寝ぼすけの遅刻魔で、ネクラくんで……、まるで想像していた通りじゃないの、と、ヒカルは面白すぎる偶然に顔がニヤけて仕方がない。さて、これからどうやってあのネクラくんと仲良しになろうか、その方法を頭の中で巡らしながらリビングに入ると、母親は台所で夕飯の支度、哲平は隣の和室でレンジャー物のテレビ番組にかじりついてた。

「ただいま。久美子は？」

「まだ帰ってないわよ？」

「いーえ。帰ってます…」

真後ろから久美子の低い声がして、ヒカルは思わず肩を震わせた。

「びっくりした…。背後霊みたいに立たないでよ」

「ヒーねえ、あたし、見ちゃったんだけど…」

「見ちゃったって何？まさか、背後霊？」

「もっと怖いものだよ」

なにそれ、とヒカルはやや神妙になった。

「夕暮れ時をトボトボ歩く妹の真横をスーッと通り抜けて、なんとかくん、待ってよーっ！な～んてかわいこぶってラブラブしちゃってる、世にも恐ろしいヒーねえを」

「なんだあたしか…。って、ええっ？！」

見てたの？と、ヒカルは首をすくめた。だが、べつにかわいこぶったつもりなど一ミリもない。ラブラブどころかおもいきり無視されて来たばかりだ。

「あの、わりとカッコいい男子は誰？」

久美子はヒカルにつめよった。入学早々、もう男の子と絡んでいるなんてちょっと羨ましい、とは言わないで。

「隣んちの息子みたいよ？」

「お隣の息子さんとどうしたって？」

食卓に夕食を運んで並べる母が、ラブラブ発言にやや心配げな顔をして訊いた。

「隣んちの息子があたしと同じ学校のしかも同じクラスだったの！おまけに今度のホームルーム合宿の実行委員まで同じでね、けどラブラブなんて...、」

「あんた、また実行委員やるの？！」

母親はヒカルに最後まで喋らせず、配膳の手を休めて叫んだ。

「そうだよ。立候補したの」

「またまた、ヒーねえのでしゃばり〜！」

「あんたも好きよね...」

中学時代から運動会、学芸会、修学旅行などほとんどの学校行事に実行委員として関わってきたスペシャリストなヒカルだ。母は隣の息子とラブラブな話よりも、高校でもまた早速実行委員に立候補してきたという娘にやや呆れている。

「活動的というか積極的というか物怖じしないというか...。いつになったら女の子らしい柔らかさが出るのかしら...」

「いいじゃない。おかげで友達もできたし、喫茶店に寄り道もしてきたし、今日は凄くいい日だったんだから！」

「そのお友達っていうのが隣の家の子？」

ヒカルは微妙にうなずいた。

「隣の息子も実行委員の一人。でも、仲良くなるにはかなり苦戦しそう。すごい無愛想なの」

「まあ、あんたの年頃の男の子なんてみんなそうよ。愛想のいい子の方がめずらしいんじゃない？」

母親は再び手を動かし始めた。今夜の夕食はかき揚げらしい。油と野菜の香りがプーンと漂ってきた。

「じゃあ、うちの兄貴はめずらしいんだ...」

「あれは愛想がいいっていうんじゃなくて、ただのバ...、」

「終いまで言うなよ、自分の息子捕まえて！」

腹減った一、とりビングに入って来た剛が、たまたま耳にした自分の陰口に途中でストップをかけた。それを、

「ただのバカ！」

久美子がしっかり締めくくってしまう。そうすると、

「何だと？！お前に言われると凄く腹が立つ！」

剛はムキになり第一ラウンドが始まる。そこへテレビを見終わった哲平がやってきて、見終わったばかりのレンジャーものになり切ってしまう。そして、既に別件で始まっているプロレス大会に参戦。浅倉家のリビングはお約束のように大騒ぎになった。母親はうんざり、といった顔で

ヒカルを見て、

「これ、なんとかして！」

ひとこと放つ。

「なんでいつもあたし～？！」

「諦めなさい。浅倉兄妹とりまとめ実行委員さん！」

「こんな実行委員はイヤなんだけどー！」

ヒカルはぶーぶー文句を言いながら、大荒れのリングの中に飛び込むのだった。

翌朝――。ヒカルはさっさと着替えを済ませるとカーテンをサーッと開いた。二メートル先の隣家の窓はまだカーテンが閉まっている。

――ネクラくん、おはようっ。

「ヒーねえ、朝から不気味な笑いはやめてよね」

欠伸をしながら二段ベッドのはしごを降りてきた久美子が、しまりのない姉の顔を見て辛辣な言葉を投げかける。

「何か企んでいるでしょう？」

「企んでいるなんて人聞きの悪い。ご近所づきあいをしようと思っているだけよ」

着替えが済んでいるヒカルは足取り軽やかに階下に下りた。そして、いつものようにひと悶着もふた悶着もあってから家を出ると、自分の自転車を門から出し颯土の家の前にピッタリとつけた。

「私もその無愛想な顔でもおがんでいこう！」

久美子が出てくるなりヒカルの横に立った。しばらくすると隣の玄関が開き、待ち伏せされているとは夢にも思っていない颯土が眠そうな顔をして出てきた。実際、まだ目が覚めていなかった。自転車を家の門から出す動作もおっくうそうだ。朝には相当弱いらしい。

「おはようっ！」

ヒカルが手をあげる。

「よっ！」

久美子も手をあげる。

門の前に立つ姉妹を見つけた颯土はおもむろにギョツとした。

「そんな、化け物見たような顔しなくてもいいでしょうが…」

「なかなかのオトコマエ。でもネクラはタイプじゃないな～！ざーんねん」

久美子は颯土の顔をマジッと見ながら遠慮なく言い、満足したように手をふってひと足先に駆け出した。

「なんだよ…」

「一緒に行こうと思って待っていたの！」

――はぁ…？なに言ってんの…？

待ち伏せされたり初対面の年下にネクラよばわりされたり of 颯土は、深い深いため息をついた。

「朝からため息をつくとか幸せが逃げちゃうよ？」

太陽の光を反映させたようなヒカルの笑顔が鬱陶しい。颯土は無言で自転車にまたがると、さっさと行ってしまった。

「ヒカル～、まんまとフラれたね？」

家の中から出てきた母親が、娘の見事なふられっぷりに茶々を入れる。だが、ヒカルはめげてなどいない。

「いやいや！予想通りのリアクションだから」

「待ってたの、一緒に行こう？」「おお、行くか、なんていう都合のいい妄想は初めからしていないのだ。でも、いつかは仲良くなりたいと思っている。家が隣で同じクラスだなんて幼馴染みだ。幼い頃からの友達にはなれないが、今からの幼馴染になることは出来るはずだから。

ヒカルが、行ってきます、と自転車に跨ろうとした時、

「颯土！」

群竹家の玄関から颯土の母親が慌てて飛び出して来た。颯土の母親は道に出て、すでに見えなくなった息子の行った先を眺めて肩を落とした。キレイな人だ、とヒカルは思った。上品にスカートをはいて、早朝なのにしっかりとお化粧もしている。思わず自分の母を見てしまう。

――色褪せたジーンズにノーメイクにひっ詰めてると言ってもいいぐらいに縛りこんでる髪...

そんな娘の視線の中に、言いたい言葉を察した母は、なによ？と小声でヒカルに抗議をしてから、

「おはようございます」

颯土の母ににこやかに声をかけた。

「あ、おはようございます...」

颯土の母は慌てていた様子を隣家の母娘に見られてしまったことを恥じたように、やや顔を赤らめて挨拶を返した。そして、手に持つ包みに視線を落とし、小さなため息をついた。

「それ、群竹くんのお弁当ですか？」

「え？ええ...」

「じゃあ、私、届けてあげます」

「あなたが？」

「私、群竹くんと同じクラスなんです」

「まあ、そうなの？」

颯土の母はずいぶん驚いたようだ。遠慮の無い目でヒカルをじっと見つめる。

「うちの娘なんですよ」

「浅倉ヒカルです。よろしくお願いします！」

「それじゃ、ヒカルさんに頼んでいいかしら？」

「はい！」

颯土の母から弁当箱を受け取り、ヒカルは自転車に跨った。行ってきまーす！とヒカルが手を振ると、母親も手を振り返して角を曲がっていく娘を見送った。颯土の母もやや控え目に手を振っている。

「元気のいいお嬢さんですね」

「それだけがとりえの娘なんですよ」

「朝からあんな素敵な笑顔が見られるなんて、浅倉さんが羨ましいわ.....」

しみじみと言う颯土の母に、ヒカルの母は、そうですか、と苦笑した。

「お隣のお嬢さんと同じクラスだったなんて、うちの子何も言わないんだから...」

「男の子なんてそんなものですよ」

「女の子はかわいいですね。はつらつとしていておしゃべりで。本当に息子ったら無愛想で困ってしまうんですよ。学校でもああなのかしら...」

「そうみたいです。娘が苦戦しているようです」

颯土の母親は、はぁ...と深いため息を吐いた。

「朝からため息をつくときが逃げて行ってしまいますよ？」

ヒカルは母親はそう言って笑った。

◇

ただでさえ遅刻ギリギリの颯土を待ち伏せしていて遅くなった上に、弁当箱を預かったりしたのでずいぶん遅れてしまった。もう中学生も歩いていない。ヒカルは全速力で自転車を走らせた。

校門にはもう誰もいなかった。時計を見るとすでに予鈴が鳴り終わった時間だ。

「マズイ！今日は私が遅刻！」

ヒカルは昇降口から教室まで全力疾走した。そして、一年F組に滑りこんだと同時に本鈴が鳴った。

「セーフ！」

自分の机についたちょうどその時、千田先生がやってきた。ホッと胸を撫で下ろしながらずっと横の颯土を見ると相変わらずうつむき加減に構えている。

「ん？」

うつむきかげんに構えているように見えて、颯土は居眠りをしていた。

――尖ってるんだかボケてるんだか、よく分からないキャラクターだなあ...。あ～あ...、今日もまたステキな寝癖が立ってるし...

確実に言えることは、朝にはめっぽう弱いつてこと。そして、かまわれるのが嫌いな性格だということは今朝の態度をみなくても既に判明している。忘れ物の弁当を自分が預かってきたといつて渡したら、颯土の自尊心というものを傷つけてしまうのではないか。そんな颯土を見てみたい気持ちはあったが、ヒカルは預かった弁当箱を休み時間にそっと机の中に忍ばせておいた。

そして四時間目が終わり昼休み。

――やべ。弁当忘れた...

颯土は今朝の自分の行動を思い返し、用意された弁当をカバンに入れた記憶がないことに気づいた。購買部でパンを買って済ませるしかないか――と思いながら、授業で使ったペンケースを机の中に突っ込もうと手を入れたとき、硬いものが手に触れて中を覗くと。

――.....？

頭の中にハテナマークがたくさん出現した。いつもの弁当箱が机の中に入っている。

――なんで机の中に...？

忘れたはずの、しかもいつもはカバンに入れっぱなしの弁当なのに、何故机の中にあるのだろう。不思議に思ったが、後から出発したヒカルが忘れた弁当を母から預かってきたなどと、そこまで気が回る性格ではなかった。きっと持って来たのだろう。そして自分で机に入れたのだ

ろう。朝はボケているから自分の行動がわからないことがよくある、と簡単に解決してしまった。

「ホームルーム合宿の実行委員はミーティングをやるから集まってください！」

あっちの方で祐輔が手を上げて叫んでいる。昨日の朝も寝起きでボケていた。だからこんな面倒なことになっちまったんだ、と、颯土は深いため息をついた。実行委員なんて、今までの自分にはまるで無関係な仕事だった。誰かと一緒に何かをするなんてことも無かったし、とにかく面倒でしょうがない。

――遅刻のペナルティって...、重すぎだし...。

自分の遅刻を棚に上げて千田先生を呪いたくなる。

「放課後は時間がないから、昼を食べながら話し合おうと思ってさ」

「じゃあ、みんなの顔がちゃんと見えるように机をくっつけよう！」

ヒカルが机を動かす。

「小学生の給食みたいだね！」

あかねも楽しそうに机を動かした。勇斗も麻耶も机を動かすが、颯土だけはそんなことをする気にはなれず、適当な椅子にさっさと座った。それでも、とりあえずは皆の顔が見える体勢は取っている。

「卒業アルバムの丸い人みたいに、ひとり離れてなくてもいいじゃない？こっち来いよ」

勇斗が呼ぶが、颯土は知らん顔で弁当箱を開いた。

――何だ？！この弁当は！

中身は十メートルも高いところから落下させたようにぐちゃぐちゃになっていた。

――...俺、いったい今朝何やったんだ...。

弁当に関する自分の行動を何一つ思い出せなくて不気味で、颯土は荒れた弁当を見つめたまま放心状態だ。

ヒカルはそんな颯土の表情を見逃さなかった。そして、そーっと立ち上がって颯土の弁当箱をのぞき、

「ありゃっ」

と、頭を抱えた。全速力で自転車を走らせたり全力疾走したりした被害がそこに及んでいるのだ。

――あ〜あ〜、おばさんの素敵なお弁当が...。玉子焼きとスパゲティとひじきがミックスされちゃってるよ...。

何を食べても同じ味になってしまいそうな中身を見て、ヒカルは放心状態だ。

「の、のぞくなよ！」

と、颯土に睨まれ、

「はは...、ごめんね...」

ヒカルは心底申し訳なさそうに呟いた。ごめん、の本当の意味は、おそらく百年経っても颯土は気付かないだろうが。

「それじゃさっそく...」

今日は祐輔が進行係を務める。

「僕の家になんなものがあったから持ってきた」

祐輔が机の上に出したものは猪苗代湖周辺のガイドブックだった。

「僕たちが泊まる宿舎はここ。裏磐梯高原荘」

「ねえ、この五色沼って何？」

五色沼は祐輔が宿舎を指した同じページにかなり大きなスペースを取って掲載されている。

「よく知らないけど、これによると探勝路があってそこにいくつかの沼が点在しているらしいよ。全部を回ると四キロってある」

「ここ、使えない？」

ヒカルが目が輝いた。

「五色沼？」

「この探勝路を使ってウォークラリーっていうのはどう？」

「ウォークラリーってなに？」

「各チームが五分とか十分おきにスタートするの。コースにはポイント地点を設けてそこではそれぞれ何かのイベントがある。例えばクイズだったりゲームだったり、それは何でもいいんだけど、そのイベントを消化する時間、クイズだったら正解の数になるけど、それと、各ポイント地点までの到達時間を測って一番短いチームが勝ちってゲーム！」

「それおもしろいじゃな〜い」

勇斗が弁当にがつつきながら言った。

「じゃあ、クラスをいくつかのチームに分けてそこにはそれぞれの実行委員がつく。各ポイント地点のイベントをそのチームで考えてもらうのはどうかな？」

麻耶が提案した。

「それはいい考えだ。各チームの中でウォークラリーに歩く人とイベントを担当する人がいる。チームごとの競争だから攻略が難しいイベントを考えるってのも作戦だ」

と、祐輔。

「そして、競争というからには負けたチームには罰ゲームでしょう」

と、勇斗。

「じゃあ、罰ゲームは実行委員の特権として私たちが決めさせてもらおうよ」

「ヒカルちゃん、何かいいアイデアでも？」

ヒカルは、ふふんと鼻を鳴らし、にま〜と笑った。頭の中には罰ゲームのある構想が出来上がっている。

「まあね。中学の時にやったことのアレンジなんだけど....、」

皆を近くに寄せてヒカルが罰ゲームの内容を小声で話すと男子たちはみるみる青ざめ、女子のふたりは面白そうに顔を歪めた。

「...絶対に負けられないなあ」

祐輔が呟くと、

――確かに....。

こっそり颯土もそこには同意した。

「...そ、それじゃこんな感じで帰りのホームルームで提案してみようよ。反対の人はいない？」

祐輔の言葉に一同はうなづいた。

「群竹もいい？」

ひとり遠くで聞いているんだかないないんだか、の颯土にみんなの視線は集まった。

「...ああ」

「そうやってサークルの外側にいられるのも今のうちだけだよ。群竹くんにも中心になって色々やってもらわなきゃならなくなるからね」

ヒカルはピシャリと言い切った。颯土はヒカルにムツとした顔を向け、何かを言い返そうとしてやめた。

——なんなんだ、こいつは。俺に何か恨みでもあるのか？

心の中で文句を言う颯土。

——なにさ。言いたいことを飲み込むな！

目で文句を言うヒカル。

「ちょっと、大丈夫か〜い？火花散ってるよ〜」

にらみ合っているヒカルと颯土を勇斗がなだめると、颯土はフンツと横を向いて自分のポーズに戻った。

「とにかくさあ、ホームルームで提案するならもう少し具体的に話を煮詰めようよ。クラスを何チームに分けるかとか、どのチームに私たちの誰が入るのかとかまとめないと提案できないよ」

麻耶がさりげなく話を軌道に戻したので実行委員たちは企画の整理に入った。そして決まったことは、四十人のクラスメートを十人ずつ四チームに分ける。五色沼の探勝路にある、るり沼、弁天沼、赤沼、毘沙門沼の四ヶ所をポイント地点にする。一般の観光客のことも考慮してイベントは人に迷惑のかからないものを第一条件に工夫する。四つの各チームに入る実行委員はくじ引きで決めた結果、ヒカル、祐輔はそれぞれひとつのチームに、そしてふたりでひとつのチームに入るのは勇斗と麻耶ペア、颯土とあかねペアだった。

あかねは不安の色を隠せない様子だった。ただでさえ引っ込み思案な性格だ。それがまだ慣れていない十人の友人たちをまとめなくてはならないばかりか、そのパートナーがよりによって颯土だ。下を向いて泣きそうな顔をしているあかねに、麻耶、祐輔、勇斗、ヒカルが注目する。あかねが何を不安に思い憂いているのかは皆見当がついている。

「あかね、そんなに心配しなくても大丈夫だよ」

麻耶があかねの顔をのぞきこみ、

「そうそう、ファイトだぜ〜」

勇斗も肩をたたいて励ます。

「群竹くん」

ヒカルの声に颯土は顔を上げた。

「あかねちゃんをよろしくね！」

「はあ？」

「あかねちゃんをリードしてあげてよ。こういうの慣れてないみたいだから」

「.....」

オレだって慣れてない、と口に出さずに反論する颯土は、無言でヒカルを睨む。

「大丈夫だよな。群竹ちゃんは男だぜ〜？」

勇斗が唐突に颯土の肩に手を回し、颯土は速攻でその手を振り解いた。

「あかねちゃん、群竹くんがついているから心配ないよ」

ヒカルは笑顔で言うが、それが一番心配なんだ、とあかねは心の中で叫んで頼りない目をヒカルに向けた。

「群竹くんはやるときはやる人だ...と思うんだ。まずは、信じてみなよ」

ヒカルはあかねにそっと耳打ちする。

「ヒカルちゃん？」

不思議そうな顔であかねがヒカルを見ると、ヒカルはニマッと笑った。

放課後のホームルームで実行委員たちは前に立ち、クラスメートたちに企画を提案し決めた内容が可決された。その他に、各チームの名前をそれぞれ決めたほうがいいという意見が出たので、それもチームで話し合うことになった。四チームに分かれたクラスメートたちはそれぞれに集まって来週までにイベントを考えることになった。

「小学生じゃあるまいし、馬鹿らしくてやってられないぜ！」

話し合いが終わりホームルームを解散しようとした時、ヒカルチームに入っている一人の男子生徒の声が響いた。

「どういうふうに馬鹿らしいのでしょうか？」

ヒカルがその男子生徒に向かって訊ねた。髪を黄色く染め長髪にパーマをかけた、クラスの中でも目立った存在である男子生徒、黒田一希はガタンと椅子を蹴って立ち上がった。

「そうやって浮かれてるのが馬鹿らしいんだよ。ウォークラリー？はあ？それが何だっていうんだ？」

クラスメートたちは一瞬にしてシュンとなった。馬鹿らしい...、そうだ。こんなことを真面目にやるのは馬鹿らしいのかもしれない。たかがホームルーム合宿だ。他のクラスは観光地を適当に回るだけで何もこんな企画は考えていない。深く考えなければそれですんでしまう行事なのだ。

「黒田くん、それはあなたの意見ですね？」

ヒカルは一希を見据えた。

「意見？そんな上品なもんじゃねえけどな」

「じゃあ、ただの愚痴だと受け取っていいの？」

「なんだと？」

鋭い目でヒカルを睨む一希だが、ヒカルは動じずにもう一度愚痴なのか意見なのかと訊ねた。

「意見だよ、意見！バカらしくてやってらんねえっていう俺の意見！」

不安そうな顔で自分を見つめるあかねに、ヒカルは任せてと目配せをし、一希には分かりましたと答えながら、ヒカルの目が輝いたのをあかねと麻耶はしっかりと見た。

「私たち実行委員は決めたことを一方的に押し付けるつもりはないです。だから意見があれば他のみなさんもどんどん言ってください。黒田くん、他に言いたいことはありませんか？」

「あるね。くくだらない！」

一希は言い捨てて、さっき蹴った椅子にどかりと座りなおした。

「では黒田くんが言った、浮かれているのが馬鹿らしい、くだらない、という意見に対しての私の個人的意見を言わせてもらいます」

一希はフンツと横を向いた。ヒカルはニヤッと笑みを浮かべて話を続けた。

「私は今日まで色々なことを学んで来ました。幼稚園ではありがとう、ごめんなさい、を言えるように教わり、小学校では友達と仲良く協力し合うことを教わり、中学ではそこに自分の意志を

確立し、なおかつ自律して自立することを教えてもらいました。高校生になった今は、今まで教えてもらった全てを自分自身にしていく時かな、って思っています。せっかくいいことを教わってきたのにそれを生かさないなんてもったいないと思うからです。たとえ小学生みたいだって、友達と仲良くして楽しめることを楽しんで、それに対して素直に浮かれていることを馬鹿らしいとかくだらないとは、私は思いません。どんな小さなことでも、ひとつひとつ真剣に大事に取り組んで高校生活を楽しみたいっていうのが私の意見です」

飾らない素朴な心が溶け込んだヒカルの言葉を、クラスメートたちは黙って聞いていた。教室の隅で椅子に座り、生徒たちの話し合いを聞いていた千田先生がパチパチと手をたたいた。

「素晴らしい話し合いです。続けてください」

千田先生はひとこと言うとまた静かになった。

「確かに僕たちは小学生の頃のように、素直に感動したりはしゃいだりするのが恥ずかしいと思うようになった。それでも部活を頑張ってるヤツや必死に勉強をするヤツはいるよな？そういう連中はやってることを恥ずかしがってなんかないし、馬鹿らしいと思ってもいないよな？クラスの行事に真面目に取り組むのもそういうことと同じなんじゃないかな」

祐輔が自分の意見を言い、

「そうだよな〜。高校は義務教育じゃないんだし、オイラたちは来たくて来たんだからさ〜」

あまり関係のないことを言うのは勇斗だ。

「私は今まで特別そんなこと考えたことなかったけれど、今、ヒカルちゃんの意見を聞いてなるほどな、と思いました！」

麻耶はサバサバとした口調で述べた。一希は腕を組み、発言するひとりひとりを睨んでいる。一希だけでなく、クラスの全員が実行委員たちを見つめていた。

「私たちはただの実行委員ですから決定権はありません。決めるのはクラスのみんなです」

ヒカルが締めるとどこからともなく拍手がおこり、その音が段々大きくなりやがて教室中に広がった。

「再び可決ってことでいいのかなー？」

勇斗がとぼけた口調で言うと、拍手がさらに大きくなったのでこの件についての話し合いは終了となった。

「それじゃ、黒田くんにあたしからお願いがあります」

一人拍手をせずにくされて一希にヒカルは言った。

「なんだよ」

「私のチーム、実行委員、私一人なのね。だから手伝ってくれる？」

「ああ？」

一希は心底呆気にとられた声を上げた。

「今の拍手で企画は通ったことになるし、黒田くんがホームルーム合宿に参加するなら我がチームということになるんですよ。だから実行委員のサブでいいから手伝って欲しいの」

「バカじゃねえの？何で俺なんだよ？他のヤツに頼めよ」

「黒田くん、自分の意見がちゃんと言える人だから。実行委員って結構みんなの前で喋ったりま

とめたりが大変なんだよ？」

今みたいに、とヒカルは笑った。

「俺の意見なんか結局却下されちまったじゃねーの」

「そーゆーことは関係ないでしょ？人が考えることなんてみんな違うと思うし、自分の思ってることを堂々と言い切れるたくましさが必要だと思うんですよ」

「黒田くんの場合、そーゆー意味で意見したわけでもないと思うけど……」

麻耶がボソッとつぶやくと、一希はヒカルと麻耶ふたりの言葉に喉を詰まらせ、クソッと床を強く蹴った。あかねは完全に怯え、ヒカルや颯土の後ろに隠れるようにして震えている。

「ヤダってヤツに無理に頼むこともないだろ…」

実行委員でありながらこれまで蚊帳の外で黙りこんでいた颯土が、みもふたもないことを呟いた。ムツとした一希は颯土を睨み、ふたりは教室の前と後ろでどっちも退かない視線バトルを展開する。

「やりたくないヤツにやらせても役に立たないし…」

——おいおいっ。

実行委員一同は颯土の発言におろおろするが、颯土の発言の真意は全く違うところにある。

「……いいぜ。やってやるよ…」

一希は、颯土の言葉に反発するように言った。そして、既に再び蚊帳の外に出て明後日のほうを見て退屈そうにする颯土をまた睨む。ヒカルはニンマリと笑った。

——ネクラくん、やるじゃん。

「じゃ、黒田くん。よろしくね！」

ヒカルがあっけらかんと言うと、一希は調子狂ったように、おお、と呟いた。

——なんだ、あいつやるのかよ。変わってんな…。

やりたくないから役に立っていない颯土は不思議そうな目で一希を見るのだった。

◇

それぞれのチームは昼休みや放課後にミーティングを開き、自分たちが担当するポジションのイベント企画を練った。

ヒカルのうさぎチームは一希の提案でペットボトルボウリング&わなげ大会に決まり、祐輔のしまうまチームはウルトラクイズ、勇斗と麻耶のタイガーチームはたし算ひき算プリント早解き競争に決まった。あかねと颯土のふくろうチームだけがなかなか話し合いがつかなかった。

「PK合戦」

と、男子が案を出す。

「それは…、一般の人に迷惑がかかってしまうから駄目です…」

あかねは小声で却下する。

「だったら、うさぎのボウリングだってそうだろう？」

男子が抗議すると、

「あっちはドッチボールを転がすだけだからいいみたいなんです…」

再び小声のあかね。

「ボールはボールだろう？」

「そうだけど...、うさぎチームのことはよくわかりません...！」

今にも泣き出しそうになっているあかねのそんな様子を傍観していた颯土は、やれやれといった具合にため息をついてから重い口を開いた。

「転がすのと蹴るのじゃ威力が違う。――で、体育系のイベントがいいのか？」

あかねとやりとりしていた男子がとりあえず納得してからうなずく。

「他の奴は？」

他のメンバーにも意見をふると、皆うなずいた。

「それじゃ...、なわとび」

颯土はつぶやくように言った。

「なわとび？」

さっきの男子はすっときょうな声を上げ、あかねの目も点になった。

「そうか、なわとびだったらたいして場所もとらないし、跳んでる人を皆で囲めば他人に迷惑もかからないもんね...」

女子生徒が呟いた。

「でもなわとびで何するんだよ？」

「単純に何分跳べるかでいいんじゃない？」

「それやっていたらキリがないぜ。俺なんか一時間は軽く跳べるし！」

「じゃあハンデをつければ？たとえば人口芝をひいた上で跳ぶとか、足に錘をつけて跳ぶとか」

「おお、それいいじゃん！」

颯土が一言、なわとびと言っただけで、あとはチームのメンバーが勝手に話し合っただけで内容を決定した。当の颯土は再びサークルの外側に引っ込んでいます。

「群竹くん、ありがと。やっと決まったね！」

あかねの顔には心からの安堵の表情が浮かんでいた。

「べつに俺はなにも...」

と、言いながらも、あかねのそんな顔を見て颯土の口元にも微かな笑みが浮かびそうになったその時。

「む～ら～た～け～ちゃ～ん！」

スキップでやって来て颯土の肩に手を回したのは勇斗だった。颯土の表情は無意識に元に戻り勇斗の手はさりげなくほどかれた。

「ふくろうチームのイベントは決まったか～い？」

勇斗はほどかれた手を再び颯土の肩に回す。

「なわとび...」

颯土は今度はその手をおもむろに振り払った。

「なわとび？」

勇斗は手を振り払われたことにも気づかないほど呆気にとられた。

「あかねちゃん、なわとびだなんてずいぶん地味...じゃなくて、ユニークだね」

「うん。群竹くん的一声で決まったの」

「ふ～ん。群竹くん的一声ねえ～」

なんだよ、文句あるのか、と颯土は心の中で呟く。だが、

「やっぱり群竹ちゃんはカッコイイなー。感心したぜ～」

と、嬉しそうに破顔する勇斗に再び手を肩に回されて、はっ、とバカにしたような息を吐いた颯土はプイと横を向いた。

「そうそう、部活の時間だぜ。一緒に行こうよ」

「何で一緒に行くんだよ...」

「いいじゃない。同じ部活に行くんだからさ。オイラたち仲間でしょ？」

仲間一一、という言葉が颯土は心に止めた。

一一くだらない...。チームメートとかチームワークとかいうのが煩わしいから俺は独りで空手をやっているんだ。ほっといてくれ...。

「ん？心の中で何か言ってる？声にしないとわかんないよ？さあ、行こうよ！」

「お、おい...！」

颯土は引かれた手を振り払おうとしたが、勇斗は気にもとめずに颯土の腕を引いたまま弾む足取りで教室を出るのだった。

ホームルーム合宿が一週間後に迫ったその日は、クラスメートたちの顔と名前も一致したということで席替えがあった。

「先生～、好きな席、好きな人の側に座っていいんですかぁ～？」

手を上げて、まるで小学生のような質問をしたのは勇斗だ。

「まあ、あんまりうるさいことは言いませんけど、授業に差障りのない程度に考えて決めてもらえますかね？」

はじめに今いる席から立ち上がり、廊下側の一番後ろに移動したのは颯土だ。ヒカルは真ん中の列のちょうど真ん中。あかねはその右ナナメ前、麻耶がヒカルの右ナナメ後ろ、ヒカルの真後ろで麻耶の隣に祐輔。となると、当然ヒカルの前、あかねの隣あたりに勇斗がやってくると思った一同だったが、

「オイラはここにする～」

スキップしながら勇斗が向かった席は廊下側の颯土のナナメ前だった。

「よーろしーくね、むーらたーけちゃん！」

勇斗は後ろの颯土を振り返りニッコリと笑った。

――だから、何なんだよ、こいつ...っ。

颯土は自分にまわりつく勇斗が鬱陶しい。実行委員会も一緒部活も一緒に、何かというと無意味に肩に回される手も邪魔でしょうがない。この上席まで近くなったらたまったものではない。そう思っていたところにやって来たのは一希だった。

「俺もここがいいんだけどなあ」

一希はやや凄みをきかせながら、既に颯土が決めた席に手を置いた。先日の話し合いでのことを根に持っているらしい一希は、あれから何かというと颯土に絡むが、颯土の方は特にそれを感じていないし、そもそも発端を忘れている。

「`授業に差障りのある奴、は隅っこでおとなしくしてた方がいいからなあ」

颯土は黙って一希を睨んだ。が、勇斗から逃れるために無言で席を一希に譲ろうとした。

「あれ？いいの？お前もここがいいんだろ？ジャンケンでもするか？」

――.....席ひとつであほらし...。

颯土は、べつにいい、と言って他の席を探した。が――。

「もう、ここしかあいてないよ？」

ヒカルが指差した席は、あかねの後ろで麻耶の前、ヒカルが隣で左右ナナメ後ろに祐輔と勇斗。

「.....」

これは、絶句するしかない。思わずもとの角の席を振り返ったが、そこは既に一希のスペースになっていた。

――.....。

「まあ、こっちでも宜しく頼むね、`お隣さん、！」

隣のヒカルがニマツと笑う。教室の真ん中の席。落ち着かない。しかも思いきり囲まれている。颯土は周囲に固まった実行委員たちを見回し、床まで届くほどの深いため息を吐くしかなかった。だが、

「群竹くん、よろしくね...」

前の席に座るあかねにふんわりと微笑まれ、どこかでホッとするような安らぎを感じもした。

「ホームルーム合宿ももうすぐだし、実行委員も頑張ろうね...」

「.....」

颯土は短く、ああ、とだけ返事を返した。

◇

午後は部活のオリエンテーションだ。新入生を勧誘する上級生たちが、あの手この手を使って我が部に新入生を迎えようと校庭や体育館で頑張っているが、麻耶と祐輔は既に剣道部に仮入部をしているし、颯土と勇斗も空手部の活動に参加している。

そんな中で、部活が決まっていないヒカルとあかねは、生徒会が発行している各部紹介のミニ冊子を眺めながら、教室の隅で頭を突き合わせていた。

「あれ？ふたりとも外行かないの？」

麻耶が教室でおとなしくいるヒカルとあかねに声をかけた。

「さっき行ってみたら勧誘がすごくて。危うく茶道部に入れられそうになっちゃって逃げてきたんだよ...」

ヒカルとあかねはふたりで校庭を歩きながら部活の紹介を見ていたが、二年生の先輩女子にいきなり両脇から捕まえられ茶道部の部室に連れ込まれたのだ。先輩たちは、名簿に名前を書くまで帰してくれない勢いで、あかねなどはあやうく記名しそうになったのだが...

「ヒカルちゃんが先輩に、あたしたち抹茶アレルギーなんですって...言って。抹茶に触ったり飲んだりするとじんましんが出て、ひどいと死ぬんですって...」

ぶわははははっ！

と、派手な笑い声がした方に三人が顔を向けると、そこで手を叩いて笑っていたのは一希だった。

「なんだそれ！断るにしてももっと言い様がなかったのかよ！」

「あったら部室に連れ込まれる前に言ってるよ。もう、ほんと大変だったんだから...。ね、あかねちゃん？」

「よく先輩たち信じてくれたね...」

麻耶は半ば呆然としている。

「抹茶飲んだら死ぬって...。しかもそんな子がふたりもいるって...、あはは」

言いながら、自分の言ったことが可笑しくなった麻耶はそこではじめて笑い出した。

「だから、今の麻耶ちゃんみたくポカーンとされてる隙に、失礼しますっ！って逃げてきたの」

一希と麻耶が爆笑しているところへ勇斗と祐輔がやってきた。

「楽しそうだね～。どうしたの～？」

麻耶がことの説明をしている間に、ヒカルは一希に向き合った。

「あんたは部活入らないの？」

「部活？めんどくせえし、バカらしいし」

「またそれ？黒田くんってなんでもバカらしいんだね」

ああ？と一希はヒカルを睨んだ。さっきまでの碎けた雰囲気を一瞬の間に消し、ほとんど殺気と言っているぐらいの険を含んだ目でヒカルを見る一希に、祐輔と勇斗はとっさに身構えた。

「何でもできそうなのにもったいないよ？」

「うるせえよ！」

突然大声で怒鳴り出した一希に、教室にいた生徒たちが注目し、そのまま退く。机に突っ伏して居眠りをしていた颯土も、そろそろと首を持ち上げて声がした方に顔を向けた。

「お前に関係ないだろが！」

「関係ないけど、気になるんだもん」

浅倉やめとけよ、と祐輔が小声でヒカルをたしなめたが、ヒカルは真っ直ぐ一希を見据えている。勇斗がヒカルを庇おうと前に出たが、ヒカルはそれを手で制して一希と対峙した。

「気になるだと？」

「そ。気になるから余計なこと言っちゃうの。やってみたら凄く楽しかったりいいことだったりするかもしれないのに、やんないうちにバカらしいって決めてるのってもったいし残念で。気になっちゃうよ」

一希は、お前はバカか、と言い放った。

「だったら抹茶アレルギーなんて言ってねえで、茶道部やればよかっただろ。やってみたら楽しいかもしれないぜ？」

あ、そうか！と目を丸くして叫ぶヒカルに、一希は一気に戦意を失くしたようだ。付き合ってらんねえ、と言い捨てて教室を出て行った。

「.....ヒカルちゃああん...っ」

途端にあかねが震えだし、ヒカルの腕にしがみついた。目には涙を浮かべている。

「瞬間湯沸かし器だ、あれ...」

麻耶は一希が出て行った方向を顎で指す。

「ヒカルちゃん...、心臓に悪いよ。オイラ、ヒカルちゃんがあいつに殴られるんじゃないかって思って焦ったじゃん」

「ごめん。でも、黒田くんは女の子を殴るようなヤツじゃないよ」

そうかな...、とあかねが小声で呟いた。一瞬で纏う空気を変化させた一希があかねは本当に怖かったのだ。だが、それ以上にそんな一希に一步も退かずに対峙するヒカルにも驚いた。

「ところであかねちゃん、抹茶部、入っておけばよかった？」

ヒカルは何事もなかったかのように話を部活に戻した。

「抹茶...、茶道部...？」

「そうそう！さっき黒田くんに言われて、そうかって思った。やらないうちから逃げてきちゃ悪かったかなって」

「...うーん。そうかもしれないけど...」

ヒカルちゃんは茶道部って感じじゃないよね...、とあかねはやっと笑った。
「あはは...。そうだね。いろんな部活があるけどさ、あたしはやりがいのある部活やりた
いなーって思ってるんだ」

「やりがい？」

「うん。みんなで心を合わせてひとつのことの為に頑張るぞー！みたいな部活」

青春だねえ...、と勇斗。じゃあ、運動部がいいんじゃない？と麻耶。

「バスケットかバレーとか、チームワークがものを言うでしょ？」

「バスケットか。いいかもね」

ヒカルはミニ冊子に目を落とす。バスケット部の紹介には在籍部員四十人とあった。

「うわ...。四十人もいちゃいつ試合に出られるか分かんないね」

「あかねは部活どうするの？」

あかねはミニ冊子から目を放し、

「とりあえず、今はホームルーム合宿の方で頭がいっぱいだから、終わってから考える...」

と、答えた。実際、実行委員の責任と仕事のことでいっぱいになっているあかねだ。

「そうだね！あたしもそうする。部活は逃げないもんね！」

「剣道部はいつでも歓迎するよー」

「空手部も！」

部活が決まったときはみんなで祝ってね、とヒカルは笑った。

――まったく...。人騒がせなヤツら...。

いきなりキレた一希も、退かないヒカルも、怯えるあかねも、そしてヒカルの盾になろうとし
た勇斗もどいつもこいつも鬱陶しすぎる。

机に伏せながら後方の様子を気にしていた颯土もとりあえず一息ついた。

一年F組のうさぎ、しまうま、タイガー、ふくろうチームの各メンバーたちは、自分たちのイベント準備に追われる毎日になった。ほとんどの生徒たちは放課後の部活動などそれぞれのスケジュールがあるため、それらを調整し互いに連絡を取り合いながらの作業だった。組み分けした当初はよそよそしかった仲間たちも、そういった活動を共にこなしていくうちに自然に親交も深まり、ホームルーム合宿までにはクラスが綺麗にまとまっていた。実行委員たちが考えていた通りの結果になったのだ。

そして、当日。

「天気がいまいちだね…」

バスが福島県に入ると空はどんよりと曇り始めた。一年F組の生徒たちはこれから五色沼へと向かう予定だ。雨天の場合の企画も考えようとしたが、もうウォークラリー以外のものを思いつくことが出来ず、レインコート着用で雨天決行でいいんじゃない？と誰かが言ったことに皆が賛成していた。だからと言って、やはり雨は嫌だ。一年F組の生徒たちは、バスの中から曇り空を望み、雨が落ちてこないことを祈った。

五色沼に到着すると、バスはまず毘沙門沼側の駐車場に入り、その入り口付近のポイント地点でイベントを担当する生徒たち数名を降ろした。その中にはヒカル、祐輔の実行委員と一希もいた。バスを降りた生徒たちは一足先に探勝路をポイント地点まで歩き、イベントの準備に取り掛かる。その後バスは再び走り出し探勝路の先の五色沼入り口側に向かった。ウォークラリーの出発点はこちら側だ。イベント担当のメンバーと実行委員の勇斗、颯土、麻耶、あかねはポイント地点までを急ぎ、歩くメンバーたちは時間が来るまで広場で待機した。

空は相変わらず曇っている。東京と違い五月の空気もまだ冷たい。待機のメンバーたちは各チームの班長の指示に従い整列していた。最初のポイント地点、るり沼のタイガーチームの準備が整う十五分後にうさぎチームから出発し、その後は十分おきにしまうま、タイガー、ふくろうと出発していく。タイガーチームの勇斗と麻耶、その他三人のイベント担当者は探勝路をるり沼まで走った。颯土やあかねのふくろうチームはるり沼の先の弁天沼まで行かなくてはならない。

「あかねちゃ〜ん、群竹ちゃ〜ん、それじゃ頑張ってね〜！」

るり沼で別れる時に勇斗はふたりに手を振って激励を飛ばした。あかねは走る颯土を追いながら手を振り返したが、颯土は当然知らん顔をして走り去った。

「相変わらずクールだなあ、群竹ちゃん」

「あかね、大丈夫かな…」

麻耶がぼつりと呟いた。

弁天沼へと急ぐふくろうチームの五人は、生い茂る木々の間の道幅の狭い探勝路を一列になって走っていた。ハンデの為に使う人工芝となわとびを持つ三人が先を行き、颯土、あかねと続いている。運動音痴なあかねは、ひょいひょい先を走る颯土を必死に追いかける。自分なりに精一杯走っているが、颯土との間はどんどん開いていくばかりだ。余裕がない自分が情けなくてあ

かねは泣きたくなった。

――泣いちゃダメッ。

もう高校生なのだ、と自分に言い聞かせ、込み上げる塊をグッと堪えるが、颯土たちはもう遙か彼方、一般の観光客たちにまぎれてしまってその姿が見えない。

そんな時、低いところに飛び出ていた木の枝になびいていた長い髪を取られあかねは身動きが取れなくなってしまった。湿った空気のせいで髪はもたつき、自分では手の届かない位置で絡まってしまっている。

「どうしよう...！」

颯土たちはもう見えない。

「もういや...っ」

自己嫌悪と不安が一気に押し寄せ、あかねは両手で顔を覆った。

その頃、遅れながらもついてきていたあかねの姿が見えなくなって颯土は足を止めた。

「群竹、どうした？」

前を走っていたチームの仲間が振り返る。

「...先に行っててくれ」

チームメンバーを先に行かせ、颯土は来た道に戻り始めた。

しばらく戻った場所にあかねはいた。

「何やってんだ？」

颯土は戸惑いを隠してあかねのそばに立った。あ...、と顔を上げたあかねの目が真っ赤だったのと、自分を見たあかねの安心したような顔に、颯土は一瞬だけ怯んだ。

「群竹くん、これ、取れないの...」

見ると、木の枝にあかねの髪の毛が絡んでいる。

「.....」

こんなことで泣いているのかと思い、颯土はため息をついた。

「ガキじゃあるまいし...」

颯土は枝に手を伸ばし絡んだあかねの髪をほどこうとした。が、自分のものじゃない細い髪を触るのが怖くてなかなかうまくいかないと、だんだんイライラしてきた。

――何で俺がこんなことしなくちゃならないんだ。

自分の髪だったら途中からブチッとちぎっているところだ。手を伸ばすのも中途半端な位置で疲れる。

「取れる...？」

「ちょっと黙ってろ」

颯土はそっけなく言うと、辺りを見回し人影のないことを確かめた。そして思い切ったように、あかねの髪を捕まえている枝をバキッと折った。

「む、群竹くん?!」

枝が手元にくると髪の毛はなんなくほどけた。

「行くぞ。そろそろうさぎが来る」

颯土は折った枝をひょいと投げ、さっさと先を行こうとする。だが、途中で思い直した。そして、

「おまえ、先に行けよ」

と、あかねを促した。

「ありがと…」

あかねは申し訳なさそうに呟いて走り始めたが、その髪がまたひらひらと空を泳ぐ。

「その髪、なんとかしろよ。また絡まるぜ」

「ああ、そうか…」

あかねはリュックのポケットからバレッタを取り出し髪をアップにしてまとめた。最初からそうしてりゃよかったんだ、と、颯土はため息をついた。

◇

一方、ウォークラリーの最終ポイント地点である毘沙門沼に、うさぎチームのイベント担当者たちはそろっていた。ボウリングとわなげの準備も整いあとは挑戦者たちを待つばかりだ。だが、普通に歩いても一時間はかかる探勝路だ。途中のイベントを行いながらここまで到達するにはまだまだ時間がかかりそうだった。

「退屈だなあ…」

一希はドッチボールを手にとり、さっき自分たちが並べたペットボトルの前に立った。

「行くぜ！」

一希はやや気合を入れ、ドッチボールをペットボトルに向かって転がす。ペットボトルはパンパンと音を立てて倒れた。

「おお…！」

周りで見ていた仲間が社交辞令的に声を出す。一希は次に輪投げのコーナーに行き、輪をとり、目標のペットボトルに向かって投げる。輪はなんなくはまる。

「おお…！」

仲間はまた声を出す。が、皆の心にはしらけた隙間風が通る。しばらくの沈黙――。

「つまんねえ～！誰がこんなの考えたんだよ！」

唐突に一希は大声を張り上げて怒鳴った。

「あんたでしょ」

一希の隣に立っていたヒカルが冷ややかに言った。

「これ絶対にしらけるぜ！俺の企画なんてこんなもんだよな！浅倉、何で却下しなかったんだよ」

おまえに誰が刃向かえるというのだ。気に入らないことがあるとすぐに怒鳴るしわめくし手に負えないんだから、と、周りの仲間たちは思った。一希がこの企画を提案したとき、こんな結果になることを誰もが予想したが誰も反対の意見を唱えるものはいなかった。皆、一希の持つ個性を恐れていたのだ。一般的に言えば、いわゆる不良、問題児、という言葉でくくられる場所にいるのが一希だったからだ。

「あたしは別にいいと思うよ」

ヒカルは一希を見上げた。

「いや、絶対につまんねえよ！」

「あんたが言うな！自分がいいと思って考えた企画なんでしょ？」

「ガキの時、何かの行事でやったんだよ。そんな時はおもしれえって思ったからさ」

でも、もうガキじゃないしねえ...、と他の仲間たちは声に出さずに呟く。

「ならいいじゃない。みんなだって一応賛成したんだし、昔みたいに楽しんじゃえば。他のチームのイベントだって内容的には大差ないと思うよ？みんな小学校レベルだしね。探勝路歩くだけでも大変なんだからイベントは息抜きって感じでいいんじゃない？」

「そうか...？」

「そうだよ」

ヒカルはにっこり笑う。そのナチュラルな笑顔に、一希は言葉を失くしてやや怯んだ。

「そ、そういやあ、罰ゲームってのも考えてるんだろ？」

「うん。最下位チームにやってもらう」

ヒカルは目を輝かし、わざとらしく笑った。

「その罰ゲームってどんななの？」

傍で二人のやりとりを聞いていた仲間が訊いた。

「それはまだ実行委員だけの秘密」

「俺には聞かせろよ。一応実行委員のサブだぜ？」

「だ〜め。言ったらつまんなくなるでしょ？」

「ケチだな、お前」

一希は退屈そうに、沼に石を投げる。空は曇っているが、目の前の毘沙門沼は深い青緑の色を神秘的に輝かせていた。

「.....私たちも探勝路歩きたいよね」

一人の女子が、探勝路から次々と歩いてきてはここ最後の毘沙門沼で感嘆の声を上げる観光客を見つめながら呟いた。

「じゃあ、まだしばらくは暇だし、途中までしかいけないけれど交代で行ってみる？」

ヒカルが提案すると、行く行く！と満場一致する。

「それじゃ、この先にある赤沼まで偵察部隊を派遣することにしまーす。偵察部隊は赤沼まで行ってウォークラリーの現在の状況を偵察してくるのね。私は実行委員だからここに残るからジャンケンで隊員を決めてください」

りょうかーい、とメンバーたちは隊員になりきって返事を返すが、その中に一希の姿がなかった。

「黒田くんはどこに行っちゃったかな？」

「あそこ...」

女子が指差したのはボート乗り場の栈橋だった。

「あいつ、ボートに乗る気なんじゃないか？」

男子が呆れたため息をもらした。迷惑なヤツーと、その目は語っている。

「じゃあ、ここは私と黒田くんが待機しているからみんなは行ってきていいよ」

ボート乗り場で一希は千田先生と揉めているようだ。三人の男女はヒカルと一希を残し、赤沼へと向かって行った。

「何やってんのよ、黒田くん！」

ヒカルは棧橋に駆けて行くなり怒鳴った。

「ボートに乗ろうとしたらよお、千田が駄目だって言うんだよ」

「あったりまえでしょーが！あんたねえ、何でそうやって一人でぶっとんでるかなあ...！」

ヒカルは腕組して一希を睨む。

「他の奴らは？」

「赤沼まで偵察に行った」

「あ、俺も行ってこよう！」

去ろうとする一希の手を、ヒカルはつかんだ。

「あんたは駄目。あたしとここで待機！」

「何でだよ」

一希はふてくされ、ヒカルを睨み返す。ケンカはいけませんよお、と千田先生はいつもの口調でふたりをたしなめた。

「ちょっと落ち着けば？ほら、戻るよ」

千田先生には大丈夫です、と笑顔で答え、一希のことは睨んだままヒカルは一希を引っ張って元の場所に戻った。

「...放せっての！」

ヒカルに繋がれていた手を振りほどき、一希はふてくされてその場に座り込んだ。何故か顔は真っ赤になっている。

「黒田くんさあ、みんなに怖がられてるよ？」

さっき一希が倒したペットボトルを並べながらヒカルは言った。

「何で？」

「あんたがそういうんだからじゃない？」

「どういうん？」

「わめく、怒鳴る、勝手な行動する」

ヒカルは冷たく言い放つ。

「みんながあんたに気を使ってるのがわからない？」

「また説教か？」

「違うよ。腫れ物になっちゃつまんないよ、ってこと。誰も本気であんたと付き合ってくれなくなるよ？」

「腫れ物？」

「そう。腫れ物は触らずにそ〜っとしておこう、って感じで」

はっ、と息を吐き捨てて、一希はそっぽを向いた。

「実行委員を手伝ってくれたり企画を考えてくれたり、あんたはいいヤツなのに、もったいないよ」

一希の目がまた剣呑に変わる。だが、ヒカルも退かない。美しく輝く毘沙門沼の前で、似合わない緊迫した空気を発散させたふたりは互いに相手から目を反らさずに睨み合う。その力を先に緩めたのは一希の方だった。

「...おまえ、もったいないが好きだな」

「だってもったいないんだもん。いいものはちゃんと使わないと宝の持ち腐れになるし、今のことは今やっとなかないと後になったら出来ないこともあるし」

「ふーん。だからお前は言いたいことをその場でポンポン言うんだ」

そんなにポンポン言ってるかな...、と空を見上げて考えるヒカルを見て、一希は根負けしたかのように笑った。

「あのね、あんただって言うよ？大音量ってオマケつきで」

「.....う」

「とにかく、もったいないことはしちゃダメだよ」

一希は答えずに、立ち上がってややわざとらしく伸びをした。

そして待機すること三十分。偵察部隊が戻ってきて、うさぎチームが赤沼に到着したからもうそろそろここにも来るはずだと伝えた。一希は、やっと仕事ができる！と腕を大きくのばしながら自分のポジションについた。

最後のチームが人工芝上のなわとび競技を終え弁天沼を去って行った時、るり沼でイベントを担当していた勇斗たちがあと片付けを終えてやって来た。

「こっちも終わったの？」

麻耶があかねのそばに来て言った。

「うん、あとは片付けてお終い」

「競技中に降らなくてよかったけど、何か天気が怪しいよね」

「そうだね...」

あかねは空を見上げた。麻耶ちゃ〜ん、行くよ〜、と向こうで勇斗が呼んでいる。

「じゃあ私たちは先にゴールに向かっているね」

麻耶は手を振り、勇斗の待つ場所に走って行った。

「あかねちゃん、群竹ちゃんを頼んだよ〜」

と、勇斗は叫ぶがあかねはさっきのことを思い出してたちまち赤くなった。頼まれなくてはならないのは自分の方だ。横目で颯土を見ると、勇斗の言葉など全く相手にしていないように敷きつめてある人工芝をはがす作業をしている。

「.....」

あかねの視線に気づいたのか、ふと颯土が顔を上げたので、あかねは目が合う前に視線を外した。

なわとびや使った小物をまとめてようやく仕事も片付いた。颯土とあかねを含む五人のメンバーは荷物を手分けして持ち弁天沼を後にする。ひとつの大きな仕事が終わりと、張っていた気持ちを少しだけ緩めることも出来てあかねは大きな息をひとつ吐いた。

「群竹くん、私、手を洗いたいから先に行ってて」

あかねはトイレの前で立ち止まり、自分の後ろから歩いてきていた颯土に言った。

「.....」

颯土は一瞬躊躇する。こいつを一人にして大丈夫か？と。

「すぐに行くから大丈夫だよ」

思っていたことを見透かされたような気がして颯土はややうろたえた。だが、

「分かった...」

それだけ言って歩き出した。

冷たい水で手と顔を洗い、あかねはため息をついた。

――どうして私ってこんなに頼りないんだろう....

ゝガキじゃあるまいし、と颯土に何度も言われたことを思い出し全身が熱く火照る。だが颯土の言うとおりで。あんなことで泣くなんてあまりにも幼すぎる。もう高校生なのだからしっかりしなきゃ、と思う。

――ヒカルちゃんみたいに…。

やることをちゃんとやって、言いたいこともちゃんと言って、それでいてみんなのことを気遣っているヒカルを見習いたい。ヒカルのように出来なくても、せめて人に迷惑をかけないようにしたい。

――群竹くん、何なんだこいつ、と思っただろうな…。

人に悪く思われるのはイヤだ。嫌われるのも悲しい。そんなことを考えながらあかねは鏡に映る自分を見つめ、その時に気がついた。首にかけていたはずのストップウォッチがない。周囲を見回してみたが落ちていない。学校から借りたストップウォッチだ。イベント中からずっと首にかけていたはずなのに――。

「沼のところで落としたのかな？」

あかねは弁天沼まで戻り、なわとび競技をやっていた辺りを探し始めた。

「あいつ、手を洗うだけって…、こんなに時間がかかるのか…？」

ずいぶんゆっくり歩いているつもりなのに追いついてこないあかねが気になり、颯土はふと足を止めて振り返った。女は色々面倒だ、と思いイライラする。べつに先に行ってしまう方がいいことだ。探勝路は一本道だし迷うことなどあるはずがない。だが、曇り空の上にもう夕方で辺りは薄暗くなっている。観光客たちももうほとんど歩いていない。

気になる。

――木の枝に髪を絡ませたくらいで泣き出すヤツだし…。

トイレに迎えに行くというのも何だし、颯土はその場であかねを待つことに決めた。

その頃、いくら探しても見つからないストップウォッチを仕方なくあきらめたあかねは再びゴールに向かおうとしていた。探勝路に出るともう誰も歩いていない。辺りは薄暗くなっているし湿った不気味な風が吹いてきた。今にも雨が降りそうだ。

背中がぞくぞくする。ひとりぼっちだと思うと自然と涙が込み上げてくる。

――ああ、もう！しっかりするんだって決めたばかりでしょ！

あかねは足早に歩き出すが、後ろから誰かついてくるような気がする。前から何かが突然飛び出して来るような気がする。

――ありえないから！変なこと考えないでサクサク歩きなさい、あかね！

自分を叱咤激励し先を急ぐが、一人だと思うと心細くて仕方がなかった。とにかく早くみんなに追いつこうと走り出した時、雨がポツポツと降ってきた。

「最悪……」

あかねは声に出してつぶやき、ふと前を見ると探勝路の端に飛び出している岩にもたれかかりながら落ちてくる雨を見上げている颯土の姿があった。

「群竹くん…」

――待っていてくれたの……？

そう思ったら、途端に我慢していた涙が溢れた。颯土はあかねに気がつきのっそりと体を起

こし、やっと来たぜ...、と小声でつぶやいてため息をついた。

「群竹くん...」

自分に駆け寄って来るあかねの、今にも泣き出しそうなその顔を見て颯土はまた戸惑った。

「泣くなよ！」

そう言われてあかねは涙を呑み込んだ。颯土の目が怒っている。

「何してたんだよ」

「ストップウォッチがなくて...」

颯土は再び深いため息をついた。

「これのことか？」

ポケットから取り出した颯土の手には、あかねが探していたストップウォッチが握られていた。

「あ...！」

「おまえ、さっき俺によこしただろう...」

「...そうだった」

片付けていた時に小物をまとめて颯土に渡したことをあかねは忘れていたのだ。

「どういう奴なんだ、おまえ」

「ごめん...」

あかねは下を向いて涙をこらえる。

「泣くなよ！」

颯土はもう一度言った。そして、自分のリュックの中からウィンドブレーカーを出して羽織った。

「おまえもさっさと着ろよ」

突っ立っているあかねに向かって颯土は冷たく言う。

「うん...」

「先を歩けよな」

「うん...」

あかねはウィンドブレーカーを羽織ながら颯土の前をトボトボ歩き出した。

——ほんと、最悪.....。

雨が降り出したことよりも、今の状態が最悪だ。あれだけ探したストップウォッチは自分で颯土に渡しておきながら忘れていて、そのせいで皆から遅れることになり、颯土を待たせて、今颯土は怒っている。全て自分がいけない。

——群竹くん、怖い.....。

後ろを歩いてくる颯土の気配に怯えてしまう。怖くて振り向けない。雨は霧雨になった。木板の探勝路は滑りやすく視界も悪い。

「みんな無事にイベント終わったかな...」

前を向き、歩いたままあかねは呟くが、颯土は答えない。みんなのことより自分のことを心配してろ、と思っているのだろう。ため息だけが聴こえてきた。

――群竹くん怒ってる…。

あかねはますます緊張する。嫌われてしまったと思うと、また涙が溢れてきて視界を遮られた。ただでさえ霧雨で視界が悪いのに、もうほとんど何も見えない。

前を歩くあかねの危なっかしい足取りを見ながら、転ぶなよ、転ぶなよ、と颯土は思っていた。そんな矢先に、

「きゃっ！」

あかねは歩道の板の隙間に足を挟んで転んだ。やっぱりな…、と、颯土はまたため息が出た。

「大丈夫か？」

「うん…」

あかねはもう自分が信じられなかった。最悪に最悪を重ね、このまま消えてしまいたいと思った。

「ほら」

颯土が差し出してくれた手を借りて何とか立ち上がることは出来たが、いたたまれない思いに潰されそうだ。

「大丈夫か？」

「……うん。平気。ありがとう」

これ以上颯土に自分を見られていたらおかしくなりそうで、あかねは少しでも離れようと早足で歩いた。だが、挟んだ足をくじいたらしく踏み込むたびに激痛が走った。それでも、その痛みは必死に隠して歩く速度は緩めない。ここで足を挫いていると颯土に知れたら、どれだけのため息をつかれるか分からない。

雨はどんどん強くなる――。

「おい！」

前を歩くあかねの歩き方がおかしいことに気づいた颯土は、あかねの腕をつかんで止まらせた。

「な、なに？！」

「そこに座れよ」

颯土は岩を指差した。

「足、見せてみるよ」

「え？！」

颯土に気づかれたことよりも、素足を颯土にさらすことの方にためらいが大きいあかねは躊躇した。

「だ…、大丈夫だから」

「いいから！」

颯土の怒鳴り声にビクリとし、あかねは仕方なく言われたとおりの岩に座った。

颯土は颯土で女子の素足に触れることに一瞬ためらったが、あかねの足首を持ち上げて靴下を

下げた。

——今すぐ消えたいっ。

あかねは真っ赤になった顔を両手で覆って泣きそうになる。

「泣くなよ！」

あかねの足首は見事に腫れていた。

颯土はリュックの中からいつも持ち歩いているテーピングを出し、丁寧にあかねの足首に巻きつけ処置をする。

「早く冷やした方がいいんだけど…」

湿布薬まではさすがに持ち歩いていない。

「大丈夫だから…、ごめん…、ありがと…、何か今日は本当に…」

続かない言葉をつぶやきながらあかねはゆっくり立ち上がった。もう二度と颯土の顔は見られないと思ったから、そのままぐるりと前方を向いて歩き出す。

こいつの足で歩いたらゴールまで何時間かかるかしれたもんじゃないな、と颯土は考えた。そして、

「これ持ってくれないか」

背負っていた自分のリュックをあかねに渡した。

「うん…？」

あかねは素直にそれを受け取るが颯土の思考が読めずに首を傾げた。だが、乗れよ、としゃがんだ颯土に背中を向けられた時。

——え……？

あかねは颯土のその行動が信じられずに立ち尽くし、差し出された背中を見下ろしたまま、ただ呆然とした。

「何してるんだ、早く乗れよ」

「やだ。歩けるよ」

「雨も降ってるんだぜ。おまえのその足じゃ日が暮れちまうだろ？俺だって早く帰りたいんだ」

颯土はあかねの手を掴み、強引に自分の背中に来させてそのまま背負って立ち上がった。

「む、群竹くん…？！」

「じっとしてろ！」

背中で抵抗するあかねを後ろに回した両手で押さえ、颯土は探勝路をゴールに向かって歩きだした。それでも、怪我をしたあかねの足首に歩く振動が響かないように、手のひらでしっかりと押さええている。

——群竹くん…。

あかねは今まで我慢していた涙が一気に溢れ出した。もう止められなかった。恥ずかしさと、情けなさと、そしてどこかで嬉しく思う気持ちと——。足首を押さええてくれる颯土の手から温もりが伝わって来る。

——頼むから泣かないでくれ。

背中に伝わるあかねの嗚咽に颯土は困り果てている。慣れていない。どうしたらいいのかわか

らない。今の自分の行動も訳がわからない。

――なにやってんだ、俺…。何でこいつを放っておけないんだ。

今日一日、あかねの為にずいぶん自分らしくないことばかりやっていたような気がする。今まで他人にそんなにかかわったことなんてなかったのに、何故だ。

「……重くて、ごめんね」

涙声のままあかねは言った。だが、重いとは思わなかった。颯土は一步一步をかみしめるように霧雨の探勝路を歩いた。

雨はますます強くなり、フードを被っていても濡れる。前髪から落ちてくる雫が邪魔だが、颯土は時々顔を左右に振り雫を飛ばしながら探勝路をゴールに向かって進んだ。

「重いでしょ？もう大丈夫だよ…。私、歩くから」

弁天沼付近からここまで、ずいぶん長い距離を背負ってもらっているあかねは颯土の疲労を気にする。怪我をした足は颯土がずっと支えてくれているから、今は痛みもほとんど感じない。

「……」

颯土は、あかねの怪我で歩けるはずが無いことを知っているから、うんともすんともなくもくもくと歩き続ける。この腫れ方だとおそらく患部は相当な熱を持っているから、少しでも早くバスに戻って冷やしたほうがいい。

何も言ってくれない颯土に、どれだけ嫌われてしまったのだろうと思うと、あかねは泣きたい気持ちがまた込み上げてくる。だが、もうそれは飲み込んで沈め、風で外れそうになる颯土のフードを空いている左手でそっとおさえた。

「……さんきゅ」

颯土はひとこと言って、雨の雫が跳ねるあかねの白い手にチラリと目をやり、歩調を速めた。

赤沼を通りかかると、イベントが終わり片付けをしていた祐輔が二人の元に飛んで来た。

「水沢、どうしたんだ？」

「足、くじいちゃって…」

祐輔がその足首を見るとしっかりとテーピングが巻かれ、颯土の手が支えている。

「これ、群竹が？」

颯土はバツが悪そうにうつむいた。

「その荷物、僕が持って行ってやるよ」

祐輔はあかねの手から颯土のリュックを取り、あかねが背負っていたリュックも受け取った。

「ありがとう、伊藤くん」

「いいから早く行け。ゴールにバスが待っているから」

「ああ…」

あかねを背負い、歩き去る颯土の後姿を見つめながら祐輔は嬉しかった。あいつもなかなかいい奴じゃないか――、と。

毘沙門沼まで来ればもうすぐそこがゴールだ。一年F組の生徒たちはゴールの方に集まり、もうすでにバスに乗車しているらしい。赤沼での片付けを終えた祐輔たちもすぐに追いついて来た。

――とにかく、早くこいつをバスに連れて行かないと。

……と、先を急ぎたい颯土だが、

「あかねちゃん！」

毘沙門沼での片付けをしていたヒカルが飛んで来てまた足止めを食う。ヒカルは機関銃のように色々と訊いて来たが、あかねが捻挫した、ということだけを簡単に説明して颯土はさっさとバスへ向かった。

「水沢、どうしたんだ？」

仕事を終えて来た一希が、背負われて遠ざかって行くあかねを見送りながらヒカルに訊いた。

「弁天沼の方で足をくじっちゃったんだって」

「あいつ、ずっと背負って来たのか？」

「そうらしいよ」

ヒカルは、あかねの足をしっかりと支え、力強く歩く颯土の後ろ姿を見つめた。

「根性あるなあ…」

「勝手にアンチ群竹、だった一希も感心したように呟いた。

「あんただったらどうすんのよ。もしもあたしが足くじいたらおんぶしてくれるの？」

ヒカルは少し意地悪な目を一希に向けた。

「どーかなー。お前、重そうだしな～」

と、一希も意地悪な顔をする。

「どうせね！あんたになんか背負われたくないわ、こっちだって！」

一希に悪態をつきながらも、あの群竹くんがねえ、とヒカルは笑みがこぼれる。

「何、ニヤついてるんだよ。さあ、こっちは終わったからとっとと帰ろうぜ！」

「そうだね。風邪ひいちゃつまないしね！」

ヒカルと一希も急いでバスに向かった。

◇

一年F組全員の生徒がゴールするとバスは速やかに動き始めた。あかねの足首は応急的に冷たいタオルで冷やされ、颯土もとりあえずホッとする。そして、生徒たちは動くバスの中で雨に濡れた髪や荷物を拭うのに忙しい。千田先生の、

「はいはいみなさん、お疲れさんでした。宿舎に到着したら出来るだけ早めに入浴して体を温めてください」

のんびり口調の話はほとんど聞いていないが、

「実行委員からいいですか？」

マイクを取って立ち上がった祐輔にはみな注目をした。

「雨の中のウォークラリーご苦労様でした。各チームの結果が出ましたので発表します。採点は歩いたタイムとイベントの結果を集計して総合で出しました。もちろん一番数の少ないチームの勝ちということです。では、まずうさぎチーム、タイムは1時間43分、総合得点136点！」

うさぎのメンバーたちはうおお～っ！と拍手をする。祐輔は次々と結果を発表し、優勝は颯土とあかねのふくろうチーム。最下位は祐輔のしまうまチームとなった。バスの中で座席がかたまっているふくろうチームのメンバーは手を取り合って喜び、しまうまメンバーはガックリと肩を

落とした。あかねは通路を挟んだ向こうの座席にいる颯土にチラリと目を向けた。すると、颯土も同じことを考えたのか、こちらに目を向けていた。そして、一瞬あとには互いに目を反らしていた。

「ここで実行委員の胴上げ！といきたいところですが、ここはバスの中、そして実行委員である水沢さんは名誉の負傷をしていますので、そこらへんは宿舎に帰ってから勝手に、じっくりと喜びを分かち合ってくださいね～」

水沢さん大丈夫？と男子も女子も口々にあかねを心配する。そして、ずっとあかねを背負ってきた颯土を称えた。

「群竹いいなあ～、水沢さんおんぶできて～」

と、勇斗のようなことを言うふくろうチームの男子たちに、あかねは、よくないよ...、と小声で抗議した。

「そんなこと、言わないで...」

うつむいたあかねは今にも泣きそうだ。

――群竹くんは...、災難だったんだよ...。

そんなあかねの様子に、颯土をからかった男子たちも優勝の喜びを横において沈む。

「.....え～、なお、優勝のふくろうチームには賞品として購買部人気ナンバーワン商品、ハムカツパンのタダ券が千田先生から贈られます！」

「はあ？私はそんな話は聞いてないですよ？」

言っていない。これはたった今、ふくろうチームの空気を読んだ祐輔が決めた賞品なのだ。

「先生、生徒が雨にぬれながら頑張ったんですよ。そこは先生の器量でよろしくお願いします」

祐輔の言葉に、ややしゅんとなっていたふくろうメンバーたちがそうだそうだと同意した。

「仕方ないですね...」

「そして、最下位のしまうまチームですが、僕もその一員ですが...、罰ゲームが用意されています...」

言いながら祐輔は、あれをやるのかぁ...、と顔をしかめた。

「それって、どんな罰ゲームなの？」

「それは...、」

質問をしてくる女子に、祐輔は言葉に詰まる。ちょっと貸して、と祐輔からマイクを取ったのはヒカルだ。

「それはまだここでは発表しません。宿舎についたらしまうまチームの皆さんは伊藤くんの部屋に集まってください。伊藤くんと同室の人は悪いんですがその時だけちょっと席を外してください。夕食のあと、一時間だけ食堂を使わせてもらう許可をとってあります。そこでみなさんの前でしまうまチームの罰ゲームを披露したいと思います」

「ずいぶんもったいぶるんだなあ」

と一希。

「この罰ゲームには少々準備が必要なんです。ね、伊藤くん？」

「そ、そうなんです...」

祐輔は頭を抱えてうつむいた。

そして、バスは宿舎に到着。生徒たちは各自の部屋へと散っていく。ヒカル、あかね、麻耶の三人娘はもちろん同じ部屋だ。怪我をしたあかねのところに養護の沢渡先生が来て手当てを始めた。

「ずいぶん腫れているから今日は入浴しちゃ駄目よ？」

沢渡先生はあかねの足首に湿布を貼りながら言った。

「はい...」

「でもこれですんでよかったのよ。このテーピング、完璧な応急処置だわ。背負ってもらったのも正解。そうでなかったら今ごろ熱が出ていたかもしれないわよ？」

あかねはうつむいて唇をかみしめた。

「じゃあ、無理をしないようにゆっくり休んでいなさいね」

沢渡先生は部屋を出て行った。

「あかねちゃん、あとのことは心配しないでここで休んでいてよ。私と麻耶ちゃんは伊藤くんの部屋に行って罰ゲームのことを決めてくるね」

「うん...」

あかねは小さくうなづく。ヒカルと麻耶は着替えをすませ、あかねを残して部屋を出た。

祐輔の部屋にはしまうまチームのメンバーと実行委員たちが集まって来ていた。

「罰ゲームっていったいどんなことするんだ？」

ものものしい雰囲気、男子生徒がやや慄いたように訊いた。

「じゃ、伊藤くんの口から発表してください！」

祐輔は鼻をポリポリかきながら、呟くようにぼつりと言った。

「なにわ口ミオとジュリエット...」

しまうまメンバーたちの頭の上には一斉にハテナマークがつく。

「これです！」

麻耶がまるめてあった模造紙をくるくると開いて壁に貼り付けた。

「この寸劇を、男役には女子が、女役には男子がという具合で入れ替わってやってもらいます！」

模造紙にビッシリ書き込まれていたのは登場人物たちの台詞だ。当然、しまうまの一同は、ええー！と声を上げた。

「さあ、時間がないから配役を決めてください。練習もしておいた方がいいよね。伊藤くん、あとは責任をもってよろしくお願いね」

「え？僕一人で？」

「当たり前でしょう。何のための実行委員よ。私たちはこれからお風呂に行ってくるんだもん」

容赦のない麻耶にサバサバ斬られ慄きかけていた祐輔だが、

「あかねちゃんも部屋で待っているし…」

ヒカルの言葉に先ほど五色沼で見た光景を脳裏に浮かべて颯土に目を向ける。

「水沢、あれからどうした？」

「沢渡先生が、応急処置が完璧だったって言ってた」

「群竹くんがあかねちゃんを背負ってなかったら今頃熱が出てたかもしれないって」

「群竹ちゃん、さすがだね～」

勇斗が例のごとく、颯土の肩に手を回す。

「…運動やってる奴だったら誰だって同じ処置しただろう」

テーピングを巻くぐらい、運動部の人間なら普通にやる処置のやり方だと、颯土は相変わらずの無愛想だ。

「でも、群竹くんがいたからあかねちゃん助かったんだから」

たかが捻挫の処置をただけで大げさなんだよ、と思っているところに、

「カッコイイね～」

勇斗が肩をポンポンとたたく。

——そういうの、やめてくれ！

颯土はスッと立ち上がると無言で部屋を出て行ってしまった。

「あいかわらず硬派の姿勢を崩さない奴だなあ。水沢を背負ってたあいつ、ほんとカッコよかったのに」

「それが群竹ちゃんでしょう。まあ、いい奴だってことは分かってるんだし、いいんじゃない？」

「そんなことより、私たちは早く温泉に行こう！じゃあ伊藤くん、しまうまのみんな、がんばってね！」

麻耶はヒカルの手を引いてスタスタと部屋を出て行った。

「こんな罰ゲーム考えたの誰だよ…」

と、模造紙に書かれている寸劇の台詞を目で読んでいた一人の男子生徒が言った。

「`あ、がつく人…」

祐輔はため息をつく。

「あかねちゃんの`あ、じゃないからね～」

となると答えはひとり——。

しまうまチームの男子たちは、`あ、がつく人が考えた『なにわロミオとジュリエット』の配役決めをすることにした。

ヒカルと麻耶が部屋を出て行った後、あかねは畳にころんと転がった。膝を抱え丸くなって、壁の方を向いて自己嫌悪に沈む――。

しっかりしようと思った。迷惑かけないようにしようとした。泣かないように我慢した。一生懸命、頑張ったのに――。

何度ため息をつかせてしまっただろう。何度、泣くなよと言われただろう。颯土の怒っている目と、うんざりした顔を思い出すと胸が苦しくなる。嫌われたと思うと、悲しくなる。

――でも…、

あかねは包帯で巻かれた自分の足首を触った。沢渡先生が湿布を貼ってくれたからひんやりとした感触が怪我をした足首に染み込んでいるのに、温かな手のぬくもりもまだ残っている。怒った顔が怖くて、緊張してうまく話ができなくて、恥ずかしくてもう二度と顔も見られないと思うのに、そう思う裏腹なところでこの温かさが嬉しくて、だからこそせつない。どうしたらいいのか分からない。ただただ、涙だけが溢れてくる。

◇

あかねが、今日我慢した分の涙を流した頃、ヒカルと麻耶が戻って来た。

「あかね、どうしたのよ」

転がって丸くなっているあかねを見た麻耶が、そばに寄って顔を覗き込んだ。もう涙は止まっていたが泣いた跡はまだ顔に残っている。麻耶は呆れたようにため息をついた。

「また泣いてたの？なんかあった？」

「何でもないよ…」

「だったらめそめそ泣くのはよしなよ。ヒカルちゃんも心配するし、これから罰ゲームだってあるんだからさ、楽しいこと考えよう」

「うん…、わかってる」

「ほらほら、顔を上げて笑いな？」

「うん…」

麻耶は一生懸命励まし、あかねは何とか気持ちを持ち上げようとするがどうしても笑顔は出てこない。そんな自分にまたへこんでしまう。中学の時からあかねと麻耶は一緒にいるが、小さなことでくよくよ悩みすぐに泣き出すあかねと、細かいことには目を向けない体育会系の麻耶とは、互いに互いを理解出来ないところがあった。だから、麻耶はよくあかねにイライラするし、あかねは麻耶の大雑把についていけない時もある。

「麻耶ちゃん、先に温泉行っててくれる？」

麻耶があかねを励ましているのは分かったが、今のあかねは元気を押し付けられているような気がしているのではないか、とふたりの様子を見ていたヒカルは思った。

「私もすぐに行くから」

「うん、分かった。ヒカルちゃん、あとは頼んだ…」

麻耶も、ここはヒカルに任せたほうがいいと判断して素直に従い、一人で先に部屋を出て行

った。

「あかねちゃん」

麻耶が出て行くと、ヒカルはそっとあかねのそばによった。

「ごめんね、ヒカルちゃん…。心配かけてるね」

「心配はしてるけど、いいよ。話したくなければ無理には聞かないし。落ち着くまであたし、ここにいるから」

ヒカルはあかねの背中に手を当てて微笑んだ。

「それとも、ひとりになりたい？」

「ううん……」

止まったはずの涙が再びじわっと溢れて、あかねは首を横にゆるゆると振りながらヒカルに抱きついた。

「私、自分がイヤで…、もう消えちゃいたくて…、」

「あかねちゃん…」

消えちゃいたいなんて言わないでよ、とヒカルはあかねを抱きしめる。

「一生懸命やっているつもりなんだけど迷惑ばかりかけて…」

「もしかして、群竹くんのこと？」

あかねはコクンとうなずいて、今日一日のことをヒカルに全て話した。

「…そっかあ」

ヒカルは、さっきあかねを背負って歩いて来た颯土の姿を思い出した。雨に濡れるのも気にしないで、顔は驚くほど真剣で、怪我をしたあかねの足を大事そうに支えて――。

「群竹くん、ずっと怒ってた…。途中からは話しかけても答えてくれなくて…。私、何回も大丈夫歩けるよって言ったのに、それにも答えてくれなくて…。嫌われちゃったと思うと、もう顔も見られない…」

あかねは両手で顔を覆った。

「泣くなよって何回も言われて、もう泣かないようにしようって思うのに、こうやって勝手に涙が出てきちゃうんだもん…」

大丈夫だよ、とヒカルはあかねの頭を撫でた。

「群竹くんは、あかねちゃんを嫌ってなんかないよ。話しかけて答えなかったのは…、」

早くあかねをバスに連れて行かなきゃと真剣だったからだ、とヒカルは言った。

「あかねちゃんは背負われてたから群竹くんの顔見てないでしょ？ 凄い思い詰めた顔してたんだよ？」

――……え？

「頭の中は早く手当てしなきゃって、それだけしかなかったんだと思うよ」

「そんな…」

あかねはヒカルを見つめ絶句した。

「それに、涙が出てくるのは悪いことじゃないよ。あかねちゃんの心だもん」

「そうなの…？」

「色々な人がいるじゃない？あたしみたいに思ったことをすぐに言っちゃう人もいれば、言葉には出さないけど態度で示したりする人とか。あかねちゃんの泣き虫も、そんな中のひとつだよ」
「でもそれで人にイヤな思いをさせたくない。嫌われたくない...」

泣くなよ、と怒る颯土の声がまだあかねの耳には聴こえてくる。

「群竹くんが今日あかねちゃんにしてくれたことは、全部優しさからの行動だったんだと思うよ。もちろん、俺は優しいんです！なんて様子は微塵も出さなかったと思うけどね」

いたずらっぽく笑うヒカルを見てあかねは強くうなづいた。

「だから、そういう気持ちには素直にお礼を言えればいいんだよ。それだけでいいと思う。群竹くん、イヤな思いなんてしてないよ」

お礼...、と、あかねはつぶやいた。

「うん。あかねちゃんの言葉でね」

「ヒカルちゃんはどうしてそんなふうになのか？」

「わからないよ、あたしだって。だけど、好きだなんて思える人のことは信じられるだけ」

自分に都合よくだけど、ヒカルは笑う。

「群竹くんのこと...好き？」

「うん。好きだよ」

あかねの心に一瞬小さな痛みが走った。自分でも何だかわからない痛みだ。でも――。

「ありがとう...。私、元気が出た。あとで、群竹くんにもお礼を言う」

「よかった！じゃああたし、温泉行ってくるね」

ヒカルは自分のバックの中から洗面道具を出す。そして、あっ、と気がついたようにあかねを振り返った。

「あとであかねちゃんの髪、そこの給湯室で洗ってあげるね。雨にぬれて気持ち悪いでしょ？」

「ほんと？」

「うん、じゃあね！」

ヒカルは手を振って部屋を出て行った。

――ヒカルちゃん.....。

あかねは胸に手を当てて、今ヒカルが言ってくれた言葉たちを思い返す。そして、さっき感じた胸の痛みは何だったのだろう、と思った。

◇

午後六時。ほとんどの生徒たちは入浴を終えサッパリとした姿で食堂に集まっていた。しまうまチームのメンバーだけは、これから行われる罰ゲームの練習に追われていたため、やや疲労した様子で食堂に現れた。

「伊藤くん、調子はどう？」

ヒカルは隣に座った祐輔の顔を覗き込んだ。

「僕、最下位の責任を取らされてジュリエットだよ...。実行委員で頑張ったのに...」

「はは...！それは楽しみだわ！」

ヒカルは大はしゃぎだ。

「かわいくメイクしてあげるから大丈夫だよ！」

「メ、メイク?!」

祐輔は飛び上がって叫んだ。

「あれ、言ってなかった？」

「聞いてません！」

「おっかしいなあ？言ったつもりだったのだけど...？」

「か、確信犯だろっ」

えへへ、と笑うヒカルに祐輔は開いた口を閉じることにも出来ない。

そして夕食が済み、罰ゲームの実行タイムがやってくるとしまうまチームのメンバーは準備の為に一旦下がり、他の生徒たちはそのまま食堂に残った。食堂にはちょうどいいあんばいのカラオケ用舞台があり、ご丁寧に幕までついている。実行委員としまうまチームは幕の後ろで準備をはじめた。ヒカル、あかね、麻耶と女子の生徒たちは、女役を演じる男子たちにメイクをする。颯土と勇斗は模造紙に書いたカンペを持つ役に回った。

あかねは颯土と話をする機会を待っていた。さっきからずっと頭の中で言葉を整理している。だが、裏方はバタバタとしていてなかなかチャンスがない。

——群竹くん...。

メイクを終えた男子たちの顔を見て唖然とする颯土を見つめながら、あかねは心の中でもう一度、言おうとしているお礼の言葉をさらった。

そして本番。颯土と勇斗は幕の外に出て舞台から見える位置に陣取りカンペを広げた。

「みなさん、お待たせいたしました。ただいまよりウォークラリー罰ゲーム、しまうまチームによる寸劇『なにわ口ミオとジュリエット』を上演いたします」

ヒカルがアナウンスすると場内はざわつく。

「なにわ口ミオとジュリエット...って？」

「さあ...？」

一年F組以外の生徒たちも、どこからか噂を聞きつけて食堂に集まってきた。

「では、はじめます！」

ヒカルはサーッと幕を開いた。

舞台にはジュリエット役の祐輔が客席を背にして足を横に投げ出して座っていた。カツラまでは用意できなかったのも頭はスポーツ刈りのままだ。

「愛しい口ミオが仇の家の息子だと知ったジュリエット～、嘆き悲しみ青いお月さんに向かって一人語りかけていた～！」

ナレーションが語りカンカンと拍子木を打ち鳴らすと、祐輔のジュリエットはバッと客席に顔を向けた。

目の上下に派手にまつげを描き、真赤な口紅はたらこのように頬はおてもやん。おまけに大きなそばかすの点々。一瞬生徒たちは息を呑み、その後大爆笑が沸き起こった。

「な～に～、あれ～！」

「誰だよあれ～！」

騒ぐ生徒たちを静めるように、カンカンと拍子木が鳴る。

「おお、ロミオはん！あんさんはなんでロミオはんでんねん？！」

有名な台詞はなにわ弁だ。それでまた客席は沸く。カンペを持つ勇斗はその場で笑い転げているが颯土はあえて祐輔を見ないようにしていた。劇はロミオとジュリエットのクライマックスをなにわ弁でなぞり、出てくる男役は女子が、女役は化粧をした男子が演じていた。

「そらあきまへんわ～」

「なにいうてまんねん～」

悲劇のシーンもなにわ弁。

「あんさんなんで死にはったん！わてもあとを追いまっせ～！」

ジュリエットが短剣で胸を突くシーンでは舞台上も観客席もしっちゃかめっちゃかになっていた。

「ああ、オイラもう駄目！腹が痛い～！」

勇斗はカンペを投げ出し転がり、颯土は、よくやるよ、と思いながらもこみ上げてくるバカバカしい笑いをこらえるのに必死だった。

「群竹ちゃんも笑えば。我慢してると体に毒だよ～」

客席も舞台も收拾がつけられなくなったところでヒカルはサーッと幕を閉めた。

「あれ、伊藤くんだってよ」

他のクラスの女子生徒が言っている。幕が閉じた舞台裏で、死んだジュリエットはそのまま起き上がれなかった。

「僕だめ…。本当に死んだ…」

これからどんな顔をして校内を歩けばいいんだと考え祐輔は放心している。幕の外ではアンコールの大合唱が起こっているが、もう二度とこの姿を人前にさらすのはゴメンだ、と思っていた。

が――。

「幕、開けるよ！」

ハツラツと号令をかけるヒカルの声に、しまうまの一同は弾かれたようにスタンバイをして舞台に整列した。祐輔もだ。

「なにわロミオとジュリエットでした。短時間のうちにこの劇を練習してこなしたしまうまチームのメンバーに心からの拍手をお願いいたしま～す！」

ヒカルはざわつく客席に向かって大声で叫んだ。

「それから大事なことをひとつ言わせて貰います！これはあくまでも一年F組のウォークラリー大会における罰ゲームです。ですから、他のクラスの人たちは、このことによって今後私たちの仲間をからかったりすることのないようにお願いしますね」

ヒカルがそう言った時、客席は静かになった。その言葉には祐輔、その他のメンバーたちも救われたような思いがした。

「… `あ、がつく人は、気配りのある素晴らしい演出家だなあ」

しまうまチームの男子生徒がつぶやくと、祐輔は演出家のヒカルにも拍手を贈るようにと客席

に向かって叫んだ。

「やだ。てれちゃうよお～」

と、言いながらも、ヒカルはしっかり舞台上がってどうもーどうもーとアピールする。
いよっ！浅倉ヒカル！という一希の声援が締めとなり、罰ゲーム大会は無事に幕を下ろしたのだ。

「おつかれさまーっ！」

ヒカルは舞台裏に走り、コールドクリームを手にとって祐輔たちの顔を拭こうとする。

「あ、このままでいいよ。どうせすぐに風呂行くし...」

ひとりの男子が言った。

「だってその顔のまま歩くの恥ずかしくないの？旅館には他のお客さんもいっぱいいるんだけど...？」

しまうまの男子たちはみんな揃って見事なおてもやんに変身しているのだ。例えば廊下で一般客に遭遇したら、さぞかし驚かれ笑われるだろう。だが、

「まあ、これもそれもあれも全部思い出ということでもいいんじゃないの？な？」

祐輔が確認すると、おてもやんな男子たちは揃ってうなづく。

「ああそう。じゃあいいけど...」

ヒカルは一旦手に取ったクリームをティッシュで拭い取った。

「何か、変な連帯感持ちちゃったんじゃない...？」

麻耶は心配気な顔で食堂を去っていく祐輔たちの後姿を眺める。

「伊藤くんたちがこれを機に女装に目覚めちゃったらどうしよう...？」

「うん、どうしようか...」

そんな麻耶とヒカルから離れ、あかねは颯土の姿を探していた。そして、まだ笑い転げている勇斗のそばで呆けて座っている颯土を見つけた。

「...群竹くん」

あかねは颯土の前に立ち声をかけ、颯土は顔を上げた。

「あの...、私...」

颯土の顔を見ると頭の中が真っ白になり用意していた言葉が出てこない。

「あの...、あの...」

自分をじっと見る颯土と目が合った時、不思議と緊張がほぐれ、ヒカルが言ってくれた言葉を思い出した。

——私の言葉で、お礼を.....。

「今日は...、本当にありがとう...」

やっとそれだけ言えた。用意してきた言葉はもっとたくさんあったのに、心から溢れ出たのはそれだけだった。

「...もう、大丈夫なのか？」

「うん、大丈夫」

「そうか、よかったな」

そう言って颯土は笑った。今まで見たことがない、初めて見る颯土の笑顔だった。

――ああ、何て私は馬鹿だったのだろう。何を飾ろうとしていたのだろう。

今、この笑顔だけで温かい。心を感じるから嬉しい…。飾らない自然な笑顔だけが何よりも――。

「どうしたんだ？」

立ちつくすあかねに向かって颯土は言った。

「ううん、何でもない…」

また涙が出てきそうになったのであかねは慌てて踵を返し、離れたところで見守ってくれているヒカルと麻耶の元に歩きだした。

「ん～、群竹ちゃ～ん」

勇斗がニヤニヤ笑っている。

「何だよ…」

「素敵な笑顔！」

「ば、ばーか！」

颯土は真っ赤になって立ち上がり、食堂を出て行った。

「おっ。今日は応答ありだね～」

明日はもう東京の空の下。ヒカルたちの本城高校生活はこれからが本番なのだ――。

ザーザーという雨の音でヒカルは目が覚めた。時計を見ると六時半を過ぎている。あれ、今日は哲平来なかった？と思いながらベッドを降りて上を見ると、久美子もまだ口を開けて爆睡している。毎日六時過ぎには必ずやって来て、二段ベッドの上で寝ている久美子に痾癪玉鉄砲を撃つ哲平だ。ヒカルは最近哲平の`子分、に昇格したためとりあえず攻撃はされなくなった。だが、痾癪玉が弾ける音と久美子の悲鳴で目を覚ますのが日課なのに。風邪でもひいたのだろうか。ヒカルは哲平のことが少し心配になり、急いで着替えを済ますと階下に下りて行った。

その頃、隣の家では颯土が三個目の目覚まし時計を止め、そのままベッドの中でうだうだしていた。

突然、バタン！と部屋のドアが開き、タタタッと走りこむ足音。そして...、
「ソージ！起きろ！」

甲高い声と共に、ズシン、と何かに体に飛び乗られた感覚がして颯土は目を開けた。
「...？」

目の前には見たこともない小さな顔が笑っていた。
「...！？」

訳がわからず夢でも見ているのかと呆けていると、額に何か冷たいものがあてられる。
「え？」

そしてそれは突然にパーン！と炸裂したのだ。
「うわっ！」

いくら颯土でもこれにはさすがに目が覚めた。
「な、何なんだ！お前はっ！」
小さなヒーローは腰に手を当ててうわっはっは一っ！と笑った。

「誰だ？お前！」
「ボクわ、哲平レンジャーだ！うわっはっはーっ！」

これは夢か？どこのガキだこいつは！と、颯土はベッドから飛び下りた。
その頃の隣家ではヒカルと母親による...

「哲平？貸し出ししたのよ」
「貸し出し？どこに？」

「朝が弱くて本当に困っているって言うから、うちの子どもたちはこうやって起きますのよ、って話したら哲平貸して欲しいって言うんだもの」

「だから、誰！」
「お隣」
「うそーっ！？」

という会話がなされていたのだが、颯土がそれを知るはずはなく――。

「哲平ちゃん、ありがとう！」

颯土と共に二階から降りてきた哲平に、颯土の母親は哲平の好きなギンガレンジャーのパッケージがついたお菓子を手渡した。

「わーい！おばちゃんありがとう！」

哲平は跳ねて大喜びだ。

「...どこのガキだよ、こいつ」

颯土はいつもの五倍ほど不機嫌度が増している。

「浅倉さんちの哲平ちゃんよ。目覚まし係を頼んだの」

――浅倉っ？！

颯土は哲平をマジマジと見る。

「何だよ、ソージ！文句あんのかつ！」

哲平は舌足らずな喋り方で言った。

――偉そうなとこなんかそっくりだ...！

「おかげで颯土は七時前に起きてくれたし、私は久しぶりにこんなにかわいいお菓子を買えて嬉しいわ！」

母はにこやかに笑い、颯土はふてくされながら食卓につく。

「哲平ちゃんも一緒に朝ごはん食べる？」

「うん！」

哲平は颯土の隣の椅子に腰掛けた。ずーずーしいところまでそっくりだ、と、颯土は隣の哲平を見下ろした。

「ヒーねえはねえ、ボクの子分だからやっつけないよ。でもくーねえとつよにーは敵だから毎日やっつけるの！」

哲平は玉子焼きをほおばりながら得意気に喋る。ヒーねえが子分になったそのいきさつまでを哲平は夢中で話しているが、そんなことに興味のない颯土は、隣の哲平を完全に無視して朝食に手をつけはじめた。だが、

「今度からソージもやっつけてやる！」

と、再び鉄砲を向けられた時、食事を進めていた手をピクリと止めた。

「頼むわよ、哲平ちゃん。どんどんやっつけていいからね」

「おふくろ！」

颯土は食卓をバン！とたたいて母親を睨みつけた。毎朝こんなことをされたらたまったものじゃない。

――冗談じゃないぜ...。

「おー、怖い怖い。.....こんな悪者、ほんとにやっつけちゃっていいよ？」

颯土の母は哲平の耳元で小声で言った。

そして、ヒカルが家を出ようとしたとき、哲平が颯土の母親に連れられて帰ってきた。

「ただいまっ！ソージ、やっつけてきたよっ！」

哲平はバタバタと家に上がりこみ母親を呼びに行った。

「哲平ちゃんのおかげで今日は早起きをしてくれました」

「哲平、あれを群竹くんに行ったんですか？」

「ええ！」

颯土の母親はものすごく嬉しそうに答えるが、

「で、群竹くんは...？」

心の準備もなくあの襲撃を受けた颯土がどういう反応をしたのか、心配でもあり興味津々でもあるヒカルだ。

「すごーく怒ってたけどいいのよ。こんなことでもしないと寝ぼすけの上に朝だって親子の会話もないんだから」

「そうなんですか？」

「男の子なんてつまらないわね。華がなくて、朝からお葬式みたいで」

「朝からお葬式...」

うん。それは分かるような気がする――と、ヒカルは颯土の仏頂面を思い出す。

「ヒカルちゃん、今度遊びに来てね。美味しいお茶をご馳走するから」

「うわ楽しみ！いつでもお邪魔します！じゃ、おばさん行って来まーす！」

哲平は颯土ではなく、颯土の母に対してずいぶんと役に立ったようだ。よかったよかった、と微笑みながらヒカルは自転車を走らせるのだった。

ヒカルが教室に入ると、きっと入学以来初めてのことだろう、颯土が既に自分の席についていた。まだ予鈴が鳴るまでもずいぶん時間がある。さすがは哲平だ、と、ヒカルは改めて感心した。ヒカルと颯土は、先の席替えによって教室でも「お隣さん、同士だ。ヒカルが自分の席に着き、隣の颯土におはようと声をかけると、颯土はヒカルをキッと睨み、無言のまま机の上での二度寝体勢に入ってしまう。

「なによ、私が起こしたわけじゃないでしょうが」

ヒカルは文句を言うが、もう颯土は顔を上げない。だが、突っ伏した颯土の後頭部に今日は寝癖は立っていない。

「早起きは三文の得っていうんだよ？哲平のおかげで寝癖直してくる時間があってよかったね、ムラタケくん」

ヒカルがやや嫌味な言い方をすると、颯土は伏せた体勢のまま顔だけを横に向けて、

「.....うるさい」

ひとこと反論した。ムッとしたヒカルが応戦体勢を整えようとした時、

「ヒカルちゃんおはよう」

あかねと麻耶が続々とやって来たので、颯土とのバトルはそこまでとなった。

「ヒカルちゃん、部活決めた？」

あかねはカバンの中からミニ冊子を出してヒカルの元に来た。ヒカルとあかねはどこの部に入ろうか、と本格的に検討しはじめている。あかねは中学時代にやっていたブラスバンドに代わる部を模索中であり、ヒカルは「みんなで心を合わせて何かをやるぞー！」な、やりがいのある部

を探している。ホームルーム合宿が終わって三日が経ち、実行委員の仕事もなくなった今、ヒカルはそろそろ何かをやらないと退屈しそうだった。

「うん！私、演劇部に入ってみようかなって思って！」

「演劇部？！」

あかねと麻耶が声をそろえて叫んだ。

「おかしい？」

「おかしくはないけど....、」

ヒカルの雰囲気から見て、茶道も似合わないけれど演劇もどうかと...というのが麻耶の感想だ。アクティブなヒカルには、文化部よりは運動部の方が似合っているように思う。

「剣道部においでよぉ～」

「剣道も魅力的なんだけどねー。演劇って前からやってみたいって思っていたし、こないだのロミジュリでなんか味しめちゃって」

ヒカルは教室の後方で勇斗や他の友人たちと雑談をしている祐輔に視線を飛ばした。

「伊藤くんたち楽しそうに演技してたしさー、あれでしまうまチームのみんな強烈に連帯したし、これぞ青春！とか思っちゃって」

「でもさ、この学校の演劇部って何か地味じゃない？部員も少ないみたいだし、やってるんだかいけないんだか分からないでしょ...」

確かに麻耶の言うとおり、演劇部の噂はほとんど聞かないしミニ冊子の紹介文も地味だ。部員数も二年生はたったの三人とある。

「だからこそやりがいがあるかなって思ったの！やり方によっちゃ何でも出来そうだもん！」

「ヒカルちゃんらしい」

あかねは笑った。

「あかねちゃんは決めた？」

「うん...。軽音楽部がいいかな、って思ってるんだけど...」

あかねは恥かしそうに答えた。

「軽音楽部なんて部、あったんだ...」

と、麻耶。

「私はやっぱり音楽がやりたいなって思うから」

「あかねちゃんは中学のブラバンで何のパートやっていたの？」

「フルート」

あかねはふんわりと笑った。

「うんうん。そんな感じる」

フルートなんて吹いたことはないし実物の楽器を見たことさえもないヒカルだが、柔らかな音色の印象とあかねの雰囲気はピッタリ重なった。

「あ、でもあかねはピアノが本流なんだよ？中学ではいつも伴奏やってたし」

「ほんとー？あかねちゃんって音楽家だったんだね！凄い凄い！」

ピアノ、と言われればあかねにこれ以上似合う楽器もないように思える。

「でも、この学校の軽音楽部って...活動してるの？」

麻耶があかねの手からミニ冊子を取り、パラパラとめくった。そして、
「部長の名前しか書いてないよ？紹介文、一行も無し...」

呆れたような同情するような目をあかねに向ける。

「よし、決めた！」

ヒカルが手をたたいた。

「私も軽音楽部に入る！楽器は全然駄目だけど何とかできるでしょ！」

「ヒカルちゃん、本当？！」

ヒカルと一緒に部活なんて、考えただけでも楽しい。

「うん、本当！そのかわりあかねちゃん、あなたも演劇部に入りなさい！」

「ええええっ？！」

あかねはその場に固まった。演劇なんて自分に出来とは思えない。

「やってるんだかいけないんだかの両部をあたしたちふたりで盛り立てようじゃないの！」

ヒカルは拳を上に向けて叫び、あかねは凍結したまま天井に向かって上がっているヒカルの拳を見つめた。

「――あかね、いいんじゃない？軽音楽部と演劇部、やってみたら？」

「麻耶ちゃん...」

あかねは麻耶とヒカルを交互に見た。ヒカルはニコニコ笑っている。まるで、太陽やひまわりのような明るい笑顔でこちらの心も明るく軽やかになる。こんなヒカルと一緒になら...、

「.....うん。やれる...かな」

ヒカルと一緒にならきっと変われるかもしれない、とあかねは頷いた。

「よおしっ！これで部活は決まったわっ！」

ヒカルはあかねの手を取った。

「じゃあ、こないだ言った通り、みんなにお祝いしてもらおう！」

大久保く一ん、伊藤く一ん、とヒカルは元実行委員の仲間を呼んだ。なにになにヒカルちゃん、と一番にすっ飛んできたのは勇斗だ。

「あたしとあかねちゃんの部活が決まったの！」

「へえ～。そりゃめでたいじゃん！じゃ、祝いの一本締めだね」

「一本締め？」

「そ。何かが無事に決まった後とか祝の席とかでよくやってるでしょ」

「そうか！うん！よし！一本締めやろう！」

祐輔も加わり、じゃあついでに群竹ちゃんも呼ぼうと、勇斗は机で寝ていた颯土を無理やり引っ張って来た。

「ヒカルちゃんあかねちゃんの部活が決まったことを祝して...みなさんお手を拝借～」

勇斗が音頭をとる。何を祝してだって？と、ついでに呼ばれた颯土はわけがわからないが、いよお～！の掛け声にとりあえず合わせ、パンパンパン！と手を鳴らす時はなんとなく右へならった。

◇

その放課後、ヒカルとあかねは早速演劇部を訪ねることにした。校庭の端に各部の部室が集合している部舎がある。二階建ての部舎は、一階に運動部の部室、二階に文化部の部室が並んでいて演劇部の部室もそこにあった。

「こんにちは～」

ノックをしてみたが返事はない。ふたりはそーっとドアを開けて中をのぞいてみた。

「誰もいないね...」

「お邪魔しまーす」

部室は綺麗に整頓されていた。壁には芝居のポスターが貼ってありテーブルの上には台本らしきものがあった。

「ロミオとジュリエットだって」

それを手にとったあかねがつぶやいた。なにわ、はついてないでしょう？ついてるわけないよ～と言い合いながら二人はクスクス笑う。

「本物のロミジュリってこういうシナリオなんだ...。演劇部でこれをやるのかな？」

「そうなのかも！あとで訊いてみよう～」

ふたりはしばらく台本に見入った。そして、ため息。決して相容れることのない、愛し合う恋人たちの純粋で悲しい恋の物語――。

「おおロ～ミオ！あなたはど～してロ～ミオなの～～！」

突然、ヒカルは大げさなジェスチャーを加えながらジュリエットになりきってみせた。

「はい、次あかねちゃんどうぞ！」

「えー、私、恥かしいよ」

「誰も見てやしないんだから！」

「おおロミオ。あなたは どうしてロミオなの」

単調に台詞を読んであかねが体をくるっと回転させたところに.....。

「.....棒読みね」

いつの間に来ていたのか、二年生の女子が三人、体を斜めに構えて腕組をして、ヒカルとあかねの役者ぶりをじっと見ていた。

「やだ！」

あかねはその場でおろおろじたばたパニックに陥った。

「見事な大根ね。それじゃロミジュリが可哀想」

左側にいる眼鏡をかけた女子に冷たく言われ、ヒカルとあかねはシュンとなる。

「あなたたち、ここで何しているの？」

右側の小柄な女子がふたりをまるで不審者を見るような目で見ると、三人が三人とも貫禄があり、あかねは思わずヒカルの後ろに隠れていた。

「私は一年F組の浅倉ヒカルです。そしてこっちは...」

ヒカルはあかねを自分の後ろから引っ張り出した。

「み、水沢あかねです...」

「浅倉さんに水沢さん。で、勝手に部室に入り込んで、いったい用は何？」

真ん中のショートヘアの女子が厳しい口調で問いただした。

「私たち、そろって演劇部入部希望なんです！」

三人の二年生は顔を見合わせた。

「本当に...？」

「本当ですけど...」

二年生たちはまた顔を見合わせ、一瞬の間があった後に、

「嬉しい！まあ、どうぞ座って！」

ショートヘアが飛び上がった。

「棒読みでも大根でもこの際関係ないわ！演劇部に来てくれたあなたたちが天使に見える！」

さっきまでの冷遇は夢だったのかと思うくらいに態度を変化させたショートヘアはヒカルとあかねに椅子を勧め、どうぞどうぞと座らせてくれたのだ。

演劇部は昨年度までは何とか細々ながらも活動していたらしい。だが、三年生がこの春に揃って抜けてしまったため、部員は二年生の三人、眼鏡の小泉真美と小柄な山本絹江と部長であるショートヘアの鳥海小夜子だけになってしまった。今年の新入生からは入部する者がなく、途方に暮れていたところのヒカルたちの入部希望だったのだ。

「はっきり言って廃部寸前なのよ。この部室も明け渡すように言われているの」

本城高校生徒会では、部員数最低七名の確保がないと部活動として認めないシステムになっているらしい。三年生たちは名簿上では在籍しているから現在の部員数は五名だが、七名には足りないためこのままの状態では廃部扱いとなり同好会に格下げになってしまうらしい。

「でもそれだけは断固阻止しなければ私たちの面目がたたないのよ。演劇部発足以来、歴代の先輩たちが守ってきたこの部室を明け渡すことなんてできないわ！」

と、小夜子は息を巻いて語る。

「あなたたちが入ってくれたら七名確保で廃部は免れるわ！」

「でも...、実働部員は五名だし...、出来ることはあまりないんだと...」

やっぱりロミジュリは無理ね...と、二年生たちはヒカルとあかねを前にして浮いたり沈んだり。

「出来ることが無いって...、高校演劇の大会とかないんですか？」

「あるけど、うちの演劇部の規模じゃ出場の対象外なのよ」

「じゃあ今までどんな活動を？」

「発声練習と台詞読み」

「それだけですか？」

「それだけです」

小夜子が早口で答えた。ふれては欲しくない部分のようだ。

「それじゃ駄目ですよ！」

ヒカルは立ち上がって叫んだ。

「営業しましょう、営業！」

ニマツと笑ったヒカルの目は見事に輝いていた。ヒカルのこんな目をあかねはつい最近何度も見た。

「自分たちの活躍の舞台を自分たちで作ってしまうんです」

「例えば？」

小夜子は心なしか真剣な面持ちだ。なにか、とてつもないいい案をこの一年生が出してくれるのではないかと、そういう期待を込めた目でヒカルを見つめる。

「例えばですね...、」

ヒカルはしばらく考えてハッと思い当たった。

「例えば小学校とか中学校の時に必ず観劇会みたいなのがありました。そういうところに私たちが出てしまうというのはどうでしょうか？」

「面白いこと考えるのね。でもそう簡単にはいかないわよ...」

小夜子はヒカルの意見にわずかにガッカリしたようだ。

「そうですか？この地域にはたくさんの小学校、中学校があると思います。地域の交流っていうと大げさになっちゃいますけど、高校の演劇部のお姉さんたちが劇をやってみせてくれるって、ちょっと素敵じゃないですか」

「そうかもしれないけど、小学生たちが学校に行っている時間は私たちも学校にいる時間なのよ。まさか授業を抜け出して行けないでしょう？」

真美がもっともな意見で水をさした。

「そもそも五人なのよ、私たち...。そんなところに行って何の劇をやるっていうの...」

絹江が基本的問題を慮ってため息を吐く。

「ですからこれは例えばの話です。活動しようと思ったらいくらだってその舞台はあるし、実働部員が五人でも出来ることはあると思います。道があるから歩くんじゃないで、歩いたところに道が出来るのですよ、先輩っ！」

と、ヒカルは言い切った。その大げさな台詞には、一同ポカンとするしかない。二年生たちと、そしてあかねまでもがヒカルにじっと注目し、ほとんど呆然としている。が。

「そうよね！浅倉さんの言う通りだわっ！」

唐突に小夜子が叫んだ。

「五人で出来る台本を自分たちで作ってしまえばいいのね！」

「そうですよ、先輩！ロミオとジュリエットじゃなくたっていいんです！」

ヒカルはテーブルの上にある台本を手にし、それを小夜子が奪い取るようにして取り上げ、そのままロッカーの中にぶち込んだ。

「そうよ！もうロミオじゃなくてもいい！」

その勢いを見て、ヒカルとあかねは顔を見合わせ、何故ロミオとジュリエットの台本があったのかはもう聞くまいとアイコンタクトで納得しあった。

「さっき浅倉さんが出した案も、もっとじっくり考えれば結構いけるかもしれないし。活動しないことには何も始まらないわ！まずは演劇の基本をあなたたちに教えることから始めなきゃね！」

小夜子の熱弁を黙って聞いていた真美と絹江はそうね、とうなずいた。

「よろしくね、浅倉さん、水沢さん」

差し出された小夜子の手を、ヒカルとあかねはしっかりと握った。

演劇部の部室を出たあと、ふたりは軽音楽部の部室を探した。だが、この部舎にそれはない。部室がない部もあるし、活動の場所は音楽室だろうからと行ってみたが誰もいない。

「今日は部活のない日なのかな？」

あかねはガランとした音楽室を見回した。

「そうかもしれないね。これによると…」

ヒカルは例のミニ冊子を開く。

「軽音楽部の活動日は書いてないよ。部長は二年F組の風間響（ひびく）って人みたい。明日、こっちに直接行ってみようか」

「二年F組に？」

「うんそう。それが一番てっとり早いでしょう？」

「二年生の教室に行くなんて、なんだか怖いな…」

あかねの言葉にヒカルはケラケラ笑い出した。

「二年生だって化け物じゃないんだから、別にとって食われるわけじゃないでしょう」

「そうだけど…」

あかねは赤くなってうつむく。

「とにかく、ここには『部長風間響』としか書いてないし、この部長さんをつかまえないと軽音楽部のことはわからなさそうだよ」

ヒカルは冊子にあるその名前を何気なく見つめるのだった。

「.....ほんとに行くの？ヒカルちゃん...」

二年生の回廊に向かう階段を上りながら、あかねは不安そうな声を出す。サクサク上っていくヒカルに対し、あかねの方は出る一步もためらいがちだ。

「行かなきゃ分からないでしょ？」

「そうだけど、二年生の階ってなんだか独特な空気があるから...」

言われてみれば確かにそうだな、とヒカルは思った。明るくてにぎやかな一年生の回廊に比べると、もうこの階段からして違う匂いがしている。演劇部に行った翌日の昼休み。ヒカルとあかねは、軽音楽部の部長、風間響に会いに二年F組に向かうところだ。

階段を上りきって回廊に出た。廊下を歩く上級生はみな落ち着いて大人びて見えるし、そんな中でヒカルとあかねは確かにその空気からは浮いている。二年F組の教室はすぐ目の前だった。ちょうど教室に入ろうとしていた男子に風間先輩に会いたいと告げると、

「風間？さっきそこらを歩いていたけどなあ？」

男子はあたりを見回した。

「私たち、風間先輩の顔知らないんです。教えてくださいませんか？」

「校則破りの常習犯。この階で一番目立つからすぐにわかるよ」

男子はサラリと言って教室に入ってしまった。ヒカルとあかねは周囲を見回しながら廊下を歩くが、それらしい人物は見当たらない。

「ヒカルちゃん、私、もう軽音楽部に入らなくてもいい...」

あかねはヒカルの袖を引いて立ち止まった。

「何で？」

「だって部長さん、校則破りの常習犯だって...。怖いもん」

まるで、周囲を歩く二年生たちから隠れるように身を縮こまらせてあかねは下を向く。一刻も早く、この場違いな空間から脱出したいと、もじもじ動くあかねの足が物語っていた。

「じゃあ、それはとりあえずその部長さんに会ってみてから決めようよ。見てみたいじゃない、その校則破りを」

「ヒカルちゃんたら...っ」

「おい、さっきの一年生！」

ヒカルとあかねが振り返ると、ひとりの男子が手を振っていた。

「さっきの先輩だ」

男子は、たった今ヒカルたちが通り過ぎた水飲み場のあたりを指差している。見ると、ひとりの男子が水飲み場で顔を洗っていた。その男子を指差して、`このヒトですか？、とサイレントアクションで訊くと、向こうも同じように`そうそう、と大きく頷いた。

「あかねちゃん、いくよ」

ヒカルはあかねの手を握って気合を入れた。

「うん...」

ヒカルはそのままあかねを引っ張って水飲み場まで戻った。男子はまだ顔を洗っていたが、その場所はやたらと明るい。だが、それが何故なのかを考える前にヒカルは声をかけていた。

「あの一、風間先輩ですか？」

男子は濡れたままの顔で振り向いた。雫が飛び散り、床をびしょびしょにぬらした。その光景がやたらとキラキラ輝いて見えて、ヒカルはほんの一瞬だけ無意識に息を止めた。

――...なんだろう？

映画の中のワンカットを見たようだった。

「ああ？そうだけど？」

風間はかがんだ姿勢のまま濡れた顔をふきもしないで言う。水滴の中にある顔は目が半開きだし歪んでいるし、いったいどんな顔をした人なのか分からない。ただ、やっぱりキラキラしているから、ヒカルはじいっと見入ってしまった。

「.....ん？キミたち誰？俺になんか用？」

不思議なものでも見ているような顔のヒカルと、怯えきっているようなあかねに見つめられた風間は、濡れた状態のままで首を傾げた。

「えっと...、軽音楽部の部長さんの風間響（ひびく）先輩ですよネ？」

風間は少しの間ノーアクションでヒカルをただ見つめた。

「...あの一。風間ヒビク先輩でいいんですよネ？軽音楽部の...」

呆けたまま答えない風間に、ヒカルはもう一度訊ねた。

「.....さあ.....。俺、そんな名前だったっけかなあ？」

風間はやっと水浸しの顔を首にかけたスポーツタオルで拭った。

「あ.....」

まともな風間の素顔を見てヒカルは初めて気がついた。水に濡れた風間の顔がキラキラに見えたのは、風間の髪が鮮やかな金色だったからだ。背中まで届くほどの長髪を後ろでひとつに束ねている。それだけではない。シャツはオレンジ色の開襟でノーネクタイ。この場所がやたらと明るかった理由が分かった。

「これが校則破りの常習犯.....なんだっ！」

ヒカルは無遠慮に風間の風貌を見回した。そして、ひとりで妙に納得する。初めて見る校則破りに感動すら覚えた。

興味津々といった目で見つめられている風間は、伸びすぎた背をやや前かがみの体勢にして、逆にヒカルの顔をじーっと見つめた。

「で、用は何？」

「あ。私たち、軽音楽部に入りたいんですけど」

言ってヒカルはにっこり笑った。

「.....へえ〜、そうなんだあ...」

こちらはまるで間が抜けたリアクション。さすがのヒカルも少々調子が狂い、次の言葉を探す。

「えっと...？風間ヒビク先輩に軽音楽部のこと色々とお聞きしたいんですけど。この冊子には先

輩の名前しか書いてなかったの」

ああそれね、と風間はヒカルが持っているミニ冊子を覗き込んだ。

「風間ヒビクねえ」

風間は目を一旦天井に向けて考えてから、

「誰だ、それ」

おもむろに首をかしげた。

「はあ？あなたじゃないんですか？」

さっき、風間先輩ですか？と訊いたら、そうだと答えたじゃないか！と、ヒカルの鼻は見事に膨らんでいる。

「アハハハ、怒ったキミの顔、チャウチャウみたいだねえ～」

――は？！何だこの男は！

ヒカルはますますチャウチャウになったし、ずっとヒカルの陰に隠れるようにしていたあかねはそろそろ限界に来て、

「ヒカルちゃん、もういいよ…。帰ろう…」

ヒカルの袖を引っ張った。その時、

「おお！」

突然風間が叫んであかねの手を取ったのだ。

「来た来た一っ！きみ、名前何ていうの？」

「み、水沢あかねです…」

あかねは怯えながら答え、風間に取りられている手を引きヒカルの後ろに隠れた。

「あかねちゃんね！覚えておくよ！いやぁ～、いい指だわ～」

――ノリがまるで大久保くんだ…。

ヒカルはため息をついた。部長がこれじゃ軽音楽部の活動も期待できそうもない。あかねの言う通り、なかったこととして考えた方がよさそうだ。

「もういいです！」

ヒカルがあかねの手を引いて踵を返し、怒った一歩を踏み出したその時、

「放課後、音楽室に来いよ。仲間を集めておくからさ」

張りのある声に振り返ってみると、さっきまでとはまるで別人のように背筋を伸ばし、まっすぐなまなざしでこちらを見つめる風間がそこに立っていた。

◇

一年F組の教室では麻耶が二人を待っていた。三人はこれからランチだ。

「それでその部長さん、あかねちゃんのこと気に入っちゃったみたいなのよね」

ヒカルはサンドイッチをかじりながらややふてくされた。

「そんなんじゃないよ…」

「どんな人なの？」

麻耶は校則破りの常習犯と謳われる人物について興味津々といった感じで身を乗り出す。

「大久保くんの性格に金髪にした群竹くんの顔と黒田くんの雰囲気にくっつけたような人」

「な～に～それ～、変！」

「すごい変な人だった」

「いつもヒトに寛大なヒカルちゃんと言うんだからよっぽどだわ」

「来た来た～、とか言ってあかねちゃんの手なんか握っちゃってさ、あたしのことはチャウチャウだなんて言うのよ！」

チャウチャウと言われたことがよっぽど気に入らなかったヒカルは息をまいて訴えた。

「わかるような気がする…」

麻耶は少し納得する。

「麻耶ちゃん！？」

「うそうそ！」

「とにかく放課後、音楽室に行ってくるから。ね、あかねちゃん」

「うん…」

大きな声でワイワイ話すヒカルたちの会話は教室中に響き渡る。

「なに～？あかねちゃんの手を握っただと～！」

早速勇斗があっちの方からすっ飛んできた。

「許せんやっちゃんあ！なあ、群竹ちゃん！」

あかねはビクンとして、一人で何かの雑誌を読んでいる颯土を見た。颯土もチラッと顔を上げてこっちの集まりに目を向けたが、興味なさそうにしてすぐにまた元のポーズに戻った。

「素直じゃないなあ、群竹ちゃん。あかねちゃんの手握ったなんて冗談じゃない話じゃない」

勇斗は口を尖らせて颯土の態度を非難する。

——群竹…くん…。

あかねは雑誌に目を落とす颯土を見つめた。ホームルーム合宿での颯土の行動はその後のクラスでも評判になっていた。無愛想で人のことなど関係ない、といった態度の颯土だが、そのクールさとシャープな印象から女子には入学当初からかなり人気がある。あかねに対しての颯土の特別な行動はそういう女子からは反感を買い、あかねはいらぬやっかみを受けているし噂のネタにもなっていた。颯土はまったく意に介していないようだが、あかねの方はそうはいかない。颯土が気になるのは確かだからだ。だがそれがどういう感情なのかはわからない。恋なのだろうか、と自分に問えば違うような気もする。

「やめなさいよ。あんたが入ると話がややこしくなるわ！」

麻耶に厳しく叱られて勇斗は怯んだ。

「ほら、あかねが泣きそうになってるよ。あんた最低！」

あかねは俯いて肩を震わせている。焦った勇斗は、

「じょ、冗談だってば～！あかねちゃん、ごめんね。ほんと、ごめんよ～！」

勇斗は何度もあかねに謝ってから逃げて行った。

「…まったく。男子ってほんとしょーがない！」

麻耶は両手を腰に当てて大いに憤慨した。

「——あの先輩もあんな感じなんだろな…」

今度は別の女子にちょっかいを出してじゃれている勇斗を見ながらヒカルがため息をついた。
そんなヒカルを横で見つめ、あかねはどこか胸の深いところで痛みを感じるのだった。

放課後、ヒカルとあかねは音楽室に向かった。

「あかねちゃん、ちょっと聞きたいんだけど軽音楽ってなに？」

「ヒカルちゃん、知らないで入るつもりだったの...？」

ヒカルちゃんって、かなり行き当たりバッタリなんだね...、とあかねは笑う。

「あはは...。音楽は好きだからね。でも、軽い音楽って何かなーって思って」

「簡単に言うと、軽音楽っていうのはクラシック音楽に対してジャズとかポピュラーとかのジャンルの総合的な呼び方かな...。高校の軽音楽部っていったら普通ポピュラーなんじゃないかなあ？ジャズはやんないと思うから」

ふーん、とヒカルは考え込んだ。

「木琴とか鉄琴とか鈴使った合奏とかじゃないの？」

合奏.....、とあかねはヒカルがイメージしているであろう光景を想像した。

「『気球に乗ってどこまでも』とかやんないのかな？」

「.....フォークギターで弾き語りとかはやるかもしれないけど」

「弾き語り！？歌?!」

ヒカルは大声を上げて立ち止まった。あかねも驚いて立ち止まった。ちょうど音楽室の前だった。

「ヒカルちゃん？」

「.....あかねちゃん、あたしの活躍の場はなさそうだわ...」

そう呟いてヒカルは音楽室のドアを開けた。

「失礼しまーす」

大きな窓から入り込む光の下にその集団はいた。その場所だけがやたら明るい。ヒカルとあかねは声も出せずに、その集団をただ見つめた。

「よお！来たなあ！」

「待ってたぜ〜！」

「どうしたの？入っておいでよ」

「そうそう。遠慮なんかしないで」

口々に歓迎の言葉をかけてくれたのは、皆、髪の色を明るく染めたり脱色したりの男子たちだった。

——この人たち、みんな校則破り？！

ヒカルは呆気にとられ、あかねはヒカルの後ろに身を隠す。

「そんな殴りこみに来たような顔すんなよ！」

構えるヒカルに言ったのは、机に腰掛け長い足を組み、腕組してニヤけた顔を向けている風間だった。さすがのヒカルもこの集団の中に飛び込んで行くことに躊躇した。風間は前出のとおりに、金髪長髪にオレンジシャツ着用。ひとりは茶髪にビジュアル系赤メッシュを挿し込んでいるし、他の男子たちも鮮やかだ。ひとりだけ黒髪の男子がいるが、それでも鮮やかだ。何が鮮や

かかというと雰囲気そのものが全て。

――チカチカする。

「どうしたの？入りなよ？」

赤メッシュがドアまで迎えに来た。後ろのあかねが、ぎゅうっとヒカルの腕を掴んだ。完全に怯えきっている。

「...あ～、私たち、軽音楽部の活動を見せて欲しいんですけど！」

思わずリキが入ってしまい、自分の鼻が膨らんでいるのが分かった。案の定、男子たちはケラケラと笑い出した。

「.....な、何がおかしいんですか？！」

ヒカルはあからさまにムツとしてますます鼻が膨らむ。

「そんなに怒るなって、チャウチャウ！」

「.....チャウチャウっていうの、やめてください！」

「ほら、また鼻が膨らんだ！おっ、今度はほっぺたも膨らんだ！風船みたいだねえ？」

「チャウチャウとか風船とか、どーして丸いものばかりなんですか！？」

「だって、キミの顔まん丸なんだもん...」

「...なっ！」

「あははっ！」

からかわれている、と思うとヒカルは何故か泣きたくなった。

――...こういう時って泣きたくなるものなんだ...。

男子と口喧嘩をしたり意見をぶつけあったりはこれまでにもしょっちゅうあったが、それで怯んだり泣きたくなるようなことはなかったのに。

涙目のヒカルは口を一文字に結び、風間を睨んだ。

「だからそんな怖い顔すんなっての」

風間は立ち上がってヒカルの横に立った。

「悪かったよ。別にいじめてるわけじゃないんだぜ」

「いじめられてるとしか思えない...」

ヒカルはふんっと横を向いた。

「そうじゃねえって。ちょっとからかっただけじゃない」

風間は顔を覗き込んでくるが、ヒカルはさらに横を向いて背く。ほとんど意地を張る子どものような。こんな無防備に拗ねる態度を人に対して取るなんていつもの自分じゃないと思う。でも、止まらない。止められない――。

「あ～あ、すねちまったよ～。風間のせいだ！」

赤メッシュがヒカルの傍にやって来た。

「ごめんよ。この部長、なんだか今日はテンション高くてさ。俺は二年A組の田村優作。まあ、軽音部の副部長ってとこかなあ...」

ヒカルは拗ねたままの目を田村に移した。そして、う...、と一瞬怯んだ田村にすかさず訊いた。

「この部ってちゃんと活動しているんですか？」

光の軍団、とでも命名したくなるような風間たち。見かけも中身もチカチカしすぎる。そして、口が悪く不真面目で意地悪な部長。さっきまでイメージしていた『気球に乗ってどこまでも』が、気球に乗る前に飛んでいってしまった。

「まあ...表向きはちゃんと活動してるよ...」

表向き？とヒカルが問うと、田村はやや困ったように自分の赤い髪を触った。こちらは風間と違い真面目で誠実そうな目をしている。

「副部長さんの方が風間ヒビク部長さんよりはまだ話がわかりそう。活動に表向きとか裏向きってあるんですか？」

「...ほらな、こんな呼び方するんだぜ？からかってやりたくもなるでしょう？」

風間がニヤリと笑った。

「なるほどね...。で、お前も拗ねてるってわけだ」

「べつに拗ねてるわけじゃねえって！」

「どうだか。ふり仮名ふっておけばよかったんだよ...。横着して名前しか書かないからこーゆーことになるんだ。自業自得」

田村はミニ冊子をポン、と机に投げた。二人のやりとりを見ながらヒカルとあかねは顔を見合わせた。

「あのね、この部長さんの名前、ヒビクじゃなくてキョウって読むの。カザマキョウ」

——風間響（きょう）。

ヒカルは字をイメージし、今、田村が言った発音を当てはめてみた。だが、最初に読み間違えた、ヒビクの方がヒカル的にどうもしっくり馴染む。だから思わず、

「変わった読み方ですね」

と、呟いた。

「変わってるか？普通、響ってあれば素直にキョウって発音するだろう、名前なんだから。ヒビク...なんて、クウ...と鼻から息が出て行きそうな間抜けた名前ないでしょうが」

「別に間違った読み方じゃないんだからそういう名前の人だっていると思いますよ！第一、ヒビクって鼻から息なんて出て行きませんか？クッ！とちゃんとスッキリ閉まってるじゃないですか。先輩の鼻の穴が大きすぎるんじゃないですか？」

「なっ、チャウチャウの鼻のくせにそういうこと言うのか？」

「誰がチャウチャウなんですか！」

「おまえ」

ヒカルはむう〜っと口を一文字に結んで風間を見据える。傍でふたりの言論戦を見守っている田村以下風間の仲間たちは、やや啞然とした様子で風間を見つめ、あかねはヒカルの陰に隠れたままおろおろ。

「それより早く表向きと裏向きの説明をしてください」

「...ったく、生意気な一年生だなあ！...ま、いいか。あかねちゃんだったよね。ちょっと来て」

風間はヒカルの後ろにいるあかねの腕を引っ張った。

「え？ええ？」

そしてあかねの手をとり、愛おしそうになでると、当然あかねはパニックに陥り、ヒカルは目を剥く。

「ちょっと、せん...っ！」

ヒカルが怒鳴ろうとした時、

「これこれ、この手なんだよ！！」

風間はまるで仲間たちに見せびらかすかのようにあかねの手を上を上げた。

「あかねちゃん、ピアノ弾くでしょう？」

「は、はい...」

「やっぱりな！俺の目に狂いはないんだ。あかねちゃん、ちょっとこの曲弾いてみてくれる？」

風間は一枚の楽譜をあかねに渡した。

「.....あの？」

あかねは風間の意図が分からずためらうが、素直にピアノの前に座り楽譜を開く。曲は聴いたことのないテンポのいいポップスで、譜面の上部に『光の城』とタイトルがうたれていた。あかねはしなやかに指を滑らせる。鼻歌でメロディーをなぞっていた風間はそのうちに歌詞を入れて歌い、一曲がまるまるここで演奏されたのだ。

「最高！初見でここまで弾けるなんて凄いで、あかねちゃん！一年間待っていた甲斐があったぜ！」

演奏が終わると風間たちは盛り上がり、あかねは再びヒカルの背後に張り付いてうつむいた。風間たちとあかねの様子をただ見守っていただけのヒカルは首をかしげた。

「一年間待っていた...って？」

「軽音楽部っていうのは実はカムフラージュ。俺たちはバンドで去年一年はピアニストなしで活動してたんだけどさ、さっきあかねちゃんの指を見た時ピンときたんだよ。この子だ！って」

「どうして、あかねちゃんがピアノ弾けるってわかったんですか？」

「ピアノを弾く指をしているからさ。ピアノを弾く奴はこの関節がしっかりしている。そして、爪が短い」

「はあ？それだけでですか？」

「そう。あとはインスピレーション。ビビッときちゃったんだよね～あかねちゃんの指と雰囲気！」

ヒカルとあかねは顔を見合わせた。

「じゃあ、軽音楽部っていうのは部の活動はやってないんですね？『気球に乗ってどこまでも』の合奏とかは」

なんだそれ？と風間たち一同は呆けた。

「だから、裏向きのバンドじゃなくて、表向きの方の活動です」

「それは微妙なところだな。一応、部、って名前がついていれば予算がもらえるしな。けど、体育祭、文化祭のイベントにはちゃんと軽音楽部として参加してるぜ。やってることがバンドだから学校はいい顔してないけどな。このままいったらいつかはきっと廃部になるかもしれない

な～」

風間は呑気に言った。

「.....なら私の出番はなさそうですのでこれにて失礼します！」

ヒカルはクルッと踵を返した。

「ヒカルちゃん！」

あかねが泣きそうな声で叫んだ。

「おいおい、待てよ！」

「私、楽器できないんです。ギターとか弾けないし。合奏で鈴担当とかなら何とかかなーって思ったけど、バンドじゃどーにもならないもん！」

「す、鈴...？」

「小中学校ではいつも鈴担当だったんです」

鈴はねえなあ...、と誰かがぼそりと言った。

「歌は？」

ヒカルはスーッと深呼吸をしてから、あああああ～と発声した。いったい何が始まるのかと、期待と不安の目が一斉にヒカルに集まる。

～すーみだーがーわあ～ そのかわべにい～ さーくらーがわあ～はゆるう～

「お、おい...？」

これは何の歌だ？と風間は隣で口を開けている田村に訊くが、田村も分からないようだ。聴いたことがあるような気もする未知の音楽――。

固まって動けなくなっている風間一同の中から、もしかして校歌か...？という言葉が発せられた時、ああそうか！と皆の硬直が解けた。何にしても、まったく別のメロディに編曲されていたことは確かだった。

「――ね？音痴なんです」

と、ヒカル。

「すんげー納得...！」

「だからバンドの軽音楽部に入ったところで何もできません。あかねちゃんだけよろしくお願いします」

風間は、うう...、と唸り言葉が出てこない。ヒカルはそのままドアに向かってスタスタ歩き出した。その時、

「私だってバンドなんてやだ...」

勝手に話が進んで行くことに異議を唱えるようにして、あかねは小声で訴えた。

「ちょっと待った！そりゃないぜ？」

風間はドアに向かったヒカルとうつむいて立つあかねを交互に見比べ、

「チャウチャウ、そこを動くな！あかねちゃん、どうしてバンドがいやなの？」

ヒカルには吼え、あかねには優しく訊いた。そこを動くな、と命令されたヒカルはおもいきりムツとして膨れた顔を風間に向けた。

「...だって、バンドとかロックなんて...ふ.....不良みたいだもんっ！」

あかねは一気に叫んで駆け出し、ドアまで行っているヒカルにしがみついた。

一瞬の沈黙と凍結――。

ぶはっ、と風間が吹き出したのを合図に、田村たちも一斉に爆笑した。

「まいったなあ、不良だってさ」

「だって...」

あかねは真っ赤になって俯いた。

「まさか、おまえもバンドは不良がやるもんだー、なんて思って、やらねえとか言ってんじゃねーだろな？」

風間はドアの前に立ち尽くしているヒカルに向かって言葉を投げた。

「あたしは...さっき言った理由以外はないですよ！」

ヒカルはムキになって反論した。本当にそうだし、それに――。

「あかねちゃん？バンドイコールロックってわけじゃないし、バンドイコール不良ってわけじゃないんだぜ？さっきの曲ね、あれは俺たちのテーマ曲でオリジナルなんだけど不良っぽかった？」

ヒカルの後ろにいるあかねに優しく話す風間。あかねは、ヒカルにしがみついたままふるふると首を振った。

「俺たちは不良なんかじゃないぜ？音楽だってマジメにやってる。アコースティック系の音楽をね」

あかねは、うう...と唸ってさらにヒカルにしがみつく。ヒカルもあかねの手をしっかりと握った。確かに、さっきの曲はキレイなメロディだったし、風間たちが歌った歌詞も「不良、っぽくはなかった。けど――。

「.....ったく、風間と田村がそんな派手ななりしてっから不良だって言われちまうんだよ！」

と、誰かが言ったがその通り。あかねはただ単に、先輩たちの見かけと雰囲気には圧されているだけだ。それはヒカルにもよく分かる。分かるのだけど――。

風間がニヤッと笑った。

「チャウチャウ」

「だから、私の名前は浅倉ヒカルです。チャウチャウって呼ばないでください。ヒビク先輩」

「んじゃ、ヒカル。お前のキャラクターは捨てがたい」

「は？」

「鈴やってたならマラカスもできるはずだ。お前も軽音楽部に入って俺たちと一緒にバンドやれ」

――...え？

風間は真っ直ぐヒカルを見つめている。ヒカルはその目を見つめ返した。

――.....バンドやれって...命令ですか....。

「音痴でいいならやりますけど.....」

よし！と風間はヒカルの肩を叩き、今度は、

「で、あかねちゃんはピアノ弾いてくれるよね？」

声色を柔らかくして、優しい口調であかねに言った。

「...ヒカルちゃんと一緒なら...やります」

あかねは小さく頷いた。

「ありがとう、あかねちゃん！...ってことでよろしくな、ヒカルッ！」

ありがとうとよろしくなで変わる声色――。

――あかねちゃんに対しての態度とあたしに対してのこの差はいったい何！？

さっきからの風間のあからさまな態度はいつそ清々しいぐらいだ。

――不愉快...、不愉快、ああ、不愉快っ！

「ん？どうしたヒカル？今度はチャウチャウが食あたりしてのたうちまわる寸前みたいな顔してるぞ？」

「な.....っ！？」

ヒカルは言葉も出てこない。最初から完全に風間のペースに吞まれてしまってる自分が悔しくて、また泣きたくなってきた。

「...風間くんらしくないよ？女の子を...、それも後輩をそんなに苛めちゃダメだってば」

そう言ってヒカルを庇ってくれたのは、目がチカチカしてきそうな色鮮やかな先輩たちの中で唯一黒髪を保ち、どこか知的な雰囲気漂う...

「俺は柏木」

――だ。

「バンドではドラムをやってるんだ。よろしくね、ヒカルちゃん。そしてあかねちゃん」

柏木はスマートに自己紹介をして微笑んだ。それが、少女漫画から抜け出してきた美少年のような美しい笑顔だったので、ヒカルの機嫌もやや回復した。

――キレイな人...。この中じゃ一番まともな人っぽい。ああ...、黒髪がこんなにも心落ち着くなんて...っ。

「俺は松山太郎。そんでコイツが弟の次郎」

「弟って...、あれ？先輩たちの顔、おんなじだ」

自分を太郎と言った人間と、弟だと紹介された次郎は双子の兄弟だ。雰囲気は若干違うが、顔だけを見れば何から何まで見分けがつかないほど似ているので、ヒカルは改めてふたりの顔をじい〜っと見入って言った。

「太郎と次郎って...、南極で頑張った犬の兄弟から取った名前なんですか？」

ぶわはははは、と笑ったのは風間と田村と柏木で、空いた口が塞がらない太郎と次郎兄弟。

――この先輩たちはお笑い担当って感じかな。けど、ほんとと同じ顔だ...。見分けつけるの大変そう。

「ま、こんなメンバーで、今年の軽音楽部は出発だな！さっそく明日から活動開始な」

風間がみなに号令をかけたが、その時ヒカルは思い出した。

「あの、私たちは演劇部にも所属してるんです。だから、毎日軽音楽部に出られるって訳ではないんですけど...」

「いいさ。こっちはお前たちに合わせてやるからさ」

そう応えて、風間はニカッと笑った。

軽音楽部の活動初日――。

「これ、どうやるんですか？」

風間響に渡されたマラカスを両手に持って、ヒカルは首を傾げた。ついこの間、体操部の久美子が家でこんな棒を持って踊っていたのを思い出し、ヒカルはマラカスをぶるんぶるん振って踊ってみたが、変な音がじゃらっじゃらっとするだけだ。

「ストップ！ストーップ！！それじゃお前、こん棒ダンスだから！」

響に止められ、こん棒ダンス？とヒカルはまた首を傾げる。

「お前、マラカス持ったことねえのかよ？！」

「ないですよ～」

ないのかよ....、と響。

「このスコアの意味わかるか？音痴のお前でもわかりやすいようにマラカスが入るところには★マーク書いといたんだぜ？」

「...だってあたし、楽譜読めないもん」

ヒカルは響が書いたバンドスコアに見入って言った。

「★マークが書いてあるのは分かるんですけど、それが曲のどこだってこと、楽譜見ただけじゃ分からない」

ああ～～っと、響は頭を抱え込み、ヒカルに詰め寄った。

「お前、もしかして正真正銘天然記念物級の音痴ってわけ？合奏で鈴やってたんだろ？音楽は好きだって言ったよな？」

「音楽は好きですよ？でも、好きと出来るとは違うんです！」

はあ.....と、響は深いため息を吐き、田村と柏木を呼んだ。

「こいつにマラカスの特訓してやって。後ろの方で！よろしく頼む！」

響はヒカル番を田村たちに押し付け、特訓は音楽室の後ろの隅でやれと言う。そして、自分はあかねをエスコートしてピアノに座らせた。

「じゃ、あかねちゃん。こないだの曲、合わせてやってみようか？太郎、次郎、演奏頼む」

太郎がベースを鳴らし次郎のギターが入りあかねのピアノがスムーズに合流してヴォーカルの響が歌う。あかねはまるでずっと前から軽音楽部の一員だったように滑らかにピアノを奏で、演奏において先輩たちとの壁はまったくない。

――う....。どうせあたしは音痴ですよお。

そんな響たちを見て、ヒカルは少しだけ落ち込んだが――。

「田村先輩、柏木先輩、よろしくお願いします！」

ふたりにペコッと頭を下げ、にっこり笑った。へこんでなんかいられない。音痴だし楽譜は読めないけど、軽音楽部の一員.....バンドの一員になったのだから頑張らなきゃ、と気合を入れて。

音楽室の前と後ろでそれぞれのパートの練習をする日々は、この日からしばらく続いたのだ。

一週間という限られた日にちの中、軽音楽部の活動と演劇部の練習で毎日の放課後が埋まり、ヒカルもあかねも慌しく過ごしていた。ヒカルのマラカスは音はだいぶ良くなったと田村たちにも言われるのだが、振りながらこん棒ダンス的なステップを踏んでしまう癖が治らないため、「直径一メートル範囲以上は動くな！」

と、いつも田村に怒られる。それでも、以前のように音痴に落ち込むことはもうない。田村と柏木が親切に指導してくれるし、マラカスを振るのは楽しい。

一方、のんびり屋のあかねの方は部活の掛け持ちはややキツイようだ。ピアノの方はお手の物だが、演劇部の練習は運動部のように体力を使うから――。

「今日は青空発声強化をします！」

小夜子の号令がかかり、部員一同は晴れ渡った青空が広がる屋上へ上がった。下は車の往来の激しい通りで騒音は上へと抜けてくる。その中で、なまむぎなまごめなまたまご〜、と腹筋を使った大声を張り上げるのが青空発声強化だが、これが結構キツイ修行なのだ。

「この騒音の中でも声が通らないと演劇なんて出来ないわよ！」

小夜子は練習の時は鬼のように厳しい。もともと大声を出すことに慣れていないし発声のコツもつかめないあかねは、こっちで落ち込むわけだ。

「デカイ声張り上げてなまむぎなまむぎ言ってじゃねえ〜、恥ずかしくないのかよっ！」

向かいの墨川中学の悪ガキが野次を飛ばしてきた。これが毎度のことで、そのたびにあかねは暗くなる。

「私たちもこれを乗り越えてきたのよ！くじけちゃ駄目！」

涙目のあかねに先輩たちは叱咤激励をするが、それであかねはまたへこむ。ヒカルの方は応戦体勢を整え、

「うるさいわねえ〜！お子さまはさっさとお家にかえりなさいーい！」

と、腹筋を使った大声を出し、道路の向こうの中学生に向かって叫んだ。

「今の発声...、凄くよかった。お腹の底から声が出てたわ...」

小夜子が半分呆れ、半分は感心して言った。

「そうですか？じゃあそろそろ演劇の方も教えてください！」

ヒカルたちは入部以来発声練習ばかりの毎日だが、二年生の三人は五人で出来る芝居の台本を思案中だった。

「そうね。そろそろ演劇もやらないと文化祭にも間に合わないしね...」

小夜子は考え込むが、なかなかいい題材が浮かんでこないのだ。憧れのロミジュリなどをもっての他だし、廃部寸前の演劇部にはたいした予算もないためにお金もかけられない。三人の二年生はこの作業に頭を悩ませていた。本城高校の部活動は運動強化部以外、原則的に三年生になると引退という形をとるため、小夜子たちにとっては今年が最後の文化祭になるのだ。ささやかでもいいからせめてちゃんと形になる演劇をやりたい。

「おお、ロ〜ミオ〜！あなたはどーしてロミオなの〜」

突然ヒカルはいつか演劇部の部室で見た台本の台詞を口にした。すると、あかねも、

「ただ一言僕を恋人と呼んでください。そうすれば、名前など今すぐにでも捨てましょう」
うろ覚えのロミオの台詞で応える。

「まあ！秘密のつぶやきを盗み聞きするなんて...っ。あなたは誰？」

ヒカルがジュリエットになりきる――。

そんな後輩の様子を見て二年生はガックリした。やっぱり大根だ。はやく演劇を教えないといけない、と。

「浅倉さん、台詞がエイトビートのリズムを刻んでいるわよ」

小夜子が言った。

「え？そうかなあ。軽音の方でマラカスの特訓を受けているから自然に身につちゃってるのかも...」

と、ヒカルはエアーマラカスを振った。そして、ハッと思いついた。

「先輩っ！」

ヒカルは大声で叫んだ。

「なによ、びっくりするじゃない」

「音楽劇やりましょうよ！」

ヒカルの目がキラキラ輝いていた。こういう時は何か突拍子もないことを思いついているということをあかねは知っている。

「ミュージカルのこと？」

「違います違います！劇の途中途中に音楽を入れるんです。登場人物が少なくても私たちが大根でも、少しはメリハリがついて内容が充実するかと思うんですけど」

「例えば？」

「そうですね...、例えばディズニーの映画って必ず歌が入ってるじゃないですか。ちょうどいいところにちゃんと音楽が入ってますよね。それを舞台でも応用するんです。ミュージカルみたいに台詞が詩と曲で語られるんじゃないくて！」

「でもね、演劇というのはしっかりした台本を実力で進行させていくものなのよ！」

真美が眼鏡の奥の目を光らせて言った。

「それはわかってますけど廃部寸前崖っぷちの演劇部なわけだし、形にこだわらずにちょっとはめをはずしてみても...」

「どうせ廃部になるならはちゃめちゃをやってしまえ、という意味？」

小夜子がヒカルを睨んだ。

「駄目...、ですよね、やっぱり...」

「気に入った！」

小夜子の目も輝いた。

「その案、いただくわ！」

「小夜子！？」

「いくら考えても題材が浮かばなかったけど、音楽を入れるならいくらでもありそうよ！グリムでもアンデルセンでもいいじゃない？」

「そうか...、童話がモチーフならいいかもね」

と絹江。

「でも音楽だったって私たちは歌なんて歌えないよ」

真美はうろたえて反論する。

「それは、歌える人に歌ってもらえばいいんですよ」

「誰？」

「先輩、私とあかねちゃんが軽音楽部だってこと、忘れてませんか？」

あかねがギョツとしてヒカルを見た。

「あなたたち二人が歌うの？」

「まーさか！私たちは演劇に専念します。音楽担当は軽音部の先輩たちです。ヒビク先輩、田村先輩、歌って演奏できる人たちはたくさんいますよ！」

「ヒカルちゃん、そんな勝手に決められないよ」

「あっちも廃部寸前なのは同じでしょ？ここは演劇部軽音楽部の共同で文化祭を盛り上げるというのはどうでしょうか」

ヒカルはいつものようにニマツと笑うのだった。

◇

「迷惑なことを考え出す奴だな、お前...」

ヒカルの提案を聞いた響は呆れた。

「俺たちだって暇なわけじゃないんだぜ？体育祭の後夜祭や他にだって公民館ライブを控えてるんだぜ？」

響たちのバンドは軽音楽部が仮の姿。地元にはファンもいるほどのバンドであり、学校無関係のライブにも出場したりする。

「でも、ただでさえ先輩たちのなりは校則違反もいいところで先生たちの心証が悪いというのに、このままバンドの態勢で活動が続けていたら軽音部は間違いなく廃部になりますよ。先輩たちはそれでいいかもしれないけれど、まじめにやっている私とあかねちゃんはそれでは困るんです。だから、ちゃんとした学校活動をしている軽音部を示さないとダメでしょう」

ヒカルは、演劇部と共同制作を真面目にやれば健全な部活動として認めてもらえる、と訴えているのだが、響たちにしてみれば、それは演劇部側の事情に都合よく...、

「お前、それこじつけすぎじゃん...？」

と、いうことになる。

「先輩、いつか言いましたよ。こっちはお前たちに合わせるって」

ヒカルはいたずらな目を響に向けた。

「あれはこういう意味じゃなくて...、」

「男が一回自分の言ったことに言い訳するんですかぁ〜?!」

と、ヒカル。

「ヒビク、お前の負けだな」

二人のやり取りを見守っていた田村が言った。ヒカルの命名以来、田村は響を`ヒビク、と呼

んでいる。

「俺の負け？！コイツに負け？！」

悔しがる響を尻目に、ヒカルはふふーん、と得意気に笑った。

「俺は別にやってもいいぜ？ヒカルの言うことにも一理あるし。な？」

田村が柏木や太郎次郎兄弟にふると、

「演劇部とのコラボレーションで文化祭を盛り上げるってのも楽しそうじゃない？」

柏木が仏頂面の響に言った。

「童話？アンデルセン？俺たちのカラーじゃねえだろが…」

響は田村と柏木がヒカルの企画に同意しているのが癪に障るのか、まだうだうだと文句を呟くが、

「…………でも、まあいいか。かわいいあかねちゃんの頼みだしね」

ヒカルを通り越して、その隣で立ちつくしているあかねに向かっては優しく微笑んだ。

――むっ。

ヒカルの目が剣呑に光る。あかねは、私は頼んでないですけど……と小さく訴えるが、響は気にせずあかねの頭をよしよし、と撫でた。

「あ、あの…？」

まるで大人が子どもにいい子いい子、とでもするように撫でられあかねはうろたえた。その横ではヒカルが、

――…おのれ…っ。いっぺんクロス！

と、鼻を膨らませ、硬く拳を握り締めるのだった。

七月に入ったのにまだ梅雨――。教室の窓からぼんやり外を眺め、ヒカルはうんざり顔だ。今朝は降っていなかった雨が昼過ぎごろから本降りになっていた。

「雨め...っ」

自転車通学のため雨の日はレインコートを着なくてはならないし、フードを被って傘をさしても髪は濡れてしまう。明後日から始まる期末試験だけでも気分が重いのに、毎日毎日飽きもせず降り続ける雨に呪いの言葉でもかけたくなる。

「よお、浅倉！珍しくブルーに沈んでんじゃん？」

背後からポン、と肩を叩かれた。

「雨止まないかなーって思って...」

振り向きもせずにヒカルは言った。

「帰らねえの？部活ないんだろ？」

「帰るよ。レインコート着るのめんどくさいなーって思ってただけ」

やっとヒカルは振り向いた。試験が近いため部活動は一斉に中止になっている。試験が終われば夏休みに入るから今学期の放課後の部活は昨日で終わっていた。

「黒田くんは始末書書き終わったの？」

「.....おお」

「これで何回目？」

「.....三回...いや四回だな。あと一回やったら親呼び出しって言われた」

は一、とヒカルはため息をついた。

「短気は損気だよ？」

うるせえな、と一希は文句を言うが、以前のようにヒカルに対してキレることはない。だが授業中に短気を起こし、教師に暴言を吐いたり教科書を投げつけたりは日常茶飯事で今日の始末書もそれが理由だった。

「じゃ、帰ろうか」

ヒカルはレインコートを着た。鞆の中からコートを出し着終わるまでほんの数秒もかからなかった。

「.....おまえ、もしかして俺を待っててくれた...とか？」

一希は校長室の隣の研修室でひとり始末書を書かされていたが、もう誰もいない教室でたいして手間もかからないレインコートを着るのが面倒だからといってこんな時間までヒカルがひとり残っているのも不自然だ。

「べつにそういうワケじゃないよ？まあ、気にはなっていたけど」

う...と一希は言葉に詰まる。

「お母さん学校来なくてもいいように、少し我慢も覚えなよ？」

一希は雨の校庭に目を向け、しばらく考え込み、

「.....だな」

と、呟いた。

一希と昇降口で別れ、ヒカルは駐輪所から取ってきた自転車を転がし校門を出ようとした。

「降水確率六十パーセントだって言ってたじゃん」

「だって邪魔だろ。朝降ってなきゃ持って来ねえよ、普通」

「持って来るでしょ、普通…。梅雨だし…」

「しょーがない、入れてってやるよ」

「…優しいなあ、田村」

――あれ？ヒビク先輩たち…。

軽音楽部の先輩五人が校門の前に固まってそんな話をしている。どうやら響は傘を持たずに来たらしい。柏木が言うように、梅雨の時期の降水確率六十パーセントなら傘は持った方がいいよ、とヒカルは思った。田村が響に自分の傘を差し出して、ふたりはひとつの傘の中に納まっ……ていない。互いの外側の肩がおもいきり濡れている。身長百八十センチは越えている男がふたり、あいあい傘というのも妙に不気味に見える。

――あはは…。面白いもの見ちゃったよ…。

ヒカルは苦笑した。

「狭い…。やっぱいい。濡れて行く」

響は田村の傘から飛び出した。途端、金色の髪の上に銀色の雫が降り注ぐ。

――あ～あ。あれじゃ駅に着くころにはびしょびしょになっちゃうよお。ヒビク先輩ってよっぽど濡れるの好きなんだなあ。

初めて会った時の水飲み場で、顔中をびしょ濡れにしていた響をヒカルは思い出した。あの時に見た、まるで映画のワンカットのようなキラキラの輝きは今でもはっきりと覚えている。明るくて幻想的で不思議だったあの光景。まるで、銀幕の中からどこかの貴公子が抜け出して来たかのように思えたというのに――。

――チャウチャウだとか音痴だとか、人でさんざん遊んでくれちゃってさ…。

昨日のことだ。演劇部の台本が出来上がり、小夜子たちがそれを持って正式に軽音楽部部長の響に合同制作の申し入れに行った。ヒカルとあかねも演劇部員として一緒に音楽室に行ったわけだが、響は台本を見て絶句してしまったのだ。台本はアンデルセンの『みにくいあひるの子』をモチーフにして小夜子を書いたオリジナルだが、いじめや親子、兄弟の関係をテーマにしているストーリーのため、やや重い。だが、登場人物はアヒルだったり白鳥だったりする童話のため、アンデルセンというカラーじゃない、と言っていた響にとっておそらく許容範囲ギリギリのものだったのだろう。小夜子たちが台本を置いて帰った後、響は深いため息を吐いていた。

『ヒビク…、作曲大丈夫か？』

田村が心配するのも無理はない。軽音楽部で作曲が出来るのは響しかいない。劇の挿入曲となると一曲や二曲とはいかないため、小夜子たちはオリジナルを作らなくてもいいと言っていたが、

『せっかく合同でやるんだし台本がオリジナルなんだから、音楽もオリジナルでいきましょう

よ〜』

と、提案したのはヒカルだった。

『オリジナルねえ…。簡単に言ってくれちゃって…』

響はまたため息を吐いた。その様子は少しいつもと違って、ヒカルは気になった。が、
『まあそうだよな。合同制作…制作っていうんだからオリジナルでやらないと意味ねえしな』

と、響はヒカルの提案を素直に飲んだ。

『そう言ってくれると思ってました！ヒビク先輩は音楽にはこだわりがありますもんね！』

思ったことをそのまま口に出したとき、響はいつものように意地悪な目をして、

『国宝級の音痴のくせに俺のこだわりが分かるなんてヒカルちゃんってばすげーや』

と、棒読みの台詞を吐いた。天然記念物からいつのまにか国宝の音痴になってしまい、当然ヒカルの鼻は膨らんだ。そこからはいつもの展開になだれ込み、さんざん遊ばれて笑われて昨日が終わったのだ。

響に吐かれた暴言を思い出すと今すぐにでも跳び蹴りを出したくなるぐらいに頭に来るが…、
――あんなに濡れてちゃ可哀想。試験前に風邪ひいたら大変だし…。

よし、と気合を入れてヒカルは、ヒビク先輩！と、声をかけた。

「よお、ヒカル」

振り向いた響の髪から雨の雫が垂れていた。

「先輩、ずいぶん濡れちゃってますよ？傘ないんですか？」

「ああ、まあね…」

響は雨粒を払う。

「風邪ひいちゃいますよ！これ、貸してあげます」

ヒカルは自分がさしていた傘を響に差し出した。

「…え！？」

差し出された傘に、響は言葉を失くして立ち尽くした。傍にいる田村も絶句している。

「あたしはレインコート着てるから大丈夫ですよ！それ、さして帰ってくださいね！」

「あ、いや…、でも…」

響はヒカルが差し出す傘になかなか手を出さない。

「遠慮なんて先輩らしくないですよ！それじゃ、また明日！」

ヒカルは響の手を取ってほとんど無理やり傘を握らせ、自転車に跨った。

「あ、おい、ヒカル！だって、これ…っ」

響の声が後ろでしたが、ヒカルはしつれいしまーす、と言ってそのまま自転車を走らせた。

――ヒビク先輩に傘貸しちゃったよ…。

自転車をこぎながら、なんともいえない気持ちが沸いてくる。だが、それがどういう感情なのかはよく分からない。ただ、自分の持ち物を今この時響が持っていると思うと心のどこかがざわついて仕方がなく、ヒカルは雨に濡れるのも忘れ夢中で自転車を走らせた。

自宅に帰ったヒカルが、濡れた前髪をタオルで拭いながら自室のカーテンを閉めようとした

時だ。

「あ」

二メートルほど離れた向かいの窓際に颯土が立っていた。向こうもちょうどカーテンを閉めようとしているらしい。

――あっちのカーテンが開いてる…。

ヒカルはカーテンを引くのも忘れ、珍しいものでも見るように颯土の部屋を眺めた。落ちてくる雨が邪魔でよく見えないのがもどかしいが、向こうは向こうでこちら側を見ているようだ。

――そんなにじろじろ見られるとちょっと恥ずかしいんだけどなあ…。

振り返って見る部屋がかなり散らかっている――。ヒカルは無意識に足で床に転がっている色々なものを端に寄せた。今、窓は閉まっているし雨で視界は悪くなっているが、こうして互いの部屋のカーテンが開いていると距離はかなり近い。晴れた日に窓を全開にしていたらきっと部屋の中まで丸見えだ。友達と部屋が隣同士で近いというのは嬉しいことだ。幼馴染のようでウキウキしてくる。例えば分からない宿題が出たりしたら窓越しに「ヘルプ～」と助けを求めたり、ちょっと人恋しい夜などに「おい」と呼んでおしゃべりしたり、夏は開け放たれた窓の縁に風鈴とか蚊取り線香を置いてジュースを飲みながら一緒に夕涼みをしたりお喋りしたり、幼馴染妄想は無限に膨らむ。

だが相手はネクラのムラタケだ。宿題の相談をしたらため息を吐かれた挙句に無言で窓を閉められるだろうし、「おい」と呼んでも聴こえない振りして無視しそうだし、夏の楽しいお喋りなんてありえない。ということは、この距離はとてつもなく微妙というものだ。

そんなことを勝手に考えながらカーテンを閉めようとした時だ。颯土の部屋の窓がガラガラッと開いた。そして――。

「ヒーねえ！」

向かい側の窓の中にそれこそありえない人物の姿を見た。

「うそっ!？」

ヒカルは反射的にこちらの窓を開けていた。そして、

「あんた、そこで何やってんの!？」

思わず身を乗り出した。無邪気ににこにこ笑いながら手を振る哲平が、

「ソージと遊んでるの!」

と、答えたものだからヒカルは思わず窓際に立っている颯土を見つめた。

「群竹さんと…遊んでる…の? 哲平が?」

颯土はあからさまに迷惑そうな顔をしている。まだ制服を着たままだから颯土も帰宅したばかりのようだ。

「あ……もしかして、哲平が入り込んでた…とか?」

颯土は不機嫌を隠さず、ああ、と呟いた。

「だって、おばちゃんがソージが帰ってくるまで遊んでていいってゆうんだもん」

哲平は邪気なく言うと、クルッと回れ右して部屋の奥に駆け込んで行った。おい、こら! という颯土の声が聴こえたが、向こうの窓とカーテンをそのまま閉められてしまい、ここからは中の

様子は分からなくなった。

「へんなの...」

いつの間に、哲平は颯土とそんなに親しくなったのだろうか？毎朝の目覚まし攻撃が効いているのだろうか。それにしても、変だ。ちぐはぐすぎる。

「.....まあ、おばさんがいいって言うならいいか...」

本当に迷惑だったら追い返されて来るだろう。ヒカルは気にしないことにして、やっとカーテンを閉めた。

◇

その翌朝は曇り。天気予報では、今日の降水確率は午後から六十パーセント。ヒビク先輩、今日はちゃんと傘を持って来たかなあ...、と考えながらヒカルが校門を潜った時、

「よお、ヒカル！」

後ろから声をかけられ振り向くと、響たち一同が手を上げて校門から歩いて来た。

「おはようございます、先輩ズ」

「こら！簡略しすぎ」

響に頭を軽く小突かれたヒカルが、痛いじゃないですかーと膨れると、

「おっ。今日も見事な膨らみっぷり！」

響は膨れたヒカルの頬を指で押した。ぷすっとコミカルな音を発して膨れた頬がつぶれ、響は面白そうにあはは、と笑った。

「朝からヒカルで遊ぶなよ、ヒビク。ヒカルに用があるんじゃないの？」

おお、そうだった、と響は手に持っていた傘をヒカルに差し出した。

「これ、サンキューな。助かったよ！」

「あ、はい...」

ヒカルが傘を受け取ると、じゃあな、と響は先に行く。その後を歩きながら、田村が思い出したようにヒカルに振り向いて言った。

「その傘、ヤツはちゃんとさして帰ったからな〜」

「そうですか。よかったです」

それじゃ、と先に行く田村の顔がずいぶんやけていたのがヒカルは少し気になった。

「しかし、いつ見ても派手な先輩たちだなあ.....」

ふいに声がした方に顔を向けると、一希が昇降口に入っていく響たちの後姿をじいっと見つめていた。

「金髪にオレンジシャツなんて普通ありえねえだろ。赤メッシュもどうかしてるぜ？」

あんたも十分派手だけどね、とヒカルはぼそりと反論した。

「浅倉、あの先輩たちと仲良いんだな？」

「まあ、部活の先輩だしね」

仲が良いかどうかは微妙だけど、とヒカルは心の中で呟いた。

――ヒビク先輩は意地悪だし...。

頬を押さえるヒカルを見つめ、一希がややためらいがちに口を開いた。

「.....あのさ、浅倉...。俺さ.....、」

しかし、その後の言葉が続かない。何かをためらうように、どこか思い詰めてもいるかのような目でヒカルを見て、やっぱりいいや、と一希は昇降口に入ってしまった。

「黒田くん、どうしたんだろう？」

そうこうしている間に予鈴が鳴り、ヒカルも慌てて校舎に駆け込んだ。

そして、帰りは天気予報が的中して、また雨——。明日からは期末試験が始まるし気分は沈む。

「早くおひさまに会いたいよお」

「そうだね。夏休みになっても梅雨なんてやだよね」

「まあ、とりあえず明日からのテスト頑張ろう」

帰りがけの昇降口で麻耶とあかねと別れ、ヒカルは今朝返って来た傘を開いた。

ふと、傘の中に響の匂いがするような気がした。昨日一日、響が持っていたからかなと思い、その直後にはおもいきり首を振った。

——何、乙女ちっくなこと考えてんの、あたし！

自分で思ったことが恥ずかしすぎて、それを誤魔化すようにヒカルは駐輪場までの路をサクサク歩く。

——...そういえば田村先輩、ヒビク先輩がこの傘ちゃんとさして帰ったからなって...、どうしてあんなこと言ってたんだろう...？

傘なのだからさして当たり前なのに。そのために貸してあげたのに——。大きなひまわりがたくさん咲いている傘の中で首を傾げるヒカルだった。

期末試験も終わり、そして梅雨も明けて夏休み――。演劇部&軽音楽部のヒカルとあかね、剣道部の麻耶と祐輔、空手部の颯土と勇斗はほとんど毎日のように部活があるため、いつもと変わらずに学校で顔を合わせていた。

「毎日毎日暑くて死にそうだよ。体育館の暑さは半端じゃないもん…」

「剣道の防具って蒸れそうだよね…」

学校の裏手にある草薙忠次郎商店一別名牛乳屋一に、ヒカルたちいつものメンバーが集合し部活帰りのひとときを愉しんでいた。牛乳屋は学校の購買部に瓶牛乳や珈琲牛乳などを納めている本店で、他には缶ジュースやアイス、菓子パンなどもほんの少しだけ置いてある。駅までの通道沿いにあるため、昼休みや普段の夕方などは本城高校生たちで溢れかえる人気の売店だ。

「はい。蒸れます。蒸し風呂です」

麻耶は肯定し、

「夏の防具は……臭いもキョーレツです」

と付け加えた。

「合宿は那須高原だっていうから、少しは涼しいんじゃないか？」

祐輔が無意識に自分の腕の匂いを確かめながら言うと、麻耶も同じように自分をクンクン嗅ぎながらそうだねと頷いた。

「オイラたちは合宿どこだっけ？」

勇斗が颯土に訊いた。八月に剣道部も空手部もそれぞれ学校が指定する施設での合宿が行われる。が、颯土に勇斗の言葉は届かず、完全無視。

「群竹ちゃん、少しは会話に加われば～？」

――何で俺がこいつらと…。

颯土はこういった輪の中からは遠ざかっていたのに勇斗がそれを許してくれない。夏休みになっても何かとつきまとわれ、気がつくとうこういう状況になっている。自分で自分にもものすごい違和感があって仕方が無い。

「どこにしたって合宿があるなんて楽しみじゃない。私たちなんてないんだから」

ヒカルがややむくれて口を尖らせた。

「演劇部、合宿ないの？」

「ないよ。ねえ、あかねちゃん」

「うん。軽音もないみたい」

「私たちも合宿やりたいよね～！」

ヒカルはあかねと手を取り合って嘆いた。今時、中学生だって夏休みにクラブ合宿をする時代なのだ。妹の久美子も来月早々に合宿がある。部活に入っている以上、そういった一般的な醍醐味を味わいたいじゃないか！と、ヒカルが声高らかに演説していると、

「どこにいても元気がいいなあ、ヒカルは」

響と軽音楽部一同がぞろぞろと現れた。

「ったく、うじゃうじゃ群がりやがって暑苦しいなあ。買い終わったヤツはとっとと出た出たあ！」

双子の太郎が歩くスペースを塞いでいる一年生組を手でパッパと拡散させると、颯土は助かった、と言わんばかりにさっさと歩道に出て行った。そしてややペンキが剥げかかっているコカコーラのベンチにどっかりと座り自分の缶コーラを開ける。

「ほらほら、おめーらもいつまでもたむろってないで出ろ出ろ！歩けやしねーじゃねーか」

太郎が麻耶や祐輔の背中を次々に押して入り口まで追い出し自分が歩くスペースを確保し、次郎が乱暴に押してやるなよ、と双子の兄をたしなめている間に、響と田村はさっさと自分の買い物済ませていた。何にしても、狭い牛乳屋は一瞬のうちに高校生たちで溢れ返った。

「ヒビク先輩！私たち今、合宿の話をしていたんです」

「ああそう…」

缶コーヒーを手にして響はそっけなく言う。

「ああそうって、先輩！冷たいです！」

ヒカルの鼻が膨らむと、

「おっ！出た出た、久々のチャウチャウ顔！」

響はヒカルの鼻の頭をつついてからかう。チャウチャウ、と言われると過剰に反応するヒカルに、それがさらに面白くてたまらない響の言い合いがいつものように始まった。響の一言一言にヒカルはいちいちムキになる。そんなヒカルを見て、麻耶や祐輔や勇斗は違和感を覚えた。黒田や颯土の睨みにも動じないしっかりもののヒカルが響には振り回され、普段より幼く見える。響はヒカルをまるで子どものように扱い、からかい、笑っているのだ。

——たいした男だ！

「あのねえ、俺たちは廃部寸前の身分なんだぜ。予算もなければ行く場所もないの！」

「演劇部と合同で行けばいいじゃないですか～」

「ばーか。演劇部だって同じ立場だろうが」

——ばーか？！ヒカルをバカ扱い！？

三人は顔を見合わせ口は半開き状態だ。

「田村先輩は？合同合宿どう思いますか？」

「そりゃ…出来れば理想だけど、現実問題として予算はない、受け入れてもらえる施設もなければ無理ってヤツだろ」

「そんな弱気なあ！本気になれば出来ないことなんてないですよ！」

「本気になってるの、お前だけだから…」

響が単調に突っ込むが、ヒカルはほとんど聞いていない。今度はいつも何かと助けてくれる優しい柏木を捕まえ、

「柏木先輩！おんなじものを一緒に制作するのに、みんなの心をひとつにするって大事なことですよね？合宿ってそういうのに凄くいいチャンスだと思うんですよ」

と、味方につける作戦に出た。そうだね…、と柏木は困惑顔だ。

「……ったく、ヒカルだよなあ」

響はため息を吐いた。

「合宿やりたいよね？あかねちゃん？」

「うん」

ヒカルとあかねはふたり揃って響をじ〜っと見つめる。

「あかねちゃんも行きたいわけ？」

例によって響はあかねには優しく訊ねた。

「行きたいです！」

「そっか…。あかねちゃんが行きたいって言うんなら、顧問に交渉してみっか！」

言いながら、あかねの頭を愛でるように撫でまわす響。困惑するあかねに苦笑いの田村たちに
無然とするヒカルだ。

「絶対差別……っ！」

「何ふくれてんだ、お前？」

ヒカルはむくれて道のベンチに飛び出した。そこでは颯土がひとりでまったりしているが気に
しない。

「あたまくるー！」

腹の虫を治めるためとりあえずヒカルは叫んだ。

――何なの、あの態度の違いはっ。そりゃあかねちゃんは可愛いけどさ、あからさま過ぎる
でしょまったく！！

どうにもこうにも腹が立って仕方が無い。このまま勢いつけて跳び蹴りしてやりたいっ！

鼻息を荒くしたままふと颯土を見ると、颯土の視線はどこか遠くに注がれていた。

「ん？」

ヒカルがそれを指で、てんてんてん、とたどってみるとそこは…。

「な、なんだよ…っ！」

ヒカルの奇行に颯土はうろたえてベンチから立ち上がった。

「べつに？どこ見てたのかな～と思って」

と、ヒカルは店の入り口付近にいるあかねと響を見た。響はまだあかねによしよししながら勇
斗や麻耶たちと何かしゃべっている。

「ふ～ん…」

ヒカルは颯土を見た。そして、

「そりゃ気になるよね～」

と、ニヤけた横目で颯土を見た。

「ヒビク先輩、あかねちゃんのことを好きみたいなんだよね～。いっつもあんな感じであかねち
ゃんにはよしよししてあげるんだよ？まあ、べつにいいんだけどね～」

言いながらヒカルは颯土に背中を向け、アイスボックスのアイスをあさりはじめた。それから
、チラッとベンチを振り返り見ると颯土の姿はもうそこにはなかった。

「気になるくせに、無理しちゃってさ…」

――群竹くんが？それとも、あたしが……？

一瞬の間の自問は、

「お〜い、ヒカル〜」

中で響が呼ぶ声によってかき消された。ヒカルが走っていくと、演劇部と合同で合宿に行けるように互いの顧問に交渉するから付き合い、と響。

「今からですか？さっきまで先輩ごねまくっていたのに？」

「一旦肚が決まれば、次の行動は電光石火なの、俺は！」

「思い立ったが吉日男、とも言うがな」

横からボソッと田村が補足する。

「いいから。さっさと行くぞ！合宿行きたいんだろ？しっかり交渉してくれよな、言いだしっぺ！」

「あたしが交渉するんですかぁ〜〜？」

響は有無を言わずの勢いで、ヒカルの腕をグイグイ引いて歩き出した。響の肚を決めさせたのはあかねが言った行きたいという言葉で...、それがどこかヒカルの胸をきしませる。だからなのか、

「あたし、交渉ごとは得意じゃないんですけど...？」

と、ささやかな抵抗を試みたが、

「謙遜しなくたっていいからな？」

と、あっさりあしらわれ、ヒカルは思わずため息をもらしていた。

「ヒカルちゃん...」

響に引きずられていくヒカルを心配するあかねに、田村は、

「ヒビクがああやって動いたってことは九十八パーセントは実現ってことだ。おまけにヒカルつきだ。百パーセント決まりだろう」

と答えたが、あかねの心配はそのことだけではなく、あかねもまたひとり、小さなため息を漏らした。

そして、田村の言うとおり各顧問と交渉成立。演劇部、軽音楽部の合同合宿が実現することになった。その出発を一週間後に控えた日のこと。

「ヒカル、大変なことになっちゃったわ...」

たった今、電話の受話器を戻した母親がやや深刻な顔をした。

「おじさんが交通事故にあって入院しちゃったの。おばさんが病院と家を行ったり来たりしてるらしいのだけど、大変だからお母さん手伝いに行かないとならない」

「どれくらい？私、来週から合宿だよ」

「来週までには帰るわ。でもね...」

母親はヒカルをじっと見る。ヒカルは嫌な予感がした。まさか...！

「そういう事情だから哲平はつれていけないのよね」

やはりそう来たか！とヒカルは思った。

「哲平おいていくのー？」

「しょうがないでしょう？久美子はちょうど合宿に行ってるし、剛もアルバイトでほとんどいないし、手がかかるのは哲平だけよ」

と、母親は簡単に言うが。

「それが一番大変なんでしょ！それに私だって部活があるんだし。まさか哲平連れてはいけないし、夜だって絶対にママーって泣くよ」

「部活はお休みしてよ。哲平はあんたになついているから夜も大丈夫よ。お願い！」

何を言っても無駄のようだ。

「...わかったよ」

ヒカルはあきらめた。その哲平は今、颯土の家に遊びに行っている。何故だかえらく颯土を気に入ってしまい毎日のように入り浸っているのだ。颯土の母親も小さい子どもが懐かしいようで哲平をかわいがってくれる。ヒカルはあかねに電話をして、明日からの部活はしばらく出られないと告げた。するとあかねは自分も哲平の子守りを手伝うと言う。それなら明日泊まりにおいでよと誘うと、あかねはきゃあきゃあはしゃいで、

「絶対に行く！」

と、言った。

翌日、母親は哲平をおいて発ち、ヒカルは部活を休んで子守りに徹した。哲平は颯土の家に行くと言ってきかない。颯土は部活に行っていない、と説明しても聞くような相手じゃない。ヒカルは仕方なく哲平を連れて群竹家の呼び鈴を鳴らした。

「まあ、ヒカルちゃんも来てくれたの！嬉しいわ！」

ヒカルは初めて入る颯土の家だ。いつも雑然としている自分の家とは違いスッキリとしている。そしてインテリアがかわいい。パッチワークのタペストリーや小物などがあちこちにセンスよく飾られている。

「このパッチワーク、全部おばさんの手作りですか？」

「そうよ。趣味なの」

颯土の母はハーブティと手作りのシフォンケーキを出してくれた。ティーカップやお皿のひとつひとつもセンスが良い。

「颯土は一人っ子でしかも男の子でしょう？もうずいぶん前から何も話してくれなくなっちゃって、手がかかるのは朝起こす時だけ。毎日暇なのよ。だからこんなこと出来るのよ」

「すごく可愛い！何もかも可愛い！」

「息子が無愛想で可愛くないから、せめて家の中ぐらい明るく可愛くしておきたいじゃない？」

「ああ…。確かに、可愛くないもんね、息子さん…」

颯土の母はヒカルの言い方が可笑しそうにくすくす笑った。哲平はしばらくそこでお菓子をつまんでいたが、やがてタターッと勝手に二階に上がって行ってしまった。

「こら、哲平！」

「いいのよ。哲平ちゃん、颯土の部屋に行ったのよ。いつもそうなの」

「群竹くんの部屋であの子何してるんですか？」

「テレビゲーム。大丈夫よ。時間見てやめさせるからね」

毎日のように哲平に部屋に入り込まれて颯土は迷惑していないのだろうか、とヒカルは心配になった。どう見ても小さな子どもの面倒を見るようなタイプではない。それなのに哲平は何故か颯土になついているようだ。

「なんで哲平、群竹くんを気にいってるんだろう…」

ヒカルが首をかしげると、颯土の母も不思議よねえ…と感慨深げに呟き、そして、

「ヒカルちゃん、好きな男の子なんているの？」

唐突に言った。

「え……？」

と言ったまま、ヒカルは返答に詰まった。今、とっさに頭に浮かんだ名前に自分が戸惑い、頭を大きく振ってその名を拡散させる。

好きだなんて、全く意識したことがない人の、その名前――。

「あら、変なこと聞いちゃったわね。ヒカルちゃん可愛いからもてるでしょう？」

「私、可愛いですか？今までそんなこと言われたことないです」

可愛いと言われてヒカルは顔を赤らめた。これまでしっかりしてるわね、とは言われても可愛いと褒めてもらったことはほとんどないから素直に嬉しくて自然と笑顔もこぼれる。

「その笑顔なの！まるでひまわりみたいよ？凄く可愛いわ！ヒカルちゃんみたいな女の子が颯土のお嫁さんになってくれると嬉しいんだけどなあ」

ヒカルはまた言葉につまった。

「む、群竹くんのお嫁さん…ですか…？」

まるで想像できない。

「あらやだ、ごめんなさい！いやよねえ、あんな無愛想な男！私だっていやなもの！」

颯土の母はケラケラと笑った。

「私ったら何を言ってるのかしらね。話をする相手がいないからつまらないのよね。こんなことなら娘を産んでおくんだったわ！」

颯土のお嫁さん、には困惑するしかないが、ヒカルはこの母親の気持ちが少しわかるような気がした。あの息子ではさぞかしつまらない毎日だろう。だから哲平をかわいがってくれるのだ。それにしても突然好きな男の子はいるのか、という質問をされた時に浮かんだ人の名前はいったい何だったのだろう。何の前触れもなく、まるで`好き、'という言葉に対する条件反射のようにその名前は沸き出てきた。

ヒビク先輩――。

――冗談じゃない！あんな意地悪なひいき男！

ヒカルはまた頭を振った。違う違う。ありえない。好きじゃない！

お茶も飲んだしケーキも平らげたヒカルは、

「哲平！帰るよー！」

階段下から二階の部屋に向かって叫ぶが、

「ボクかえんないよ。ソージが来るまで待ってるもん！いつも待ってるんだもん！」

哲平の返答はこうだ。

「駄目だよ！」

「や～だよ～！」

ヒカルはため息をつく。

「あとで送って行くわよ」

「でも…」

颯土の母は大丈夫だから、と言う。ヒカルは悪いとは思いながらも家の事もしなくてはいけないので哲平を置いて一人で帰ってきた。

時計を見ると午後三時。いつもならまだ部活をやっている時間だ。今ごろあかねや響たちは何をしているのだろう、とふと考えた。みんなが集まっている場所に自分がいられないというのは少し寂しい。決して響が好きだから、というわけではないけれど――。

そろそろ洗濯物をしまっておこう。あかねが来るから夕食の準備もしておいてしまおう。夜には父も兄も帰ってくるからカレーライスでいいや、とヒカルは考えながら動き始めた。

そして、カレーライスができあがった頃、玄関のチャイムが鳴った。あかねか哲平か、と思いながらドアを開けると、

「やっほー！」

立っていたのは勇斗だった。その後ろから、

「ハァイ！」

麻耶が顔を出し、またその後ろから、

「うーっす！」

祐輔が出てきて、最後に、

「ごめん。ヒカルちゃんちに行くって言ったらみんなついて来ちゃって…」

あかねが顔を出した。

「ん～、食欲をそそるいい匂い～」

勇斗はダイニングに直行し勝手に座り込む。食べる？と訊くと部活帰りで腹減らしの勇斗と祐輔までも、うんうん、と、まるで飢えた犬のように舌を出す。ヒカルは二人分のカレーライスをやそい食卓に並べた。

「それで、その哲平ちゃんは？」

ガツガツとカレーライスをかつ込むふたりにやや呆れた視線を送りながらあかねは哲平の姿を探す。

「隣んちに遊びに行ってる。そろそろ迎えに行かないと…。あの子、どういうわけか群竹くんのが気に入っちゃってるんだよね～」

だが、勇斗、祐輔、あかね、麻耶はそのヒカルの言葉の意味が理解できないようだ。みなが同じような「はて？」の顔になっている。哲平が颯土を気に入っていると何故隣の家に遊びに行くのだ。そもそも颯土とヒカルの弟のどこに接点があるのだ、と皆の思考が回っているのがヒカルには見えたような気がした。

「ああ、そうか…。みんなは知らないんだよね。隣、群竹くんちなの」

「ええ————っ!？」

勇斗、祐輔、麻耶、あかねは同時に立ち上がって叫んだ。

「マジ？ほんとマジ？」

「う、うん。まじ」

「じゃあいるんだな？群竹ちゃん、隣にいるんだな？」

「さあ？部活から帰ってればいるんじゃない？」

「行こうぜ、行こうぜ」

「みんなで行ったら絶対にイヤがるよ」

麻耶が興奮している勇斗をたしなめた。だが、

「いいじゃん。そのペッペーとかいうヒカルちゃんの弟を迎えにみんなで行こうぜ」

勇斗はどうしても颯土の家に行きたいらしい。そんな勇斗はまるで哲平がそのまま大きくなったみたいだ。哲平が颯土になついているのと、勇斗が颯土にこだわるのはもしかしたら同じ理由なのかもしれない。その理由自体は本人たちにしか分からないのだろうが——。む～らた～けちゃ～ん、と変な節をつけて言いながら勇斗がさっさと行ってしまったので一同も後を追って隣家へと向かった。

隣家の玄関が開くと、

「こんにちは！オイラ…いや、ボクたち颯土くんのクラスメートで～す」

勇斗が元気にあいさつをした。颯土の母は、このクラスメートたちの突然の来訪に目を丸くしている。

「すみません、おばさん。哲平を迎えに来たんです」

ヒカルは勇斗を押し退けて前に出る。

「どうぞ、みなさん上がってちょうだい」

颯土の母が嬉しそうに言うので、一同はどかどかと上がりこんだ。

「哲平ちゃんは颯土の部屋にいるわよ。そこの階段を上った左の部屋」

「じゃあ、あがらせてもらいま〜す」

勇斗が先頭を歩く。

「お〜い、群竹ちゃ〜ん。あがるよ〜！」

勇斗は大きな声を出しながら階段を上がる。その後ろを皆がぞろぞろと続いて行く。が、颯土の部屋からは何の反応もない。部屋の前に立ってドアをノックしても返事がない。中からはテレビゲームの電子音が微かに聞こえていた。

「開けるよ〜！」

勇斗は部屋のドアを開けた。

向かって左側にベッドがあった。颯土は耳にヘッドホンをつけ、そこに転がって向こう側、壁の方を向いていた。雑誌を見ているようだ。哲平はというと、投げ出している颯土の足を背もたれにして座り、ベッドの足元にあるテレビの前でゲームをしていた。二人とも互いの存在を微妙に触れ合うことで感じながら、勝手に好きなことをしている。

「ほお〜…」

大きな颯土に小さな哲平。一見アンバランスなそのペアーがどういうわけかしっくりとなじんでいる。颯土は友人たちが入って来たことにまるで気がついていない。ヘッドホンからはシャカシャカと音楽が漏れているし、哲平はゲームの世界に入り込んでいる。友人たちは顔を見合わせた。このなごやかな空気を壊してしまっているものだろうか、と。

「あ〜、また死んだ〜」

ゲームオーバーになった哲平が、ふいに顔を部屋の入り口に立っているヒカルたちに向けた。

「あっ！ヒーねえだ！」

哲平がベッドから飛び下りた。足元にあった温もりが突然に消え、その行き先を確認するかのように顔をこちらに向けた颯土は、一瞬のうちに体をはね起こし耳にあったヘッドホンをぶんどった。

「な、なんだよ、お前ら…っ？」

颯土は友人一人一人の顔を見回しながら大いにうろたえた。

「ヒカルちゃんちのペッパーを迎えに来たんだよ」

「僕たちみんなで浅倉の家に行った。そしたら隣が群竹んちだって聞いてさ」

「ちゃんとあがるよ〜、って声をかけながら来たんだぜ〜」

ヒカル、あかね、麻耶は一步後ろに下がっている。そのまた後ろから颯土の母がお茶を運んでやって来て、

「あら、こんなところで立ってないで中に入ったら？」

と、背中を押すので一同はぞろぞろと部屋の中に入った。

「………」

だが、颯土がおもいきり不機嫌な顔をしているから誰もお茶に手をつけない。あかねはいたたまれない様子だし、麻耶も落ち着かずに目を泳がせている。ヒカルは哲平を自分の方に寄せ、そ

れでもあからさまにムツとしている颯土をじっと見つめていた。

「群竹ちゃんさあ、どうしてそんなにオイラたちを嫌うんだよ？」

――別に嫌っているわけじゃない。

「オイラたち仲間だろ～？」

――それが気に入らないだけだ。

仲間、友達、それがどうしたっていうのだ。今は仲良く一緒にいてもずっとそのままとは限らない。時が経てば、環境が変わってしまえば一緒にいた時間も存在さえもすぐに忘れ去る。何年一緒にいたってその後は記憶の糸をたぐりよせないと思いつけないモノになるのだ。

――そんなものに執着したところで何になる。無駄なエネルギーを使うだけだ…。

仲間、友達。颯土にとっては虫唾が走る言葉だ。

「思っていることがあったら言いなよ。言わないと分からないよ？」

黙って何かを考えている颯土にヒカルは口を開いた。颯土はヒカルにチラリ、と目を向けた。別に何も言いたいことはないし、分かってもらわなきゃならないこともない…とは心の中で呟いて。

「…もう、いいだろ？そいつを連れて行けよ」

「群竹ちゃんてば～」

勇斗は颯土の肩に手を回す。が、颯土はそれを迷惑そうに振り払った。

「わかったよ。帰るよ…」

勇斗はしょんぼりと呟いた。

「でもさ、オイラは…、たぶんみんなもだと思うけど、群竹ちゃんと仲間でいたいんだよね」

「もういいじゃない。勝手に押しつけてきた私たちが悪いよ。じゃあね～」

最初に部屋を出たのは麻耶だ。

「哲平のこと、ありがとう」

ヒカルも哲平を連れて部屋を出る。祐輔と勇斗も続いて去り、あかねが最後に残った。

「みんなで来ちゃってごめん…」

「…別に、お前らがキライってわけじゃないんだぜ」

颯土はそっけなく、それでも部屋を出ようとしているあかねに向かって言った。

「え？」

あかねは振り返る。

「それだけだよ…。行けよ」

颯土は再びベッドに転がり向こうを向いてしまった。

◇

「群竹くん、あかねちゃんにそんなこと言ったんだ…」

夜、ヒカルとあかねはお菓子をつまみながらのパジャマパーティーだ。哲平はヒカルのベッドに入り、もうすやすやと寝息をたてていた。

「うん…」

「案外わかりやすい奴なんだね」

ヒカルは窓向こうの颯土の部屋を見つめた。

「わかりやすい？」

あかねだけには自分を誤解して欲しくない、という心の現われが、颯土があかねに言った言葉だったのではないだろうか。そうだとしたら真っ直ぐすぎるほど真っ直ぐな性格だ。ただ、不器用なだけ。好きだと思っているあかねにだけ、颯土が示す特別な態度――。

「あかねちゃんはさ、群竹くんのこと好き？」

「わからない…。好きか嫌いかで言えば嫌いじゃないけど…」

「特別な人を特別に好きになるってどういう気持ちをいうんだろうね？」

最近になって時々変な気持ちになることがある。自分では説明のつかない感情にとらえられてしまうことがある。だが、それはたった一瞬のことですぐに元に戻ってしまうから、その気持ちが何なのか考えている暇がない。

「ヒカルちゃんにもわからないの？」

「わからないよ。自分のことは特にわからない。好きな人ってたくさんいるの。大久保くんのこと伊藤くんのこと群竹くんのことみんな好き。リスト作ったらノート一冊分名前で埋まっちゃうぐらいに、好きな人たちはたくさんいる。でも――」

颯土の母に好きな男の子はいるかと聞かれた時、真っ先に浮かんだ響の名前。だが、今まで響をただの`好き、`とも思ったことはなかったし、響はヒカルにとってはムカつく先輩だった。

なのに、どうしてなのだろう――。

「ヒカルちゃんも私と同じなのかな。でも、私は大久保くんや伊藤くんに対する好きと、群竹くんへの好きはちょっと違う…」

「あかねちゃんにとって、群竹くんはきっと特別なんだね」

互いに互いを特別な想いで見ているのにそれに気がついていない。心に感情がついていない。

「だけど、これって恋なのかな、って思うの。恋ってもっと胸が熱くなったり苦しくなったりするもんじゃないかな？群竹くんのそばにいとドキドキするんだけど、それは群竹くんがああいう人だから、ただ緊張しているだけなんじゃないかって思うし…。それに…」

言葉をつまらせてあかねはヒカルを見た。

「ん？」

「ううん、なんでもない…」

あかねは恥ずかしそうに顔を赤らめて下を向く。

「どうしたのよ、変なあかねちゃん」

あかねが今一番好きな人。一番一緒にいたい人。それはヒカルだった。ヒカルのような女の子になりたい。そういう憧れから始まった想いは、今は恋に近いと言えるかもしれない。だからなのか、ヒカルの感情が動く相手を敏感に感じとり、その相手に嫉妬のような想いを抱いてしまうことがある。それは、時には颯土だったり、麻耶や祐輔たちだったりもするが、今は、風間先輩…、とあかねはごくごく小さく呟いた。ヒカルの心が響に向いているのが寂しくて、響がヒカルを自分の元から持ち去ってしまいそうなのが怖くて、せつなくなってしまうのだ。

「群竹くんが人とかかわるのを拒絶するのには何か訳があるんじゃないかな？なんか、無理してあたしたちと距離をおこうとしているように思うもん。自分に居心地のいい場所をあえて避けているみたい」

「...どうしてかな？もしもそうなら何だか悲しいね...」

だが、颯土に対する想いも他のみんなと違うことは確かだ。ヒカルに抱いている想いに近くて、でもそれはどこか違って一。

「やっぱりあかねちゃんの心の中は群竹くんへの想いでいっぱいなんだね」

「そんなことないよ！もう、ヒカルちゃんたら意地悪だな」

「いいじゃない、それはそれで。人を好きになるってとっても素敵なことだと思うよ」

「そんなことを言ってヒカルちゃんはどうなのよ...」

「だから言ったでしょ～。好きな人はたくさんいるって。大久保くんも伊藤くんも...」

「それ、何だかずるくない？」

「全然ずるくない！」

ヒカルはむきになった。顔は赤く火照っている。

「まあいいか」

「まあいいよ」

ヒカルは窓のカーテンをサーッと開いた。向かい合う窓の奥の部屋にはまだ明かりがついている。

「ヒカルちゃんと群竹くんの部屋ってこんなに近いんだね」

あかねが窓のそばに立って颯土の部屋をじっと見つめる。さっきあの部屋に皆で入ったことが嘘のようだ。かたく閉じられた窓が、関わるもの全てを拒絶しているようにさえ見える。でも一。

「.....哲平ちゃんと群竹くんの様子には和んだなあ。お互いに干渉しあっていないのに溶け合ってるように見えた」

あどけない顔をして眠る哲平に目を向けて、あかねは笑った。

「哲平をああやって受け入れてくれてるんだもん。根っから人を拒絶してるんじゃないんだよ」

「.....きっと、そうなんだね」

ヒカルはニマッと笑い、窓を開け、

「せっかくだからおやすみのあいさつでもしようか」

机の引き出しから取り出して掴んだものを颯土の部屋の窓に投げてぶつけた。

ゴトン、と窓に何かがぶつかる音がした。

一ーなんだ？

ベッドに転がっていた颯土は、立ち上がりカーテンを開いてギョッとした。向かい側の窓でパジャマ姿のヒカルとあかねが頬杖をつきながらこっちを見て手を振っている。何て突拍子もないことをする奴らなんだ、と颯土は呆れた。

「あかねちゃん、今日うちに泊まるんだよ」

窓の隔たりを越えた向こうでヒカルが言ってるのが聞こえる。

――それがどうしたって言うんだよ、俺には関係ないだろ…。

「ちょっと、何言ってるのか全然聞こえないよ。窓開ければ？」

ヒカルが向こうで騒いでいる。まったく、昼でも夜でも騒がしい奴だ、と思いながら颯土は渋々窓を開けた。

窓と窓の間はほんの二メートルしかない。窓際で頬杖をつく少女たちと無愛想に立ちつくす少年は静寂の中、少しの間、無言で見つめあっていた。

「おやすみ、群竹くん！」

「おやすみ…」

――は？

「それだけだよ、じゃあね～！」

ヒカルとあかねは手を振りながら窓を閉め、やがてカーテンも閉められた。

――それだけのめに俺に窓を開けさせたのか…？

女というのは無駄な行動をする生き物だ。わけが分からない。だいたい、ヒカルは何を投げつけて来たのだろう。ずいぶんと重たい音がした。

颯土は窓から軒下を覗き込んで見た。白い消しゴムがひとつ、ポツンと落ちていた。

八月七日。演劇部、軽音楽部一同は揃って日光中禅寺湖畔の合宿所に到着した。四泊五日の合宿の始まりだ。

長くうねったいろは坂を路線バスで上ってきたため、二年生たちは揃ってげっそりした顔をしている。双子の太郎と次郎はすぐさまトイレに駆け込んで行ったし、響や小夜子たちもやや蒼白な顔をしながら山の空気を肺にいっぱい吸い込んでいる。だが、

「わーい！合宿だ！合宿だ〜！」

ヒカルとあかねは合宿所の玄関の前で手を取り合いながらはしゃぎまわっている。そばに立つ小夜子たちや響たちは無邪気な一年生を冷ややかな目で見つめていた。

「……ったく、誰だよ、こんなくねくね坂の上で合宿やろうなんて決めたヤツはあ…っ」

「胃の中のもの、全部出ちまった」

「胃まで出ちまった！」

「平地にしとけての…っ」

トイレから戻って来た太郎と次郎が文句を言った。その言葉を聞き逃さなかったヒカルは、はしゃぐのを止め、

「だって、本城高校が毎年利用してる合宿施設、ここしか空いてなかったんだもん」

と、口を尖らせた。合宿に行きたいと言った言いだしっぺだからと、顧問に交渉しただけでなく宿泊施設の手配係までを演劇部軽音楽部両部長から任命されて、これでもずいぶん苦勞して確保したのだ。

「ここ、いいじゃないですか！宿舍の目の前、湖ですよ？」

ヒカルはキラキラ光る水面を指差す。

「小夜子先輩、これから何をやるんですか？」

ぶつぶつ言っている双子を無視して、ヒカルは目を輝かせた。

「何をとって…、いつもと同じよ。発声と台本の読み合いと…」

「風間先輩、軽音楽部は？」

と、あかね。

「俺たちは挿入曲作りだろ？ヒカルはマラカス、あかねちゃんはピアノ…。あれ？お前らは演劇部の立場で参加してるんだっけか…？」

響が適当に答えていると、

「それじゃ、わざわざ合宿に来なくたって学校でやっても同じじゃないですか〜！」

鼻を膨らませたヒカルが叫んだ。

「だから俺たちに合宿の予定はなかったんじゃないか。それをどうしても行きたいってお前たちが言い出したんだろ？」

「そうよ。そもそもまだ軽音楽部と合同で出来ることがないわよ」

小夜子も響に同調する。

「ヒビク先輩、小夜子先輩！今は夏ですよ！」

ヒカルは真っ直ぐ手を上に上げて空を指差す。

「そしてここは日光中禅寺湖！そしてあれに見えるはボート乗り場じゃないですか！」

ヒカルは今度は前方のボート乗り場を指差した。

「だから何なのよ…」

「まず手始めにボートに乗りましょうよ」

にっこり笑うヒカルに、話がずいぶんズレたわね…と小夜子。

「あかねちゃん、行って来ようっ」

「うんっ！」

ふたりはボート乗り場を目指して駆け出して行った。

「もう…っ！はねっ返りなんだから。付き合ってもらえないわ。浅倉さんはともかく、水沢さんはあんなんじゃなかったはずなのに…」

「まあいいじゃないか。少し遊ばせておけ。俺たちは今後についてのミーティングをしようぜ」

響はあひるのボートに乗り込んで湖に出て行ったふたりを目で追う。

「先輩たち〜！」

ボートからヒカルが湖上で手を振っている。まるで弾けて飛ぶ炭酸のようだな、と田村が笑うと、響は、そうだな…と手を上げてヒカルに応え、二年生たちはそのままボート乗り場のそばのテーブルに着きミーティングを始めた。

ヒカルの提案により、台本がオリジナルだから挿入曲もオリジナルでいこうということになっている。劇は『みにくいあひるの子』をそのままアレンジした二幕構成のもので、ひとりだけみんなとは違った姿で生まれた主人公のエミーが母親や兄弟たちに苛められながら成長していく物語だ。最初は卑屈だったり仕返ししたりと家族たちを恨んでいるエミーだが、成長するにつれて自分を苛める家族たちを慈しめるように変わっていき、それが自分に自信と誇りを抱ける原動にもなっていくというストーリー。一幕、二幕の劇中に挿入する小曲は既に出来上がっていた。問題はエミーの心が復讐心からすべてを包み込む愛情に変わっていく場面に使うメインテーマだった。曲作りは響がひとりでやっている。

「曲に関しては風間くんたちに任せるしかないんだけど、舞台上で演奏をしてもらう時はどんな形をとればいいのかなあ？」

演技をするのは演劇部だ。だが、音楽劇ということで軽音楽部が演奏する音楽が最初から最後まで挿入される。その時のスタイルはどうすればいいのか、ということだ。

「俺たちは一応裏方なんだし、舞台の上には乗らないほうがいいだろ？」

と、田村。

「それじゃ、田村くんたちに華がないよ…」

「そこらへんの演出はきっとあいつが考え出すだろうよ」

響が彼方にいるヒカルを見つめた。

「とにかく俺たちは曲を作る。鳥海たちは劇の演出を考える。それを融合させるのはあいつにまかせてみればいいんじゃないか？もともとこの企画の言い出しっぺはあいつなんだし」

「まあ、そうね。きっと浅倉さんの頭の中では何かが形になっているんでしょうね」

「んじゃ、この合宿で俺たちはいつもとおんなじようにアレンジやってりゃいいってことね？」

響以外の軽音楽部員たちは、これまでも響が作曲した小曲のアレンジ作業をしていた。

「それしかねえな。風間はテーマ曲出来そうか？」

「テーマ曲ねえ……」

響は湖上を見つめながら呟いた。

演劇部ではこれまで配役を決め台本を読み合わせるところまで進めていた。ヒカルとあかねは意地悪兄弟の役で、絹江はその姉、真美は母親、エミーは小夜子がやることに決まっている。この合宿ではこれまでのに加え、演技をつけて通す練習を中心に行う予定になっている。

軽音楽部はというとこれまでとほとんど変わらない。響はテーマ曲作り、田村たちは出来上がっている曲のアレンジの作業に時間を費やしている。ヒカルとあかねはこっちではやることがないので演劇部の練習に専念していた。

合同合宿といっても両部が一緒にやったのは湖畔でのミーティングだけであとは合流することもない。朝夕の食事時に顔を合わせる以外は完全別行動だ。そのわずかな時間に会う響の雰囲気がいぶんと尖っていることにヒカルは気がついていて。会えば「よお」と声をかけては来るが、いつものからかいや冗談は出てこない。

「風間先輩、なんだか怖いね」

二日目の朝食時、田村や双子の兄弟たちがくだらない話をしながら盛り上がっている席で、響だけは苦虫を噛み潰したような顔をしてサラダを口に運んでいた。それも食べているという感じではなく、作業的にだ。

「…昨日からずっとあんな感じだよ、ヒビク先輩」

「そう言えば田村先輩が、テーマ曲作りにずいぶん苦労してるみたいだって言ってた」

ヒカルは隣のテーブルにいる響を見つめた。オリジナル曲でやろうなんて簡単に言ってしまったが、響にずいぶんな負担をかけてしまっているのだろうか、と少し責任を感じてしまう。

――でも…。

響は音楽に対して手を抜いたり妥協したりしない。普段は口が悪くて意地悪で不真面目な響だが、音楽にだけは真摯に取り組んでいることをわずかに共にしたこれまでの活動の中でヒカルは感じていた。去年一年、バンドにピアニストがいなかったのも響のこだわりからだ聞いた。マラカスはその待っていたピアニストにくっついて来たオマケなのだろうが、

――適当じゃないんだよね、ヒビク先輩。

だから、この合同制作にも真剣に取り組んでいる。テーマ曲を作る責任を大真面目に果たしているから、

――あんな顔になってるんだ、きっと…。

笑顔がないのは少し寂しいが、音楽に真正面から真剣に取り組む響に心を大きく動かされる。ふいに響がこちらを見たので、ヒカルはにっこりと笑った。

――ヒビク先輩が笑わない分、あたしがいっぱい笑っておこう！

そんなふうに思った自分がヒカルは少し可笑しかった。

その日の午後――。

「ちょっと見学させてくれない？ここで適当に見させてもらえればいいから」

演劇部が練習するホールに響が田村を連れてやって来た。

「ヒビク先輩！」

ヒカルは満面の笑みで迎えたが、小夜子たちはやや困惑顔だ。というのも――、

「見学してもらえるほど、演技が出来てないんだけど……」

と、いう理由で小夜子は一年生ふたりに目を向ける。

「ああ、そんなの全然構わないから。流れを見たいだけ」

「そういうことなら、どうぞ」

小夜子はふたりの見学を許可し、ヒカルたちにひとつふたつの注意をしてから練習が再開された。今日は演技をつけての初めての通しだ。初めての演技にヒカルはさっきまでずいぶん緊張をしていたが響が来た途端にそれがすっ飛んだ。台詞は棒読みだが生き活きと体が動くのが自分で分かり、それが心地よくてさらに活きる。

『あいつったら、こんなに馬鹿にされていじめられているのにヘラヘラ笑ってるんだ。いったいどういう神経してるのかな？あんなふうにされていると何だか僕たちの方がみじめになってこないか？』

いつも囁んでしまう長い台詞も今日は間違えずに言えた。

「誰かに見ててもらおうと張り合いがありますね！」

ひと通りの進行が終わりヒカルは汗を拭う。ずっと、響が自分の演技を見守ってくれていた視線を感じていた。

「…なら、毎日見に来てもらったら棒読みも克服できるかしらね…。こんなんで風間くんたちの役に立った？」

演技中からずっと一点を見つめていた響は、小夜子にその視線を移し、

「ああ。かなりね」

と、笑った。

「あっ」

響は声を発したヒカルを見て、ん？と聞き返した。

「なんだか、ヒビク先輩のそういう顔、すごく久しぶりに見た感じ！」

「…どういう顔だよ」

「そういう顔ですよ！自然に笑ってる顔！」

ふーん、と言った響の目がいつものきらめきを発したので、ヒカルは次に来る展開に対してやや身構えたが、

「だったらヒカルのおかげかもな！」

響はヒカルの肩にポン、と手を置いてホールを出て行った。その様子を目で追っていた田村の口元が嬉しそうにニヤケている。

「……ヤツも脱皮したか」

「脱皮？」

「きっとすげーのが出来るぞ？楽しみにしておけよ！」

さっきの響と同じように、田村もヒカルの肩に手を置いて笑った。

そして四日目の朝――。

随分早く目が覚めてしまったヒカルは、まだ眠っているあかねたちを起こさないようにそっと部屋を出た。廊下は静まり返っていて誰も歩いていない。窓から外を見るとまだ陽は昇っていない。ぼんやりとした薄紅色の光が朝もやの中に溶け込みはじめたところだ。ヒカルは廊下の突き当たりにある洗面所に向かって歩き出した。その途中、談話室の中を何気なく見ると響が一人でしきりに何か書き物をしていた。

――ヒビク先輩、こんな朝早くから何してるんだろう？

入り口から体を乗り出し覗き込むと、響が鉛筆を走らせているものは譜面だった。テーブルの上でピアノを弾くように指を動かしそれを音符にしているようだ。そのテーブルの上を見ると、コーラの空き缶やコーヒーの紙コップが散乱している。昨夜は眠らずにずっとここで作業していたのがわかった。

――ヒビク先輩…。

ヒカルの胸は熱くなった。

「よし…っ」

響は独り言をつぶやき鉛筆をテーブルに投げた。そして今まで書いていた譜面を手を持ち、鼻歌でメロディを確認する。それから、

「おっけーっ！」

その譜面もテーブルに投げ、はあぁーっ、と大きく伸びをした。その時、入り口に立っているヒカルと目が合ったのだ。

「よお、ヒカル。どうした？」

「先輩、徹夜ですか？」

「ん？もう朝か？」

「夜明けですよ。もうすぐ太陽が昇ってきます」

「そうか。夜明けか…」

なにか感慨深そうに響は言い、

「じゃ、夜明けの散歩に行こうぜ。ヒカル、付き合えよ」

立ち上がってヒカルの肩に手を置く。

「はい！」

ヒカルはニッコリと笑った。

夜が明けたばかりの湖は夏の空気に似合わずひんやりとしていた。朝もやがたちこめる深緑色の湖面はキラキラと輝き、今日のたった今、生まれたばかりの光がその上で踊っている。

「朝の空気はいいな」

並んで歩いていた湖畔で立ち止まり響は深呼吸をした。それを見ていたヒカルは言った。

「先輩、その深呼吸じゃ幸せ半分ってとこですね」

「ああ？」

「朝の深呼吸はこうやってするんです」

ヒカルは両手をガラリと下に下げて体を前屈させると、そこからゆっくり体を起こしながら大きく息を吸い込んだ。

「それじゃまるでバキューム機だ」

「そうです。朝の空気の中にはたっくさんの今日一日の幸せがつまっているんですよ？それを全部吸い込まなくちゃもったいないでしょう？反対に、朝からため息をつくとも幸せが逃げちゃうんですよ。気をつけてくださいね！」

「それは一般論？」

「いーえ！浅倉ヒカル論です」

響はヒカルを見て、はっ！と笑った。

「一応覚えておくよ」

そして、ヒカルの真似をしてもう一度大きく深呼吸をしてから再び歩き出した。ヒカルも後をついていく。まだ、誰も歩いていない静かな湖畔だ。前を歩く響の金色の髪が朝日を照らして輝いているように見える。

「そう言えば先輩！さっきの曲、すごくキレイなメロディでしたね！鼻歌だったけど、すごくいい曲だった」

ヒカルは響に追いついて言った。

「聴いてたのか？」

ヒカルに振り向いて響は照れくさそうに笑った。

「はい。聴いちゃいました。でも、先輩、良かったですね！曲が出来て！」

まるで、今昇ってくる太陽のような明るいヒカルの笑顔に響の顔も自然とほころぶ。

「はは...。もしかして心配かけたか？」

「心配はしていなかったけど...、あ、でもやっぱり心配だったかも。先輩に苦勞かけちゃったかなって思って...」

「べつにヒカルに苦勞かけられたとは思ってないぜ？」

「先輩ってもしかしたら天才なんじゃないですか？そんなふうには見えないし認めたくもないんですけど」

響の真横に立ち、ヒカルも同じ太陽を見上げた。

「何だよ、その言い方は？」

「だって、楽器がないのに指でテーブルたたきだけで音符を書いていた。それって鍵盤のドレミが全部頭の中にないとできないですよ？」

「う...？お前、いつから黙って見てたんだ？」

見られちゃったのかよ...、と響はピアノを弾くようにして指をはじく。

「すみません。声をかけられる雰囲気じゃなかったんで...」

真剣だった響の顔を思い出し、ヒカルの胸はまた熱くなる。

「絶対音感はあるけど俺はべつに天才じゃねえよ。苦戦もいいとこだったしさ...。ほんと、あの

曲には参ったぜ…」

「苦戦…ですか」

「あの台本読んだとき昔の自分を思い出しちゃってさあ、ちょっと参っちゃったんだよね」

響は今まさに昇っていく太陽を見つめた。

「台本読んで思い出したってことは、昔のヒビク先輩ってやっぱりいじめっ子だったんですか？あ、女の子でも苛めていたんでしょう？泣かしちゃったり！」

「惜しい。ちょっと違うな！」

「じゃあ男の子を苛めてたんですか？」

いや、と響は首を振る。そして、

「……俺はいじめられっ子だったんだ」

と、呟いた。

ぽちゃん、と湖で小さな魚が跳ねた。

まるで信じていないような驚いた目で自分を見るヒカルに響は苦笑した。

「この髪、脱色していると思っているだろ？」

響は自分の長い金髪を持つ。

「違うんですか？」

「これは天然。俺の親父はアメリカ人らしい。ピアニストだって聞いた」

「…らしいって…」

「べつにそれ以上詳しくは知らないし知りたいとも思わない。そんなこと今はどうでもいいことなんだ。とにかく、このみんなと違う髪の色のおかげで子どもの頃はよくいじめられたさ。金髪の日本人なんかいないとか、金髪だったらアメリカ人の名前にしろとか言われてさ」

みんなと違うから苛められた――。それはまさにエミーと同じ。ヒカルの胸に言葉に出来ない想いが突き上げてきた。

「そんなんで毎日生傷が絶えなかったから、小さい頃はおふくろが俺の髪を黒く染めてくれたこともあった。きっとおふくろなりに精一杯、俺を守ろうとしてくれたんだろうな。けど俺はそれがイヤでさ。金髪もイヤだったけど本当の自分を隠すのはもっとイヤで」

ヒカルは響の金髪を見つめる。光を照らしてキラキラ輝いて見えたのは初めて会った時も同じだった。

「だからやめた。これが俺なんだし俺は何も恥じることはしていないし。自分に誇りっていうの？プライドとも言うんだろうけど、そーゆーの持ちたかったんだ。親父がいなくなっちゃって金髪だって俺は日本人の風間響なんだって。誰も分かってくれなくても俺が分かってればいいやって。自分の気持ちに区切りをつけちゃった」

カッコつけてるだろ？という響にヒカルは首を振って答えた。

「けどさ、俺は俺を蔑んだ奴らを許しているのかな？って。今はもう、金髪だとか親父の顔を知らないとかそんなことにこだわっちゃいけないけど、本当のところどうなんだろって…。このメインテーマは俺自身の内面を表さなくちゃならないわけだろ？だから参っちゃったってわけ…」

――音楽に妥協をしないヒビク先輩だから…。

ヒカルは響の金色の髪を見つめた。田村が脱皮、と言った意味が今分かった。劇中でエミーがそれまでの自分を脱ぎ捨てて新しく生まれ変わる場面に使用するこのメインテーマを制作しながら、響も過去からの葛藤を真っ直ぐ見つめて、そして曲を完成させたのだ。すごいのが出来る、と田村は言っていたが本当にそのとおりに。

「先輩、本当は凄くピアノが上手なんじゃないですか？」

響は息を飲み込み、驚いた目をヒカルに向けた。そして、体中に詰め込んでいた力を一気に抜いたような、諦めに似たような顔をして笑う。

「.....ピンポン。参ったねー。国宝級音痴のヒカルに見抜かれちゃうなんてさ」

「国宝級音痴っていうのには納得できませんけど...、先輩やっぱりピアノ、弾けるんですね」

「ああ、弾けるよ。たぶんあかねと同レベルぐらいに弾けると思うぜ」

だったらどうして...、と言いかけたヒカルの言葉を制し、響は言った。

「でも俺、ピアノは弾きたくないんだ」

幼い頃母親にピアノを与えられ、玩具や絵本代わりにある時までは自然にピアノを弾いてきた。だが――。

「ピアノを弾けることは誰にも話したことがないよ。田村たちにも...な」

「どうしてですか？」

「親父のことを恨んでいるからなんだろうな。どうでもいいって思いながらも奥底では俺がこんな目に遭ってきたのは親父のせいだって、ずっと思って生きてきちまったんだと思う。親父さえ俺たちを捨てなければ...ってさ。だから、そんな親父と同じピアノなんて絶対に弾くもんかって...意地だな...。て、何で俺はこんなことをバカ正直にお前に話してるんだろ。カッコ悪いっただけ！」

響は突然我に返ったようにアハハと笑いながら歩きだした。

「私は先輩のお父さんに感謝する」

ヒカルの言葉に響は足を止めて振り向いた。

「ヒカル...？」

「だって、ヒビク先輩に出会えた。誇りを持つって決めて、今生きている先輩に。先輩、あんなに素敵な曲を作れるんだもん。それはお父さんから譲り受けた財産だって思います」

「...そんな立派なもんじゃないぜ。ただちょっと曲が作れてピアノが弾けるってだけの話だ。そんなヤツ日本中にゴロゴロいるだろ」

「だけど私には出来ません。国宝級の音痴なんですよ、私！先輩、いつもそう言って私を苛めるじゃないですかー」

響は反論の言葉を失い黙り込んだ。

「ヒビク先輩の髪、すごく優しい色をしていますよ。おひさまみたいにあったかくて綺麗な髪だって思います」

「.....ヒカル」

響は無意識に目を見開いた。ヒカルの言葉が胸に浸み込んで呆然となる。

「先輩のお父さんがどんな人なのか分からないのに勝手なこと言って...」

すみません...、とヒカル。

「ヒカル？」

「でも、やっぱりヒビク先輩の`響、は`ヒビク、ってことだったんだなって思うんです」

ヒカルはスーッと目を閉じて湖面の音に耳を澄ませた。湖の上で光が歩き空気が動くようなイメージの中で響き渡るのは柔らかな音色だ。

「.....ピアニストのお父さんはきっと素敵な音色を響かせていたんだと思います。だから先輩の名前は響なんじゃないかって」

「.....っ」

響は絶句した。響という名を、今の今まで好きではなかった。自分と母を捨てた勝手な父親が名前の中にいるような気がして。母の父への想いが込められているような気がして。

だけどー。

「ヒカル.....」

「ヒビク先輩は先輩らしく響いていますね」

「俺らしく？」

「うん。全身で。先輩しか響かせられない強烈で、でもどこか温かい音色が聴こえる気がする。あたし、国宝級の音痴だからきっと分かるんですよ、これ」

にっこり笑うヒカルに響は半分呆気にとられながらも、ヒカルの言葉に嘘がないことが分かった。胸の底から温かな太陽が昇ってくるのを感じたが、

「...ったく、生意気なこと言いやがって」

あまりにも照れくさくてこんな言葉が出てしまった。

「...ですね。先輩に向かって私、さっきから何言ってんだろうな。でも...、」

ヒカルは真っ直ぐに響を見つめて微笑んだ。

「だから、先輩。お父さんのこと、アメリカ人らしい、なんて言わないでください。アメリカ人のお父さん、なんです」

「.....っ」

響は言葉に詰まり、ただヒカルを見つめた。

「先輩、私の好きな人のリストにやっと加わりましたよ！」

「好きな人のリスト？何だ、そりゃ？」

「私、好きな人いっぱいいるんです。今まで先輩はそのリストに入ってなかったの。意地悪だしあかねちゃんと差別するしチャウチャウって言うし。でも、今から入れてあげることにしました！」

ヒカルは笑った。

「サンキュー。嬉しいぜ...」

と、響も笑う。そして、

「好きな人のリストか...」

と、呟いた時――。

白い集団が掛け声をかけながら前方から走ってきた。もやに包まれその姿ははっきりしない

が――。

ホンジョーウ、ファイト、オー！ファイト、オー！

それはいつも耳にしているかけ声だ。

「あれ、うちの空手部だぜ」

「本当だ！合宿ここだったんだ！」

ヒカルは嬉しそうに、お～い！と手を振りながら駆け出した。

「ありゃ？ヒカルちゃんじゃないか！」

前から手を振りながらやって来るヒカルを見つけた勇斗が走りながら叫んだ。

「大久保く～ん、群竹く～ん！」

空手部は主将を先頭にして二列になってランニングしている。ヒカルは集団の一番後ろにいる勇斗と颯土の真ん中に入って一緒に走り始めた。

「群竹くん、朝早くから大変だね？寝癖は...やっぱり立ってる」

今朝も見事に跳ねている颯土の寝癖を指差してヒカルは笑った。

「...お前、こんなところで何してるんだよ？」

「私も合宿だよ。ほら、ヒビク先輩もいるでしょ？散歩の途中だったの」

響が少し先の湖畔に立ちこちらを見ていた。

「散歩かぁ。優雅だなあ～。オイラたちは朝っぱらからランニングだっていうのに...」

勇斗はふぁ～とあくびを出した。

「ぼやくなぼやくな！ファイト、ファイト！」

突然の乱入者に他の部員たちはチラチラと後ろを振り返っているが、ヒカルは気にせず笑顔で応対だ。

「.....親父に感謝...か」

そんなこと、今まで一度も考えたことがなかった。幼いころ、ひとりでいることが多かった自分に母が買ってくれたのはピアノだった。初めてその音色を聴いたとき、自分の中の何かとピアノの音が共鳴しそれが幼心に深く刻まれ、想いを言葉には出来なくてもメロディには出来る、そんな特技がいつの間にか身についた。

何年かした後に母親にピアノを自分に与えた理由を訊いた時、父親がピアニストだったと知らされた。その瞬間、自分でもわからなくなるくらいに母に反発し、母はそれ以来父の話はいいしなかったし自分も二度と聞きたくないと思った。それまで言葉の代わりに弾いてきたピアノも、もう二度と弾くまいと鍵をかけてしばらく放置したけれど――。

――やめられなかった...。

今でもひとりの時はピアノを奏でる。田村たちの前では絶対に弾けないが、ピアノの音色の中に隠してきた本当の自分がある――。

――それをあいつに見破られちゃうなんてな...。

響はふっと笑いをこぼす。

「先輩、私、ちょっとこの人たちと一緒に走って来ますね～！」

響の前を通り過ぎるヒカルが手をふった。

「あんまり遠くまで行くなよ？迷子になっても知らねえぞ？」

だいじょうぶですよ～～、と叫びながら走るヒカルとの距離がぐんぐん遠くなる。心の手が、遠ざかる人を捕まえようとしているかのように無意識に伸びているのを自覚して響は我に返った。

「せんぱーい！先に宿舎に戻っててくださいね～！」

くったくのない笑顔がまぶしすぎて響は思わず目をそらし、

「――ライジング・サン…」

ひとことつぶやいた。

「ヒカルちゃん、どこに行ってたの？起きたらいないから心配しちゃったよ！」

ヒカルが宿舎の部屋に戻ると、もうすっかり布団もたたまれていて小夜子たちは既に食堂に向かった後だった。あかねだけがいつまでも帰ってこないヒカルを心配して待っていてくれたのだ。

「ごめん。ヒビク先輩と湖を散歩してて...、」

やや顔を紅潮させて話すヒカルを見て、ほんの一瞬のうちにあかねは寂しさと嫉妬を同時に感じた。ヒカルがどこか遠くに行ってしまうような、響に連れて行かれてしまうような――。

だが、

「...そのあと群竹くんたちとランニングしてきた」

その名を聞いてびくんと肩が跳ねた。

「群竹くんたちって...」

ここは日光中善寺湖だ。今なぜ、ヒカルの口から颯土の名が出たのか、あかねが不思議に思うのも無理はない。しかも、一緒にランニングなど。

「あ、そうだ。うちの空手部が湖をもっとあっちに行ったとこの宿舎で合宿してるんだよ。昨日来たんだって」

「...うそっ？」

「でね、今夜一緒に出かける約束をしてきたの！私たちは今夜が最後だし、いいよね？」

「.....う、うん」

あかねの胸が突然跳ね上がった。

――群竹くんに会える...の？

そう心の中で言葉にただけで顔が火照る。そんな自分を変だと思いながらも、ドキドキする胸も熱くなる頬も止めることが出来ない。颯土に対する想いがどういうものなのか、あかねはたった今、分かったような気がした。目が覚めてヒカルの姿が見えなかったときに感じた寂しさと響と散歩に出かけていたと聞いた時に感じた嫉妬よりも、颯土に会えると思ったときのときめきの方が大きいから。合宿が始まってからたった四日、颯土の顔が見られないというだけで募っていた寂しいというこの気持ちは――。

「あかねちゃん、どうしたのお？顔が真っ赤だよ～？」

「ヒカルちゃんの方こそ赤いよお？風間先輩と何かあったの？」

「あ、あかねちゃんの方が赤いよ！」

「絶対にヒカルちゃんだよ！」

そんな不毛な言い合いは、遅いわよあなたたち、と小夜子が迎えに来るまで続いた。

◇

そして、夕食後の午後七時。勇斗と颯土が宿舎のロビーに迎えに来た。と言っても、颯土の方は勇斗に無理やりひっ張ってこられたというのが正しい。ヒカルとあかねが来るまで、にこにこと宿舎の人たちに愛想を振りまく勇斗とは対照的に、颯土は周囲全てが敵といわんばかりの仏頂

面を振りまいている。

「お待たせ！」

ヒカルとあかねが外出の仕度を終えて来た。

「今朝はびっくりしたぜー。まさかヒカルちゃんに会うなんて思ってなかったもんね」

「私だってびっくりしたよ。同じところで合宿してたなんて全然知らなかったもん」

「夢じゃなかったんだな〜」

「群竹くん、今朝私に会ったの覚えてるー？」

ヒカルは、ひとりそっぽ向いて退屈そうにしている颯土の顔をまじっと見つめた。

――覚えているに決まっているだろ…。

「群竹くん、寝ぼけた顔して走ってたもんね。寝癖もバッチリ立ってたし」

「……うるさい」

――一緒に散歩してる `ヤツ、を放って、いきなりランニングに乱入してくるやつもいないぜ。

と、颯土は向こうから歩いてくる響を見た。

――出た。オレンジシャツ男…。

響が学校で着用しているオレンジシャツにはさすがの颯土も驚いた。金髪だけでも目立つというのに、オレンジはさらにその上をいっている。ヒカルやあかねの先輩だということはたまに遭遇する牛乳屋などでの様子を見ていて分かっていたが、鮮やかすぎる見た目とやたらと豪快な話し方に本能が退いている。

――それに、あいつは……。

颯土の響を見る目が無意識に鋭くなる。

ロビー前の階段を下りてきた響がヒカルたちに気がついた。

「あれ？お前ら外出か？」

「はい、最後の夜ですから一緒にお土産も見ようかなって思いまして」

「そうか、気をつけて行けよ」

「大丈夫です。つよ〜い空手部のボディーガードが二人もついてますから」

ヒカルの言葉に勇斗は目を輝かせて胸を張って応えたが、颯土は目を伏せて無愛想にため息を吐いた。その目を元に戻した時、偶然にも響と目が合った。

「お。ほんと、強そう…。眼光だけで殺されそうだぜ？」

颯土の目の鋭さに響は冗談を飛ばす。

「じゃあ、あかねちゃんを頼んだよ、君たち！」

響はニヤニヤ笑いながらあかねの頭を撫でた。するとさらに颯土の目は鋭く光り、ヒカルの鼻は大きく膨らんだ。

「もういいもん！大久保くん、行こ！」

ヒカルは勇斗の手を取ってやや大股に歩き出した。

「お〜、今日のヒカルちゃんてば積極的〜！」

ヒカルに手をつないでもらった勇斗はるんるん跳ねながらふたりで先頭に行く。その後を颯土

が面倒くさそうに、それでもあかねを気にして先に行かせて歩き出した。

「ヒカルッ！」

自分を呼ぶ声にヒカルは振り向いた。響は今自動販売機から出した缶コーヒーを手にしてニカッと笑い、

「早く帰って来いよ...！」

ひとこと言ってから階段を再び上って行った。

◇

誰もいない談話室で、響はテーブルの上に今朝出来上がったばかりの曲の楽譜を広げ歌詞を書き込んでいた。鉛筆を握る手はスラスラと動き一片の迷いもない。その作業はあっという間に終わり、完成した楽譜を見直した響は満足気に笑みを浮かべた。

「ここにいたのか？」

入り口から田村がひょいと顔をのぞかせた。

「みんな出かけるって言ってるけど、お前どうする？」

「俺はいいや。お前たち行ってこいよ」

田村はテーブルにのっている楽譜に手を伸ばした。

「出来たの？」

「ああ、たった今完成したところ」

田村はそのメロディと歌詞を目で追った。そして、意外だというような顔をした。

「これ、お前の詞？」

「ああ。おかしいか？」

「いいや、おかしくないけど、らしくない詞じゃねえ？ずいぶんストレートだし」

「まあな」

響はややバツが悪そうに鼻の頭をかきながら笑った。そんな響の様子に田村はまた面食らう。中学時代から今まで一緒にいて響のあれこれを田村は間近で見てきたが、自分の感情を素直に表す響はこれまでにあまり見たことがない。それが最近の響ときたら、ヒカルをからかってはしゃいでみたりこんな素直な詞を書いてみたり、これまで田村も知らなかった顔をいくつも見せていた。響がテーマ曲作りに苦戦していたこともその理由も田村は理解していたが、合宿に来てからの四日の間に、響の中で何か大きな革命が起こったということは顔を見れば分かる。その集大成がこの曲かと思うと、嬉しくなると同時にその変化の原因が気になるところだ。

「.....何かあったな？教えろよっ」

田村は響の肩に手を回してせまった。

「やーだね！教えねえよっ！」

「どーして！？」

「もったいねえしっ」

二人は馬鹿みたいにそこでジャレ合う。が、

「あ！俺、こんなことしている場合じゃないんだよ。下で奴らが待ってっから」

突然、田村は自分が何故ここに来たのかを思い出した。

「そういえばヒカルたちは？演劇部の連中はさっき出かけて行ったけど一緒じゃなかったみたいだったなあ」

「あいつらは空手部のオトモダチと行ったぜ」

「空手部？ああ、いつも一緒にいる一年生か」

「ああ。やたらにぎやかなヤツとやたら目つきの悪いヤツ。さっき下にヒカルとあかねを迎えに来てた」

「...ふうん。仲がいいなあ...」

響はうなづく。そして、

「なあ、田村。俺はもしかしたら凄いお宝を目の前にしているのかもなあ...」

と、つぶやいた。

「どんなお宝？」

「輝き...、ダイヤモンドみたいな...さ」

「...そりゃまたすごえお宝だなあ。目の前にしているんであれば見ているだけじゃつまないでしょ。ゲットしなさい！」

「ゲットか...。できっかなあ...」

響はふっと天井を見上げる。

「何を弱気な。お宝は、誰かに奪られちゃう前に自分がゲットしなくちゃいけません」

響は、そうだなと呟いた。

「まあ、とにかくご苦労さん。ヒビクの合宿はこれに捧げたようなもんだったな。よかったんだか、悪かったんだか」

田村は手にあった楽譜をひらひら揺らす。作曲にかけた時間は合宿に来てからの四日だったかもしれないが、親友がもっと以前からの戦いに決着をつけたことを田村は知っている。

「よかったんだよ。合宿に来たから出来たようなもんだし、それ」

合宿に来ていなかったらどうなっていたのだろうか...、と響はふと思った。間違いなく言えることはこの詞は書いていなかった、いや書けなかったということだ。

「そうか。じゃあ言いだしっぺのヒカルのおかげだな？」

そうだな...、と響は嬉しそうに目を伏せた。

「んじゃ、今夜はゆっくり休んでくださいよ。俺たちは行ってくるぜ」

田村は自動販売機でコーラを買うと、それを響に投げてから談話室を出て行った。

「サンキュー、田村」

響はもういなくなった田村にそう言ってコーラの缶を開けた。炭酸の泡がプシューッと弾けて飛んだ。

中禅寺湖では三日前から商工会の納涼祭が行われている。今日はその最終日で、観光協会の広場では盆踊りやカラオケ大会のイベントが開催されていた。夏の夜、そして観光地でのイベントということで人出は多く、ちょっと気を抜くとたちまちはぐれてしまいそうな賑わいだった。

ヒカルは勇斗と並んで前を歩き、あかねは颯土と歩いている。が、会話が弾んでいるヒカルたちが正真正銘のお祭りだとしたら、だんまり男とうつむき女でとぼとぼ歩くあかねたちはまるで通夜だ。それでも、颯土はあかねより前を歩こうとはしていない。常にあかねが視界に入る位置に自分がいる。それは先のホームルーム合宿でさんざんな目に遭っているから、あかねが見えていないと落ち着かないという理由なのだが――。

「ここでお土産を見よう？」

大きな土産物屋にヒカルたちは入った。民芸品、工芸品から菓子、漬物、何でも揃っている。

「麻耶ちゃんと伊藤くんに何か買っていこう」

あかねは早速小物売り場の方に進み、キーホルダーなどを見繕う。

「ゆうちゃんたちだって那須に合宿に行ってるんだぜ～？なんでお土産買うんだよお～」

勇斗はやや不満顔だ。ゆうちゃんは麻耶ちゃんと一緒かぁ...などぶつぶつ言いながら、どこか苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「那須には行ってるかもしれないけど、日光には来てないじゃない。だから買って行くの」

「あかねちゃんってば優しいなあ」

と、言いながらも、結局勇斗もふたりの土産を買った。

「いつもお世話になっているから群竹くんちのおばさんにお土産買って行こう～。ねえ？どんなのが喜ぶかな？」

特に見て回るわけでもなく、同じ場所でぼーっと立っている颯土にヒカルは訊いた。

「群竹くんのおばさん、どんなのが好き？」

ヒカルが見ているのは絞り染めのコーナーだ。綺麗な色の染物で作られた巾着や小銭入れなどの小物がそこにある。

「さあ...」

颯土は無表情で言った。

「さあって...、じゃあ、おばさんの好きな色って何色？」

「知らねえ」

「自分のお母さんでしょ？好きな色とか好きなものとか知らないの？」

呆れるヒカルに颯土は悪いか、と呟いた。

「.....あ～あ。こんな息子でおばさんが可哀想。もういいよ。私の趣味で選ぶから」

勇斗とあかねも苦笑いをしている。颯土は居心地が悪くなり、ひとり外に出た。

――疲れる...。

なぜ自分がこの場にいるのか、颯土はいくら考えても分からない。どうしてヒカルや勇斗は自分を放っておかないのだろう。その理由も分からない。人とするむのは嫌いだ。

——めんどくせえ…。

このまま帰ってしまおうか、とも思う。でも——。

「群竹くんはお土産買わないの？」

外に出た颯土をあかねが追いかけて来た。

「俺は、いい…」

「そっか…。私も買い終わったからここで一緒にヒカルちゃんたち待っててもいい？」

「……べつに」

——こいつの…、

あかねのそばにいと和む。危なっかしくて頼りなくてイライラするが、あかねの周りにある空気がほんわかと暖かいから、ついその居心地の良さに甘えたくなくなってしまう。

だが、それがずっと続くとは限らない。人の気持ちほど不確かなものはない。そんなものに甘んじていたら傷つくだけだ。人と深くかかわれば仲良くなればなるほど、大切だと思えば必要だと思えば思うほどそれが壊れた時の傷が大きくなる。

もう、二度とそんな思いはしたくはない——。だからひとりが楽でいい。

——楽で、いいんだ。

「実際のところ、あの軽音部の風間って先輩、あかねちゃんのことどう思ってた？」

土産物屋を何軒か回った後に、四人はアイスクリーム屋に落ち着いた。ヒカルとあかねはオレンジシャーベットを、勇斗と颯土は飲み物を手にしてテーブルに着いた時、勇斗が突然思い出したように言い出した。あかねと颯土は互いに無意識のうちに顔を見合わせて、互いに急いで顔をそらした。

「好きなんじゃない？」

ヒカルは少し投げやりに答えた。

「そんなことないよ…」

あかねは小声で否定する。

「そんなことがあります～。ヒビク先輩、いつもあかねちゃんあかねちゃんだもん。さっきだってさ、あかねちゃんを頼むって。私だっているのにー」

「ヒカルちゃん、何かひがんでない？」

勇斗が突っ込むとヒカルは真っ赤になって、

「ひがんでない～～！！」

顔をプイとそむけた。

「でもあの人、何か独特の雰囲気あるよな～。真面目なんだか不真面目なんだかよくわかんないよね～」

「ヒビク先輩はすごく真面目な人だよ」

ヒカルはまだほてっている顔を両手で押さえながら言った。

「ヒビク先輩は、想像できないくらい重たい荷物をしょって生きてきた人なんだよ。その途中で自分で自分を拓いて、そんな自分に誇りを持ってるの。不真面目にふるまったり意地悪だったり

するけど、本当はすごく真面目…。音楽とも、他のこととも真剣に向き合っている人」

「ヒカルちゃん…？」

あかねは何故ヒカルがそこまで響を分かっているのか不思議に思った。言い合い、罵り合いをするふたりはさんざん見てきたが、ヒカルと響が互いのことを理解するほど語り合っているところは見たことがない。いつの間に…、と思うと、響に対して少しだけヤキモチに近い感情を抱いてしまう。

「あのね、今朝、ヒビク先輩と散歩したでしょ？その時、先輩のこと色々話してくれたの」

「……風間先輩のこと…って？」

「詳しくは言えないけど、先輩にはツライ思いをしてきた昔があって。そんなそぶり今まで全然見せてなかったからあたしも驚いた。でも、嬉しかったな。先輩の話を聞いて先輩が好きになったから…」

「おいおい、ヒカルちゃ～ん。先輩が好きってえ～？」

女の子は全部自分のものだ勘違いをしている勇斗はうろたえた。

「好きは好き。嫌いじゃないってことだよー」

「じゃあオイラの身の上話も聞いて、オイラを好きになってよ！オイラはさあ、四才の時に親に空手道場に入れられてさあ、そりゃもう大変で…、」

「よせよ…」

勇斗の話をさえぎるように颯土はつぶやいた。

「え？」

ヒカルとあかねは颯土に注目する。

「人の苦労話を聞いて何になる？」

颯土はうつむいたまま言葉を続けた。

「苦労話を聞いて嬉しいなんておかしいぜ」

「どうしておかしいの？」

「他人に自分の苦労話をする方もする方だせ。お前が言う荷物ってやつを他人に背負ってもらいたってことだろ？」

颯土は顔を上げてヒカルを見据えながら言い放った。勇斗もあかねもそんな颯土に驚いた。今までこんな風に自分の思っていることを語ることのなかった颯土がヒカルに対して真正面からぶつかっているのだ。

「仲良しごっこだ…」

「ヒビク先輩はそんなつもりで私に話したんじゃないよ。仲良しごっこでもない。真剣に自分のことを話してくれたのに群竹くんはどうしてそう言い切るの？」

「……、」

「誰だって一人で生きているわけじゃないんだよ。誰かに聞いてもらいたい話だってあるでしょ？聞いてもらいたって言うよりは、話したくなる時や思っていないのにいつの間にか話してしまう時だってあるでしょ？それは弱いとか荷物を預けたいからだとかじゃなくて、自然な人と人とのコミュニケーションじゃない？私だって…、」

ヒカルは胸に込み上げるものをぐっと押さえ込んだ。

——自分じゃどうにもならないことを誰かに話せたらって思うときがあるよ…。

「じゃあ訊くけど、そうやって打ち明け話をされておまえは何が出来るんだ？そいつの荷物を背負ってやれるのか？打ち明けてもらって嬉しいってさ、それはただ自己満足しているだけだろ？」

「群竹くん、言い過ぎだよ…」

あかねがたしなめるが、颯土はヒカルを睨んだままだ。何がこれほどまで颯土を突き動かしているのだろう、颯土はどんな思いを抱えているのだろうと思うとあかねの不安が膨らむ。

「そうかもしれない。でも何かをしてもらいたいから話すのかな？何もしてくれなくてもいいんだよ。聞いてくれる人がそこにいてくれれば、それだけで」

「はっ…。そこにいだけでいいってなら、犬でも猫でもいいんじゃないか？」

「そんな…」

「おまえの言ってることは綺麗事なんだよ…」

「おいおい、群竹ちゃん。もうやめておきなよ」

勇斗もおろおろして颯土を止めようとした。だが、颯土は止まらない。ヒカルを見据え、言葉を続ける。

「……人に依存しても結局は無駄なんだ」

「ヒビク先輩はそんなんじゃないよ！依存なんかしてない！」

ヒカルは思わず叫んでいた。今朝、響が話してくれたことは今、颯土が言っていることとは全く違う。

「そいつのことを言ってるんじゃない。おまえらが好きな仲間とか友達とか、そういうのにこだわっていつも何をするのも一緒に、ってというのが俺は嫌いなだけだ。仲良しごっこはごめんなんだよ！」

「群竹くん、あんたは臆病だ！」

ヒカルは立ち上がって颯土を真っ直ぐ指差した。

「そうやって自分一人の殻にこもっていれば安全だし楽でいいよ！誰だって傷つくのは嫌だし怖いから！」

颯土は何も言わずにヒカルを見据えている。

「いつもサークルの外側にいて、面倒なことに自分から関わらないようにしてるのは、みんなが言ってるみたいな硬派だからとか無愛想だからとかじゃなく、ただ人との関わりから逃げてるだけじゃない！あんたがどうしてそういうポーズでいるんだかなんて分からないけど！」

「そう思うなら、俺のことなんか放っておけばいい。俺は別にお前たちに何も期待なんかしてないし、聞いて欲しい話もない。お前らが勝手に俺を巻き込んでいるだけだろう？」

「それが臆病だって言ってるの！人と関わる勇気が出せないだけじゃないの！踏み出そうとしないだけじゃない！」

ヒカルはピシャリと言い切って颯土を睨んだ。

「……っ」

お前に――、

「...何が分かる...、お前に何が分かるって思ってるでしょ？わかんないよ、何も。話してくれなきゃ分からないよ！でも分かったからって何も出来ないかもしれない。だけど、何かしてあげたいってきつと思う。荷物を背負ってあげることはできなくても、ほんの少しの間でも降ろさせてあげたいって思うよ！それが綺麗事だって言うなら、あたしはそれでもいいよ！綺麗事だろうが理想だろうが人を想う気持ちを忘れたくはないもん！」

ガタン、と椅子を蹴って颯土は立ち上がった。そして、
「先に帰る...」

と、店を出て行った。

「群竹くん...！」

間髪をいれず、あかねが後を追った。その後を追おうとした勇斗をヒカルは止めた。

「あかねちゃんにまかせよう...。あたし、言いすぎた...」

「まあ...、確かにムキになってたね。でも、あいつもかなりキツイこと言ってたぜ？」

勇斗は慰めるようにしてヒカルの肩をたたく。

「あんな群竹くんはじめてだね...」

ヒカルはそう呟いて窓の下湖を見つめた。

「群竹くん待って！」

あかねの声も届かないかのように、颯土は湖畔の道を速足で歩いていく。

「群竹くん！」

あかねは颯土の姿を見失わないように必死になって追いかけていた。だが、祭りの最中の通りは人多すぎて颯土の姿は見え隠れしている。ホームルーム合宿の探勝路が脳裏に過ぎった。あの時も追いつけずに颯土の背中を見失い、枝に髪を絡めとられて――。あかねの背筋に冷たいものが走ったその時。

「彼女、一人？」

数人の若い男たちがあかねに声をかけてきた。

「ちょっと急いでるんです」

あかねは颯土の姿を目で追う。が、行き交う人と闇にまぎれて颯土とは完全にはぐれてしまっていた。

「一人なんだろう？遊びに行こうよ？」

若者の一人が自分の肩に手を回してきてはじめてあかねは状況を理解した。知らない男たちに囲まれている。男たちは馴れなれしく腕や顔を触ってくる。

「行こうよ。おいで」

ひとりに肩を抱かれ、もうひとりに腕を引かれ、他の数人は周囲をガッチリ固めている。あかねは声も出なかった。ヒカルも勇斗もそばにはいない。颯土はもう行ってしまった。

――怖い！

次の瞬間に強く手を引っ張られてあかねはその集団の外に出た。

「きゃあ！」

「俺だよ」

あかねの手を握っているのは颯土だった。

「群竹くん！」

あかねの腕を引いていた男が、

「何だよ、彼氏つきなら最初からそう言えってんだ！」

と、あかねを怒鳴りつけた。男の大声にびくんと肩を震わしたあかねを自分の背に庇い、颯土と男たちは対峙する。だが、颯土の殺気と眼光の鋭さに気迫で負けた男たちは、口々にあかねと颯土を罵りながら去っていった。

「……ったく」

颯土が男たちの背中を睨みつけている間に、恐怖のピークに達していたあかねは足元から崩れた。

「大丈夫か？」

自分を支える颯土の優しい目を見た時、もうあかねは何も分からなくなった。

「泣くな…、」

言いかけて颯土は止めた。もう遅い。あかねがしがみついてきたからだ。肩を震わせ、声を殺すあかねの嗚咽が胸の真ん中を激しく振動させる。

覚えている、この感覚。あれは、雨の探勝路だった。足をくじいたあかねを背負ったその背中で...

——あの時もこいつはこんなふうに声を殺して...

歩道の真ん中。泣いている少女を抱きしめている少年。そんなふたりを道行く人々が振り返りながら歩いていくが、そんなことはどうでもよかった。とにかくあかねの震えが止まるまでこうしているしかないだろう。これは居心地のいい場所に逃げているわけじゃない...、と、自分に言い訳をして、颯土はあかねを抱きしめていた。

その腕の中であかねは徐々に落ち着きを取り戻した。頭の中が真っ白になるぐらいに怖かったが、もう震えは止まった。そして、やっと自分も返って来た。

「ごめん...っ！」

あかねは慌てて颯土の腕の中からすり抜けた。

「私...、私.....っ」

今度は別の意味でパニックになりかけているあかねだ。颯土はため息と同時に小さく笑った。そして、

「.....何で追いかけてきたんだ...？」

ゆっくりと歩き出す。あかねをしっかりと視界に入れて——。

「だって...、あんなふうに言い合ったままじゃイヤだったんだもん...」

「別におまえと言い合ったわけじゃないだろ...」

「そうだけど、今日の群竹くんはいつもと違ったから何だか心配で...」

颯土は立ち止まった。

「心配？俺のことか？」

あかねはコクンとうなずいた。そのあかねをじっと見つめて颯土はプッとふき出した。

——その台詞、そっくりそのまま返してやるよ。いつも危なっかしくて俺に心配をかけるのはおまえだろ....。

「そうだよね...。私が群竹くんの心配をするなんておかしいよね。助けられているのはいつも私なのに...」

人の心配をするほどの自分じゃないということをすっかり忘れていた。今もパニックに陥って自分が止められなくなって颯土に受け止めてもらったばかりだ。

「群竹くんは強い人なんだね.....」

「強い...？」

「ひとりで何でも出来るし、さっきも...友達とか仲間はいらないみたいなこと言ってた...。でも、私はひとりじゃ何もできないし寂しいよ...。だからヒカルちゃんや麻耶ちゃんたちがそばにいてくれないとダメ。群竹くんはひとりで大丈夫なんでしょ？」

——こいつ、何が言いたいんだ？

颯土は隣で自分を見上げるあかねを探るように見下ろしてから再び歩き出した。確かに、さっ

きはヒカルにずいぶんと言いたいことを言ってしまった。他人に必要以上に関わろうとするヒカルにイラついて仕方なかった。一旦口火を切ってしまったら止まらなくなり、言いながら自分でも驚いていたくらいだ。あんなにムキになって人にぶつかったことなど今までにないし、それ以前にそこまで自分の感情が高まったことがない。

――.....調子が狂いっぱなしだぜ...。

臆病と言ったヒカルの声がまだ耳の中にある。そして今、強いと言ったあかねの言葉も同じところで響く。自分が臆病なのか強いのかなんて考えたこともなければ、そんなことはどうでもいいことだ。

ただ馴れ合いたくないだけ。

人と関わり、関わるるのが面倒なだけ。

なのに、最初にヒカルに突っかかって行ったのは自分の方だ。関わりたくないはずなのに、自ら関わって行ったのだ。思考は堂々巡る。

――わけわかんねえ...。

「群竹くん...」

あかねは颯土の袖を引いて立ち止まった。

「あ...? ああ」

ぼんやりとひとりで考え込んでいた颯土は、横のあかねを見下ろした。

「私、群竹くんのそばにいちや駄目？」

潤んだままの瞳でじっと見つめられ、颯土はその目を外せなくなった。

「水沢...」

「私も強くなるから。泣かないようにするから。群竹くんやみんなに心配かけないように頑張るから。そして、群竹くんを分かるようにするから。だから...、傍にいちやダメかな。迷惑かな...」

居心地のいい場所...。手を伸ばせば、足を踏み込めばそこにある。けれど...。

「ごめん、変なこと言っちゃった...!」

自分の言った言葉の大胆さに気がついたあかねは突然赤面して駆け出した。もう、そこはあかねの合宿所だった。ヒカルと勇斗が玄関の前に立ちあかねたちを待っていた。

「待てよ!」

颯土は思わずあかねを追い、その手をつかんでいた。

「群竹くん...?」

あかねは赤面したまま颯土の手から伝わってくる温もりを感じて、そのまま振り向くこともできないで立ち尽くした。

――ガキの頃以来だから、人と関わるやり方なんて忘れちゃった...。

だからどうしていいのかわからないが、あの時、自分を追いかけて来たあかねの気持ちには背中を向けたくはない。夜の中に飛び出して怖い目にあって、それでもこうして自分に手を差し伸べようとしているあかねの想いには――。

颯土はそのままあかねの手をひいてヒカルたちが待つ玄関へと向かった。

「群竹くん...」

これが颯土にとっての精一杯だということをあかねは理解した。言葉はなくても、今はこうして手をひいてみんなのいる場所に連れて行ってくれるだけでいいと思った。

「水沢、連れてきたぜ」

颯土は無愛想に言うと、握り締めていたあかねの手を離した。離れて行く温もりが寂しいと、ふたりはそれぞれの胸の中で感じた。

「それから浅倉...、さっきは言いすぎた...。悪かったな」

ヒカルと勇斗は思わず顔を見合わせた。

「ううん。私こそ言いすぎたよ。ごめん」

「じゃ」

颯土はさっさと踵を返す。

「あっ、おい、待てよ！」

勇斗が慌てて後を追う。颯土は面倒くさそうに振り向いてから速足で行ってしまった。

「同じ宿舎に帰るんだぜ〜。一緒に帰ろうよ〜」

勇斗は颯土に追いつく。颯土が突き放す。そうやってじゃれあいながらふたりの姿はやがて闇の中に消えて行った。その後姿をずっと、見えなくなるまで見送っていたあかねが呟いた。

「ヒカルちゃん、私、群竹くんにそばにいたいって言っちゃった...みたい」

半分呆然としたあかねが、颯土に握られていた右手のひらを大事そうに左手で握り締める。

「みたい...？」

「夢中だったからどう言ったのか覚えてないんだけど...、でも、私ね...、」

あかねはヒカルを見た。ヒカルのような女の子になりたいーそう思うのは今でも変わらない。そして、ヒカルが一番近くにいた友達でいたい。けれどー。

「私ね、群竹くんのことが好き。群竹くんの傍にいたいし群竹くんを解かりたい...って思うの」

颯土に対する想いは恋だ。あかねは今、はっきりと分かった。

「そうか...。それはきっとあかねちゃんだからできることかもしれないね」

颯土がぶつかってきた時、ヒカルは「臆病もの、と否定してしまった。人の心は見えるものじゃないのに、訳も聞かないでどうしてあんなことをやってしまったのだろうと今は悔やんでいる。颯土を解りたいというあかね。颯土にはそんなあかねの存在がきっと安らぎなのかもしれない。だから今、こうしてあかねの手を引いてきたのだろう。そういえば、雨のホームルーム合宿の時もそうだった。

「...群竹くんて、本当はきっとすごく優しいヤツなんだろうね」

「...うん。そう思う」

「そっか...」

ぶつかり合ったけど謝り合うことも出来た。少しだけ仲間としての距離が短くなったみたいだな、と思いながら、ヒカルは宿舎の玄関をまたぐのだった。

ヒカルとあかねがロビーに戻ると、田村たち軽音楽部の先輩たちが集まっていた。外出から帰ったばかりの様子だがそこに響の姿が見えないのでヒカルは少し気になった。

「先輩たち！」

ヒカルが駆け寄ると、田村たちはおお、と手を上げて応えた。

「これから演劇部と合同でミーティングやるって、さっき鳥海が言ってたぜ」

「ヒビク先輩は？」

「あいつは談話室でテーマ曲の仕上げをやってたぜ。今ごろは部屋で寝ているんじゃないかな」

「そうですか...」

昨夜は徹夜だったわけだし、昼間も田村たちとアレンジの作業をしていたようだから無理もない、とヒカルは思った。

「すげえのが出来てたぜ？」

田村はニヤッと笑う。

「田村先輩、聴いたんですか？」

「楽譜をチラッと見ただけだけどね。ミーティングで披露してくれるだろ」

「.....ヒビク先輩」

ホールでは小夜子たちと顧問がすでに待っていた。田村たちもガヤガヤとテーブルについて楽譜やら台本をそこに広げ出す。ヒカルとあかねが席についた時、アコースティックギターを片手に持った響がのっそりと現れた。目の周りにクマを作り長髪もやや乱れて今まで仮眠をとっていたのは誰が見ても明らかだった。

「風間くん、お疲れ様でした」

小夜子が響に椅子を勧めた。

「じゃあ、合宿最後の合同ミーティングを始めます」

指揮をとるのは小夜子だ。ヒカルとあかねは初日のミーティングに参加していないので最初で最後のミーティングだった。

話し合いは軽音楽部の曲作りの進み具合と演劇部の演出についての状況報告から始まって、やがて二つの部をどのように融合させたらいいか、ということに及んだ。軽音楽部としては裏方に徹するつもりでいるが、小夜子たちがそれに納得しない。最後の文化祭なのにそれでは申し訳ないという気持ちからだ。だが、実際問題、演劇が主になるわけだからドラムやギターなどの楽器が舞台に乗り、演劇をしている中で演奏をするというのも変だ。

「だから俺たちはいいって。裏幕の後ろで演奏するから」

田村は最初からこう主張している。

「それじゃ合同でやる意味がないじゃない」

「そんなことはないよ。俺たちは曲を作って演奏するんだからさ、ちゃんとコラボレートしたことになるよ？」

柏木がスマートに意見した。

「浅倉さん、何か考えていることないの？」

二年生たちの話し合いに口を挟まないように気をつけていたヒカルは、小夜子に振ってもらって待ってましたとばかりに瞳を輝かせた。

「しゃべってもいいんですか？」

「待って、心の準備をするから」

いつも突拍子もないことを言い出すヒカルだから小夜子は一瞬の間をとった。

「はい、どうぞ」

「では...、私はこの企画が始まった時から思い描いている構図があるんです」

ヒカルのちょうど向かい側に座っている響が、ニヤニヤしながらヒカルの顔を見つめた。

「舞台の後部には背景というものをセットしますよね？」

「まあね。設定が湖とか森の中だから木のセットを作ろうって考えているけど。予算がないから、」

と、小夜子は顧問を睨む。

「...あまり凝ったものはつくれないけどね」

「そうですね。予算がないんです、私たち。だから私は低予算で素敵な演出するために軽音の先輩たちに背景のセットになってもらおうと...」

言葉の語尾がだんだん小さくなる。田村が顔をおもいきりゆがめているからだ。

「ヒカル〜...」

田村は牽制する。ヒカルは上目遣いに田村を見、こほん、と小さく咳払いをしてから話を続けた。

「.....あ〜、ですからね？たとえばこんもりとした木々のセットがあったとしたら、その後ろにドラムを置くんです。ようするに、楽器の機械的な部分だけをセットで隠すんです。それで、演奏する先輩たちはちょっとおしゃれ〜に変装してもらって舞台の上で歌ってもらうというのは...」

「おしゃれ〜に変装とはどういうのか具体的に述べよ」

田村が早口で言った。

「具体的にですか？えっと...、緑の葉っぱで作ったカツラをかぶって同じく葉っぱの衣装を着て、顔は...、」

「茶色に塗りたいくるんだな？」

と、響。

「はいそうです！そこにちょっと派手なペイントなんかしてみてもお洒落かな〜、な〜んて...」

田村たち一同は口をあぐり開けながらヒカルの発想を聞いていた。

「そんな恥ずかしい格好をするくらいならやっぱり舞台裏でいいや、俺たち」

「ええ〜？いいと思うんですけど〜。はちゃめちゃやっていいって、先輩言ったじゃないですか〜！」

ヒカルは小夜子に振った。

「...それはそうだけど、変装するのは私たちじゃないしこれは私の一存では...」

小夜子は響に視線を向ける。腕を組んで下を向いている響の肩がさっきから震えている。

「ヒカルちゃん...、風間先輩、怒ってるよ？」

あかねがささやいた。

「...いや？怒ってなんかないさ...」

響はふふふと顔を上げ、

「いいぜ～、それ、グッドアイデアだぜ！」

と、叫んだ。

「ヒビク、正気か？」

「バリバリ正気」

「葉っぱになるんだぜ？いいの？」

「全然オッケー！」

「おいおい、ヒビクウ...」

「軽音楽部部長の権限でヒカルのアイデアいただくことに決定！お前ら文句言うなよ！」

響は田村たちひとりひとりを指で差し、力強く言い切った。マジかよ...と呟く太郎と次郎に顔面蒼白になる柏木に頭を抱える田村だ。

「想像してみろよ。舞台の背景が動いて演奏して歌うんだぜ。カッコイイじゃないか！森の精霊ってやつだぜ」

「そうそう、それです！森の精霊！カッコイイですよ、先輩！」

ヒカルは嬉しそうに飛び跳ねた。

「お前ら、いいな？」

「わかったよ。部長が言うんじゃしょうがない...」

田村たちも渋々納得した。

「じゃあ、ここでできたてのテーマ曲を...」

響はギターを手にしてボロンと弦を撫でたあと、簡単なアルペジオの前奏から始まった歌は――。

♪ライジング・サン

夜が明けたよ 長い長い夜が

朝もや立ちこむ緑の湖面に 生まれたばかりの光が踊る

いっぱい幸せこめられた 朝の空気を吸い込もう

ひとつもこぼさないように 力いっぱい吸い込もう

今日（いま）この瞬間（とき）から 僕が僕で在るために

ライジング・サン やったきた夜明けだから

ライジング・サン 昇ってゆこう どこまでも

Fly the sky Believe in tomorrow

飛んでゆこう 明日を信じて

終わらせよう 暗い辛い物語（ストーリー）
読み返せば歴史（ヒストリー）ちっぽけだった僕が見える
明けない夜はありえない 星なく暗く長くても
終わらない物語ありえない せつなく悲しく果てしなくとも
ピリオド打つのはmy mind ハッピーエンドはJust my mind
ライジング・サン 僕はもう大丈夫
ライジング・サン 生きていける どんな場所でも
Fly the sky Believe in tomorrow
飛んでゆこう 明日を信じて

響の歌声は穏やかだった。心にスーッと染み込んでくる透明で繊細なメロディに一同はため息を漏らす。

「ヒビク先輩…」

ヒカルは響がこの歌詞を書いたいきさつを知っている。これは今朝、響と自分が過ごした時間そのものだ。

——本当にすごいのが出来たね、ヒビク先輩…っ。

どうしてこんなに嬉しいのだろう。どうしてこんなに感動するのだろう…。今まで形になっていなかったものがヒカルの心の中で積み上がっていく。

歌が終わると皆一斉に響の周りに集まり拍手を贈った。顧問が夜も遅いのため、とたしなめてもやめる者はいなかった。

「風間くん、ありがとう！素敵な曲～！」

小夜子たちは感激して目に涙を浮かべていた。

「礼なんかよせよ。この台本のおかげで俺も色々考えることができたんだ…」

響は照れくさそうに頭をかき、ヒカルに視線を送った。

——少し、変わってみることにしたよ、ヒカル…。

まずは、ずっと避けてきたことに向き合ってみよう。`アメリカ人の父、に——。

響の視線を受け止めてヒカルは笑った。晴れ晴れとした響の顔が嬉しかった。

「最高の『みにくいあひるの子』を作ろうぜ。な！」

田村が響と小夜子の肩に手を置いて気合を入れる。

「合宿やってよかったですね！先輩たち！あかねちゃん！」

そうだな！と響がヒカルの背中を叩き、小夜子たちは大きく頷いた。

——ヒビク先輩、ヒビク先輩、ヒビク先輩……！

ヒカルはもう一度響を見て笑った。嬉しすぎて、涙も込み上げてきて、いつもよりも鼻が膨らんでいるのが分かる。きっと、チャウチャウが食あたりしてのたうちまわった後に笑ったような顔になっているのだろうけど、そんなこと気にしない。とにかく今この時、嬉しさが止まらないヒカルだった。

――必ず迎えに来るから。

十八年前にそう約束の言葉を残して故国に帰っていった恋人に、真実を告げずその時点で自らピリオドを打ったのは――。

◇

ピーーッと勢いよく鳴るケトルの笛の音で響は目が覚めた。毎朝のこの笛は寝覚めが悪く、起きた途端にため息を吐きたくなるのだが、

――朝からため息をつくとき幸せが逃げちゃうんですよ。気をつけてくださいね！

ヒカルの言葉を思い返し、ため息の代わりにバキューム式の深呼吸をするようにしている。

「響～、遅刻するよ～」

母親が鼻歌を唄いながら声をかけてきた。今日も朝からテンションが高い。この後ダイニングに行けば家を出るまでしゃべりっぱなしになるのだろう。普段からハイテンションの母親が、先日からさらにその度合いを増してすこぶる機嫌が良い。ただ、

『なあ、おふくろ。俺の親父ってどんな奴だったんだ？』

そう訊いただけなのに――。

母が見せてくれたのは十八年前の父の写真だった。アルバムの中で母と並んで写っていた若い父の姿に、

『...優しそうだ』

自然とそんな言葉が漏れた。金髪のアメリカ青年は穏やかな眼差しでこちらを見つめて笑っていた。それは、ずっと憎しみを抱きながら想像していた人物の像とはまったく違っていた。だが、いくら優しそうに見えたとしても自分と母を捨てた男だ、そう母に言うと、母は真実を話してくれた。その時だけは少しだけ寂しそうな顔をしていたが、後はハイテンションがさらにハイテンションになり現在も継続中だ。

「ほら、響～。今日から新学期なんでしょー？」

起きてるよ...、と返して響はやっとベッドから降りた。

今日から新学期――。だが、体はまだ夏休み仕様のままで正常に機能していない。おまけに母のハイテンショントークに朝からつき合わされた響は家を出るのがすっきりと遅れ、新学期早々遅刻するはめになった。学校に到着したものの校門は既に閉められているし校舎は静まり返っている。生徒たちは体育館に集合して始業式が始まっているのだ。

九月といってもまだ暑い。ダラダラと歩きながらとりあえず体育館の前まで来てみると、閉められた入り口の間隙から中を覗いている男がいる。後頭部のでっぺんには寝癖が立っているし制服のシャツはズボンの外に出ているし、これは見るからに...、

――同類ってヤツだな。

響はニヤリと笑い後ろから声をかけた。

「おい」

一瞬、ギクリと肩を上げて固まった後、恐る恐る振り向いたのは...。

「あ」

「ん？」

ヒカルの空手部のオトモダチ…、

「群竹だったのか」

「どうも…」

颯土はぺこっと頭を下げた。

「お前、何してるんだ？」

「…いや、入ろうかどうしようかと考えてたところです」

響がドアの隙間から中を覗くと、もう整列は終わっていて校長が長話をしている最中だ。ここで入って行ったら、

「遅刻の説教だけじゃなく、また、そのシャツはなんなんだあ～、とかって言われそうだなあ…」

そうですねと颯土は相槌を打つが、鋭い目はオレンジシャツに注目し、そのシャツはなんなんだ…と語っている。

「じゃあ、終わるまでここで待機ってのはどう？で、みんなが流れてきたらこっそりとそん中に入る。さも、出席してましたよ～ってな顔をして」

響はニヤッと笑って提案した。

「…それいい考えです」

「じゃ、ここは暑いから日陰にしようぜ？」

ふたりは連れ立って体育館脇の木陰に移動した。木の根元に座り込み、ふたりが同時にあくびを出したとき、目の前の通気窓から覗いている顔と目が合った。

「よお、ヒカル～」

響が手を振ると、ヒカルは、

「やっぱりヒビク先輩だったんだ！」

と、笑った。窓の外をオレンジ色の影が見えたからもしやと思い通気窓から覗いたらしい。

「あ、ついでに群竹くんもいるー」

ついでかよ…、と颯土は慔然とした。

「新学期早々、ふたりとも寝坊ですかぁ？」

「まあな…。まだ夏休みモード全開だし…」

「先輩、眠そうですね？」

「眠いっていうかダルイっていうか夏の疲れが取れないってゆーか…」

「おじさん！」

「な…？」

ケタケタと笑うヒカルの声。小さな通気窓越しにあっちとこっちで仲良く喋る響とヒカルだが、

「浅倉…、今、式の最中じゃ…？」

「そうだよ、ヒカル。しゃがんで喋ってんの、目立ってねえか？」

「あ」

案の定、ヒカルの横からいかつい顔がさかさまになって現れた。

「風間あ、群竹え、お前らそんなとこで何やってんだあ？」

生活指導で英語の権田先生だった。

「やばっ！」

響と颯土は同時に立ち上がった。

「始業式からサボりかあ。いい度胸してるなあ？あとでふたりとも俺んどこに來い！」

権田先生はそれだけ言って、また引込んだ。

「ヒカルだよな…」

「浅倉だぜ……」

響と颯土が同時にやれやれといった調子で呟いた。そして、ふたりで顔を見合わせる。

「ははは…」

「参りましたね…」

「ごめんね、ふたりとも」

またヒカルが顔を出した。

「仲良く権田先生のお説教聞いてきて！」

ヒカルはハツラツとした笑顔を残してまた消えた。

——ヒカルのテンションはおふくろに通じるものがあるかも…。

式が終わって出てきた流れに紛れ込む、という響の作戦はヒカルのせいで失敗に終わり、響と颯土は権田先生直行となった。

◇

「お！やっと目が覚めたって感じだね？」

権田先生の説教から解放され、教室に戻って來た颯土にヒカルは言った。

「……誰のせいで新学期早々、権田の長い説教食らったと思ってんだよ」

「それは、遅刻した群竹くんのせいでしょ？」

にっこりと笑うヒカルに、ごもっとも！と合いの手を打つのは麻耶と勇斗だ。

「あの先輩もずいぶん絞られてたぜ…？」

「うそ？どうしよう…っ」

途端に笑顔を引っ込めて本気で響を心配するヒカルに、颯土はややムッとしたため息を吐いた。

「オレンジシャツをやめないと坊主だって言われてた…」

「うそおっ?!」

ヒビク先輩が坊主……と、ヒカルは青くなる。

「ちょっとヒビク先輩のところに行つて來る！」

言うが早いか、ヒカルはそのまま教室を飛び出して行つた。

「群竹ちゃん、それ、ほんとかーい？」

響に対してオレンジシャツをやめないと坊主というのも今さらのような気がする。颯土は答え

なかった。そして、ヒカルは――。

「ヒビク先輩っ！」

二年F組の入り口から窓際の席で女子と喋っている響を大声で呼ぶと、教室にいた全ての生徒たちがヒカルに注目した。

「よお、ヒカル？どうしたんだ、そんなに慌てて」

響は喋っていた女子をそのままにしてヒカルの元にやって来た。

「先輩、坊主にされちゃうってほんとですか？！」

「はぁ？！」

「オレンジシャツをやめないと坊主だって権田先生に怒られたんでしょ？あたしのせいで！」

「……」

あはははははは！

教室中の生徒が笑った。響は大いに困惑し、ヒカルの手を引いて教室を出る。風間くん！と女子が呼ぶ声がしたが、響はそのままヒカルを引っ張って階段を上り上っていく。

「あの先輩、ヒビク先輩のこと呼んでましたけど？」

響と喋っていた女子バスケット部長の大島雪乃は、本城高校一の美人だと一年生の間では評判になっている。ヒカルはこれまでも何度か響と雪乃が一緒にいるところを見ているから、自分が話に割って入ってしまったようでやや気になった。が、

「いいから、来い」

響は気にもせずに屋上の扉を開け、ヒカルを中に押し込めた。

サーッと風が通って行った。陽射はまだ強く気温も高いが、空はもう秋の顔をしている。

「ヒカルのおかげでバックレ成功だなっ」

響は笑った。

「バックレって…、あっ！！ホームルーム！」

ちょうど予鈴が鳴っている。

「だ、だめですよー！私帰りますっ！今日のホームルームで体育祭のこと決めるんですから！」

「そんなのどーにかなるだろ」

響はコンクリートにごろんと寝転がった。

「ヒビクせんぱあい…」

「ヒカルは俺が坊主にされちゃうことを心配して来てくれたんだろ？」

「そうですけどー」

「だったら、傷心の俺に付き合っここにいるよ」

う…と、言葉に詰まりヒカルはおとなしく響の隣に座った。風に揺れる響の前髪は明るく綺麗に輝いている。

――坊主にされちゃうなんて、イヤだっ

「先輩、オレンジシャツやめてください」

「ん？ヒカルはオレンジが嫌いか？」

「好きですよ！でも、先輩が坊主にされちゃうのはイヤです！」

はは、と響は笑った。

「権田もひどいよなあ…。たかが遅刻したぐらいで坊主にしろなんてさ…」

「それは、オレンジだからですよ！群竹くんは遅刻ばかりしてるけど坊主にしろなんて一度も言われたことないですよ！」

群竹くんねえ……、と響は意味深に呟いて、よっこいしょと起き上がった。

「でも、私のせいですよ。始業式の時、呑気に話しかけちゃったから」

ヒカルは肩を縮めてしゅんとなる。

「そうだな。ヒカルのせいだ…。俺、オレンジシャツしか持ってねえし、坊主になるのはイヤだし…、どうすればいいんだ？」

響はヒカルの目をせつなげに覗き込んだ。そんな顔で見られると、ヒカルまでとてつもなくせつなくなるし、焦るし、なんとかしなきゃと思う。

「うう…、白いシャツ買うか田村先輩に借りるかして何とかしてください～」

うーん…、と響は空を見上げる。

「今さら白シャツってのもなあ。入学式の時から俺、これだし…」

「だってー！」

泣きそうな目をしながら膨んだヒカルの鼻を、響は面白そうにつまんだ。

「しょうがないから坊主になってみっかな」

「先輩っ？！」

「べつにもともとこの髪の高さに拘ってるわけじゃねーし。最近は長髪にも飽きてきたしさ、面倒無くてよさそうじゃないか？野球部はみんな坊主だし」

「野球部は坊主でいいんです！でも、ヒビク先輩はダメです！」

「どうして？べつにいいじゃない？俺が坊主だってヒカルは痛くも痒くもねえだろ？」

「痛いし痒いです！」

ほお～、痛いんだあ…と響はヒカルを見る。

「あたしのせいって思うと心が痛いし、坊主になった先輩見たらきっとむず痒いぐらい笑っちゃいそうだもん！」

は？！と響は啞然とした。

「笑っちゃうって…おまえ…」

「もう、想像しただけでも笑っちゃいそうなんですよ！実物見たら笑い死にしそうですっ」

まったく…、と響は頭をかく。

「やっぱ、ヒカルだよなあ……」

ほんとに坊主にしまおうかな……、と響は呟いた。

「あ、先輩見て？ひこうき雲が！」

唐突にヒカルが空を指差した青空の中を飛行機が白い線を引っ張りながら飛んで行く。やがて飛行機が見えなくなっても白線は鮮やかに残ったままだった。

「べつに珍しくもねえだろ」

ややふてくされて響は言った。

「そうだけど、空に線が描いてあるのってなんか嬉しくないですか？私もあそこでお絵描きしたいなあ〜」

目をキラキラさせながらひこうき雲を見上げるヒカルに、響はやれやれ、と笑った。さっきまで坊主のことで涙目にまでなっていたというのに、今、ヒカルの頭の中は青空でお絵描きをする妄想で埋め尽くされているのだろう。

――ほんと、面白いヤツ…。

本鈴が鳴った。

「じゃ、帰るとするか」

響は立ち上がり、白くなったズボンをはたいた。

「え？バックレはいいんですか？」

「体育祭のこと決めるんだろ？ヒカルは何の種目に出るんだ？」

「まだ分からないけど…リレーに出たいなーって思ってます」

リレーか、と響は呟いた。

「んじゃ、早く行け？リレーは人気の種目だからな？すぐなくなっちまうぜ？」

はい！とヒカルは先に駆け出した。そして、まだ同じところでぼんやりしている響を振り返り、

「坊主はダメですよ、絶対に！私は先輩の金色の髪が好きなんです！」

と、叫んで階段室に消えていった。

――は…。まったくヒカルだぜ……。しかし、坊主って……。

青空の白線を何気なく見上げながら、群竹も冗談なんて言うんだな、と響はひとりごちた。

◇

ホームルームをバックレなかったおかげで体育祭の実行委員に推挙されたヒカルはまた忙しくなる毎日を迎える。出場種目も無事に決まり、帰り支度をしながらヒカルはふと廊下側、一番後ろの席を振り返って見た。始業式の今日、一希はとうとう来なかった。夏休み前からどこか様子がおかしかったから気になる。

「千田先生、黒田くんはどうして欠席なんですか？」

教室を出ようとしていた千田先生を捕まえてヒカルは訊いてみた。が――。

「それが、連絡がなかったんですよ。まさか始業式の日を忘れてるってわけでもないでしょうけどねえ。あとで黒田くん家に電話して確認してみますよ」

――無断欠席か……。

ヒカルの顔が曇る。

「まあ黒田のことだから本気で忘れてたのかもよ？心配しなくて平気だって」

勇斗が部活の仕度を整えながらヒカルの心配をフォローする。

「そうだねー」

「で、ヒカルちゃん？風間先輩は坊主になるって？」

ヒカルの隣で部活の用意をしている颯土が、ややギョツとした。

「分からない…。白シャツ持ってないし、今さらオレンジ以外着られないっていうんだよ、ヒビ

ク先輩。坊主になっちゃおうかな、なんて言ってるし...」

は？と颯土はヒカルを見た。

「明日から白シャツ着てくださいって頼んで来たけど...」

さっきの様子だと着ないだろうな、とヒカル。

「そっか...」

勇斗は颯土にチラリと目を向けた。

「そうだ！権田先生にお願いしてくればいいんだ！」

ヒカルが手を打って思いついたことに、さすがの颯土も、

「それはどうかと...っ！」

と、反論した。

「どうして？ヒビク先輩が坊主にならない方法はもうそれしかないもん」

「権田に頼んだところで意味ないから...」

いろんな意味で、と颯土。勇斗はニヤリ、と笑った。

「まあ、少し様子見ても大丈夫じゃん？きっと坊主にはならないよ」

「うん...。そうだね」

とりあえずヒカルが納得したので颯土も胸を撫で下ろした。

そして翌日――。朝、ヒカルが昇降口を入るとそこで教室に向かう前の一希に会った。

「おお、久しぶりだな、浅倉」

「久しぶりだなじゃないよー。昨日はどうしたの？」

「へへ。始業式の日にち間違えててさ...、千田から電話あって気づいた...」

一希は相変わらずの黄色い髪を触って笑った。

「嘘みたい...。心配しちゃったよ」

「.....サンキューな」

ヒカルの髪をくしゅっと撫でて、一希はそのまま教室へと向かった。

「やっぱり日にち間違えてたんだなー」

「しょうがないなあ」

勇斗と祐輔と一緒に登校して来た。

「心配することなかったねー、ヒカルちゃん」

うん、と頷いてヒカルも教室に向かおうとした時――。

昇降口の入り口が妙に騒がしくなった。うそ、と呟く女子に、マジかよ？と囁く男子たち。

「どうしたんだろねー？」

勇斗たちもその場にとどまり、入り口をじっと見つめる。やがて、騒ぎの元がやって来た。

「.....ヒビク先輩っ?!」

思わずヒカルが叫んだ。勇斗も驚いて目を見開く。

「.....やっちゃったよ、風間先輩...。群竹ちゃんのせいだこれ...」

その時、朝ボケの颯土も昇降口に入って来て、前にいる響を見て眠気が一気に飛んだ。

「よお、ヒカル！」

響はいつもより涼しげな姿で、心なしか爽やかに笑った。

「先輩！どうしたんですか？それ、そのシャツ！」

「ん？ああ...、さすがに田村の着古しは勘弁だから買ったぜ？」

真っ白なシャツに金色の髪はいつもより鮮やかに映えて、オレンジを着ている響よりもさらに際立っているのが不思議だった。

「ヒカルが坊主はダメだっていうからさ。白に妥協してやった」

ニカッと笑って響はヒカルの真横に立った。ヒカルはただ呆然と響を見上げた。校則破りの常習犯は、入学以来初めて校則を破らずに登校したのだ。

「どうしたヒカル？なんか言ってくれよー？」

「あ、はい...。私の願いを聞き入れてくれてありがとうございます...」

「そうだぜ？この白シャツは、ただただヒカルのためなんだぜ？感謝してくれよ？」

「ほんと、ですか？」

「当たり前だろ？ヒカルちゃんはこの俺のオレンジシャツを脱がせた唯一の女ってことだ」

その言い方、なんかやらしい、とヒカルは赤くなるが響は満足そうに笑った。そして、ヒカルの後ろで呆然と立ち尽くしている颯土に、

「よお、群竹～！なかなか面白れえ冗談をサンキューな！」

と、本当に面白そうに手を上げた。

「.....あ...、えっと...、おはようございます...」

颯土は目を泳がせて、さっさと教室に去っていく。

「面白い冗談？なんですか？」

いや、なんでもない、と響は笑う。その笑顔が白いシャツに反射して眩しい。

「せんばい.....」

ヒカルは響が入学以来一度も着たことがないという白いシャツを、自分の願いの為に着てくれたことを素直に嬉しいと思った。

「これで先輩...、坊主にならなくてすみませうね」

「まあな」

でもー。

鮮やかに映える金髪を見てヒカルは今までの響がなぜオレンジを着ているのかが少し分かったような気がした。そして、やっぱり響にはオレンジが似合うと改めて思った。

翌日からはまた響のシャツはオレンジに戻ったが、坊主にされる様子はなかった。そして、風間響という男の豪胆さを思い知った男がひとり密かに、もうくだらない冗談は二度と言うまい、と心に誓ったのだ。

新学期が始まって一週間目の浅倉家の朝。相変わらずの哲平が目覚ましがやって来て上で眠る久美子を襲う。いつもなら大声を張り上げて跳び起きるはずの久美子が、その日はパーン！の音にも無反応だった。調子が狂った哲平は、

「くーねえ、どうしたの？」

と、心配そうに声をかけている。ヒカルは気になって上をのぞいてみた。

「ヒーねえ、くーねえが変だよ？」

哲平は久美子の上に馬乗りになったままの状態に心配している。久美子は布団を頭からかぶってまるくなっていた。

「久美子、具合でも悪いの？」

ヒカルは布団をめくって久美子の顔をのぞき込んだ。

「別に…」

「なら起きないと学校遅れるよ」

「うん、わかってる…」

久美子はため息をついて面倒くさそうに起き上がった。哲平は安心したように笑うとたどたどしい足取りではしごを下り、自分の役目を遂行するため、隣の部屋へと去って行った。

「どうしたのよ、お元気娘が」

まったくいつもの久美子じゃない。そういえば昨夜から様子がおかしかった。

「学校で何かあったの？」

「あったもくそもないよ。あの学校最低！」

久美子はどうやらクラスの中のごたごたに巻き込まれているらしい。いじめのターゲットされているクラスメートを、姉譲りの正義感の強さから庇ったことが原因で今度は久美子が何かとインネンをつけられるようになったそう。かといってうじうじしない性格であることが救いの久美子だが、いいかげん、

「戦うのにも疲れた…」

という訳で今朝の様なのだ。

「美少女戦士にも休息は必要なのよ」

久美子の話では、今、墨川中学は荒れているらしい。表面的な暴力行為こそないが、あちこちでいじめを遊びだと勘違いしている者がターゲットを選んでいじめをしている。それは教師たちの目をすり抜けたところで行われているため、大人たちは介入できないでいるらしい。

「馬鹿じゃないかと思うよ。そんなことして何が楽しいんだか！だからあたしは…、」

いつ、自分がターゲットにされるかと毎日ビクビクしているクラスメートたちは、目の前でいじめが行われていても傍観者を決め込んでいる。久美子はそれが許せなくて、

「一発ガツンとかましてやった！」

のだそうだ。その日から久美子の戦いの火蓋は切っておとされたらしい。

「あんた、偉いよ！さすがあたしの妹だね！」

ヒカルは久美子の肩をポンとたたいた。

「負けるんじゃないよ！」

「そりゃ負けない自信はあるけどさあ。あたしだって一応女の子だからね、イヤになっちゃうこともあるわけ」

「どうしても頑張れなくなったそんな時は、あたしが出て行ってやるからね！学校も隣なんだからいつでも駆け込んでおいで」

「ヒーねえ～～～！」

久美子は大げさにヒカルに抱きついた。実際泣きたいだろうに、こんな時無理して涙を飲み込んでしまうのも姉譲りだ。

「よし、じゃあ行くよ！」

ふたりは一緒に登校し道を挟んで右と左に分かれた。久美子は戦場へ、ヒカルは学園天国へ。

「久美子ファイト！！」

中学の校門を、心とは裏腹に快活にくぐっていく妹に向かってヒカルはエールを送った。

そんな久美子には申し訳ないが、ヒカルは今、高校生活が楽しくて仕方がない。やることが山ほどあって退屈をしている暇もない。二週間後には体育祭を控えている。その後夜祭では軽音楽部のステージがある。それにむけてのマラカスの特訓も毎日のようにあるし、そして二ヵ月後にはいよいよ文化祭も控えている。こっちの方は演劇の練習と大道具、小道具の制作に追われ文字通りハードスケジュールだった。一日のうちに体育祭の実行委員会に出てその後マラカスをやってその後に演劇部に顔を出さなくてはならない、という日も少なくない。だがそれはヒカルにとってはとても充実した毎日だった。

「ヒカルさあ、マラカス振りながらどうして踊るかなあ？」

田村がやれやれといった感じでぼやいた、放課後の音楽室――。

「だって、自然に体が動いちゃうんだもん…」

マラカスを振ると自然にステップを踏んでしまうのがヒカルのくせだ。それもあっちこっちと移動するので目障りだ、といつも田村に注意されていた。それが最近になってステップだけにとどまらず、マラカスを持つ手も派手に動くようになり、まるで盆踊りでも踊っているような格好になってしまっていた。

「リズム感がいいんだか悪いんだか…」

ヒカル番続行中の田村は頭を抱える。

「後夜祭のステージ、また紅白垂れ幕な盆踊りやぐらじゃねーだろうなあ…？」

ヒカルのダンスを見ていた響は去年のステージを思い出して青くなった。去年の後夜祭で校庭に組まれたステージは紅白の垂れ幕がかかる檣で、響たちはその上で初ステージを踏んだという苦い経験があったのだ。

「え？盆踊りやぐらって倉庫にしまってあるアレのことですか？だったらそうですよ？」

体育祭実行委員のヒカルがあっさり肯定すると、響たち一同は揃って頭を抱えた。

「盆踊り櫓で盆踊りなマラカスダンス...、ヒカルのオンステージだなあ。バンドと合わせたら結構イイ感じになるんじゃないか〜？」

「ヒビク、それマジで言ってる？演奏している前でチョロチョロされたら邪魔でしょうがないっての」

「すみませんね〜。なんたって国宝級の音痴ですからね、私。あっ！演劇部に行かなきゃ！私はこれで〜！」

ヒカルは逃げるようにして音楽室を出て行ってしまった。

「ステップ踏むか踊るか、どっちかってんならまだいいんだけどなあ...」

田村はヒカルの出て行った先を見つめながらため息を吐いた。

「あいつにじっとしてろ、ってのは無理なんじゃないか？いっそのことあいつに衣装着せて躍らせてやったらどうだ？」

「そうだな。文化祭のときはアイツ、俺たちにとんでもねえ衣装着せるつもりみたいだし、逆襲の意味もこめて素敵な演出を考えてやるか！」

響の提案に田村はいたずらな目を輝かせる。

「田村先輩、あんまりヒカルちゃんをいじめないでくださいね」

「いじめはしないさ。演出だよ、演出」

「ならいいんですけど、ヒカルちゃん、本当は凄く疲れているはずなんです。午後の授業中も調子が悪かったみたいだし...」

「調子悪かった...？」

さっきまでの冗談を引っ込めて、響が心配げに顔を曇らせた。六時間目の英語の授業中、指名されたヒカルは立ち上がってふらふらと前の席に倒れこんだ。一瞬のことだったからそれですが、ヒカルのハードスケジュールを知っているあかねは心配している。

「ヒカルは一人しかいないのに何足もワラジを履いているからなあ...」

そう言う響の視線は窓の外にあった。演劇部の部室に向かおうとしていたであろうヒカルが校庭をあちこち駆け回っている。途中で誰かにつかまり、体育祭実行委員としての何らかの手配をしているのだろう、ということはその動きからしてよくわかった。響はそんなヒカルを見つめながら思う。

――あの宝を手に入れることができたなら...

いつからそんなふうになるようになったのだろう。`生意気な後輩、だったはずなのに...。快活で思ったことを何でも口にしてすぐにムキになって怒るヒカル――。だが、気が付くと自分はいつもヒカルを目で追っていた。からかって怒らせて笑って、それでもヒカルが何かを言うたびにワクワクし、次の言葉を楽しみに待つようになっていた。あの明るさ、無邪気さ、そして太陽のように輝く笑顔を全部まるごと自分のそばに置いておけたら――。

「ヒカル...」

響は誰にも聞こえないほどの小さな声でその名をつぶやいた。校庭を行ったり来たりしているヒカルは、そこで部活動をしているサッカー部の連中や、テニス部の面々や、ハンドボール部の友人たちとも忙しそうに手を振り笑顔で会話を飛ばしている。やがて格技場からは部活を終えた

空手部の連中たちもぞろぞろと出てきて、ヒカルを取り囲んで何やら笑っている。ヒカルの周りからは友人が途切れることがない。いつでも誰かと笑っているのがヒカルだ。

——好きな人のリストがあるって言ってたしな…。

とりあえず、その中に自分も入れてくれたらいい。でも、リストの中のひとりではなく、リストには入らない特別な存在になればいい。

窓の外にあった視線を音楽室に戻し、響は田村たちと話をしているあかねに言った。

「あかねもそろそろ行っていいぜ？と言ってもこんな時間だけどこれから演劇部？」

もう下校のチャイムはとくに鳴り終わっていた。辺りも薄暗くなっている。

「演劇部の練習はとりあえず体育祭が終わるまでは休んでいいことになっているんです」

「それじゃ、ヒカルは何してるんだ？」

「ヒカルちゃんは衣装係になっちゃったんです。先輩たちが着る葉っぱの衣装を作っているんです」

演劇部では五人のメンバーが、大道具、小道具の制作を分担してすることになった。小夜子とヒカルは衣装を作り、あかねと真美は大道具を、絹江は小道具を担当することになっている。文化祭が間際に迫り大詰めを迎えるまでは、各自が時間を見つけて責任を持ってその作業を進めておくことになっているのだ。ヒカルは家が近いからと、だいたい毎日一人で部室に残り衣装作りの作業をしている。

「あかね～、終わった～？」

廊下で麻耶が呼ぶ声がした。

「じゃ、私はお先に失礼します！」

あかねはペコッと頭を下げ音楽室を出て行った。響が校庭を見ると、もうそこにヒカルの姿もなかった。

響たちが後夜祭のステージの内容について話し合ってから下校する頃には、辺りはもう真っ暗になっていた。軽音楽部のメンバー全員が電車通学のため、一同は駅に向かいぞろぞろと学校周囲の道を歩く。部舎の横を通るとひとつだけ二階の部屋に明かりがついていた。演劇部の部室だ。響は立ち止まりその明かりを見上げた。腕の時計を見るともう七時を過ぎている。

「俺、ちょっと用を思い出したから先に帰ってくれないか…？」

田村は演劇部の部室をチラッと見上げた。

「…りょーかい」

響はさっさと踵を返し再び校門の中に入っていく。

「あれがお前のお宝か…」

田村はぼそりと呟いた。

◇

部舎を二階に上がり演劇部の部室の前に立つと、明かりがついているのはここと校舎の職員室だけになっていた。響は少しだけためらった後、ドアをノックした。

「あっ、すみませ～ん、今、帰りま～す！」

というヒカルの声が返ってきた。

――全く...、遅くまで残ってるの今日だけじゃないんだな。

響はため息をついてドアを開けた。

「うおっ?!」

テーブルの上には針と糸と布が散乱しものすごい状態になっていた。

「なんだ、先生じゃなかったのか」

ヒカルは気の抜けた声を出して、止めかけた縫い物を再び手にとった。

「もう遅いぞ?昇降口の鍵も閉められちゃうぜ?」

響は壁の時計を指差す。

「これ一枚縫い終わったら帰りますから」

ヒカルが響に見せたのは葉っぱの形に切ったグリーンの布だった。二枚を中表にして縫い合わせて一枚の葉っぱを作っている。テーブルの上には仕上がった同じ葉っぱが何十枚も散らばっていた。響はヒカルの隣に座ってそれを手にとった。

「これ、どうするんだ?」

「たくさん作って土台のシャツに縫い付けるんですよ。カッコイイでしょ?」

「.....。これ一枚一枚作っているのか?」

カッコイイかどうかはさておき、響はその作業の細かさに驚いた。

「そうですよ。先輩たちをカッコよく飾りたいし、これ私の仕事なんです」

「一人で?」

「小夜子先輩は私たちが着るあひると白鳥の衣装を縫っているし、他のみんなもそれぞれやるのがいっぱいあるんですよ。だからこの作業は私が一人でやるしかないんです。何てったって言い出しっぺは私ですから」

ヒカルはチクチクと手を動かす。

「先輩はどうしたんですか?」

「帰ろうとしたらここに明かりがついていたから様子を見に来たんだよ。お前が無理してんじゃないかって思ってな」

一瞬ヒカルの手が止まった。

お前が無理してんじゃないかと思って――。

その一言だけで、意識の下に張り詰めていたものが一気に緩んでいった。

「だって私はやるのがいっぱいあって時間がないから...」

ヒカルはうつむいた。

「中途半端はイヤなんです。言っぱなしもイヤだから...」

「だな。言いだしっぺで墓穴掘ってるよな、お前はいつも。けど、そーゆーお前、悪くないぜ?」

響は笑った。

「ヒビク先輩...」

ヒカルは込み上げてくるものを必死に押し込めた。

——ヒビク先輩、いつもって言った？いつも私を見てくれてるの？わかってきている...？私のこと本当に...？ヒビク先輩になら、あたし、甘てもいいの...かな？

それはきっと、ヒカルが今までずっと求めていた場所だ。

見つめていて欲しい。甘えさせて欲しい——。

これが、今まで漠然としていた感情の答えなのか、とヒカルは思った。`しっかりもののヒカルちゃん、はいつも周りから頼りにされてきた。ヒカルがいれば大丈夫、と決め付けられてきた。その期待に応えなきゃならないんだと思い込んできた。本当はひとりぼっちが寂しくて、誰かに頼りたいとも思っているただの女の子なのに。それはヒカル自身が一番よく知っている。だが、それを意識している暇もないほど、いつも誰かに頼られて甘えられる場所も頼る相手もなく突っ走ってきたから...。

「終わったな？帰るぞ」

「はい」

ヒカルはテーブルの上をそそくさと片付けてから立ち上がった。その時、突然膝の力が抜けて思わず両手をテーブルについてしまった。六時間目の時と同じだ。

「おい！」

響は膝を折ってテーブルに腕をつくヒカルを抱きかかえて驚いた。ヒカルの体が異常に熱い。額に手を当ててみると熱がある。それもかなり高い熱のようだ。

「凄い熱だぜ?!」

「そうですか...？」

「そうですか、じゃないだろう！こんなに熱があるのに、お前何やってんだよ、バカか?!」

午後の授業から調子が悪かったとあかねが言っていた。それを我慢してマラカス振って踊って、校庭を駆けずり回って、夜遅くまで縫い物なんかして、

——ほんと呆れたはねっ返りだ！

「ヒビク先輩の手、冷たくて気持ちいい〜」

「ああそうかい！手が冷たい奴は心がう〜んとあったかいんだぜ！さ、ヒカルんちまで送るぞ」

「大丈夫ですよ〜。うち近いし、それに私自転車だし...」

「じゃあ俺が乗っけてってやるよ！お前みたいなバカ、一人で帰らせらんねえだろうが！大バカ！」

響はヒカルの手を引いて部室を出た。

「バカバカ言わないでください...。落ち込んでしまいます...」

こんな時でさえヒカルは口応えを忘れない。

——まったく.....っ！

抱きしめて包み込んであげたい気持ちを抑えながら、響はヒカルの熱くほてった手を引いて自転車置き場へと歩いていく。

手を引かれて歩くヒカルは、響の背中に垂れた金色の髪を見つめながらぼんやりと思う。

——優しい色。おひさまのように温かな綺麗な髪...。坊主にならなくて、本当によかったよ...

今、響に握られている手が痛いくらいだ。こんなにもしっかりとつかまえていてくれる人がいる、この安心感はなんだろう。どんなに疲れていたって、どんなに熱があったって、さっきまでは全然平気だった。なのに、響の言葉を聞いた途端、まるで積み木がくずれるようにがたがたになってしまった。今はもう、立っているのも辛い――。

――ひとりじゃないから…。安心して心を預けられる人がここで支えてくれるから…。

「ヒカル、大丈夫か？」

急に足取りがおぼつかなくなったヒカルを心配して響は立ち止まった。

「何か…、駄目みたいです…」

強がらないで素直な気持ちを言うのは何て楽なんだろう。

「おいおい、しっかりしてくれよ。今、自転車持ってくるから」

響が自転車を取りに行くと、ヒカルはその場にヘナヘナと座り込んでしまった。そして響が戻ってくるまでのほんの短い時間に自分の気持ちを整理した。

――これって恋…？こんなに胸がドキドキしているよ。熱に浮かされているわけじゃないよね？

ヒビク先輩が好き。大好き――。

これが、ヒカルの答え。響に恋をしている――。

「おい、ヒカル～。立てるかぁ？」

うずくまっているヒカルの両肩に手を置き、響が顔をのぞき込んだ。ヒカルはうなずいてゆっくりと立ち上がる。

「ほれ、後ろに乗りな。それからこれを着てろよ」

響は制服の上着を脱いでヒカルの肩にかぶせてくれた。袖に手を通して、ヒカルは響の匂いをかみしめる。

「走るぞ。お前、病気なんだから、なりふりかまわず俺にしっかりしがみついてろよな！」

「はい…」

響の言葉どおりヒカルはその背中にしがみついた。自転車は夜の静寂の中をゆっくりと走り出した。背中から伝わってくるヒカルの熱い息遣いが辛そうだった。

――こんなになるまで無理を通すなんて、ヒカルってどういうヤツなんだよ…。

「大丈夫かぁ？」

背中に向かって声をかけると微かにうなずく気配だけを感じた。ヒカルは自転車から落ちないように響にしがみついているのがやっとだった。風を避けるようにゆっくりと自転車をこぐ響の背中のは広くて温かい。言われた通りになりふりかまわず顔をうずめていると、不思議と涙が込み上げてきた。

「おい、大丈夫か？」

響はまた後ろを気にする。

言葉が出せないヒカルは返事をする代わりに響の前に回している手でOKのサインを作った。

「まあ、元気のないヒカルってのも可愛いもんだな！なんだか、らぶらぶみてーでいいなあ

？……ってことはないよな！ヒカルちゃんは高熱で苦しいんだもんなあ。元気になったらぶっとばされちゃうよなあ。ヒビク先輩、よくも呑気にらぶらぶなんて言ってくれたわねってさあ！」

響の独り言のような言葉が背中から響いてくる。

——このままずっと、らぶらぶ…がいいよ…。

ヒカルはいっそう強くその背中にしがみついた。

「ヒカルんち、ついたぜ」

自転車が浅倉家の前に止まったが、ヒカルは響の背中にしがみついたまま動こうとしない。

「ヒカル？」

動けなかったのだ。体中の力が抜けてしまっている。

「大丈夫かよお」

響が自転車にまたがったままヒカルの体を支えようとした時だった。通りの角から一台の自転車が曲がってきて浅倉家の前で止まった。近くのコンビニから帰った颯土だった。

「浅倉？」

颯土はグッタリと響の背中にもたれているヒカルを見て思わずつぶやいた。

「おお！群竹！悪いけど、ちょっと手伝ってくれないか？」

身動きが取れなかった響は颯土に助勢を求めるが、颯土はヒカルと響を見比べる。その視線が鋭く響を刺しているようだった。

「そんなこわい顔をするなって！別に俺がヒカルになんかしたってわけじゃないんだぜ。熱があるんだよ。ちょっとヒカルを支えてやってくれないか？」

「熱…？こいつが？」

颯土は自分の自転車を門の中に押し込めると、言われた通りにヒカルを支えた。そして、その体温の熱さに心底驚いた。自由になった響は自転車を降りると、そのままヒカルの家の呼び鈴を鳴らした。すぐに母親が出てきた。

「ヒカル！」

母親は颯土に支えられてやっと立っているヒカルを見てビックリしたようだった。部屋にいる剛を呼び、剛がヒカルを抱えて家の中に連れて行った。

「ありがとうございました」

母親は響に深々と頭を下げた。

「いいえ。それじゃ俺はこれで」

響は礼儀正しく頭を下げると踵を返した。門の外では颯土が立っていた。

「群竹んちって、ここなの？」

さっき颯土が自分の自転車を入れた家はヒカルの家の隣。

「はい」

「ふーん…。じゃ、ヒカルとは幼馴染ってヤツか」

「いや…、アイツはこの春、越してきたばかりですから」

「そうか…」

響は今明かりが灯った二階の部屋と、明かりがついていない向かい合っている部屋を交互に見比べて、近いなあ...、と独り言のようにつぶやく。

「あの...、先輩、浅倉は...」

今の状況に対して、何をどう言っているのかわからない颯土はボソボソと呟く。あんなヒカルを初めて見た。いつもうるさいくらいに元気に飛び跳ねているヒカルが、響の背中に自分を全て委ねるようにして力なくもたれかかっていた。

かawaii女の子のように――。

「ん？心配か？」

「いえ、まあ、はい...」

「無理がたたったんだろ？ほら、あいつなんやかんやと忙しいじゃない？性格もあるんだろうけど、一人で色々抱え込みすぎているんじゃないか？ヒカル一人に頼ってないでもっと周りの連中も助けてやればいいのにな。まあ、部長の俺にもちょっとは責任があるんだけど」

「抱え込みすぎって...」

ヒカルが色々なことに首を突っ込んでいるのはただのしゃばりじゃなかったのか、と颯土は少し驚いた。確かに、ヒカルが皆に頼りにされているのは分かるし、皆もヒカルばかりを頼っている感はあるが、ヒカルはいつも楽しそうに何でもこなしている。

「あの様子じゃ、二、三日は動けないんじゃないかな。まっ、お隣さんをよろしく頼むよ！」

響は颯土の肩をポンとたたくと、その手を上げて通りの方へと歩き出した。その後ろ姿をしばらく見送ってから、再び明かりが消えたヒカルの部屋を見上げ、颯土は自分の家の中に入ってしまった。

◇

そして、翌日の一時間目――。退屈な英語の授業を片方の耳で聞きながら響はぼんやりと窓の外を見ていた。校庭ではE―Fの女子が体育の授業をしていた。体育祭に向けてリレーの練習のようだ。そこにはあかねの姿が見える。トラックを走る選手たちの外側で手をたたきぴょんぴょん跳ねながら応援をしている。

――あれは鈍いからもちろん選手じゃないだろう...。

ヒカルの姿は見えない。それも当然か、と視線を黒板に戻しかけた時だった。バトンタッチを受けてF組のカラーである紫のハチマキを巻き、肩にタスキをかけて颯爽と走り出したアンカーは...、

「なに？！」

響は思わず席を立て窓にかじりついた。

「ヒカルッ！」

E組のオレンジを追い抜き前に走り出たのはヒカルだった。

「あいつ、また無理して！」

響は窓に向かって叫んだ。

「おい、風間あ～！授業中だということを忘れていないか？」

「ああ、そうだった...」

すみません、と響は席に戻った。だが、目は校庭にあるままだ。先頭でゴールしたヒカルは応援していたクラスメートに向かって大きくVサインを出してはしゃいでいる。昨夜はあんなに死にそうだったのに、今日のヒカルはそんな様子はみじんもない。

「参ったね...」

再び声を出した響に、今度は教壇からチョークが飛んできた。それを素早くかわして校庭のヒカルを目で追いながら、響は心なしか寂しそうに笑った。

その放課後――。昨日と同じく、演劇部の部室は辺りが暗くなっても明かりがついていた。部活が終わり、田村たちといつものように校門を出ようとして響はふと足を止める。昨日の今日だというのにヒカルが無理をしているのは分かりきっている。休まず学校に来ることだけでも昨日の状態では無理だったはずなのに、リレーを走ったり遅くまで作業をしていたり。

「ヒビク、どうした？」

立ち止まって何かを考えている響に、先を歩いていた田村が振り返った。

「...いや、べつに...」

演劇部の部室に行って様子を見て来たい。だが、わけもなく行くのもためらう。響が校門の前で、一生懸命部室に行く口実を考えていると、昇降口から一年F組のいつもの面子がぞろぞろと出てきた。

「先輩たちも今帰りですか？」

麻耶に声をかけられ、そこで田村たちは立ち話が始まる。響は昇降口から出てきた颯土を捕まえ、

「ヒカルの様子はどうだ？」

一番気になっていることを訊いた。

「...ほんとに熱があったのか？と言いたくなるぐらいに元気でしたよ...」

颯土はボソボソと答えた。

「本当に大丈夫なのかよ、アイツ...」

響が心配していると、今度は昇降口からヒカル本人が出てきた。今日の作業は終わったようだ。

「...ったく、ヒカ...、」

言いかけてやめたのは、ヒカルが男子生徒と一緒に出てきたからだ。

「浅倉、一緒に帰ろうぜ？」

その男子はヒカルにまわりついていった。

――誰だ、アイツは...。

響の目が剣呑に光った。

「いいけど、あたしの家は駅とは反対方向だよ？」

「お前が俺をチャリで駅まで送ってくれるってのはどう？」

「なんであたしが！」

「嬉しいだろ？俺様と二ケツが出来るなんて」

「あたしがあんたを乗せるわけ？」

ヒカルと男子生徒は校門に溜まっている響たちに気づかずに、そんな話を大声でしている。

「黒田のヤツ、ホームルーム合宿からずいぶんヒカルちゃんに懐いたよなあ～」

勇斗が頭の後ろで両手を組んでヒカルたちを見た。

「黒田...？」

響の眉間に皺がよった。今年の新入生の中で一番の問題児だと言われているヤツだ。去年の新入生の中で一番の問題児だと言われていた響だから、というわけではないが、基本的に平和な本城高校で問題児と呼ばれる生徒の名は学校中に渡るのだ。

「ヒカルちゃんの言うことはよく聞くよね、黒田くん。先生には反抗ばかりで始末書の帝王だけどさ」

と、麻耶。

「あれは、惚れてるな、浅倉に」

祐輔の容赦ない一言に、響は思わず息を呑んだ。

「で、ヒカルはどうなんだよ？アイツに惚れてるってか？」

響の気がかりを代弁するように田村が突っ込んだ。

「さあ.....」

皆の視線がヒカルと一希に集まっているそのことに、本人たちは校門の傍まで来てようやく気がついたようだ。

「ヒビク先輩...っ！」

「よお、ヒカル」

響はあえて一希を視界に入れず、ヒカルに声をかけた。

「昨日は...送ってくれてありがとうございました...！」

ペコッと響にお辞儀をして、ヒカルは少し恥ずかしそうに笑う。そんなヒカルを横目で見ている一希は何かを言いかけたがやめた。

「お前、大丈夫なのか？」

「はい。一晚寝たら元気になっちゃって！」

響に会いたい、響の顔が見たい、という想いが病を撃退した、とはさすがに言えないヒカルだが、実際は間違いない。響の存在が元気の源になっている。昨日よりも今日が今日よりもきつと明日の方がこの想いは大きくなっていく。

「...ならいいけど、あんまり無理するなよ？今日は寄り道なんかしないでさっさと帰れ」

言ったことの後半は一希に対する意識的なけん制だったが、それに気づいた者はおそらくいないだろう。

「なんだお前、具合悪かったのか？」

と、一希。

「うん、ちょっとね」

「んじゃ、今日は俺が送って行ってやるぜ？」

「大丈夫だよ。あたし自転車だから！」

一希の申し出をあっさりと断るヒカルにホッと胸を撫で下ろしている自分に、響は思わず失笑した。いつの間にか、ヒカルに気持ちを振り回されている。いつの間にか、ヒカルの傍にいる男を無意識に敵視している。

——カッコ悪りい…。

「それじゃ、先輩の言う通りおとなしく帰りますね」

ヒカルは自転車を校門の外に転がして、さよなら、と走り出した。ちえっ、と一希はアスファルトを蹴る。

「まあまあ、黒田の気持ちは分かるけどさ。ヒカルちゃんはかなりハードル高いよ〜？」

と、一希を慰める勇斗。

「ハードル高いか……」

ポツリ、とつぶやいた響の横を颯土が無言で通り過ぎ、今、ヒカルが走っていった方向へと自転車を走らせ消えて行く。

——あいつはお隣さんだしなあ…。

その後ろ姿も、響は複雑な想いで見送った。

体育祭の当日ー。競技は三学年をクラスごとに縦割りにしてA組からF組で競い合う。A組の赤には田村が、B組のグリーンには次郎が、E組のオレンジには太郎が、F組の紫には響と柏木がいて、軽音楽部の二年生はそれぞれに対抗意識を燃やしていた。

「ヒビク先輩、頑張って優勝勝ち取りましょうね！」

一年F組のヒカルとあかねは響とおなじ紫のハチマキを締めている。

「...俺もいるんだけど」

響の真横にいる柏木がやや拗ねたように呟くのを、田村がまあまあ、となだめるが、

「ヒビク先輩も混合リレーに出るんですってね！」

「まあな」

「あたしトップランナーなんですよお...。混合リレーって体育祭一番の目玉なんですよ？プレッシャーに負けそうですう」

「何だよ、ヒカルらしくねーな？だいじょーぶ！俺がいるんだから！心配すんな！」

周りを無視してまったくふたりだけで会話を進めて行くヒカルと響には、田村も柏木もそしてヒカルの真横にいるあかねも苦笑するしかない。

「俺がいるんだから心配すんなって...、ヒビクのヤツすげえ台詞言ってるぜ...」

半分呆れた田村がぼそっと呟いた。

「ほんとですね...」

あかねも呆気にとられている。

「オレンジも負けちゃいねーぜ」

「優勝はグリーンだから！」

後夜祭のライブでは力を合わせるが、ここは皆敵同士、ということで軽音楽部員たちは互いに火花を散らした。

「群竹くん、そろそろ男子の八百メートル走が始まるから準備に行ってー」

実行委員のヒカルが校庭の隅でまったりしている颯土に集合を促した。八百メートル走は午前中最後の種目だ。

「おお...」

颯土はのっそりと立ち上がると、ハチマキを締めなおして出場者控えの場所にチンタラ歩いていく。

「群竹くん、頑張ってね。応援してるから」

入場門まで行くと、あかねがそこで待っていた。颯土は風になびくあかねの長い髪をチラリと見て無愛想におお、と応えた。

ーその髪...。

五種目ほど前、ムカデ競争に元実行委員全員がひとつのチームになって出場した。颯土はあかねの後ろがポジションだった。スタートは好調で一年F組は先頭を走っていたが、途中から風で

後ろになびいてくるあかねの髪に鼻や顔をくすぐられて颯土のペースが乱れた。いちに、いちに、と声を出すたびにあかねの髪は口に入りそうだったし、痒くてくしゃみは出そうになるし、どうにもこうにもならなくなった時、とうとう掴んでいたあかねの肩から手を放してまとわりついてくる髪を避けたら――。

――俺のせいなのかよ…。

颯土は転倒の責任を取らされ昼休みに皆にアイスを奢らなくてはならなくなった。後のチームが健闘してくれたおかげでF組は一等到着になったが、

「チームワークが売りのあたしたち元実行委員がビリだなんてプライドが許さないの！責任とりなさい、群竹くん！」

と、ヒカルが吼えてそうになった。どうもあかねの髪には振り回される運命にあるらしい。あの時も今日も、あかねが髪をまとめてくれていれば難は逃れたのだ。

――でも…。

柔らかな感触は嫌いじゃない。ほのかに香るフローラルの香りも好きだ。そこは、居心地のいい安堵のスペース……。

「群竹くん、ガンバレー！」

ヒカルの元気なエールに颯土は我に返った。気がつくスタートラインに立つよう、係に促されている。

「群竹くん、頑張っ…！」

あかねの声援が聴こえ、颯土はそっと手を上げて応えた。そして、スタートラインに立つ。

――このままでいいよな。

この状態がいい。ここから先は――。

「赤頑張れ！紫は転ベ―！」

そう大音量で叫んでいるのは田村だった。田村先輩ひどーい、とヒカルとあかねが抗議している。

――冗談じゃない。これ以上転んだらどんだけ奢らされるかわかりやしねえ…。

颯土は気合を入れてスタート。今度は一等でゴールした。

◇

昼休みの応援合戦も終わり、そして体育祭はいよいよクライマックスのクラス対抗リレーに入った。ヒカルと颯土は一Fの選手にエントリーされているし、響は二Fの選手で出場する。一年生から三年生までの男女が交互に走る混合リレーは体育祭のラストプログラムであり一番の目玉だ。

紫のスタートラインに立ったのはヒカルだ。トップの責任は重大だ。このプレッシャーに潰されないように精神を強く保つのに相当な気力がいる。気を抜くと足がガクガクと震えてしまう。

。

「ヒカル～、パン食い競争だと思って走れや～！」

スタートラインに緊張して立つヒカルに対し、控えている響が声援を送った。

「ヒビク先輩…っ」

ヒカルは大きく息を吸った。響の一言で張っている糸が緩んでいく。

「りょーかいっ！」

返事を返したヒカルはいつもの笑顔になっていた。

スタートのピストルが鳴った。同時にいち早くインを取ったのは紫のハチマキだ。

「ヒカルー！」

応援団が一斉に歓声を上げ、

「偉いぞ、ヒカル！そのまま行けっ！」

響の激励が飛ぶ。ヒカルはそのままトップをキープし、第二走者の颯土にバトンをタッチした。そして颯土から第三走者、第四走者とバトンはトップのまま渡され、ランナーは二年生へと移った。

二年生は途中でA組にトップを取られ、次の走者は二年最後のランナー響だ。

「ヒビクせんぱ〜い！挽回お願いしますよ！あ、ゴールにハムカツパンが！」

ヒカルが叫ぶと、

「おっ！んじゃ、あれをゲットしてヒカルにくれてやるからまかしとけ！」

響はスタートラインで答える。ハムカツパン、どこ？と、他の選手たちがぎょろぎょろと見回すのを見てヒカルは、くすっと笑った。

響がバトンを受け取った時点でF組は三位だった。先頭から赤、グリーン、紫とハチマキが泳いでいる。グリーンのハチマキを巻いて走っているのは次郎だ。運動神経は学校一、と謳われている次郎はすぐに赤を抜かしてトップに躍り出た。響も次郎の後ろにピッタリと着いてそのまま赤を追い越す。無駄も隙も無い次郎と幻のハムカツパンを目指す響の勝負になった。ふたりは一定の距離を間にしてトラックを走る。だが、最終コーナー直前から響が次郎を追い上げコーナーを抜けたところでとうとう追い抜いた。

F組の選手一同、そして応援団一同が拍手とともに歓声上げた。

「ハムカツパンゲットっ！」

と、叫びながら響は三年第一走者にバトンを手渡して役目を終え、ヒカルにエアーハムカツパンを投げた。そしてヒカルはそれをしっかりキャッチして笑った。だが、その健闘も空しく三年生のランナーが転倒してしまったのが災いしてF組は三位に終わった。

ーでもいいんだ。ヒビク先輩と心のリレーが出来たから。ハムカツパンゲットしてくれたもん！

ヒカルが最初にとったトップを響は運動神経学校一の次郎から奪還した。それだけでヒカルは大満足だった。結局、体育祭の優勝旗はグリーンのB組が手にし体育祭は終了した。

◇

ヒカルが実行委員として後夜祭の準備を進めていると、

「ヒカル、そろそろステージの準備に入れよ」

と、やって来たのは田村だ。

「ステージの準備？」

「そう。着替えたりなんだりあるんだぜ〜？いひひ」

「なんですか？その笑いは…」

「いいから、ここは誰かに任せてお前はこっちに来いよ！」

田村はヒカルの手を引いて歩き出す。

「ちょっと、田村先輩？」

ステージには普段通りただマラカスを持って上がればいいと思っていたヒカルはわけが分からず、引きずられるようにして田村についていくしかなかった。

「…なんですか、それ…」

音楽室に連れてこられたヒカルは啞然と口を開けた。

「あかねちゃん……ヒビク先輩……」

太郎次郎柏木は白のダンガリーシャツに黒のパンツというラフなスタイルで統一している。それはいいのだが、あかねはまるでピアノの発表会にでも出るような純白のワンピースを着、響はというと、どこから調達したのか、まるでバーのカウンターにいるバーテンダーのような黒服に蝶ネクタイを締めている。いつもノーネクタイの響だからそれがえらく不自然に見えた。

「田村に無理やり着せられた…」

響はかなり抵抗したようで金髪がやや乱れていた。紅白垂れ幕付き盆踊り舞台で黒服衣装というのはどう見ても滑稽だ。チグハグすぎて観客の笑いを誘ってしまう、というのが響の言い分だった。

「……私もヒビク先輩の意見に同感ですう…」

まだ浴衣でも着て演奏した方がしっくり馴染む。

「うるさいの。文句は受付ねえぜ？ヒカル、お前もこれに着替えて！」

あかねと響の衣装を呆然と眺めているヒカルに田村が手渡したのは響と同じ衣装だった。

「ええっ？！」

「今夜は思う存分踊っていいからな。ヒビクのボーカルとヒカルのマラカスを絡ませた舞台演出を考えてやったんだ」

「そんなの聞いてないよ～？！」

「言ってねえもん」

田村はしれっと言い放った。

「どっちにしたってお前はじっとしてないんだから、いっそのことスポットを当ててやろうってことになったんだよ。ヒビクとセットでな！」

舞台の前面に出るのはボーカルの響。マラカスのヒカルは本来ならばバンドの横にいるはずが、マラカスを振りながらチョロチョロとステップを踏むくせがある。そうしないとリズムが取れないというただの音痴なのだが、田村たちにとってみたらこれが悩みの種だった。だったら思い切ってヒカルと響に同じ衣装を着せて、二人を舞台の前面に出し華やかに踊らせようというのが田村が考えた苦肉の策だったのだ。

「早く着替える！」

ヒカルは田村に隣の音楽準備室に押し込められた。仕方なく着替え、音楽室に戻ってくると、
「次はここに来て座れ」

今度は無理やり椅子に座らされ、髪をいじられる。

「ちょっとせんぱ〜い？何するんですか〜？」

田村はヒカルの髪にジェルをベツトリと撫で付けた。

「ひゃあ〜！背中がぞくぞくするー」

「た、田村！生髪を素手で触るんじゃないねえ！耳とかうなじとかも触んな、こら！」

響が田村に抗議した。

「耳とかうなじなんて触ってねえし！ったく...、しょーがねえ。ヒビクが小姑みたくなるせえから...、」

田村は櫛を使い、ヒカルの髪をオールバックにしてまとめてしまった。

「よし！完璧だ！これでどこから見てもカッコイイ少年だぜ！」

田村はヒカルを鏡の前に連れて行った。

「うそ〜！」

髪をオールバックに固められまるで宝塚の男役のような格好をさせられたヒカルがそこに映っていた。

「ヒビクの隣に立ってみろよ」

言われるままにそこに立つと、メンバー一団手をたたく。

「ナイスナイス〜！絵になるぐらいにつり合ってるぜ？これで演出は完璧だな！あとはもう好きなように暴れてくれていいからさ！」

田村は、ほらよ、とヒカルにマラカスを投げた。

校庭には舞台が組み立てられ、その前でキャンプファイヤーの炎が燃え盛っている。その炎を囲み、フォークダンスありカラオケありで後夜祭は大いに盛り上がった。その締めくくりはいよいよ軽音楽部のバンド演奏だ。メンバーが舞台上行くと生徒たちから拍手が沸いた。曲目は皆が知っている洋楽や歌謡曲を主に演奏し、響は歌って踊り、ヒカルはマラカス振って踊り、生徒たちは演奏に合わせて踊り、まるでダンスパーティーのような盛り上がりを見せた。お堅い一部の教師たちはしかめ面をしている。

「こんな馬鹿騒ぎはよくありませんな」

「全くです。軽音楽部もこのバンドをやめない限り廃部ですな」

そんな会話が麻耶や祐輔たちがいる横でされていた。

「そりゃないよな〜。ヒカルちゃんやあかねちゃんがあんなに頑張っているのにさ〜」

勇斗が誰にともなく言う。舞台上立つヒカルもあかねも生き生きしていた。それを取り囲む観衆たちも生き生きしている。

「水沢さんはピアノが上手なんですね〜」

勇斗たちのそばで千田先生が演奏に合わせて手拍子を打っていた。

「それにあそこで踊っているのは浅倉さんでしょう？カッコイイじゃないですか〜」

「千田先生もそう思うでしょ？」

「思いますよ。ふたりとも私のクラスの生徒だなんて鼻が高いですよ」

千田先生はニコニコしながら答え、手拍子を打ちながら少し外れたリズムを取る。

「千田先生は年寄りのわりに話がわかるよな～！どっかのカタブツとは違うや～！」

勇斗がわざと声を大にして叫んだ。するとカタブツたちは勇斗をジロツと睨んでその場から離れて行った。

「年寄りとはなんですか！」

千田先生に抗議されて勇斗は逃げ回る。まるで、コメディ漫画のひとコマのようだ。傍観していた颯土が思わずハッと声に出して笑っていた。

「群竹ちゃ～ん、そんなところでニヤニヤしてないでさ、オイラたちも前に出て踊ってこようぜ～」

勇斗が颯土の手を引っ張った。

「よせ、待てっ！」

めずらしく颯土が声を荒立てた。

「前に出るってまさか」

「舞台に決まってるでしょう！ヒカルちゃんとあかねちゃんを応援してこよう！」

勇斗はそのまま颯土を舞台に連れて行こうと引っ張る。

「やだ！俺はやだ！お前一人で応援でも何でもしろよ！」

舞台に乱入するなんて冗談じゃない！と、颯土は強く抵抗した。演奏はラストナンバーに入っていた。この曲だけは響が作ったオリジナル、バンドのテーマ曲で『光の城』だ。体育祭から引き続いた後夜祭、その最後ということもあってバンドも気合が入っているし、生徒たちも汗を光らせながら演奏を愉しんでいる。

勇斗は颯土を引き連れて舞台の上に踊り出た。すぐに引っ込もうとする颯土の腕を、ヒカルはつかんでとどまらせる。すると響が歌いながらやって来て颯土の肩に手を回した。勇斗はそこで、もうヒカルと同じステップを踏んでいた。

「伊藤くん、私たちも行こう！」

「了解！」

麻耶と祐輔も舞台に走り、ステージには一年F組のいつものメンバーが揃い響の歌に合わせてヒカルと同じステップを踏む。もう颯土もあきらめてそこで一緒に踊りながら、時々あかねに戸惑った視線を送る。あかねはそれが嬉しかった。

――突然乱入してきて一緒にランニングする奴もあまりいないけれど、演奏中のステージに乱入して一緒に踊り出す奴はもっといないだろうな…。

弾ける仲間たちとやや冷めた自分を冷静に分析する颯土。

――嬉しいっ！

汗の粒を飛び散らせながらヒカルはかみしめた。この素晴らしく楽しい仲間に出会えたこと。そして、響と同じステージに立っていること。自分にこんな時間を与えてくれた全てのものに感謝したい。

でも――。

響に視線を送ると小さなガッツポーズが返って来た。

——この学校に来て、ここで、この時に、ヒビク先輩に出会えたことが一番嬉しい！！
ヒカルはとびっきりの笑顔を響に返した。

ジョイントライブで意気投合した軽音楽部と一年F組のメンバーは、駅前のビリヤード場で打ち上げをやるということになった。ライブや実行委員の片付けを終えた一同が下校できたのはほとんど最後で当然辺りはもう闇。そろそろ校舎の電気も消されてしまうからと急いで校門を出ようとした時だ。

「浅倉、ちょっと...」

校門の陰からスッと姿を現しヒカルを呼び止めたのは一希だった。

「黒田くん、どうしたの？」

「話があるんだ」

響や勇斗たちは一希に注目した。一希も響たちをぐるりと見回す。

「話って？」

「.....ここじゃ言えないよ。ちょっと来てくれないか？」

一希はヒカルを再び校門の中に引っ張って行く。

「お、おい...」

響がためらいがちに一步を出した時には、ヒカルと黒田は校舎の中に吸い込まれていた。

「行っちゃったよ...」

勇斗が校舎を振り返ると、祐輔や麻耶たちもふたりが消えた昇降口を無言で見つめた。

「黒田くん、なんか変じゃなかった？」

「そうかな？」

こんな遅い時間まで校門で待ち伏せ、ヒカルだけを校舎の中に連れて行くというのは普通じゃないだろう、と颯土は思うが口には出さず、代わりに響を見た。響は口を固く結び校舎を凝視している。

「どうする？先に行く？」

一希の様子は気になるが、かといって皆でぞろぞろついていくわけにもいかない。この人数が狭い歩道で待っているというのも変だ

——あいつは確か黒田...

響の胸は騒いだ。校内にはもう生徒は残っていないはずだ。静まり返った校舎の中でヒカルが男と二人でいるというのは面白くない。カッコ悪いけれど自分はここで待つか...、と思った時だった。

「私、ここでヒカルちゃんを待ってる」

このままヒカルを置いて先に行くなんて出来ないから、とあかねは言った。

「じゃあ僕たちは先に行ってようよ」

「そうだね。黒田がヒカルちゃんに何の用かなんて考えて待っててもしょうがないしなあ」

祐輔も勇斗も気にはなっているが、とりあえずどうすることも出来ない。

「あかねが待つなら...、」

私も...、と麻耶が言いかけたとき、

「...俺もここで待つから」

颯士が気まずそうに、それでもスッとあかねの横に立った。あかねはやや驚いて颯士を見上げ、すぐに恥ずかしそうに俯いた。一瞬、皆が沈黙した。

「.....あれ？お前たちってそーゆーの？」

「風間先輩、ヤボですよ、ヤボ」

勇斗が響の目の前でやる気なさげに手を振ってみせた。

「そーゆーのなんです、このふたり」

麻耶は単調に肯定したが、あかねと颯士は否定も肯定もせず俯いていたり目を泳がせたりしているだけだ。

「ふ〜ん、あかねが群竹とね〜。それじゃ俺はロストラブじゃん...」

もうよしよしも出来ないのか...、という響の無意味なおちゃらけを、

「何、心にもないことを言ってるんですか、先輩！素直じゃないんですね！」

あかねがまるでヒカルのような口調でぴしゃりと斬った。

「うっ...」

詰まった響は次の言葉を見失い、しばらく放心していたが、

「と、とにかく...、俺たちは先に行っているから、おまえらはあとでヒカルを連れて来てくれよ」

さっさと先を歩き出した。

「ちょっと待てヒビク。お前、待ってなくていいのかっ？」

「...あかねたちがいるんだからいいだろ？子どもじゃないんだし...」

響は無関心を装いさらに先に行く。

「ったく...、素直じゃねえな...」

田村は響の背中に向かってつぶやき、小さなため息をもらした。

◇

一希はヒカルの手を引いて校舎の中をズンズン歩いていく。もうその先の明りは消えていて薄暗い非常灯だけがぼんやりと青白く光っていた。

「ちょっと、どこまで行けばいいのよ」

ヒカルは強引に立ち止まった。

「あ、ああ、そうだよな...」

考えなしに歩いていた一希も我に返って立ち止まった。

「で、話って何？」

ヒカルは一希の顔をマジマジと見つめた。

「そ、そんな顔をして見つめんじゃねえよ」

「じゃあ、どんな顔をしていればいいのよ」

「普通にしろよ、普通に」

「これが普通だよお。何か変だよ黒田くん」

変、という言葉の口にしてヒカルは気が付いた。そういえば、ここのところの一希は様子が

変だったのだ。

「黒田くん...、何かあったの？」

くっ、と声にならない声を発し、一希はヒカルに背を向けた。

「黒田くん？」

「浅倉...、俺さ、学校やめるんだ...」

背中を向けたままの一希の声はくぐもって聴こえた。ヒカルは一瞬耳を疑ったが、確かに一希は学校を辞めると言った。

「どうして...？」

あまりにも驚きすぎて聞き返した言葉は淡々としていた。だから、

「もっと驚けよ！」

と、一希に反応の不満をぶつけられた。

「全く、調子狂う女だなあ...」

「だから...何で？」

ヒカルは一希を見つめる。その目は少しも揺るがずに真っ直ぐに一希を見ていた。

「.....うちはさあ、母子家庭なんだ。俺、呑気に高校生やってる場合じゃないんだよ、本当は...」

「じゃあ、どうして高校に来たの？」

「それは、母ちゃんが行けって言ったからだけど...、俺は母ちゃんの苦労なんかちっとも分かってなくてさ...。見たくないものは見ないようにしてたから。そんで学校にも母ちゃんにも反発してたんだからどうしようもないガキだったんだよな。けど、最近になって分かって来たんだ。母ちゃん...こないだ倒れてさ...。こんなバカ息子だから気苦労が絶えないってのも原因で...。そしたら、俺はやっぱり母ちゃん助けて働かないって思えてさ...」

「黒田くん...」

――ここにも一人、重たい荷物を背負っている人がいた...。

ヒカルは固く目を閉じた。握った手が震える。

「――夏休み前ぐらいから考えてたんだ」

「黒田くんはそれでいいの？学校やめてそれでいいの？」

一希は一瞬考えた。本当の所はまだ迷っている。今日決めよう、明日決めようと思いながらまだ学校には言っていない。新学期に来てしまったら、ヒカルの顔を見てしまったら決められないと思ったから、もう来ないつもりでいた。だが、電話をかけて来た千田先生の「浅倉さんも心配してましたよ」のひとことに負けてしまった――。

「奨学金とか色々あるんだよ？もっとよく考えて千田先生にも相談すればいい方法があるかもしれないよ！」

ヒカルは目に涙をためて一希の両腕をつかんで精一杯訴えた。なんとかいい方法がないか、その頭の中にたくさんのことを巡らしているのが一希には分かった。もう、それだけで十分だった。たった今、迷いがふっきた――。

「いや、いいんだ。今まで親不孝してきて分、働いて返してやんないとな。サンキュー、浅倉。」

やっぱりお前に話してよかったぜ」

「何で！何でよかったのよ！あたしはイヤだよ！あんたの一大事なのに何もしてあげられないよ！」

一希の腕を揺さぶりながらヒカルの瞳からは涙がぼろぼろとこぼれる。人の苦労話を聞いたところでそいつの荷物は背負ってやれない、と、いつか颯土に言われた。確かにそうだ。今がそうだ。話してもらって嬉しいなんて言っていられない。何とかしたい、してあげたい。けれど、結局何も出来ない。どうすることも出来ない。ここに話を聞いてあげる自分がいるだけじゃダメなのだ。そんなのは颯土が言ったとおり綺麗事だった。

——甘いよ、ほんと甘い！こんなのってない！こんなのはイヤだ！

「お前さ、いつか俺に言ったよな。いいヤツだって。全然なんだぜ？中学の時はどうしようもない暴れん坊でさ、母ちゃんはいつも学校に呼び出されて謝ってばかりで泣かせてばかり…。口には出来ない悪いこともひと通りやったしさ、いいヤツなんて嘘だ」

「何言ってるのよ！あんたはいいヤツだよ！お母さん助けようって、学校辞めて働こうって思ってるあんたがいいヤツじゃないはずないでしょ！」

ヒカルは一希の腕をつかんだまま下を向いて泣いている。

「浅倉…」

一希の手が一瞬だけためらったが、次の瞬間にはその迷いを振り切ったようにヒカルを力いっぱい抱きしめていた。

「黒田く…？！」

「俺のために泣いてくれるのは母ちゃんとお前だけだ…。俺のこと気になるって言ってくれたのはお前だけ…っ！」

向こうに灯っていた明りが消えた。ふたりの周りは闇に包まれ、微かな青白い光だけでは互いの顔もよく見えない。

「好きだよ、浅倉…」

「黒田…くん」

「言わないつもりだった。けど、今言わないと後になってもう言えねえもんな…。それはもったいない…だろ？」

抱きしめられているから一希の顔は見えない。声だけが振動とともに胸から響いてくる。

「好きだ。おまえが」

ヒカルは涙が止まらない——。

「いいんだぜ、何も答えなくて。ただ、もうちょっとだけこうしててもいいだろ？」

「ごめん、放して…」

一希はうなずいた。それでもヒカルを放そうとはせず腕にはますます力が入る。ほとんど真っ暗な校舎の中で自分を抱きしめる一希に、ヒカルは突然恐怖を感じた。

「お願い、放して！」

ヒカルは叫んだ。

「…ごめん、悪かった」

ヒカルの声に驚いた一希は素直に謝りやっとなヒカルを放した。

「あたし、好きな人がいるの…。だから…」

ヒカルの声が震える。ここにいる一希は男だ。今までは喧嘩仲間で一希に男を意識したことはなかった。だが、今は違う。一希は自分のことが好きで、今、自分は暗闇の中で男の一希と二人きり。

怖い――。

「わかった。いいよ、いい…。でも…！」

一希はもう一度ヒカルを抱き寄せキスをした。両手を空に泳がせ、ヒカルの頭は真っ白になった。だが一瞬後にヒカルは我に返り、一希を突き放した。

「く、黒田くんっ…！」

ヒカルは唇を押さえて啞然とする。

「へへっ！浅倉ヒカルのファーストキスは俺様がいただきますだぜ。お前の好きな野郎にはやらねえよ！」

「くろっ…！」

ヒカルは一希に手を上げる。その手首を一希はすかさず掴み、

「おっと！ケチケチすんなって！じゃあな！」

そう言って廊下を走って行った。

ヒカルは唇を押さえたままその場に力なく座り込んだ。自然に涙があふれてくる。一希のことは好きだ。大切な仲間だった。けれど、

――こんなのひどいよ…！

ケチケチするななんて、そんな簡単には言わないで欲しかった。初めてのキスの相手は――。

――あたし、傷ついている…。

ヒカルは顔を覆った。立ち上がることが出来なかった。

「ヒカルちゃん、どこ？」

暗闇の中からあかねの声がした。

「あかねちゃん…？」

あかねは颯土とともにヒカルのもとにかけ寄ってきた。

「よかった！さっき黒田くんが出て行って…、泣いているみたいだったから何かあったのかと心配で…」

「黒田くんが泣いていた…の？」

ヒカルは呆然となった。

「…どうして――？」

――怖いと思ったから…？一瞬でも信じられなかったから…？

一希が自分を想ってくれていることよりも、恐怖の方からかれて突き放したから――。傷ついたのは一希も同じだったと、一希の心を思い、ヒカルはまた涙があふれた。

「とにかく早く校舎を出よう。鍵かけられたらアウトだぜ」

颯土が冷静に言う。三人は足元もよく見えない暗闇の廊下を昇降口へと向かって歩き出した。

校門の外に出ると、街灯と行き交う車のライトに照らされた夜の空間がそこにあった。

「みんな先に行ったから」

あかねはヒカルの顔を見て息を呑んだ。

「ヒカルちゃん...?!」

ヒカルが泣いている。どんな時でもしっかりしていて元気で今まで涙なんか見せたことのないヒカルが、とめどなくあふれる涙を拭おうともしないでいる。

「浅倉...っ？」

颯土も絶句した。

「ヒカルちゃん、何かあったの？黒田くんの用事は何だったの?!」

あかねはヒカルに詰め寄った。

「...ごめんね。あたし、今日は帰る...っ！」

ヒカルはただ首を横に振り、駆け出した。

「ヒカルちゃん、待って！」

追いかけようとするあかねの腕をつかんで颯土は止めた。

「群竹くん！」

「やめろよ」

「だって...！ヒカルちゃんが泣いてたんだよ！あんなに悲しそうに泣いてたんだよっ！」

「追いかけて何が出来るんだ？」

颯土に言われてあかねはハッとした。

何も出来ない――。

「でも...っ」

本当に何も出来ないのだろうか。そうだとすると、ただ傍にいてあげれば良かったのではないだろうか。

「.....やっぱり追いかければよかった」

「水沢...」

「友達なんだもん...。何も出来なくても、何も話してくれなくても、一緒にいてあげたかった...」

――友達...。またそれか.....。

颯土はうんざりとため息を吐く。だが――。

「...そうか。止めて悪かったな...」

「群竹くん...」

「...けど友達なら、本当に友達なんだったらいずれあいつの方から話してくるんじゃないか？」

――話すだけで軽くなる、と言っていたもんな...。

「うん...」

「行こう」

あかねは颯土の後ろ姿をしばらく呆然と見つめていた。

「どうしたんだよ？」

颯土はまだ校門の前に立ちつくすあかねを振り返る。

「ううん、なんでもない...」

あかねは答えて颯土の元に駆けてきた。そして、一歩後ろをしょんぼりと歩いてくる。

「お前が落ち込んでもしょうがないだろ？」

「うん...」

やれやれ、と颯土は思う。だが――。

ヒカルを思うあかねの心こそ自分が忘れかけてしまっている感情...、

――友情...ってヤツなんだろう...。

颯土は歩調を緩め、あかねに並んで歩いた。

一希は本城高校を去って行った。まるで何事もなかったかのようにヒカルに笑いかけ、`またな！、と手を上げて――。

◇

「浅倉さんを推薦します！」

「男子は群竹くんがいいで一す！」

というクラスメートたちの推薦によって、文化祭実行委員はスペシャリストのヒカルとどういうわけかの颯土に決まった。

「よろしくね、群竹くん」

にっこりと笑うヒカルに、

「何で俺?!」

鳩が豆鉄砲を食らったような顔を返した颯土だ。

「それじゃさっそく、我が一年F組の出し物を決めたいと思いまーす！」

ヒカルは元気よく指揮を執った。

――ヒカルちゃん…。

体育祭の夜から塞いでいるのはあかねの方だ。翌日のヒカルはもういつもと変わらない笑顔を見せ、前日の涙はまるで夢だったような振る舞いだった。一希は体育祭のあと、三日も経たないうちに学校を辞めてしまったし、あの時になにがあったのかヒカルは何も言わない。ただ元気にハツラツと笑いながら演劇部の練習にも出て、自分や麻耶と一緒にオレンジパフェを食べに行き、今また文化祭の実行委員も引き受けて。ヒカルが話してくれないことが悲しいわけじゃない。悲しくないと言ったらそれは嘘だが、それよりも、ヒカルが一番そばにいる友達で、ヒカルはいつも自分の支えになってくれるのに自分にはそれが出来ないことが悲しい。

――やっぱり追いかければよかった…。

颯土がどう言おうと、あの時追いかけていればよかった。ホームルーム合宿の時、消えてしまいたいと泣いている自分の傍にヒカルはずっといてくれた。ただ、それだけで心のおもりが軽くなった。何も言わなくても、何を話せなくても傍についていてあげればよかった…と、それが出来なかったあかねは後悔でいっぱいだ。

「あかねちゃん、どうした？元気ないよ？」

ぼんやりしているあかねにヒカルが声をかけた。

「……なんでもないよ」

あかねは席を立ち、そのままヒカルを残して廊下に出た。ヒカルの力になりたいと思っているのにヒカルに心配かけている自分が情けない。

「はあ……」

「はあ……」

思わずため息を吐いたとき、同時に同じようなため息がすぐ近くで聞こえてあかねはそちらに顔を向けた。颯土が自分のロッカーから胴着を出し、開いたままの扉に手を置いて首を垂れて

いた。

「群竹くん？」

「あ」

あかねに気がついた颯土はパタンとロッカーを閉めた。

「どうしたの？ため息が聞こえたけど...」

「どうしたもこうしたも.....」

「あ。実行委員？」

「何で俺なんだ？伊藤とか大久保とか得意そうなヤツはいるだろう...」

「...頼りがいがあるんだよ、きっと」

あかねはふんわりと笑った。颯土は無愛想だがやるべきことはキッチリやる。ホームルーム合宿の時もそうだったし授業やクラスの中でもそうだ。人に気を使わない分ここぞという時は直球を投げるから、決断力が必要な実行委員などの仕事には案外向いているのかもしれない。

「そんなに嫌がらないで、ヒカルちゃんを助けてあげて...」

「あいつに助けなんか必要か？」

うん、とあかねは頷いた。

「ヒカルちゃんの笑顔、今までと全然違うから.....」

「.....笑顔...？」

颯土は教室のドアからヒカルを見る。勇斗と麻耶と楽しそうに声をあげて笑っているヒカルがそこにいた。

◇

「誰だよ、コーラス外してるやつ！」

いつになくイライラとした調子で響がバンドの演奏を止めた。

「俺じゃねえぜ？」

「俺でもねえよ？」

双子が注目したのは田村だ。

「俺かも.....。すまん...」

あっさり認めた田村が申し訳なさそうに響を見た。リードギター担当でもともと歌が得意でない田村は、ギターの演奏に夢中になるとよく音程を外す。

「頼む田村！ギターだけ弾いててくれ！」

「ハモリは俺たちに任せろっ！」

「ひたすらギターに徹してろ！」

双子が響の顔色を伺いながら田村に懇願した。放課後の音楽室。響たちは文化祭に向けての練習に励んでいる、のだが――。

体育祭の後から響の機嫌がよくない。音が少し外れたと言っては演奏を中断させたり、自分がおもいきり歌詞を間違えて中断したりで練習は思ったようにはかどらない。田村たちに当ってしまっていることは重々承知している響だが、暴走する気分を止めることが出来ないでいる。

後夜祭が終わったあの夜、とうとうヒカルはビリヤード場に来なかった。後から来たあかねと

颯土の様子もおかしくて、そんなふたりに事情を訊ねたら――。

『ヒカルちゃんと黒田くん、何かあったみたいで…。ヒカルちゃん泣いて帰っちゃって…』

血の気がサーッと引いていった。カッコつけてヒカルを待たなかったことを後悔した。暗闇の校舎の中でふたりに何があったのか、ヒカルが泣くほどの何があったのか、想像もしたくないがこれまで何度か遭遇した黒田がヒカルに好意を持っていたことなど見ただけで分かっていたのだから――。

――どうしてあの時後を追わなかった…っ！

ヒカルが黒田に校舎に連れて行かれたとき、一步を出すのに躊躇した自分に怒りが込み上げる。あの時、ためらわずにすぐに一步を出していたら、ヒカルの腕を捕まえることが出来たのに……。ふつふつと湧き上がる怒りをどこへぶつけたらいいのか、黒田が学校を去ってしまった今となっては感情の行き場が無い。だからといって、田村たちに当るのは筋違いなのだから――。

「風間くん、少し休憩したら？」

眉間に皺を寄せている響に柏木が言った。

「いや…いい。悪い…」

響は自分の態度を詫び、練習が再開された。が、やはり歌声に張りは戻って来ない。

「……やっぱちょっと休憩」

響は歌を途中で止め、音楽室を出て行く。

「風間、最近どうしたの？」

「…さあな。アレの日かぁ？」

呑気な双子は首をかしげるが、田村は響の背中を見送りながらその心情を慮っていた。

部舎から渡り廊下に出たヒカルは、校舎の方から歩いてくる響を見かけて思わず足を止めた。響は花壇で足を止め咲き始めたばかりの秋桜をぼんやりと見つめている。秋風が響の金色の前髪と秋桜をサラサラと揺らしていた。

――ヒビク先輩…。

響に会うと胸が痛い。制服が夏服から衣替えをした今、オレンジのシャツはブレザーの下に隠れているが、夏から響と交わしてきた色々な言葉がオレンジのイメージと一緒に次々に浮かび上がって来た。

恋をしている自分に気がついて、響と一緒にいられることが嬉しくて、幻のハムカツパンを受け取って、飛び跳ねて、マラカス振ったあの日だったのに――。

――黒田くんを傷つけた…。でも、あたしも傷ついた……。

響を想う気持ちと心の傷が重なってしまう。もう、戻れないのにいつまでもそこに拘ってくよくよしてしまう。

響が好きだから。好きな人が目の前にいるから余計に。綺麗事を並べるだけで何も出来なかったことも一希の想いを踏みにじったことも棚に上げて、一希にキスされたことに傷ついている。それを自覚したくないから、もがいて無駄に笑っている。今はただ流されたい。衣装作りや演劇

や実行委員の仕事に駆けずり回りながら忙しさに身を委ねたい。それがトンネルの出口に続く一本の道なのだと信じて――。

「...ヒビク先輩！」

ヒカルは笑顔を作り花壇の前に駆け寄った。

「よお、ヒカル...」

たった今、頭の中にいた人が突然目の前に現われて響はやや戸惑いがちに右手を上げた。渡り廊下から元気に走って来たヒカルは、儚い秋桜の前でひまわりのような笑顔を輝かせているが、それが余計に胸の痛みを連れてくる。

「どうしたんですか？こんなところでぼーっとして！あれ？軽音楽部の練習は？」

「.....今、ちょっと休憩中。ヒカルは何やってんだ？」

「部室の小夜子先輩に部活に出るのちょっと遅れるって言って来たんです。私、文化祭の実行委員になっちゃったから、これから群竹くんとちょっと話し合わなきゃいけないことがあって」

「群竹？あいつが実行委員なのか？」

「本人はすごーくイヤがってますけど、クラスみんなの推薦だから仕方なく...」

ふふ、とヒカルは笑う。

「んじゃ、また忙しくなるんだなお前」

「そうですね」

ふう、と響は小さなため息をひとつ吐いた。

「...なんで...そうひとりで色々抱えるんだ？」

「え？ひとりじゃないですよ？群竹くんがいるし...」

「そうじゃなくて...、」

響は言いよどんだ。何をどう言ったらいいのか分からない。ただ――、

「あれー？ヒカルちゃんじゃない？こんなところで何してるの？」

ヒカルに声をかけてきたのは空手部の主将で二年の奥田だった。湖畔のランニング乱入以来、ヒカルと空手部には妙な関わりが出来て、勇斗や颯土を通さなくても奥田や他の部員たちが気軽に声をかけてくるようになっていた。

「ヒビク先輩とお話してたんですよ！」

ふーん...、と奥田は響を見、響は奥田に剣呑な目を向ける。

「また一緒にランニングしような、ヒカルちゃん」

「はい、喜んで！」

奥田はそのまま格技場の方へと向かい、その代わりにまた別の通りかかった友人がヒカルに声をかけてきた。快活に笑いはしゃぎ、いつもと変わらない振る舞いをするヒカル。だが、

――...無理してんだろ...。

ひとりで。何かから抜け出そうともがいているからテンションを上げてはしゃぐ。でも、それは自然なそれとは違う。いつもヒカルを見つめているから、今、ヒカルが苦しんでいることがよくわかる。

――俺はどうすればいい…。

ヒカルにどう関わればいい。ただただ、もうヒカルを傷つけたくはない。傷つけさせたくない。今すぐここから連れ出して抱きしめたいけれど――。

「それじゃ先輩、私行きますね！」

友人たちに囲まれたヒカルはもう校舎に向かって歩き出していた。

「お、おお…」

「来週ぐらいから軽音楽部と合同で練習したいって、さっき小夜子先輩が言ってました！いよいよですね！」

「そうだな…」

「それじゃ、また！」

ヒカルをここから連れ出して行ったのは友人たちだった。

――やっぱりあの時、追いかければよかったんだ…。

今となってはもう遅い。響は今、後悔の海に沈むしかなかった。

宿題の数学問題は、ただプリントと睨めっこしているだけのヒカルだ。問題がサッパリ分らないということもあるが、頭の中でこだましているのは、なんで、そうひとりで色々抱えるんだ？と言った、響の言葉だった。

響が外面的なことを言ったのではないことぐらい分かっていた。だが、本当の意味で答えることは出来なかった。

——だって...、言えないもん...。話せないよ...。

言えないから抱えてしまう。自分でも分かっているのに——。

ヒカルはため息を吐いた。もう夜だからいくら吐いてもかまわない。心の中に溜まっているよどみを全部ため息と共に吐き出して、また明日から笑おう。気を取り直してプリントに戻ってみたけれど、

「.....これはいったい何語で書いてあるんだろう...」

日本語じゃないことだけは確かだ。

「やっぱり英語なんかな？」

XやYやZが並んでいるプリントは解読不可能な文字の羅列だ。だから再びため息と共に気分が沈んでしまう。苦しい。胸が潰れてしまいそうだ。

「うう...」

涙と共に嗚咽が漏れる。話せないのに話したい。誰かに、頼りたい——。

ふと、机の上の消しゴムが目に残り、思わず握り締めていた。カーテンをそっと開いてみると、向かい側の窓にもまだ灯りがついている。考える前にヒカルは窓を開け、消しゴムを投げていた。しばらくしてから向かい側の窓が開いた。

「...なんだよ」

颯土があからさまに迷惑そうな顔をしてそこに立っている。ヒカルはそんな颯土に対し、こんな時はもっと優しい微笑みが欲しいのだけど...と都合のいいことを思ったが相手は颯土だし無謀な望みはすぐに沈めた。

「せっかく同じ実行委員になったんだし、仲良くなろうぜ祭りを開催しようと思って」

は？と颯土は呆けた。

「こうゆうの幼馴染みたいで良くない？窓からおーいってさ。困ったこととがあった時、ヘルプ〜って.....」

何を言っているのだろう...、とヒカルは自分で思った。颯土はさっき自分が吐いたよりももっと深いため息を出して、今にも窓を閉めてしまいそうだ。

「はは...。ごめんごめん。ちょっと暇だったもんだから！」

笑顔で言ってみるが不機嫌な颯土の顔を見て余計に落ち込む。もう、底まで落ちていく。

仲良くなろうぜ祭りだなんて変な祭りを勝手に開催され、颯土はため息が出た。そのまま窓を閉めようとしたが、ヒカルの口から出てくる、困ったこと、ヘルプ、という言葉がやけに耳

に残って思いとどまっていた。あかねに、ヒカルを助けてあげてと言われたからかもしれないが、向かい側の窓辺に立つヒカルは確かにいつもとは少し様子が違う。母親がヒカルを『浅倉さんちのひまわりちゃん』と呼び、まったくそのとおり、と密かに思っていたが、今のヒカルは違う。

「...何に困ってんだよ」

ぶっきらぼうに颯土は言った。顔は不機嫌なままの颯土だが、今言葉を返してくれてヒカルは少し救われた思いがした。

「困っていることといえば、これ！」

答えをひとつも書いてない数学のプリントをひらりと空に泳がせ、ヒカルはニマッと笑った。

「群竹くん、数学得意だったよね？ 答え教えて～」

答えかよ、と颯土は憮然とした。

「だって...、やり方聞いたところでどうせ分からないもん」

「少しは努力しろよ」

「したよ。帰って来てからずーっと睨めっこしていたんだから」

嘘ではない。ただ、目で問題をぼんやり見ていただけだが...

しょうがねえな...、と呟いて、颯土は自分のプリントを折りはじめた。ヒカルはポカンとしてその様子を見守っていたが、

「いくぞ」

という声と同時に部屋の中に紙飛行機に変身した数学のプリントが飛んで来た時は感動に目を輝かせた。

「凄いよ、群竹くん！」

「なにが...」

「プリントが飛んできたよ！」

「飛ばしたんだよ.....。いいから、さっさと写せ」

飛行機を丁寧に開いたヒカルは、完璧に仕上げてある颯土のプリントにまた感動した。

「あああ...、いいなあ。嬉しいなあ～。仲良くなろうぜ祭りは大成功だわ...」

ひとり感激をしながらヒカルはその場で颯土のプリントを写す。颯土は思わず吹き出した。

――仲良くなろうぜ祭り.....ね。

そのまんまの、変な名前の祭りだ。それでも、向かい側の窓の奥からカリカリとプリントを写す音が聴こえてきて、自分のどこかがくすぐったい。よく分からないが、やっぱりヒカルはナチュラルに笑っているのがいい、と颯土は思った。

「ありがとう！ 助かったよーっ」

ヒカルは折り目にそって再現した紙飛行機を颯土の部屋の中に飛ばし返した。

「じゃ、閉めるぜ」

颯土は手短かに言って窓を閉めた。

――ありがとう、群竹くん...。

さっきよりずっと心が軽くなっていた。それは、数学のプリントが片付いたからではなく――

。

仲良くなろうぜ祭り、これからもたまに開催していいかな...、とヒカルはもう閉められた向かい側の窓に向かって呟いた。

「ヒカル、相変わらず跳ねてるなあ」

休み時間、購買部人気ナンバーワン商品ハムカツパンの争奪戦に奮闘しているヒカルの頭を響はコン、とつついた。

「あ、ヒビク先輩！」

ヒカルは振り向いて響を見上げつつも、その場からは動かず改めて激戦地に赴いていく。

「これで挑戦何回目だ？」

「えっと...、十七戦で十六敗ですー」

あらら...、と響。

「でも今日はお弁当を持ってくるの忘れちゃったからどうしてもゲットしておかないと、お昼休みに食べるものがないんです」

「そうか...。んじゃ、俺にまかせろ！」

誰よりも背の高い響は、長い腕をひょいと前に伸ばしてヒカルにとっては彼方にあったパンをしっかりとつかんだ。

「ほらよ。幻じゃない、本物のハムカツパンだぜ？」

ヒカルの手の上にポン、とパンを乗せて響は笑った。

「やった！ヒビク先輩ありがとう！」

ヒカルは文字通り飛び跳ねた。これでお昼にひもじい思いをしなくてすむ、と快活に喋りながらヒカルはレジのおばちゃんにパンの代金を支払う。その間に響は自分の分も無事にゲットし、ふたり揃って人山の外に出たときは、響もヒカルもややよれよれになっていた。

「これに参戦するといつもリボンがほどけちゃう.....」

ヒカルの首元で制服のリボンが見るも無残に垂れ下がっていた。ヒカルは買ったパンを響に預け、リボンを結びなおす。あどけない指が不器用に動く仕草を見つめていた響の胸に、突然、言い知れぬ愛しさが突き上げて来た。

——こいつは誰にも...っ、

「ヒカルッ」

響は思わず大声でヒカルの名を呼んだ。ヒカルの手がびくっと跳ねて止まり、そのまま響を見上げる。

「はい？」

——ためている想い...、今こいつに...、

予鈴が鳴った——。

途中だったリボンをしっかり結び終えたヒカルに、響は預かっていたパンを戻して言った。

「.....昼、一緒にランチしようぜ？屋上でさ」

「え...？はい！」

「じゃ、待ってるから来いよ？」

響はヒカルの頭にぽふんと手を置いてから購買部を出た。そして教室までの廊下を歩きながら

、自分がヒカルにどう関わればいいのかの答えを見つけていた。

◇

「えっ、今日の放課後までなの？」

「.....そう聞いた」

クラスが文化祭で行う催しを書く白紙の企画書を実行委員が預かったのはつい昨日だった。それを今日の放課後までに仕上げて提出するようと、颯土が聞いてきたらしい。今はもう四時間目の授業が始まっている。放課後までに十分な時間がない。

「昼休みにやるしかない...だろ」

「うう...、昼休み」

響と屋上でランチをする約束を今して来たばかりだ。一年F組の催しは、ウォークラリーの罰ゲームとしてやった『なにわ口ミオとジュリエット』を寸劇ではなくちゃんとした劇に改訂して行うことに決まっていた。企画書にはその内容と所要時間、使用会場、決まっている配役などを詳しく書き込むことになっている。

「.....書いといて一なんて言ったら怒るよね」

「怒る」

「うう...。ひとことで斬られた...」

「当然」

ヒカルは、冷たいな一群竹くん、とぼやきはしたが、たとえ颯土が怒らなかったとしても、颯土ひとりに企画書を任せたら部活紹介のミニ冊子で自分の名前しか書かなかった軽音楽部長と同じぐらいに簡素化してしまいそうだ。

「しょうがない...。私が書くよ」

「手伝わなくていいのか？」

「昼休み、ちょっと約束があるの...。持って行って書くよ...」

ランチしながら書くしかない。書き終わらなければ午後の授業を潰すしかない。

「.....じゃ、よろしく」

颯土は助かった、と言わんばかりに安堵の息を吐いた。

「この間数学のプリント見せてもらったしね。これぐらいやるわよ」

そうか、と颯土は笑った。ところでふたりの席は教室のド真ん中。教壇からも周りの生徒たちからも目立つ位置に隣同士に並んでいる。当然、そのふたり、いつまで喋ってるんだ！と先生に叱られてヒカルと颯土は同時に首をすくめた。

そして、颯土の前の席であかねがふたりの会話をずっと聞いていた。颯土がだんだんヒカルに心を開いているのが分かる。家も席も隣なのだから当然――。そう思っている。

――ヒカルちゃんも、少し元気になったみたい...。

元気というのは本当の意味での元気だ。明るくて眩しくて、憧れてしまうほどの――。

ほんの少しだけせつない。ヒカルを見る颯土の目の中に、自分がヒカルに抱く同じものがあるから。それでも、ヒカルに本当の笑顔が戻ってくることと、颯土が少しずつでも皆と近くなることの方が嬉しいから。

——だから群竹くん、ヒカルちゃんを助けてあげて。

自分には出来ないから、とあかねは心の中で呟いた。

そして、昼休み——。ヒカルが屋上へと続く階段を上っていると、
「ヒカルッ！」

下から響が駆け上ってきた。

「約束ってのはなんだかドキドキするな！」

豪快にヒカルの背中を叩く響だが、その言葉にヒカルはドキドキしてしまう。

屋上には誰もいなかった。昼休みに校庭や中庭で昼食を摂る生徒はわりといるが、屋上は車の騒音が激しいうえに風当たりも強いのであまり人気のスポットではない。だが、今日は暖かく穏やかな屋下がりだ。響は屋上のフェンスにもたれかかるようにして座った。ヒカルも同じようにしてその隣に座る。

「ここは俺の特等席」

「ヒビク先輩、いつもここでランチなんですか？」

「天気の良い日はだいたいね。いつもは田村を誘うんだけど」

田村先輩と仲いいですね、とヒカルは今さらのようなことを言った。響が言った約束という言葉にまだ胸がときめいていて、隣に座ったものの何を話していいのか分からない。今まで、チャウチャウだとか国宝級音痴だとか言われてさんざん言い合ってきたのに、それももう遠い昔のような気がする。だが、ときめく気持ちに重なるように、突然にまた心の傷が浮かび上がった。ふいに、唇に一希の感触を思い出し、思わずヒカルは固く目を閉じて首を振る。

「どうした？」

「いえ、なんでもないです…」

ヒカルはさっき響に取ってもらったハムカツパンのビニール袋を開けた。手が微かに震えた。

——ヒカル…。

やっぱりヒカルは苦悩を抱えている。震える手、ふいにうつむいた顔、それはこれまでのヒカルではない。パンをただ手にしているだけで呆っとしているヒカルを見つめる響は、

「ほらほら、ちゃんと食えよ」

ヒカルの手からパンを取り袋から出して手渡した。

「ああ…そうですね！せっかく先輩がゲットしてくれたんだから…」

ヒカルはパンを口に運んだ。

「ハムカツパン食べられたの、まだ三回目なんですよ？私、どれだけ負けているんだろう…」

俺は全戦全勝だけだなあ…、と響も自分のパンにかじりつく。

「そういう人がいるから私が買えないんですっ」

「あはは、そうかもな！」

「でも、ハムカツパン美味しいですよー」

ヒカルはパンにパクッと噛みつきにっこり笑った。この世の中でハムカツパンが一番美味しいと言わんばかりの笑顔だ。秋の穏やかな風が、そんなヒカルの髪をサラサラ揺らす。

——このヒカルが、アイツに、黒田にもしも傷つけられたのだとしたら…。

忘れることの出来ない怒りと悔いが、再び響の胸を突き上げた。今、ヒカルの苦悩を消すために自分がどう関わるか、その答えは、

——俺がこいつを守ればいい。こいつを俺のものに…、つきあっちゃえばいいんだ。

もう二度と、誰にも傷つけられないように抱きしめてしまえばいい——。

「ヒカル…、俺…、」

響はいつになく真面目な顔をしてヒカルを見つめた。

「なんですか？」

ヒカルは屈託のない笑顔を響に向けてから、あ、そうだ…と、思い出しバックの中からプリントとペンケースを取り出した。そして膝の上にはノートを置き、その上にプリントを広げる。

「……なんだ、それ？」

「文化祭の企画書なんです。今日の放課後までに提出だってついさっき言われて…」

「………」

ノートを台にしてカリカリとペンを走らせ始めたヒカルをやや啞然として見つめる響は、ふっと乾いた笑いをもらした。

「忙しいんだな、ヒカルちゃんは…」

「先輩とランチしたかったし…、時間がないのでこんなところで書いてすみません」

「いや、いいさ…」

俺とランチしたかったか…、と響は寂しさの混ざる微笑みをこぼす。そして、今ヒカルに言おうとしていた言葉を飲み込んだ。

——今はやめておこう…。

「あれ？先輩何か言いかけてませんでしたか？」

「ああ…。でも、やっぱあとでいい」

言おうと思えばいつでも言える。だから、それは文化祭が終わってヒカルの周囲が少し落ち着いてからでいい。その方がいい——。

「ええ？！あっとってなんですかあ？！気になる！」

「おもいっきり気にしてろ！」

「何ですか、それえ！」

今言ってください、とヒカルは響に詰め寄る。

「ヒカルが暇になったら言うさ」

「暇？！そんなあ～」

文化祭が終わるまで暇ないです～、とヒカル。響は、あははと笑いながら膨らんだヒカルの鼻をキュッとつまみ、

「さあ、そろそろ予鈴がなる頃だ！」

と、立ち上がった。

台本どおりに劇を通して音楽をかぶせる合同練習が音楽室で毎日行われている。衣装は葉っぱをつけて仕上げれば完成というところまで来た。この作業は既に大道具小道具の制作が終わっている真美や絹江も入り、演劇部全員でやっている。

ヒカルとあかねは一年F組の『なにわロミオとジュリエット』の練習も並行して進めていた。キャストは罰ゲームで寸劇をやった元しまうまチームのメンバーが主要人物につき、ヒカルは総監督、あかねはロミオの友人一役についていた。ちなみにジュリエットは寸劇が大好評だった祐輔だ。文化祭まであと一週間。演劇軽音のコラボも一年F組の『なにわロミジュリ』もそれぞれが佳境を迎えていた。

「それじゃもう一回、二幕の最初から音楽入れてやってみようぜ？」

と、田村が号令をかけたその時、

「総監督～、ちょっと来てくださ～い！」

クラスメイトが音楽室にヒカルを呼びに来た。

「またかぁ?!」

今日、ヒカルの呼び出しはこれで三度目だから、響や田村もさすがにうんざり顔だ。

「すみません。すぐに戻りますから～」

ヒカルは音楽室を飛び出して行った。

「相変わらず走り回ってるね、ヒカルちゃんは。体育祭の時もそうだった」

「んだな一。なんであんなにヒカルは頼りにされてんだろな？俺にはちっともわかんねえ」

柏木と田村がヒカルが出て行った方を見たまま感心したり首をかしげたりしている。

――なんであんなに...か。

田村が言った言葉を響はひとりかみしめた。おそらく、田村にとっては先輩先輩と慕ってくる可愛い後輩にすぎないヒカルなのということなのだろう。だが――。

「すみません、先輩たち...」

あかねがヒカルの代わりに謝った。

「みんな、ヒカルちゃんが好きなんです...」

あかねは少しだけ寂しげに笑った。ここ数日ヒカルは本当に忙しく、誰もがほとんどヒカルと落ち着いた話も出来ないでいる。教室でも部活でもヒカルを留めておくことが出来ず、気がつけば誰かに攫われていってしまうような状態だ。思わずあかねがため息を吐いたとき、すぐ傍で響も小さく息を吐いていた。

「まあ、ヒカルが好きってのはわかるぜ？けど、あれは忙しすぎだろう。なあ、ヒビク？」

「そうだな...。けど、ああやって出て行っちゃったんだからしょうがない。ヒカルが戻るまでちょっと休憩にしようぜ」

そう応え、響は音楽室を出て行った。

そのまま響が一年F組に行くと、ヒカルは数人のクラスメイトに囲まれて打ち合わせのようなものをしていた。教室の中は明るく、ヒカルを真ん中にして皆が笑っていた。昨年、自分も同じ

教室を使っていたはずなのに現在の一Fはその頃の面影は残さずにまるで別の次元のようにきらめいて見える。

「ヒビク先輩？」

ヒカルが響に気がついてこちらを見ると、他の生徒たちの目が一斉に扉の前に立つ響に集まった。皆にとっては校則破りの常習犯である風間響は驚異の存在らしく、その目がやや退いているのが空気から伝わってきた。そんな気配には馴れすぎている響だが、自分が場違いの場所にいる自覚は確かにある。

ここは一年生の教室。自分の知らない、ヒカルの世界だ。

「どうしたんですか？」

「ヒカルが攫われちゃったからあっちは休憩。せっかくだからおまえがどれだけの監督やってるんだか見に来た。適当に見てるから続けてろよ」

「……はい。適当に見てください」

ヒカルは嬉しそうに笑い、中断していた打ち合わせを再開する。そんなヒカルを`適当、'に見つめている響だか、ふと視線を感じる方に目を向けると、そこで自分を見ていたのは颯土だった。

「よお、群竹」

「ども…」

颯土は特に何をするわけでもなく、教室の外れでひとりいる。

「おまえ、なんか役についてるの？」

いえ…、と颯土は首を振る。

「俺は浅倉の補佐…だそうです」

「暇そうだな」

「まあ…アレですから…」

颯土はヒカルを顎で指し、響は頷いた。

「いらねえだろうな、ヒカルに補佐は」

補佐だけではない。ヒカルの周囲に人はいなくていい。

——俺だけで…。

無意識にそんなことを考えて響は自分に失笑した。

——なにをバカなことを……。

「それじゃ、あたしは演劇部の方に戻るから！」

総監督としてひととおりの指示を出し終えたヒカルはパタパタと響の元に駆けて来た。

「ええ～！総監督行っちゃうの～？」

そうぼやいた男子生徒を、響は一瞥して言った。

「悪いけど、もうヒカルはこっちに返してもらうぜ」

低いトーンで単調で冷たいその言い方に男子生徒が怯んだのが分かる。

——やべ…。俺、なにムキになってんだ…。

響は無意識に出てしまった自分の態度に自分がうろたえたが、さっきの響の眼力と威圧感に一

年F組の生徒たちは圧倒されてしまったようだ。ヒカルは、どうしよう...といった感じで響とクラスメイトたちを見比べる。

「.....あっちにとっても浅倉は重要なんだろ。お前らも出来ることは自分らでなんとかしろよ」

ヒカル補佐の颯土が初めて補佐の仕事をした。ヒカルは颯土に目でありがとを訴えて、
「みんなよろしく！先輩、行きましょ！」

と、響の腕を取った。響は、廊下をヒカルと並んで音楽室に向かいながら、
――あと少し、もう少し。文化祭が終わったら....。

と、逸り高ぶる想いを沈めていた。

◇

そして――。文化祭は明日に迫り、校舎の各教室、体育館、部舎の明りは夜遅くまで消えることがなかった。全校生徒が皆、それぞれ明日の準備に追われていた。最終稽古をさっき終わらせた演劇軽音部は、出来上がった衣装のチェックのために全員で演劇部の部室に集合していた。あひるの親子が着るのは黄色い木綿の作務衣のような着物に共布で作った髪飾り。子ども時代のエミーは同じデザインで色違いの白。そして白鳥になってからの衣装は純白のサテンで作った。バンドたちが着る衣装は葉っぱのシャツとカツラ、パンツはグリーンの生地で縫った。

「最高じゃん？よく頑張ったな、ヒカル」

響たちが着る衣装は土台になるシャツに何十枚ものグリーンの葉っぱが縫い付けられている。バンドメンバー五人分のこの衣装はヒカルが一人で作っていた。

「ほんと、よくがんばったよ...」

響は以前あかねにしていたように、ヒカルの頭を撫でた。

「うわ〜、私、いっぺんこれやってもらいたかったんです〜！」

ヒカルは満面の笑顔で響を見上げる。

――これからいつだってやってやるさ、明日が終わればな....。

響はヒカルを熱く見る。そんな友の目を田村は熱く見る。

「とうとうここまできました。あとは明日の本番があるのみ！」

小夜子が皆を見回した。

「そうだな！」

「それじゃ、明日にそなえて今日はこれで解散しましょう。皆さん、病気や事故に十分気をつけてくださいね！」

りょうかい、と田村たち。

「ヒカル、今日はもうまっすぐに帰れよ！」

「わかってますよ、ヒビク先輩！この期に及んではもうじたばたしませんよ。それじゃ先輩方、お先に失礼しま〜す！」

ヒカルは元気よくあかねとともに部室を出て行った。

「しかしこの衣装を着てステージに立つのかよ...」

「森の精霊ってよりはピーターパンだろ、これ」

「コスプレだな...」

「俺だって分からないぐらいに、顔にペイントしてもらおう…」

「……コメント出来ねえ…」

「……………絶句」

ヒカルが帰ったあと、響には聞こえないように田村と太郎次郎、そして柏木が互いの恰好を見合わせてコッソリ苦笑したことは永遠の秘め事になった。

その帰り道――。明るい月と満天の星空の下を響と田村は並んで歩いていた。

「嬉しそうだったな、ヒカル」

「え？」

「あれもヒビクに惚れてるぜ？目を見りゃわかる」

響は、なんだよそれ…と照れくさそうに鼻をかいて田村から目をそらした。

「前に言ってたお前のお宝ってヒカルのことなんだろう？」

「…ああ、そうだよ。バレちゃったな…」

最初からバレバレだぜ、と田村は小声で呟き、やっと白状した親友に、

「ここまで来たら一気にお宝ゲットしろな！」

と、ゲキを飛ばした。

「そうしたいね…」

――明日が終われば…。

響は満天の星空を見上げた。

――この時を決めて待ってから時間が経つのがずいぶん長かったぜ…。

ヒカルはいつも何かに夢中になっていて、忙しくて跳ね返っていてゆっくり話せる時間もなかった。ヒカルの周りには必ず誰かがいたし、めまぐるしくて眩しくて。でも、明日が終わればヒカルをこの手に抱きしめて放さない。カゴの中に閉じ込めて誰にも触れさせない。

――空手部の連中にも、一年F組のやつらにも、誰にも。

放さない。放せない――。放せなくなる……。一度この手に抱きしめたらきっと、二度と放せなくなる。

――そうになったら、きっと、俺は…。

そう気がついて響は愕然とした。

――俺は、あいつを縛るつもりだったのか？

独り占めして宝箱に閉じ込めて鍵でもかけるつもりだったのか。それが、あの時決めた自分がヒカルと関わる方法だったというのか――。

体の底から自分に対する嫌悪が沸いてきた。ヒカルを想うとき、自分がどれだけ醜い男になっているかを考えた。ヒカルに近づく者たちを無意識に敵視し排除したいという感情が暴走する。そんな自分がこのままヒカルを手に入れてしまったら、

――俺はきっと、あいつを束縛するだろう。少しだって放したくなくて。放せなくなつて。あいつの気持ちを無視して縛って。縛って。縛り付けて――。

「おい、どうした？」

急に立ち止まって肩を震わす響に田村は驚いた。

「いや、なんでもない...」

そう答える響の声は小さく震えている。

だが、今更どうしてこの想いにストップがかけられようか。たとえ、ヒカルを宝箱に閉じ込めることになったとしても、もう――。

――何考えてる。そんなことできるわけないだろ...っ。何て醜いんだ...。これが俺か？俺...なのか――？

「ヒビク...？」

さっきまで月明かりに照らされていた響の顔は、今は光の陰に入ってくすんで見えた。

「田村には...お宝はねえのか？」

響は唐突に言って空を見上げた。

「俺のお宝...？まあ、ないこともない...な」

田村も星空を見上げ、ひとつのため息を吐いた。

「で？」

「で？って言われてもなあ...。俺のお宝は人様のものになっちまったし...」

「マジ？お前、それでいいわけ？」

「だってしょーがねえじゃん？やっぱ彼女の気持ち優先にしねーと...」

彼女の気持ちか...、と響は再び星の空を見上げる。そして、空を見上げたまま、

「...独り占めして一とは...思わないわけ？」

と、やや思い詰めたように訊いた。

「そりゃ思ったときもあったけど...、ていうか、」

思わないわけがない、と田村。惚れた相手を独占したいと思うのは当たり前感情だろ、と田村は呟くように言う。

「当たり前...、そうか...」

――そうだ。当たり前だ。

響は自分の感情を無理に肯定した。宝箱の中に閉じ込めたいと思うのは当たり前で、何も醜い感情というわけではない。だから――。

「けどさ、相手が俺を想ってなきゃしたくたって出来ないだろ？」

そうだな、と響。

「彼女ってのはお前の気持ち知ってるのか？」

「いや？言ってねーし、言うつもりも...、もう、ねーしな...。陰で見守ることに徹する田村優作ってことで...」

「はっ...？！それでいいのか？お宝なんだろう？」

「だからこそ彼女の気持ち優先なの...っ。ほんとに大事な宝ってのはそういうもんだ」

田村は自分を納得させるかのようにやや力を込めて言い、頭の後ろで両手を組んで先を歩いて行く。

「ほんとに大事な宝...か...」

もしも、ヒカルを宝箱に閉じ込めて鍵をかけたとしたら――。

「.....」

ヒカルの太陽のように輝く笑顔が目には浮かぶ。その輝きを、箱の中、に閉じ込めることで遮ってしまったとしたら。

はあ...、と響は息をついた。

「何だよ、ヒビク？お前なんか全然問題ねーだろ！ヒカルは完璧にお前に惚れてる。俺が保証してやるぜ？」

「いや、問題は俺...」

好きだと告げたあとの暴走した自分の気持ちを、自分自身がセーブする自信がない。そうならきっと、光輝く宝をくすませてしまうだろう。

「あの月は星屑たちみんなの月だよなあ...。あれを独り占めできる星屑なんてねえよなあ...」

「...ああ？なに意味不明なこと言ってんの...」

田村がおもいきり首を傾げる横で遥かな星空を見つめながら、響は思わず深いため息がもれるのだった。

秋晴れの日――。本城高校では『稲穂祭』と名づけられた文化祭の当日を迎えた。学校内はどこへ行ってもお祭り。模擬店あり、ゲームやホラーハウスあり、研究発表ありでとても一日では回りきれないぐらいのイベントが盛りだくさんだ。その中を他校の生徒や中学生、一般の人までも大勢の見物客が校内を歩き回っている。

演劇などのプログラムは学校に隣接している公民館が会場になる。一年F組の『なにわロミオとジュリエット』は午前十一時に、演劇部軽音楽部合同制作の『みにくいあひるの子』は午後三時にプログラムされている。

「なんだか全然違うところに來たみたいだね」

ヒカルはあかねと麻耶と三人で、出番の時間がくるまで校内のイベントを見て歩いていた。廊下や教室は派手な飾りがなされていて普段の学び舎とはまるで違った様相だ。初めて体験する文化祭に三人の目はさっきからキラキラ輝きっぱなしだ。

「おお！お前たち寄ってけよ！」

二年生の回廊を歩いているとキャバレーの客引きのような派手な上着に、羽飾りがついたヨーロッパ風の帽子を目深に被った男が寄ってきた。あまりにもチグハグな珍しい恰好をしているものだから、三人でおもいきり見入ってしまった。

「...もしかして、田村先輩ですか？」

「もしかしくなくても、田村先輩ですけど？」

田村は顔の前に垂れ下がってくる羽を持ち上げながら顔を見せた。

「うわぁ...。先輩のイメージが変わっちゃいました.....」

「.....どんなふうに変わったんだか恐ろしいものあるけど、まあそんなことより模擬店寄ってけよ？」

田村はヒカルたちの腕を引いて店内に誘う。

「すみません。あんまり時間がないんです」

男子たちのメイク準備に入る時間まであと三十分しかない。

「先輩、私たちの『なにわロミジュリ』見に来てくださいね！」

逆にあかねが田村に営業をかけると、

「了解！がんばれよ！」

田村は爽やかに了承して別の生徒の呼び込みに走って行った。

無意識に響の姿を探しながら廊下を歩いていたヒカルは、見覚えのある光景を見つけて立ち止まった。

「ヒビク先輩...」

響は初めて出会った時と同じ水飲み場であの時と同じ格好をして顔を洗っていた。ヒビク先輩、と声をかけると、

「ああ？」

響は濡れたままの顔で振り向いた。すると、あの時と同様に雫がボタボタと廊下に垂れる。

「...ヒカルか？」

「あ～あ、先輩、また床がびしょびしょですよ？」

響はポケットにあるはずのハンカチを探った。だがそこには何もない。濡れた顔のままあっち向いたりこっち向いたりしているので、もうそこら中がびしょ濡れだ。あかねと麻耶は顔を見合わせて苦笑している。ヒカルは響の首にかかっていたスポーツタオルをひょいと取ると、それを響の顔の上に乗せた。

「あ、ああ、サンキュ...」

やっと濡れた顔をふくことができた響は、フーッと息を吐いてヒカルを見た。

「先輩、どうしたんですか？何かボケてませんか？」

「.....」

首を傾げて微笑みながらそこに立つヒカルを響は見つめた。

――昨夜は眠れなかったぜ...。

寝不足の目にヒカルの笑顔は眩しすぎて、響はそっと視線を外した。

「先輩...変ですよ？何か悩んでます？」

心配して顔を覗き込んでくるヒカルに、

「バーカ、俺が何を悩むんだよ」

響はいつも通りの口調で答えた。

「そうですね。先輩、あとで田村先輩たちと私たちの『ロミジュリ』見に来てくださいね」

「おお、もちろん行くぜ」

「じゃあ、私たちそろそろ時間だから行きますね」

ヒカルたちはその場を歩き去る。途中、空手部の奥田につかまり何やらはしゃいでいる。『ロミジュリ』の営業でもしているのだろう。すれ違う二年の男どもがヒカルに気軽に声をかける。それに対してヒカルも笑顔で応えてまたはしゃぐ。いつか、ハードルが高いと言っていた勇斗の言葉を思い出した。

――あいつらみんなリストにいたんだろうなあ....。

そして、やはり自分もその中のひとり...でいるのがいいのだろう。

「ゲットするにはやっぱ遠いわ...」

そして、一年F組の『なにわロミオとジュリエット』は大爆笑で幕を閉じ、観劇した田村や響はしばらく席を立てないほど笑い転げた。

「ジュリエットがわてもあとを追いまっせ～、だとよお」

ヒカルのイメージが変わった、と田村は腹を抱える。

「あいつ、演劇部で大根役者やってるより演出家に回ったんがいいんじゃないーの...？」

「エンターテイナーだな、ヒカルは」

響は感慨深げに呟いた。周囲の皆に笑顔を与えるエンターテイナー...。後戻りをせず、昇りつめていくライジング・サン...。

「参ったな……」

幕が下りた舞台を見つめ、響は呟いた。

◇

午後三時。いよいよ『みにくいあひるの子』の幕が開こうとしていた。舞台の上では軽音楽部が背景セットになり切ってスタンバイをしているし、演劇部員たちもそれぞれ自分のポジションについている。ヒカルは隣でスタンバイをしているあかねと目を合わせ、互いに気合を入れあい、それから後方に控えている響を振り返った。

響は真っ直ぐ前を向いていた。顔にペイントをしているから表情は分からない。だが、目は少しも揺らぐことなく真剣な光を輝かせている。

――ヒビク先輩。

心の中で名を呼んだとき、響の視線がヒカルに動いた。それだけでヒカルの緊張はほぐれていく。響とアイコンタクトを交わし、ヒカルは開演ブザーが鳴るのを待つ――。

客席の最前列には、勇斗、祐輔、麻耶、颯土が陣取っていた。

「ビデオ係、ちゃんと撮ってよ！」

ビデオを構えている祐輔は「僕も肉眼で見たいのに…」と、ぼやく。

「写真係、いい写真撮ってちょうだいよ！」

麻耶に言い切られたのは颯土だ。ビデオ係か写真係かと決めていた時に、いつものようにサークルの外側で傍観していたらいつの間にか写真係にされてしまっていた。冗談じゃないと断っても、麻耶につべこべ言うなと押し切れ仕方なく今この場所にいる。最近は皆の自分に対する扱いが厳しい。

――ピンボケしても知らないぜ…。

麻耶がよこしたカメラは一眼レフだ。オートカメラしか触ったことがないのに上手く撮れるはずがない。ピントの合わせ方だってよく分からないのだ。だが、撮影に失敗したら女子ども三人にどれだけの文句を言われるか知れたものじゃない。アイスを奢るぐらいじゃすまされないだろうから、颯土は初めて触るカメラの性能と機能を幕が開くまでの間に必死に研究した。勇斗はビデオ係を祐輔とジャンケンで競い、みごと勝利したので悠々と観劇に専念するつमりのようだ。麻耶はもちろん最初からお役御免の身分である。

開幕のブザーが鳴り、照明が落とされて幕がゆっくりと上がった。舞台の上は暗闇で、ひとつだけ小さくスポットライトが当たっている場所にあひるの母親が座っていた。

『もう少しよ、頑張って！』

母親の声に合わせて右端にスポットライトが照らされると、そこに今生まれたあひるの子どもがいた。

『出た！』

『まあ、かわいい！あなたは女の子ね。名前はメイミーにしましょう』

するとその隣にもスポットが当たり、

『出た！』

『まあ、かわいい！あなたは男の子ね。名前はスイミーにしましょう』

「あれがヒカルちゃんだよ。そして次にくるのがあかね」

麻耶が勇斗に耳打ちする。

『出た！』

『まあ、かわいい！あなたも男の子ね。名前をレイミーにしましょう』

生まれたてのあひるの子供は、隣でこれから生まれてこようとしているものを囲みじっと注目する。やがて、『はじめまして！』と出てきたのは皆と違う色をしたあひるだった。

『まあ...』

母親は考え込む。

『はじめましてだって。変なあいさつ！あひるは 出た！って言うものなのにな！』

と、スイミーのヒカル。

『なんて下品な色をしているのかしら。これが私の子供なの？』

『はじめまして！』

白いあひるはまた言う。

『はいはい、名前をつけないとね。あんたも男の子みたいだからエミーでいいわ』

母親は面倒くさそうに言った。すると、右からあひるの子どもがひとりずつ立ち上がり、『メイミー』『スイミー』『レイミー』『エイミー』と、自分の名前を言う。

『違うよ！お前の名前はエミーだよ、エミー！』

スイミーがエミーの頭をはたいた。

『ボクも、イ、が欲しい。みんなと同じがいい』

『みにくいお前はイなしのエミーで十分よ！』

メイミーに言われ、エミーはしょんぼりする。

『さあさあ、くだらないこと言っていないで散歩に行きますよ』

母親と子供たちは一列を作って歩き出すーというのがオープニングだった。

この後、ストーリーはあひるの三姉弟がエミーをいじめ、それを母親は見て見ぬふりをし、エミーがだんだん卑屈になっていく。要所要所にはオリジナルの音楽が挿入され、背景やセットの効果もあって童話の域は出ないもののファンタスティックな演出になっていた。

『あいつら絶対に仕返ししてやる』

いじめられっぱなしのエミーはとうとう頭にきた。そして三姉弟の散歩道に罠をしかけた。木に紐を結びエミーは反対側に隠れて紐の端を持つ。そこへ三姉弟が歩いてきて紐をまたごうとした瞬間にエミーは思い切りそれを引っ張った。先頭のメイミーがまず転び、スイミーレイミーと次々に将棋倒しに転んだ。

『やったぞ！やった、やった...』

最初は飛び上がっていたエミーは段々としょんぼりしてくる。そして、

『ちっとも嬉しくなんかない...。人に意地悪をしたって全然楽しくなんかない。それどころか凄くいやな気分だ...』

エミーは転んで泣いている三姉弟を助け起こした。

『このやろ～！よくもやったな～！』

と叫んだのはレイミーのあかね。「あかねちゃんの`このやろう、は必見だなあ...」と、客席の勇斗がつぶやくと、「しっ！うるさいわよっ！」と、すかさず麻耶。颯土が横でプッと笑う。『ごめんなさい...。もう二度とこんなことはしないよ。本当にごめんなさい』エミーはトボトボと舞台の袖に歩き去る.....という場面で一幕が終了した。

「童話なんだよな、これ...」

ビデオを構えている祐輔が呟いた。よく知っているアンデルセンだ。子どもの頃、何度も何度もコミカルな絵で表現されているあひるの親子を見てきた童話なのに、今、舞台上で展開されているのは幼児や児童を対象にしたそれではないように思う。

「音楽のせいなのかな...」

「しっ！幕が開くわよ」

二幕が開いた。いきなりメインテーマの『ライジングサン』が流れ出す。エミーが精神的な脱皮をするクライマックスを、幕が開くと同時に音楽と演技だけで表現する見せ場だ。エミーはバンドの木々のセットの間を、響の歌に合わせてひらひらと飛ぶように行き来する。観客席から見ると森の精霊たちとエミーが交流する様子が幻想的に見えた。

『ライジングサン』が終わると観客席から大きな拍手が沸いた。だが演劇はまだ二幕が開いたばかり。これからだ。

『ボクはボクだから。たとえみんなと違っていてもボクに変わりはないんだ。自信を持って誇りを持ってボクはボクらしく生きて行こう！暗闇から昇るおひさまのように、明るく朗らかにみんなを照らして！』

台詞のあとに再び大きな拍手。

エミーはどんなにいじめられてもいつも明るくふるまうようになった。姉や兄たちを思いやり優しくする。

『意地悪はいけないって言いながら、お母さんはボクたちがエミーをいじめても怒らないんだもん』

と、レイミー。

『それはお母さんだってエミーが嫌いだからよ』

『どうして嫌いなんだろう？』

『だってエミーは私たちと違うじゃない』

『違うとどうして嫌いなんだろう？』

『そんなこと...わからないわよ！』

『あいつったらこんなにバカにされていじめられているのにヘラヘラ笑ってるんだ。いったいどういう神経しているんだ？あんなふうにされていると、何だかボクたちの方がみじめになってこないか？』

と、スイミー。

『ねえ、ボクたちはどうしてエミーをいじめるの？お母さんはどうしてエミーが嫌いななの？』

レイミーの問いかけにメイミーもスイミーも首をふる。やがて成長したエミーは美しい白鳥

になった。

『エミー、カッコいい...』

レイミーは感嘆の声を上げた。

『生れながらにあったエミーの中の気高さに、私はきっと嫉妬していたのでしょう...』

と、母親。『ライジングサン』の前奏が静かに入ってくる。

『みにくかったのはエミーじゃなく私の心の方でした』

『お母さん、今まで育ててくれてありがとう。でも、ボクは白鳥だから旅立たなくてはなりません』

『エミー、行ってしまうの？』

『お姉さん、お兄さんたち、ありがとう』

『あんなにいじめたのにありがとうって言うってくれるの？』

『うん。みんなはボクを育てくれた大切な家族だから』

『ボク、エミーが大好きだったよ。たくさん意地悪をしたけれど、でも本当はエミーが大好きだったんだ』

と、スイミー。『ボクも...』『私も...』と姉弟たち。

『ありがとう。ボクたちは色々なことを経験しながら大人になるんだよね。さあ、みんな泣かないで顔を上げようよ。そして真っ直ぐに前を向いて笑ってさよならしよう。またいつか会える時に笑って会えるように！』

エミーは翼を大きく広げ羽ばたき始めた。

『さようなら、お母さん！さようなら、メイミー、スイミー、レイミー！』

エミーは羽ばたきながら舞台の袖に消えていく。残されたあひるの親子たちはその方向をしばらく見つめていた。

『全部ここにあるのね』と母親が自分の胸を押さえる。

『醜い心も美しい心も全部自分の中にあるのよ。私もあなたたちもそれをしっかり見つめて生きていきましょう。自分の心を自分で監視しながら...』

『はい、お母さん』

『エミーが教えてくれたんだね。きっとエミーは神様のお使いだったんだ！』

親子たちはうなずき合って客席の方を向く。そのまま幕はゆっくりと下りていった。

観客席からは拍手の渦と歓声が飛び交っている。舞台では感極まった小夜子、真美、絹江が抱き合って泣いていた。

「小夜子先輩！」

ヒカルとあかねもそこに駆け寄る。

「浅倉さん、水沢さん、やったね！」

響や田村たちも集まってくる。

「成功だよな？」

田村は少し興奮しながら皆を見回した。

「あったりまえだろ！この拍手だぜっ！」

「風間くん、田村くんみんな本当にありがとう！みんなのおかげよ！」

「先輩、しっかりしてください！カーテンコールですよ！」

おいおい泣いている小夜子の背中をヒカルが押して、一同は舞台に整列し再び幕が開く。観客たちは立ち上がって拍手や声援を送ってくれていた。最前列にいる勇斗はその場で飛び上がっている。

「ヒカルッ！」

響がヒカルにマラカスを投げた。

「ヒビク先輩？」

ヒカルはマラカスを持ってしばらく立ちすくんだ。田村やバンドのメンバーたちは素早く自分の楽器を持ち、あかねもピアノの前に座る。ヒカルは満面の笑みを浮かべてうなずいた。

劇中よりも少しテンポを上げた『ライジングサン』の演奏が始まった。響は舞台の前面に出て歌う。小夜子たちはその一步後ろでリズムを取る。ヒカルは響の横でステップを踏む。そして客席は総立ちになり、観客たちはその場でリズムを取っている。

響がヒカルの真横にきてひょいと肩に手を回した。ヒカルは響の顔を見上げながら、響と一緒にステップを踏んだ。

「何か、凄くキレイ…」

そんなヒカルと響を見て麻耶がつぶやいた。舞台の中央で見つめ合い瞳をキラキラ輝かせながら歌って踊る二人はピッタリと息も合い不思議なオーラを発散させている。

「……っ」

カメラを構えていた写真係の颯土はおもわずファインダーをのぞいた。そして、響とヒカルにズームし焦点を合わせてシャッターを切る。何枚も何枚もシャッターを切る――。

♪いっぱいの幸せこめられた朝の空気を吸い込もう　ひとつもこぼさないように力いっぱい吸い込もう　今日（いま）この瞬間（とき）から僕が僕で在るために

――ああ、ヒカル。この歌はお前と一緒に作ったんだよな。あの時、お前が俺の背負っていた荷物をおろしてくれなかったら、俺の心にはまだ暗闇が存在していたはずだ。長かった俺の夜を明けさせてくれたのはお前の太陽なんだ。なのに、俺は…、俺は…、ヒカル――。

響はヒカルを愛おしくせつなく見つめる。そして、歌う。

――ヒビク先輩がいつもと違う…？　どうしたの？そんな目をされたら、ドキドキが止まらなくなっちゃうよ…。

ヒカルは響に微笑む。そして踊る。

♪ライジング・サン やったきた夜明けだから ライジング・サン 昇ってゆこうどこでも――

「演劇部軽音楽部合同制作『みにくいあひるの子』」でした！ありがとうございました！」

最後に小夜子が客席に向かって叫びカーテンコールの幕も下りた。

「終わったな！」

田村が響の肩をポンとたたいた。

「ああ、終わった…」

響はポツリとつぶやいた。

舞台裏で片付けをしている時だった。浅倉と呼ばれてヒカルが振り返るとそこには一希が立っていた。

「黒田くん...」

ヒカルはしばし呆然とした。そして、ヒカルのすぐ隣にいた響は眼光を鋭くして一希を見据えた。ヒカルを自分の背後に庇おうと体が動いたが、

「劇、見たぜ」

一希の自然な笑顔を見て思い止まった。これまで見てきた" `問題児、の顔をどこかへ飛ばした一希だ。

「見に来てくれたんだ...」

「当たり前だろ？お前が夏休み前から頑張ってた劇だからさ」

「...うん」

俯いたヒカルの胸に、一希と一緒に過ごした一学期からこの間のことまでが次々と浮かんで来た。傷つけたことも、傷ついたことも――。

「ちょっと来いよ。話があるんだ」

ヒカルを促がして一希は舞台裏を出て行く。

「うん」

ヒカルはためらうことなく一希に従った。

「ヒカル」

「ヒカルちゃん」

響とあかねが同時にふたりのあとを追った。だが、ふたりの姿はすぐそこにあった。一希はヒカルを袖の向こうに連れ出したただけだったのだ。響とあかねはその場に止まり、少し離れたところからふたりの様子を見守る。響は一希がヒカルに触れようとしたらすぐに飛び出すつもりでいるし、あかねも同じだ。もう、行動をためらってヒカルを傷つけたくはないから――。

「みにくいあひるの子、よかったぜ？音楽も最高だったな！」

「黒田くん、あたし...」

あなたを傷つけてしまって...、と言おうとしたヒカルだったが言葉が喉の奥につまって出せない。急に胸が苦しくなったヒカルは唇をかみしめてうつむいた。

「どうしたんだよ。お前らしくないぜ？あっ、もしかして怒ってるんだ？お前のファーストキ...」

ヒカルは周りを見回しながら慌てて一希の口を手でふさいだ。

「違うよ！あたし、あんたの気持ちも考えなしに、あんたをふみにじるようなことを...」

「何言ってるの！俺はお前のおかげで踏ん切りがついてさ、今は凄くさっぱりしているんだ。俺、今、引越し屋で働いてるんだ。運転手の助手をやってる。トラックに乗って日本全国色々な場所に行けるんだぜ。母ちゃんの具合もよくなってきたし、学校やめてよかったって思ってる」

そう言う一希の顔に曇りはない。

「幸せ...なの？」

「...んなこと聞くなよ。俺は大丈夫だよ。さっきの歌じゃないけどライジングサン！だぜ！」

「そっか...。じゃあいいや！」

ヒカルはやっと笑顔になった。

「お前見てるとさ、俺もがんばんなきゃって気になるよ。俺、来年から定時制の高校に行こうと思ってる。やっぱ勉強はしとかないな！」

「うん、それがいいね！」

「お前には悪いことしちゃったと思ってさ。一言謝りに来たんだ。お前のファーストキ...、」

ああ〜っ！と言ってヒカルは続きをさえぎった。一希はそんなヒカルにニヤッと笑いかけた。そして声をひそめ、

「お前の好きな奴ってあいつだろ？」

と、袖から心配そうにこちらを見つめている響に向かって視線を投げた。

「...うん。どうしてわかったの？」

「さっきの舞台を見れば誰だってわかるさ。お前、全身であいつのことが好きだって宣言してたからな！」

「ええーっ?!」

「ホント、悪かったよな〜。恋する乙女のファーストキスを奪っちゃったんだからな〜、この俺様がっ！」

言葉では言いながらも一希はそれほど悪気もなさそうに、むしろ響に対して優越感の態度を示して胸を張る。あっちで響が首をかしげた。

「もういいよ。あんたの門出にファースト...のひとつぐらいのし紙つけてあげたことにするから」

「サンキュー！じゃあな！元気でいろよ！」

一希は手を上げて去っていく。それを見送るヒカルは笑っていた。

あかねはそんなヒカルの顔を見て安心した。決着がついたんだな、と響も思った。あの時から今日まで、ヒカルの笑顔は本物じゃなかったから。だが、今のこの笑顔は違う。心のもやが晴れたように爽やかな笑顔だ。

ボクたちは色々なことを経験しながら大人になるんだ、と、エミーが言った台詞がヒカルの頭に浮かんでいた。傷つけて傷ついて、言いたくて言えなくて、泣きたくて笑っていたこの一ヶ月間。心の中の暗闇にとらえられ、出口を捜したくて越えたくて目まぐるしく動いてきた日々もう終わった。それと同時に心の澁みも消えて行った。久しぶりに会った一希はすこしやせたように見えた。だが、生き活きとしていて大人になったように思う。一希は一希で自分の人生を自分で拓いて見出してちゃんと立って生きている。

——あたしこそ、がんばらなきゃって思うよ...。自分の人生を自分で拓いて——。

ふと、前を見ると響がじっとこちらを見つめていた。

「ヒビク先輩...」

響は微笑んでうなずいた。その後ろではあかねもヒカルを見て笑っている。この人たちはずっ

と自分を心配して見守ってくれていたのだ。そう思った時、涙があふれてきた。

「打ち上げいくかー？」

響がみんなに向かって叫ぶと、行こう、行こう、とその場は盛り上がり、勇斗や麻耶たちも誘って、前回中途半端になったビリヤード大会をやりなおそう、ということになったのだ。

◇

軽音楽部、演劇部と一年F組たちが全員で行くと狭いビリヤード場は貸切状態になってしまった。駅前のこのビリヤード場は響たちの得意の店で、一年生の時から放課後や授業中によく利用している。後夜祭で響とヒカルが着用した黒服衣装は、田村がここのマスターから借りたものだ。

「んじゃ、とりあえず記念撮影ということで...！」

田村が、持参したオートカメラでまずは全員の集合写真を写した。その後、あかねとヒカルを撮ったり自分とあかねを撮ったり響とヒカルを撮ったりと適当に撮影した後に、いよいよビリヤード大会の開催だ。一同はワイワイと騒ぎながら激しいバトルを展開していた。響たち二年生は上手だが勇斗や祐輔などは話にならない。それでも負けず嫌いの体育会系の一年生たちは先輩たちに何度でも勝負を挑んでいく。ヒカルたち女子組はテーブルについてそのバトルを見物していた。

「...おつかれ...」

ヒカルが壁にもたれ、少しぼんやりしながら玉を突く響や勇斗たちを見ていると、颯土が手にしたオレンジジュースをヒカルに差し出してきた。

「おつかれ.....？」

ヒカルは颯土からグラスを受け取りやや呆ける。

「早く帰って寝た方がいいんじゃないか？ぼうっとしてるぜ？」

颯土はそれだけ言って台の方へ移動して行った。ヒカルは手にあるオレンジジュースを見つめ、やっと颯土が労ってくれたということに気がついた。

「.....なんか、嬉しいかも.....」

オレンジジュースに口をつけながら、ヒカルは響と勝負を始めた颯土を見守った。

随分の時間が経った頃、小夜子たちはしばらく前に先に帰り、麻耶は祐輔の、あかねは颯土のそれぞれの応援団としてビリヤード台の周りを取り囲んでいた。ふと気がつくとヒカルの声が聞こえない

「あれ～？ヒカルちゃんは～？」

「あそこだよ...」

田村が指を差した場所はビリヤード台から少し離れた、店の角にあるテーブルだった。

「もう随分前からあの状態」

ヒカルはコーナーの壁にもたれかかってスヤスヤと眠っていた。

「あらまあ...」

「終わって安心したんだろうよ。あいつ、本当に忙しかったからなあ...」

「そうだな。あいつにはハナマルをあげないとな」

響はヒカルの寝顔を見ながら優しく微笑んだ。そんな親友を田村はじっと見つめ、
「さあ、あとはヒカル番のヒビクにまかせて、俺たちはそろそろ引き上げようぜ！」

と、まだ遊び足りていない勇斗や双子たちの背中を出入り口のドアに向けて押した。
「え～？風間先輩、いつからヒカルちゃん番なんっすか～？」

勇斗が振り向き振り向き突っ込むと、田村はその後頭部をパンとはたき、ヤボを言うな、とそのままドアの外に押し出す。そして、響には目配せをしてその耳元でささやいた。

「俺たちは消えるから、お前はヒカルとゆっくり話をするがいいさ…」

「田村…」

田村は響の肩をポンとたたくと、ほら行くぞ～！と、皆を引き連れてビリヤード場を出て行った。一番最後に店を出ようとした颯土が振り返ると、キューを握り締めたままたずむ響が眠るヒカルをじっと見つめていた。

「ヒカル、おい、ヒカルー」

響はヒカルの肩を揺さぶった。だが、ヒカルは微かな笑みを携えたまま眠り続けている。ヒカルの意識はもう、どこか遠くへ飛んでしまっているようだ。小さなため息を漏らし響は自分の上着をヒカルの肩にそっとかぶせた。その様子を見守っていたのは店のマスターだ。

「風間、俺ちょっとそこまで用足しに行ってくるから留守番頼んだぞ」

「は？留守番って...、客来たらどーすんだよ」

「来ない来ない。何なら、鍵かけちゃっていいから」

マスターは適当なことを粋に吐いてさっさと店を出て行ってしまった。マジかよ...、とつぶやき、響はもう一度ヒカルの名を呼びながら肩を揺する。だが、ヒカルは無防備に眠ったままで目を覚ます気配はない。

――まったく...、こんな場所でよくこうも熟睡できるな...。

響は半分呆れながら、それでも今日までのヒカルの努力と疲労を思えば無理もないこともわかっていった。響はヒカルの隣に座り、そっと肩に手を回した。

「お前のしょってる荷物もかなり重いよなあ。自分の限界ってのをいつも先送りして、ひとりで頑張ってるって人の荷物までも背負い込んで悩んで苦しんで。それを無意識に自然体でやっちゃうんだから...」

腕の中にヒカルを包み、響は囁くような声で言う。

「俺は昨夜眠れなかったぜ。昨日までは、文化祭が終わったらお前に好きだって宣言して、そしてお前も俺でオッケーならいつでもそばにいられる特別な関係になろうって決めていた...。勝手に決めていたんだ.....」

昨夜、満天の星空を見上げるまで――。

自分がこれほどヒカルを欲しがっていたとは思わなかった。これほど独占したいと思っていたと気づかなかった。ヒカルを誰にも渡したくないと、誰にも触れさせたくない、自分の横でその笑顔は自分にだけ向けて欲しいと、無意識にストイックに思い詰めていた...

「...けど、そんなことお前にできやしないよな。お前はたくさんの仲間に関われて、跳ねて笑っている時が一番いい女だもんな...」

――お前に一言好きだって言っちゃったら、俺はきっと自分が止められなくなっちゃう...。ヒカルを自分のそばに縛り付けて壊してしまうかもしれない...

「.....そうになったら最悪だもんな...。だから言わない。ここにしまっておくことに決めた」

――俺の胸に...

ふふ、とヒカルが笑った。

「ヒカル？起きたか？」

だが、それだけ。子どものような微笑を残したままのヒカルが目覚める様子はない。は...っ、と響は笑う。そして回した腕の力を少しだけ強める。

「こんなヒカルちゃんとは付き合えないよな...。俺のものにしちゃダメだろ...。だから明日から

も今までのようにお前を見つめるだけにしておくよ。んで、そこから少しでもお前の荷物を軽くしてやれるように見てやる…」

ヒカルの肩を抱く響の手が震える。

——キツイぜ…、今は俺の腕の中にお前がいるのに…！

響はヒカルを自分の方に抱き寄せた。

——こんなのは卑怯だよな？男らしくないよな？でも、今のこの一時は天が俺に与えてくれた時間なのかもしれない。明日からは、いや、この一瞬あとからは今まで通り、俺はただのヒビク先輩をやるから、今だけ、この一瞬だけは俺だけのヒカルでいてくれよ…っ！

響はヒカルの唇に自分の唇をゆっくりと近づけた。だが、触れ合う寸前のところで止めた——。

抱きしめる腕が震える。重なり合う手前の唇が震える。このまま先に進んでしまったら、たった今決めたことが嘘になる——。響は進むことも退くことも出来ず、紙一枚分の距離を守りヒカルをぎゅうっと抱きしめた。

・
・

さっきから響の声が聴こえている。自分を呼ぶ声がしている。答えなくちゃ、目を開けなくちゃと思うのに、優しく包まれているようなこの感触が温かいからふわふわと漂っている。

——もう少しこのままでいいでしょ？甘えていてもいいでしょ？だって、何だかとても気持ちがいいから——。

・
・

それはずいぶん長い時間だった。響は全ての想いをこの時間に注ぎ込んでヒカルを抱きしめていた。そして突然電話のベルが鳴り響いた時に、永遠に続いて欲しい時間が終わった。マスターは出て行ったまま帰ってきていない。電話のベルは鳴り続けている。ふと壁の時計を見ると、もう九時を過ぎたところだ。ベルはまだ鳴っている。その音でヒカルの意識は現実へと戻ってきたようだ。響の腕の中で目をこすりはじめた。響はさり気なく肩を抱いていた手を放すと立ち上がって受話器を取った。

『風間か？』

聞こえてきたのはマスターの声だった。帰るなら鍵をかけてそれをポストに放り込んでおいてくれと言う声の後ろではジャラジャラとパチンコの音がしている。響は受話器を戻して笑った。

——どいつもこいつもやってくれるぜ…。

「ヒビク先輩？みんなは？」

周りを見回しながらヒカルはきょとんとしている。

「とっくに解散したぜ…」

「うそ！あたし、もしかして凄い迷惑かけちゃいました？」

おろおろするヒカルの頭に大きな手をぽふんと置いて、

「いや？お前、よく寝てたからさ。俺、ヒカル番なんだとさ…」

答えながら響は思わずヒカルから視線を外した。

「すみませんでした。すごくいい夢を見ていて…。優しくてふわふわしていてあったかくて気持ちよかったから…」

ヒカルは無邪気に笑って、うーんと伸びをした。響は少しうしろめたさを感じ、ああそう…、とそっけなくあしらう。

「そう言えばヒビク先輩、いつか、あとでいいって言っていた用件は何だったんですか？私、ず〜っと気になっているんですけど」

唐突に言いだしたヒカルの言葉に響はギョッとなった。たった今、あの時言おうとした想いを振り切ったばかりだ。

「ああ、あれはなあ…。ヒカルちゃん、最近ちょっと太ったんじゃない？って言いたかったの！」

「えーっ！ひどーい！そんなことを言うためにこんなにもったいつけてたんですか！？」

「だって、あの時言ったらヒカルちゃんは気にしちゃって、実行委員の仕事に集中できなかっただろ？」

「ひどいっ！楽しみにしていて損した〜！」

ヒカルは響の背中を思いきりたたいた。

「アハハッ！冗談、冗談！でもあれはもういいんだ。ヒカルに頼らず自分で処理したからさ！」

「そうなんですか…。頼ってくれてもよかったのに。ちょっと寂しいな」

「……………ヒカルは優しいな」

やっと閉じ込めた想いがヒカルの笑顔と言葉でまた溢れそうになる。ほんの少しの間、響は次の言葉をためらった。だが――。

「さあ、帰るぞ！」

響は扉を開けたのだ。

マスターに言われた通り鍵をかけ、それをポストに放り込んでふたりはビリヤード場をあとにする。駅はもう目の前だったが、響はヒカルの家の方向に歩を進めた。ふたりはヒカルの家までの約二十分の道のりを、自転車を転がしながらゆっくりと歩いた。

隅田川の川べりまで来て、その角を曲がればヒカルの家だ。少し遠回りしてくればよかったと、響が心のどこかで思っていた時。

♪ライジングサン やってきた夜明けだから ライジングサン 昇ってゆこうどこまでも…

唐突に、ヒカルがかなり調子外れに口ずさんだ。

「私、このフレーズが大好きなんです！」

響は何も言わずにヒカルの横顔を見つめる。ヒカルしか歌えない『ライジングサン』を、もっと聴いていたい気分だった。

「ライジングサンって言葉、凄くいい言葉ですよ〜。昇りつめていく太陽、でしょ？」

「ああ。まるでお前だな」

「ええ？私？私、昇りつめていく太陽かなあ？」

「だろ？絶対に後戻りをしないで真っ直ぐに昇っていくじゃないか、いつだってさ。周りをうんと照らしながら...」

「先輩からそんなふうに褒めてもらえるなんて嘘みたい。そういえば、今日の先輩は、国宝級の音痴とか言わないし...」

「音痴も極めれば才能ってやつだ」

私、極めてますかー？！とやや膨れてから、ヒカルは小さく息を吐いて言った。

「高校に入ってから今日まで何だか凄く早かったな...。文化祭も終わっちゃったし次の目標を決めないと」

「もう次か？さんざん跳ね回って疲れてるんだから、少し休もうって気にはならないのか？」

「そうですね。休みたいって思う時もあるけれど、そう思っていて休めたことってあまりないんですよ。何かしら忙しくなっちゃう。これ、私の癖みたい」

「お前のしょってる荷物ってのもなかなかやっかいだなあ」

もう、ここはヒカルの家の前だ。

「私の荷物って...」

ヒカルは呆然と呟くように言って響を見上げた。

「照らせ。そして跳ねてろよ。それがお前だもんな」

「ヒビク先輩...」

「まあ、色々あるけどさ、荷物が背負いきれないくらいに重くなったら誰かに助けてもらえばいいだろ。俺もちょっとぐらいなら持ってやれるだろうし、あかねや他の仲間だってお前にはたくさんいるだろ？お前が仲間たちの荷物を軽くしてやっているように、あいつらだってお前の助けになってくれるだろうからさ。もちろん、俺も...。だから安心してライジングサンやってろ」

「ヒビク先輩...」

胸元に熱い塊がこみ上げる。

――そうだ。そうだった...。

いつか颯土に人に話をするだけで軽くなる、なんて言っておきながら、自分の荷物を人に預けようとしなかったのは自分だ。心のどこかでどうにもならない、と勝手に決めて、話したいのに話すことが出来なくて。かかえきれなくてパンクしそうな時も無理をして頑張ってしまう。それが自分なんだと最初からあきらめて。ひとりぼっちだったのは自分の心だ。仲間がいるのに、助けてくれる友達がそばにいるのに、信じているふりをしているだけで...。あかねがどんなに心配してくれていたか。颯土も不器用に力になってくれていた。そして、響もずっと見守ってくれていた。なのに――。

――みんな、ごめん。ごめん。ごめん...。

ヒカルの目からぼろぼろと涙が零れた。

「お、おい？どうした？俺、何か悪いこと言ったか？」

突然のヒカルの涙に響はうろたえた。

「いえ、違うんです。私、自分の悪かったところに気がついて...」

本当の意味で心を開こう。仲間たちを頼ろう。明日、これまでのことをあかねや麻耶に何もか

も話そう。そう決めただけで心がうんと軽くなった。

「ヒビク先輩、ありがとう...」

「え？」

何に対してのありがとうなのか響にはわからない。だが、涙に濡れているはずのヒカルのが、まるで真昼の太陽のように輝いているから、どういたしまして、と、笑った。

「じゃあ、もう遅いから入れよ」

ヒカルはうん、とうなずいて門を開けた。

「ヒカルッ」

その後ろ姿に向かって響は名を呼んだ。ヒカルは、はい？と振り向く。そのままふたりは門の内と外で少しの間、ただ見つめ合った。どちらも動かず、どちらも声を出さず、ただそうしたいと思った。そして、

「.....お疲れさんだったな。お前、ホントよくやったよ」

響はニカッと笑った。

「ヒビク先輩も！」

と、返してヒカルも笑う。響はうなずくと踵を返し、ヒカルとふたりで来た道を戻っていく。

——これでいいんだな...。

と、自分自身を納得させながら——。

・
・
・

窓の下の方音に気がついて、颯土は少しだけカーテンを開いた。隣家の門の前に月明かりに照らされたヒカルと響が立っていた。

——あいつ、今ごろ帰ってきやがって...。

闇の中に浮かび上がるふたりの姿に、さっきステージで見た光景が重なった。どこまでも美しく、どこまでもきらめいて見えたステージでのヒカルと響——。

——...ったく、キラキラなヤツらだぜ...。

窓の下でいつまでも見つめ合ったままのふたりから目を反らし、颯土はそっとカーテンを閉めた。

――あ....

――亮ちゃん、オレ来たよ。約束忘れてないよね？

――約束？

――亮ちゃん...？

――悪いけど、今、友達がいっぱいきてて誕生会をやってるんだ。じゃあね。

――亮...ちゃん？！

◇

「ソージ！起きろ！」

甲高い叫び声とパンパンパンパンという鉄砲の連打音が耳元で炸裂し、颯土は跳ね起きた。

「うわうわうわっ！」

「やっと起きたな、ソージ」

ベッドの上で仁王立ちしているのは隣家のやんちゃ坊主の哲平だ。

「またお前か...。鉄砲が変わったんじゃないか？」

「もう、ギンガレンジャーはフルイんだよ。今はスターレンジャーのジダイなんだ」

哲平は生意気に首を傾げながら言う。

「ああそう...」

颯土は頭をかきながら呆けた声を出した。

「いつもいつもチコクばかりでヤバイからソージを起こしてっておばちゃんにお願いされたの」

「へいへい...」

「じゃあね。ちゃんと起きてシタクしてよ！」

「わかったわかった...」

颯土は片手を面倒くさそうに振り、哲平が部屋から出て行くのを待ってベッドから降りた。そしてそのまま床に座り込む。

――今ごろあんな昔の夢を見るなんてな...。

颯土は頭をかきむしやる。もう、顔も忘れたはずの、昔、今のヒカルの家に住んでいた、颯土が友達と呼んでいた最初で最後の少年――。

人の心は移ろい変わるものということを痛いくらいに思い知ったあの日に、もう友達はいらない作らないと心に決めた。最初からひとりでいれば傷つくこともない。そうやって長い間ひとりで来たというのに、高校に入ってから自分はひとりになれない。やかましい連中が何かといろんなことに巻き込んでくれる。肩に手を回して来てはつきまとうヤツはいるし、時々窓に消しゴムを投げつけて「仲良くなろうぜ祭り、を勝手に開催する隣人はいるし、その弟にはこんな過激な目覚まし攻撃を受ける日々――。

――いったい、どうなってる...。

流されて今日まで来たが、ふと我に返るとわけが分からなくなる。自分が変わったわけじゃない。自分の周りが変わっているのだ。颯土はため息を吐いて足元にある雑誌を手にとった。め

くらくらくでも勝手に開かれるページは鮮やかな海と空が広がる沖縄の風景写真だ。

澄み渡る青空から降り注ぐ光のシャワー。キラキラと輝くグリーンの海。真っ白な砂浜の上に点々と残るひとつの足跡。

ずいぶん前に、本屋でたまたま手にした雑誌だった。何気なく開いたページから飛び出してきた鮮やかな風景にどういうわけか釘漬けになり、そのままレジに持っていった。

――沖縄か....

写真から伝わってくるのは輝く陽射と乾いた風。何故か強烈に惹かれるこの風景。陽射も風も、この身で感じたいと思うほどに――。

「.....って、のんびり雑誌見てる場合じゃないだろっ！」

せっかく哲平に起こしてもらったというのに、また遅刻ギリギリの時間だ。颯土一、と階下から母親の呼ぶ声がした。颯土は雑誌を鞆にぶち込み、慌てて制服に着替えた。

久しぶりに予鈴が鳴る前に教室に入ることが出来た颯土は、席に着いた途端、一斉にクラスメイトたちの注目を浴びた。周囲を見回して、何だ？と思う。隣の席に着いているヒカルを見ると、どうやらクラスの連中同様自分を見ていたようだが、視線を向けた途端に顔を背けられた。

――えっと.....？

ヒカルに何かしてしまったのだろうか、と最近の自分の行動を思い巡らしてみるのがこれといって思い当たることはない。無愛想だとか反応が悪いとか、そういうことなら毎日だろうが今さらそんなことでヒカルに顔を背けられるのも不自然だ。

――まあ、べつにいいか。考えるのもめんどくせえし。

そう思った時だ。

「来た来た！群竹ちゃん、スゲエじゃん！」

勇斗が駆け寄って来た。勇斗の興奮のしように遅刻しないで来たことがそんなに凄いことなのか？と、颯土はあっけにとられた。

「群竹ちゃんにこんな才能があったなんて全然知らなかったよ！」

勇斗は颯土の机の上に一冊の雑誌を広げた。

「はあ？」

颯土はますます訳がわからずに啞然とする。

「何だ、これ...？」

颯土が呆けていると祐輔もやってきて颯土の机を囲んだ。雑誌は『ピクチャーライフ』という写真投稿誌だった。アマチュアのカメラマンが撮影した写真が多数掲載されている。雑誌主宰の数々の賞が設けられているらしく、受賞した写真は紙面に大きくレイアウトされていた。颯土は見覚えのある構図をそこに発見した。グリーン衣装を纏う森の精霊の響と、黄色の衣装と髪飾りをなびかせて響の隣で笑うヒカルだ。ふたりの視線は交差し瞳に星が映るぐらいに輝いている。写真というスクエアにおさまったふたりがまるでファンタジー世界の住人のような幻想的な雰囲気を発散させていた。

「今月号の大賞だよ、この写真！」

勇斗が雑誌の写真をバンバン叩く。

「と、どうしてこれが...?!」

颯土はキツネにつままれたような感覚に陥った。自分はこの写真を雑誌に投稿した覚えはない。

――それが何でこんなことに...?!

反射的にヒカルを見ると、また視線を外された。それはそうだろう。写真におもいきりヒカルの顔が出ている。確かにこの写真を撮ったのは自分だ。受賞者の名前にもしっかりと「群竹颯土（十六才）」と書かれている。

「けど！俺は知らないぜ、こんなの！」

颯土は無意識にヒカルに詰め寄るようにして訴えたが、ヒカルは顔を赤くしたままこちらを向いてくれない。

「犯人はうちの兄貴なの...」

空気を読みながら申し訳なさそうに近づいてきた麻耶が、手にしていた同じ雑誌を机に置いた。

「結野の...?」

文化祭の時、麻耶が颯土に渡した一眼レフは兄が所有しているカメラだった。麻耶の兄は出版社でカメラマンの仕事をしているため、カメラを返す時に現像も頼んだのだが.....、

「出来た群竹くんの写真たちを凄く気に入っちゃったみたいで、自分の会社の投稿雑誌にそのまま投稿しちゃったらしいのよ...」

それが、大賞を取ってしまったということになる。颯土は啞然とした。

「そのまま投稿したって.....」

「編集部にポン、と持ってったって言ってたよ。あ、でも審査は公平にされてるから受賞に嘘はないからね！」

「そうじゃなくて.....っ！」

撮影した者、被写体になった者の了解も得ずに、ということを颯土は言っているのだ。

「いい写真じゃないか、これ...」

祐輔が雑誌に見入ってしみじみと呟いた。

「あの文化祭の光景を思い出すよ。あれはよかった...」

「うん。不思議な世界だったよねえ.....」

祐輔と麻耶はふたりでうっとりとして頭の中に文化祭のステージを再現させる。

「よくないっ！」

それまで黙ってそっぽを向いていたヒカルがやっと口を開いた。

「ヒビク先輩も一緒に写っちゃってるんだよ？今頃二年生の階でも大騒ぎになってるよ、きつと...」

ああ、そうか...、と一同は納得した。

「ゴメンね、ヒカルちゃん。全ては兄貴の責任だから！風間先輩にもあとで謝りに行ってくるよ」

「でもこれ.....、」

写真にじいっと見入っているあかねが言った。

「...凄くキレイだよ。風間先輩とヒカルちゃんがとっても素敵。なんだかせつなくなるくらいに...」

「よくシャッターチャンスをとらったな」

「偶然だよ...」

祐輔の言葉に颯土は不機嫌に言い返した。

「でね...、うちの兄貴、群竹くんに会いたって...」

「俺に？何で？」

「これは兄貴の弁だからね、私に文句言わないでよ？」

と、麻耶はしっかり前置きをしてから、さっさとこれを言ってしまう、というような早口で告げた。

「センスがいいから写真の勉強をしてみないかって」

――は？

颯土にとっては全く考えてもいなかったことだ。

「それで、今日の放課後来るって」

「今日？！」

突然のことでさすがの颯土も戸惑った。

「だから、兄貴の弁だって言ったでしょう。私はちゃんと伝えたよ。あとは群竹くんが自分で決めてよね。嫌だったらすっぽかしたってかまわないんだからね！」

ずいぶん勝手な言い分だ、と颯土は思った。写真の勉強なんかする気もない。

――どうしてそんな話になるっ。

「賞金十万円かぁ...。いいなあ、群竹ちゃん」

「アイス、何個奢ってもらえるかな」

勇斗とあかねがそんな話をしているが...

「じゃあ、それは私が貰うから」

と、ヒカルが颯土の前にスクッと立った。

「ああ？」

颯土は席に着いたままヒカルを見上げる。

「モデル代高いんだからね、あたし！」

ヒカルは手のひらを颯土の前に差し出し、ニマツと笑った。

◇

昼休み、颯土が購買部に続く廊下を歩いていると、向こうから響と田村が来るのが見えた。

――やばっ！

颯土は咄嗟に踵を返した。が。

「あ、こら！なんで逃げんだ、群竹っ！」

颯土の行動に気づいた響がすかさず追いかけて来た。

――まじっ？！

颯土は思わず早足になる。

「なにになに？群竹と追いかけてっこ？面白そう！」

「そ、そんな！」

田村にまで便乗されて、ついには廊下を疾走するまでに。

「おい！待てよ！」

ふたりがかりで追いかけられたらさすがに逃げ切れない。諦めて速度を緩めた途端に追いつかれ、ふたりの先輩に両脇を押さえられた。

「何で逃げるんだよ」

「追いかけてくるからですよ…」

「逃げたから追いかけたんだろうが…」

う…、と颯土は言葉に詰まった。今朝の雑誌の件があったから、響の姿を見て何となく体が退く方向に反応してしまっただけだ。自分が投稿したわけではないが、響とヒカルを写した写真が受賞し賞金を得てしまうことにバツの悪さを感じている。

「さっき、麻耶ちゃんが雑誌のことで謝りに来たぜ？もしかしてそのことを気にしてるとか？」

「……まあ、そうです…」

すみません、と颯土はぺこっと頭を下げた。

「いや、べつに俺は気にしちゃいないぜ？けど、ヒカルはどうなんだよ」

「あいつは怒ってました」

「はは。モデル代よこせとか言われたんじゃないか？」

「そのとおりです…」

廊下で立ち話もなんだから場所を移動しようと言い出したのは田村だ。もう失礼します、という颯土を、たまには一緒にランチでもしようぜ、とふたりはむりやり音楽室まで連れて行った。二月に入った今、音楽室が屋上に代わるランチ場になっている。颯土は購買部に行く前に拉致されてしまったため、昼のパンを買いそびれていた。

「ほら、これやるよ」

田村が投げてくれたのはチョコデニッシュ。甘いものは苦手の颯土だが、ありがたく頂戴してパンの袋を破いた。

「じゃ、あれは麻耶ちゃんに写真係を押し付けられて、たまたま撮ったヒビクとヒカルの写真だったってことなわけだな？」

はいと答えながら颯土は文化祭の日を思い出す。あの時は劇中から何枚もの写真を撮り、一度フィルムを入れ替えた。カーテンコールの後の『ライジングサン』が始まったのはその入れ替えた直後。だが、その後自分がどんなふうに撮影をしたのかを覚えていない。颯土はそのことに今気がついた。

「じゃ、今度俺とかあかねとかの写真も見せてくれな？」

と、田村は言うけれど…、

「……現像した写真は全部結野が持ってるんで…」

あの時、何を撮っただろう？田村やあかねは撮っただろうか？夢中で撮影したことだけは覚え

ている。ただただ、ヒカルと響が輝いていたということと、ふたりの姿に惹き付けられた自分がいたということも。

「まあ...、ヒカルは怒ってるかもしれないけどさ、俺はあの写真、けっこういいと思ってるぜ」

今まで黙ってパンをかじっていた響が空いた袋をくしゃっと丸めてゴミ箱に投げた。

「ほんと、案外おまえ才能あるんじゃないか？じゃなかったら素人がたまたま撮った写真が大賞なんか取れねえだろ」

「ないですよ。偶然です」

颯土は考えるまでもなく答えた。偶然以外の何物でもない。

「いや、写真撮るってのは感性がものを言うだろ、たぶん」

ふいに立ち上がった響はピアノのトップを開き、綺麗な和音をポロンと鳴らした。

「音楽もそういうのあるよなあ、田村？」

「感性ねえ。そりゃあるんじゃないか？」

「音楽家の血で奏でる、写真家の血で撮る...表現されるのはそいつの持ってる中身というのかなんとか、そんな感じかな」

響の説明はよく分からないが、言わんとしていることは何となく分かった。いや、分かる気がした。

「俺は群竹のあの写真、かなり気に入ってるぜ？俺がいい感じに写ってたし」

響はニカッと笑った。

「ありがとうございます...」

「モデル料はヒカルの半額ってことにしといてやるぜ？」

「えっ?!」

冗談だよ！と響は笑った。

「だから、偶然だなんて言ってないで、ちっとは自分の才能を信じてみれば？大賞なんだぜ？」

そう言う響の顔は、さっきまでの冗談をどこかへ飛ばしていた。

「.....」

ちょうど予鈴が鳴り、響と田村は音楽室を出て行く。颯土もその後を追い自分の教室に帰ったが、五時間目の間中、腹の虫がグーグー騒いでいた。

ーチョコデニッシュだけじゃ菓子食ってるのと同じだし...。

チョコの甘い味がまだ口の中にいっぱいに残っている。それは不快とまではいかなくてもムズムズするようなくすぐったいような、颯土を落ち着かない気分にした。

放課後――。部活を終え、颯土が昇降口に行くと下駄箱の前にあかねが立っていた。

「……あ」

時々あかねはこのようにして颯土を待っている。そんな時颯土はあかねを自転車の後ろに乗せて駅まで送る。夏の合宿以来、付かず離れずのふたりの間でそれが暗黙の約束のようになっているのだ。

「これから麻耶ちゃんのお兄さんに会うんでしょ？」

あかねはふんわりと微笑んだ。

「…とりあえず」

だがそれは、写真が偶然に撮れた一枚であることと写真の勉強をする気などないことを間違いなく伝える為だ。

「だから、今日は送れないんだ…」

「ううん、いいの。ただ帰る前に群竹くんの顔が見たいなって思って待ってたただけだから…」

あかねが赤くなってうつむくと、颯土も全身がむずがゆくなり、あかねの言葉に反応が出来なかった。

「伊藤くんたちが言ってたように、いい写真だと思う。だから…、」

急いで結論を出さないでね、とあかねは言った。

「……」

颯土は返答が出来ないまま昇降口を出た。すると――。

「いやぁ！群竹くんだね？！」

いきなり明るい声をかけられたと思ったら、声の主が駆け寄ってきて颯土の手を握った。

「は、はい…」

ぶるんぶるん振られている自分の手と、手を握っている男の顔を見比べながら颯土がうろたえていると、男の傍にいた麻耶が飛んできた。

「兄貴！それじゃただの不審者だから！群竹くん、ごめん。これ、うちの兄貴」

どうもはじめまして！と麻耶の兄、純平は笑った。切りっぱなしのようなザンバラな髪がやや鬱陶しいが、丸い瞳は子どものような輝きを放っている。

「会いたかったよ！群竹くん！」

純平はにこにこことこぼれるぐらいの笑顔で握ったままの颯土の手をもう一度振った。苦手なタイプだ！と、颯土は直感した。

「それじゃ私はこれで帰るから。あかね、行こう！」

麻耶は昇降口の前で立ち尽くし、ふたりの様子を見守っているあかねを呼んだ。

「結野？！」

颯土は思わず情けない声を上げて麻耶を引き止めるが、

「ふたりで話した方がいいでしょ？だって私、関係ないから」

麻耶はシビアに言い放ち、あかねを伴いスタスタと行ってしまった。

——関係なくないだろう。もとはと言えばお前が文化祭の時に俺を写真係にしたからだろうが！

颯土は心の中で叫ぶが、麻耶はもうすでに道の角を曲がって消えていた。あかねが何度もこちらを振り向いていた。

「んじゃ群竹くん、行こうか！」

純平は颯土の手を引いて歩きだした。

純平は颯土を駅前の珈琲屋に連れて行った。その道中、純平はしゃべりっぱなしだった。颯土が聞いてようがまいが一人で喋って一人で笑っている。普段慣れていないぶん、颯土はそれだけで疲れてしまった。やっぱり断るのが正解のようだ。

「俺、写真の勉強をする気はありませんから」

テーブルに着くなり颯土は結論を口にした。話を長引かせて純平のペースに巻き込まれでもしたらたまらない。

「えっ？」

純平は目を丸くする。

「あの写真は偶然なんです。別に何も考えずにシャッターを切った中の一枚なんです。だから俺はセンスがあるわけでもないし、写真が好きってわけでもないんです」

颯土の話を純平は煙草に火を点けながら聞いていた。

「何だ、しゃべるんじゃない」

「は？」

「いや、麻耶から聞いていたからさ、キミの性格」

どうせ無愛想な奴だとか何だとか言ったんだろう、と颯土は思った。

「無口で無愛想だって」

ほらな、と颯土は思う。

「だからこそこの写真なんだな、って思うんだけどね」

「え？」

「ここに全部つまっているよ、キミの言葉」

純平は雑誌に掲載された写真をひきのばしたものをテーブルの上に置いた。

「だから、それは…」

「これでもかい？」

純平は別の写真も次々とテーブルに並べる。

——あ…っ！

颯土は思わずテーブルの写真に顔を近づけ見入った。

「キミは僕が麻耶に貸したカメラでこの被写体を全部で二十四枚写していた。その全てに言葉があるんだよ。何も考えずにただシャッターを切っただけなら、この中にはアングルがずれていたりピンボケしていたりや見られない写真が混ざっていたりするのが普通さ」

「二十四枚……」

純平の話が耳を通り過ぎて行く中で、二十四枚という言葉だけが颯土を捉えていた。テーブルに並んでいる全てがヒカルと響を写した写真ばかりだ。あの時、フィルムまるまる一本、ふたりを撮っていたということだ。だが、その時の記憶が自分にはまるでない。

「...実際、もう一本のフィルムの方はかなりピンボケがあったからね。ほら」

劇中に撮影した方を見せられて颯土は絶句した。演技中のあひるとか白鳥とか森の精霊たちは見る影もない姿で写っている。麻耶がいつまで経っても撮った写真を持って来ないわけが分かった。こんな写真ではヒカルもあかねも怒るだろう.....。

——俺を写真係になんかした結野の責任だよな。

と、颯土の頭は純平の話よりも、ピンボケした方の言い訳に向いていた。

「ん？どうしたの？」

いや...、と頭をかいて颯土は苦笑した。

「ね？こっちはこんな写真ばかり。これこそ何も考えないで撮ったんだろうね。オートカメラに慣れている人がマニュアルで撮るとだいたいこうなるしさ。でもね、」

純平は短くなった煙草を灰皿に押し付けた。

「こっちの二十四枚にはそれがないんだ。被写体の表情、雰囲気がこの上ない状態でよく撮れているだろ？撮影条件としちゃあんまりよくない会場だったと思うけど、それでもこんなに鮮やかにさ。無意識だったかもしれないけれど、キミは動く被写体をよく見てシャッターチャンスを狙いながらピント調整を完璧にやって撮ったからなんだよ？」

——シャッターチャンス...。

そんなものは狙った覚えはない。ただ、ヒカルと響、ふたりの姿を追うのに夢中になっていただけだ。

「これを撮った時のキミは何か心動かされていたはずだ。それは言葉には現せないほどのものさ。ただ、その瞬間を大事にしたい、その瞬間を美しいまま残したいというキミの想いが被写体にズームし焦点を合わせた。結果がこれら写真の中の言葉たち」

颯土は自分が撮った写真たちを見つめる。この表情もこっちの仕草も、今、ファインダーから見たそのままの絵が脳裏に鮮やかに浮かんで来た。さっきまでまるで覚えていなかったあの時のことが次々と蘇ってくるのが不思議だ。

「いい写真を撮る人間はたくさんいる。けど、こんなに素朴でなおかつ言葉のつまった写真を写せるカメラマンを僕は自分を含めてあまり知らない。このふたり、特にグリーンの方はせつないね。こうやって顔にはペイントしてるし衣装で化けてはいるけれど、この被写体、心はせつない海に吞まれてるようだよ？そして、その上にはキミの感じた想いが重なっているんだ。だからこの写真はこんなにも幻想的な世界を醸し出しているんだと思うんだ」

颯土には純平の言っている意味がよくわからなかった。だが、あの時感動していたことだけは確かだ。響とヒカルが眩しかった。見終えてしまうのが惜しいと思うほど、ずっとこのまま見続けていたいと思うほどふたりが輝いて見えた。だから夢中でシャッターを切った。それはまったく純平の言う通りだ。

「これは僕が現像したんだけど、現像液から浮かび上がってくる瞬間だけでもなんだかぞくぞく

しちゃってさ。で、そのまま編集部に掲載しちゃったの。締め切りも間近だったし。ごめんね？」

そのことに関しては大いに文句を言いたい颯土だが、

——写真の中の俺の言葉って…、

どんな言葉なのだろう——。純平には分かるようだが颯土自身はまったく分からない。

「まあ、キミはまだ高校生だし、勉強するといっても特別なことをするわけじゃないんだよ。感性を磨くっていうのかなあ。時間がある時に僕と一緒にロケとかに行ってみないか？」

「ロケ？」

「僕、今は会社の命令で動くカメラマンだけど、いずれは自分の写真を撮る写真家になりたいと思ってる。だから時間がある時に色々なところに行って写真を撮っているんだ。人間と空間、これが僕のライフワーク」

「人間と空間…？」

「そう。人間とそれを取り巻く空間、反対に言えば限られた空間の中で生きている人間の自然な姿を写してそこにある哲学を見出してみたいんだ。いずれはそれをテーマに個展も開きたいし写真集なんかも出せたらいいな～、というのが僕の夢かな」

純平はおちゃめに笑った。

「はあ…」

夢…ね、と颯土はややしニカルに思った。

「まあ、僕は別にキミをカメラマンに育てようとかそんなことを考えているわけじゃないんだ」

「じゃあ、何故俺に？」

「キミの言葉が好きになったから、かな？」

「その言葉っていったい…、」

「うーん…、説明するのは難しいけど、この写真を見た時にキミという人間に関わってみたいと思ったわけ。僕にとってもなんかこう、刺激になるし勉強にもなるんじゃないかな～、なんてね。どうかなあ？」

わけが分からない。自分なんかと関わったって哲学の勉強なんかにならないだろう、と颯土は考えた。人と関わるのは面倒だ。ここはやはり、キッパリと断った方があとあと面倒がない。響やあかね、祐輔たちがどんなにこれを称賛し、才能うんぬん言ってくれたとしても——。

「やっぱり俺は…、」

「あーっ！即答しないで少し考えてよ。今年の夏に少し休暇が取れるから沖縄に行こうと思っているんだ」

——え？

沖縄、という言葉が颯土の琴線に触れた。

「…沖縄ですか？」

「そう。前に会社の仕事で撮影に行ったことがあるんだけど、もういちどゆっくり自分の写真を撮りたいと思ってさ」

——沖縄…。

颯土の目の前にその風景が見えた。澄み渡る青空から降り注ぐ光のシャワー。キラキラと輝くグリーンの海。真っ白な砂浜の上に点々と残るひとつの足跡。写真の中から伝わる乾いた風、熱い陽射、そして懐かしさを覚える雰囲気。いつまで見ていても飽きないほど、胸のどこかが苦しくなるぐらいの強い刺激を与えられた雑誌の写真にあったあの風景――。

「これ...、」

颯土はカバンの中からその雑誌を出した。

「ああこれ、うちの雑誌じゃない！」

純平はそれを開こうとしたが、何度も繰り返し見ているそのページは勝手に目の前に現われた。

「これ、僕が撮った写真」

純平はやや目を丸くしてから、嬉しそうに写真を指差した。颯土が何度も何度も見返していた風景写真を。

「...夏...に行くんですね？」

「そう、一緒に行く？」

――行きたい。

素直にその想いは胸の奥から溢れてきて、

「バイトして金ためます」

と、颯土は答えていた。

「本当かい？うれしいなあ！賞金も入るしね！」

――それは、モデル代に消えそうだから...。

「僕は結野純平、よろしくな！」

純平は嬉しそうに笑った。颯土がふと雑誌に目を落とすと、そこには写真を撮ったカメラマンの著作権表示がある。

PHOTO BY JUNPEY YUINO

自分を夢中にさせた写真を撮った人物を目の前にして、颯土は何とも言えない不思議な気持ちがしていた。

今日の勇斗は変だった。授業中にあかねが鉛筆を床に落とすと、ずいぶん離れた席から飛んできて拾ってくれたり、教科書を忘れたと麻耶が言うと、自分の教科書を差し出してくれたり、ヒカルがハムカツパンが食べたいと叫ぶと、まだ終業のベルが鳴らないうちにコッソリ教室を抜け出して購買部に走ってくれたり。だが、三人の女子が部活に出ようとした時、突然脱力して大きなため息を吐いたのだ。

「大久保くんどうしちゃったんだろう？」

「ちょっと怖かったよね...」

そんな話をしながらヒカルとあかねは部活の音楽室に向かっている。

「そういえば麻耶ちゃんが言ってたけど、群竹くん、夏に麻耶ちゃんのお兄さんと沖縄に行くことになったんだって。あかねちゃん、群竹くんから聞してる？」

あかねは一度驚いてから、首を横に振ってため息を吐いた。颯土が純平と放課後に会ったのは一週間も前だが、話の内容がどうだったのかという話をあかねは颯土からは何も聞いていない。

「群竹くん、あかねちゃんにも話してないの？」

「自分のことを自分から話す人じゃないもん...」

そもそも、颯土と会話というものをほとんどしない。教室で席が前と後ろでもひとことも言葉を交わさないで一日が終わる日もあるし、昇降口で待っていれば駅までは送ってくれるが、自転車の後ろに乗せてもらってもほとんど会話は無い。それでも、颯土が自転車の後ろに乗せるのはあかねだけだから、クラスの皆はもちろん、一年生たちの間では公認のカップルということになっている。おかげで一部の女子からはあかねに対する風当たりが強い。あんな颯土でも女子からの人気だけはあるのだ。本人同士はハッキリした関係ではないのに、そういう周りの認識に戸惑っているあかねだ。

「...はあ」

肩を下げ、息を吐くあかねにヒカルは言った。

「あかねちゃんと群竹くん、似すぎだよ！どっちも引いてばかりじゃ前に進めないじゃない！」

「そんなこと言たって.....」

「あっちはどうやったって自分から押すタイプじゃないんだから、あかねちゃんが押さなくちゃ！明日のバレンタインはしっかりと奇襲をかけること！」

奇襲？！とあかねは飛び上がった。

「どうせ、群竹くんは明日がバレンタインだってことも頭がないから！ちゃんと用意はしてあるんでしょ？」

「一応.....」

甘いものが苦手な颯土のためにビターチョコを、デパートの専門店で買ってきてある。

「じゃ、それをしっかり手渡すの！分かった？」

うん...、とあかねは小さく頷いた。

そしてヒカルとあかねが音楽室の扉を開けると、

「あれ、お前たち？今日部活やる気？」

顔を見るなり双子の太郎が言った。

「え？やりますよ？どうしてですか？」

「いや...、どうしてって、そうあっさり切り返さなくても...」

太郎だけではなく、田村や響までヒカルはどうして？にやや意気消沈したようだ。だが、ヒカルとあかねにはその理由が不明だ。

「変な先輩たちですね？色々引き継がないとダメなのに部活やる気？って訊かれたこっちの方が悲しいんですけど...」

一年生たちは来年度の部活動を仕切らなくてはならないため、どの部でも二年生たちから引継ぎを受けている。秋の新人戦で優勝を決めた麻耶は剣道部の時期部長に、勇斗も空手部の部長に指名されていた。演劇部と軽音楽部は、現二年生が抜ける来年度は両部ともヒカルとあかねのふたりだけになってしまう。これは両部の存続に関わる大問題だから、ふたりとも部の引継ぎと今後について真面目になっているというのに、呑気な太郎の発言には首を傾げるヒカルとあかねだ。

「.....まあ、とりあえず俺たちは三年になっても夏までは残るから人数的には大丈夫さ」

むくれたヒカルをなだめるように響が言った。

「でもそれって人数だけですよね？先輩たちが部活に出てくるわけじゃなくて...」

時期部長に決まっているあかねは来年度の活動が今から心配でたまらない。響や田村が抜けた後の軽音楽部がどのようなになるのか、まるで想像もつかないからだ。

「まあ、そうなるかな...。新一年生の多数の入部に期待するしかないなあ」

あかねは、はあ...、とため息をついた。

「それが出来たら悩まないよね、あかねちゃん」

「うん...」

今年の新入部員はヒカルとあかねだけだった。響たち五人が抜けた穴が埋まるほどの新入部員が集まるとは思えない。

「春のオリエンテーションでインパクトのある勧誘活動をすれば何とかなるだろ」

「そうですね...」

「まあ、心配するなって。俺たちが何とかするから！」

と、響が言い切った時だ。扉がガラッと開き、演劇部の小夜子がバタバタと駆け込んで来た。

「風間くん、大変！こんなのが学校に届いたの！」

小夜子は一通の封筒を響に差し出した。

「何だ、これ？」

「そこの墨川中学から。三月の三送会に『みにくいあひるの子』を中学の体育館でやってほしいっていう手紙！」

小夜子は早口でまくしたてる。

「はあ？マジ？」

響は驚いて封筒の中身を開けた。確かに、墨川中学の三年生学年主任の教師から本城高校演劇

部顧問宛てに届いた依頼の手紙だった。

「顧問は私たちにまかせるって言うの。どうする？」

「そりゃやるだろ、もちろん！なあ？！」

響がメンバーにふると、一同は当然といった調子で同意した。その中でヒカルだけが苦虫をかみつぶしたような顔をしている。

「ヒカル、不満か？」

響はヒカルの仏頂面を覗き込んだ。

「...小夜子先輩、依頼は一件だけですか？」

ヒカルは不満の表情を隠さずに言った。

「そうだけど、どうして...、」

「あっ！」

一同が同時に叫んでヒカルを指差した。

「お前、何かやったな？！」

と、響。

「何かって...、文化祭の時、招待状を出したんです。私たちの『みにくいあひるの子』を見てもらって、もしも気に入ってもらえたらいつでもどこでもお邪魔して公演しますから呼んでください！って添え書きして...。この界隈の小学校、中学校、養護学校の全てに出したのに一件だけだなんて！」

言ってヒカルはむすっとした。

「営業したわけね...。それにしてもいつの間にそんなこと...」

小夜子はあきれ、響はニヤッと笑う。

「まあいいじゃないか。よくやったな、ヒカル！これはきっと来年の勧誘活動にもいい宣伝になるぜ！」

「んじゃ、こんなことしてられないなあ。明日からでも練習を始めないと感覚取り戻せない！」

文化祭から既に三ヶ月が経過している。あれから両部はそれぞれの活動に戻っていた。

「こんな年度末押し迫った時期に部活が忙しくなるなんて思わなかったわ...」

小夜子は少し困惑した様子だ。

「そうなんですか？どんな時期だって退屈しているよりは忙しい方がいいですよ」

「ヒカルの言う通りさ。せっかく合宿までして作り上げたみにくいあひるの子なんだぜ。どんどんやらないともったいない！」

という響に、もったいないのはダメですよ、とヒカルが笑う。

「ホント、活動しようと思えばその舞台はいくらだってあるのね...」

小夜子はしみじみとした口調で言い、台詞覚えているかしら...と呟きながら音楽室を出て行った。

明日からはまた両部で合同練習だ。さっきまで来年のことで沈んでいたあかねもやや気を取り直し、ヒカルはほとんどお祭りのように浮かれている。そんな時――

「ところでヒカルちゃん？今日って何日だか知ってる？」

響に優しく「ヒカルちゃん、なんて呼び方をされてヒカルは目を丸くした。

「今日は二月十三日ですけど？」

「二月十三日っていう日は特別な日じゃないのかね？」

「とくべつ？」

ヒカルはあかねと顔を見合わせた。バレンタインデーは明日だし、あかねの誕生日は二月三日だし特に思いつかない。ヒカルがひとつだけ思いついたことといえば。

「おじいちゃんの命日ですけど…」

おいおい、と響は脱力した。

「やっぱヒカルだよ」

「まあ、期待はしちゃいなかったけどな」

「ふたりとも普通に部活に出てくるぐらいだし」

響だけではなく、田村たちにも口々にわけのわからないことを言われ、ヒカルの鼻がみるみるうちに膨らんでいく。

「なんでそんな風に言われなきゃならないんですかー？二月十三日に特別なことなんてないもん！もういいですよ～だ！明日は先輩たちにはな一んにもあげませんからっ！」

――せっかく、今日の帰りにいつものコンビニで、おこづかいをたいてバレンタインチョコを買おうと思っていたのに、やっぱりあんまん買っちゃおう！

「なんだ、分かってたんだ。安心したぜ」

今度は響たちは口々に、さすがヒカルだ、とか、可愛い後輩だ、とか言い出した。ヒカルとあかねはまた顔を見合わせた。

「んじゃ、とびっきりの愛情こもった手作りチョコを期待しているぜ！」

――はっ？手作りっ？！

顔を見合わせたままふたりは硬直した。手作りなんて考えもしなかった。あかねは市販のチョコだしヒカルもコンビニだし――。

…部活なんかやってないで手作りチョコを作れってことだったんだ…。

…そうみたい、だね…。

…大久保くんが変だったのもそれ？

…そうかも…。

ふたりはコソコソ囁き合う。奇襲はやっぱり手作りチョコの方が効果的かもしれない…、とあかね。義理と本命の差をさり気なくつけやすいかもしれない…、とヒカル。そしてふたり、よし、と心に決めた。

――あんまんはやめてお菓子作りの本、買って帰ろう！

「じゃ、じゃあ私たちこれで帰りますね！明日、楽しみにしててください！」

言うが早いか、ヒカルとあかねはさっさと音楽室を出て行った。

「明日楽しみにしてろなんて、あんなんじゃないか……」

と、田村がぼそりと呟くと、

「……そうだなあ……」

響も苦笑した。

あかねのバレンタイン奇襲作戦はとりあえず実行はされた。だが、成功したかといえば微妙だ。いつものように放課後に昇降口で待っていると、颯土は駅まで送ってくれた。約束をしていたわけではないからこれで奇襲は成ったことになる。だが、待っていると送ってくれるのはいつものことだから特別感は何もない。普段と特に何も変わらずただ黙って自転車をこぐ颯土に対して、あかねの方は手作りしたチョコレートはどうやって渡そうかとひたすら考えているうちに駅に着いてしまった。駅の前で自分を降ろし、そのまま方向転換して帰ろうとする颯土を呼び止め、あかねはそこでやっとチョコレートを手渡した。颯土は一瞬だけ照れくさそうな目であかねを見たが、それだけ。サンキュと言って、あかねからのチョコをしまおうと開けたスポーツバックの中には、可愛い包みや袋が多数入っていた。

ヒカルの方は、前日の夜中までかかって初めてのチョコレート作りに挑戦した。溶かしたチョコをカップに流し込む時にはみ出してしまったり、トッピングの形が崩れてしまったりと、お世辞にも上出来とは言えない出来栄えだったが、それらひどい失敗作は、田村や双子の先輩たちと勇斗や祐輔にあてた。颯土には作らなかった。お隣さんでさらに仲良くなるためには義理チョコのひとつも配りたいところだったが、たとえ義理とは分かっているにしてもきつといい気分はしないだろうあかねの気持ちを慮ったのだ。そして、響には形よくキレイに仕上がったものに特別なトッピングを飾った。出来上がったハートチョコに溶かしたホワイトチョコレートで音符の形を描いたのだ。合宿所の談話室で、ピアノを弾くようにしてテーブルを叩いていた響が今でも深く心に残っている。あの時、響がサラサラと書いていたのは音符だった。響といえば音楽。音楽といえば響。もう、ヒカルの中にはこの方程式が刻みついている。

「あかねからは無し?! 義理も無し?!」

そう文句を言う田村に、

「あかねちゃんは本命一筋なんです。その代わり私があかねちゃんの方まで手作りしましたからね」

と、ヒカルは手作りチョコを先輩たちに配布した。響にも同じように手渡した。ラッピングも渡し方も同じだが、中身とハートだけは特別、と心で思いながら――。

そんなバレンタインデーの放課後。部活を終えた響たちはいつものように連なって駅までの道を歩きながら、本日の収穫物についてガッカリしたり笑ったりそれぞれの感情を呑みこんだ。ヒカルからのチョコをその場で開けてパクパク食べる響に、

「そんなもったいない食い方すんな!」

と、田村はやけにカリカリした調子で怒った。

「なんで? もらったものはありがたく、頂きます、するのが礼儀だろ」

「それはヒカルの手作りなんだぜ? 歩きながらバクバク食うな! もっと大切にかみ締めていただいけよ」

「あのね、俺にはそんな暗い趣味はねえの」

響は鼻でフン、と笑ってさらに袋の中に手を入れた。小さな袋にハートの形をしたチョコレー

トがたくさん入っていた。たとえ皆と同じに配られた義理チョコだったとしても、ヒカルのは今ここで全て食べつくしたいと思った。

――ヒビク先輩、だもんな…。

もしかしたら、今日は特別な日になるのではないかとほんの少しだけ期待していた自分に笑った。だが、ヒカルはやっぱりヒカル。自分はヒカル所有の好きな人リストの中にいるヒビク先輩、なのだ。そして、今はそれでいいと思っている。この関係でいけば、それはずっと繋がっていくものだから。あんなにも独占したいと思っていたことが嘘のように、今は穏やかにヒカルの傍にいられる。

――まあ…、田村たちにも同じバレンタインチョコ配られた時は妬けもしたけどな…。

八分音符を模ったトッピングはすこしいびつだが、ポンと口の中に放り込むと甘い味と共にヒカルがくれた言葉たちが全身に広がっていく。

『ヒビク先輩の`響、は`ヒビク、ってことだったんだなって思うんです』

『ヒビク先輩は先輩らしく響いていますね』

『先輩しか響かせられない強烈で、どこか温かい音色が聴こえる気がする。あたし、国宝級の音痴だからきっと分かるんですよ』

国宝級音痴のヒカルは今も立派に音痴だ。だが、響の歌にだけはピッタリと合わせてマラカスを振る。互いに響き合うことが出来る――。

もっと自分らしく響いていくために、響には今、ひとつの決意があった。それは、夏の湖畔でヒカルとの時間があったからこそ向き合うことが出来た、父への想いに対する決着になるだろうことだ。その決意に覚悟はあるが、やはり怖れがあるのも確かだった。だが、

――ヒカルのチョコと、この音符のおかげで勇気が沸いたぜ。

響はもうひとつ、音符のチョコを口に放り込んだ。その時だ。

「ははっ！いつまで経ってもチビだな！こんなのも届かないのかよっ！」

通りかかった公園の中から、蔑んだような口調の声が聴こえて響は足を止めた。外灯の明かりの中に、五、六人の学生服を着た中学生がいた。その中で極めて体格も背丈も小さな少年が目についたが、他の少年のひとりが何かを手にしてそれを頭上高く上げている。

「ヒビク、どうした？」

少し先に行っていた田村がついてこない響を振り返った。響が公園の中を顎で指すと田村は怪訝な顔をしながら戻って来た。そしてふたり並んで、少年たちの様子を見守った。

「返してよ」

「自分で手を伸ばして取り返せよ」

高く上げられているのはどうやら小さい少年の持ち物らしいが手を伸ばしても届かない。それだけその少年は小さかった。

「おまえ、本当に中学生なの？ほんとに小学生なんじゃない？」

「小学校に戻った方がいいぜ～？」

「もう中学に来るなよ！」

――おまえ、本当に日本人なの？そんな金髪のくせに！

——金髪なんだからアメリカ人の名前にしたほうがいいぜ！

——ここは日本の学校だぜー。金髪のヤツはもう来るなよ！

真っ黒い学生服と少年たちの光景に、響は忘れていない過去の自分をそこに見た気がした。気がつくと公園に足を踏み入れ、少年が手にして高く上げていたものを、さらに高いところからひょいとり上げていた。

「お前ら、何やってんだ？」

少年たちは響を見上げた。

「なに、やってんだ？」

響はもう一度訊いた。

「別に何もしてないです」

響に手のものを取り上げられた、見かけはいかにも真面目そうな少年が答えた。

「そうは見えなかったぜ。じゃあ、これは何だ？こいつの持ち物なんだろう？」

響が取り上げたのは名前が入った体操着袋だった。

「僕たちはここで、ただ遊んでいただけです」

相手は間髪入れずに切り返してくる。響はぐるり、と少年たちを見回した。

「……そうか。じゃあもう帰れ。お前も帰れ」

響は小さい少年に体操着袋を返し、その小さな頭をポン、とつかんだ。響の隣に立つとその少年はますます小さく見え、その差は親子のようだ。少年たちはクスクスと陰険な笑いを漏らした。

「何だ、お前ら。何がおかしい？」

そう言う響の声は低く響いた。傍にいる田村も思わず背筋が寒くなるような凄みのかかった声だった。

「い、いえ、別に…」

さすがの少年たちも首をすくめて小さく言った。

「人間の価値は見てくれで決まるもんじゃないぜ。覚えておけよ」

響は少年たちひとりひとりに鋭い視線を投げる。

「し、失礼します…」

少年たちはすすごと公園から立ち去って行った。

「おい、お前」

響に呼び止められて、小さな少年は振り返った。

「お前は何も悪くねえんだ。卑屈になるんじゃないぞ！」

「はい…！」

少年はペコリとお辞儀をして走って行った。

「めずらしいな、ヒビク」

田村が響の肩に手を置いた。

「おまえが中坊のいざこざに口出すなんてさ」

「は…。確かにな。今までだったら素通りしたんだろうけどさ、一応俺たち来月墨中で『みにく

いあひるの子』やるだろ。あいつら、墨中のガキだったぜ」

「そういやヒカルの妹も墨中でイジメに巻き込まれてるみて一なこと言ってたな」

「...どこにでもあるんだろうけどな。ああいうくだらねえイジメはさ」

「あったもんなあ...、俺らの時も。本城高校が平和だからすっかり忘れちゃってたけどさ」

ああ、そうだな、と響は頷いた。子どもの頃から理不尽に受けてきた蔑みは中学に入ってから続いた。金髪という派手な外見を持ちながら父親がいない、そんな境遇を面白半分のからかいのネタにされ、吐かれる暴言、陰口はさらに陰湿にエスカレートしていった。

真っ黒い学生服に映えすぎる金髪――。

普通であれば中学生にはあってはならない頭髪だ。響の髪は天然のものだったが、あまりにも目立ちすぎるということで中学に入ってからしばらくすると学校は髪の色をなんとかしろ、と言ってきた。たとえ自毛であってもそんな鮮やかな金髪では、他の生徒に悪い影響を与えるという理由だった。もしも自分に、たとえアメリカ人であったとしても父親がいて、当たり前のように生活していたとしたら学校は同じことを言っただろうか、と響は思った。言わないだろう。アメリカ人の父と日本人の母の間に生まれた普通のハーフ、風間響として学校も友人たちも受け入れたはずだ。父親の無い私生児。しかも金髪。そのことが、どれだけ響と響の母を理不尽に傷つけたか分からない。境遇が個人の人格までも否定し、蔑んだ。

響は学校の言いつけを無視した。その態度に対しては何度も嚴重注意を受けた。だから響は訴えた。影響を受ける人間がいるとしたらそいつらの方に問題がある。自分に髪の色を変えさせようとする前にそいつらを指導しろ、と――。それから完全に問題児扱いをされるようになった。学校も敵、同級生たちも敵、という中で自分の誇りを守る戦いが始まった。その果てしなく長い孤独な戦いは、中学三年になって田村と同じクラスになるまで続いたのだ。

田村は理不尽な教師に対する反発から、わざと服装や髪型を乱している生徒だった。二人は自然にクラスのあぶれものになり、同じ場所――不良、問題児――そう呼ばれる位置にくくられた。それは、結果的にふたりが結びつくキッカケになった。それまで響の周りにいた友人たちとは違い、田村には人の心や痛みを思いやるという性質が備わっているだけではなく、響の誇りを守るために一緒に戦ってくれたのだ。響がシャツをオレンジにしたのはこの頃からだ。何もしなくても蔑まれる。金髪金髪と無駄に騒がれる。だったら金髪が霞むぐらいの派手な服装にしてやろう、と、そんな子どもじみた発想からのことだったが、そんな心情にも田村は当たり前のように共感し、じゃ俺も...、と頭髪に派手な赤いメッシュを入れた。

ふたりで校則を派手に破る――。

教師に追い回される日々だったが、それはこれまで縛られていた心の解放に繋がり、響が初めてかけがえの無いものを手に入れた瞬間だった。

「俺は...田村がいて良かったぜ」

突然真顔で言い出した響に、田村は目玉を丸くした。

「な、なんだよいきなり」

あの時、手に入れたかけがえの無いものは親友。

「今、自分で言って気持ち悪かった」

響は照れたようにニカッと笑った。今、過去から消えることなく自分の根元に在る父という存在と決着をつける――。

――そして、もっと俺らしく響いていく。

そうなれた時に、一番大切な宝に自ら手を伸ばしたい。だからそれまでは…、

―― `先輩、つきで我慢しておくぜ。

袋の中には最後に残ったひとつのチョコレートがあった。響はためらいながらもそのひとつに手を伸ばし、口の中に放り込んだ。

三月になり、校庭の隅にある梅の木がピンクの花を満開に咲かせた。本城高校では今日が終了式だ。そして、墨川中学では三送会が催され、演劇部と軽音楽部は『みにくいあひるの子』を公演しにいく。両部員たちは終了式への出席を免除してもらい、朝早くから楽器や舞台の大道具小道具を道路を挟んだ向かい側の中学に搬入していた。中学生たちはまだぼちぼちと登校してくる時間だった。

響とヒカルが本城高校に最後の荷物を取りに中学の校門を出ようとした時だ。いつかの公園にいた小さな少年が歩道の向こうからやってきた。少年の周囲に四、五人の同級生が囲んでいる。

「もう来るなって言ったよなあ？」

「小学校はあっちだぜ？」

「おまえには三送会なんか関係ないだろ」

彼らは、あははと高笑いをしながら朝から小さな少年をからかっている様子だ。響は立ち止まってその集団をジッと見つめた。

「ヒビク先輩？」

ヒカルも響の視線をたどって同じ集団を見つめる。視線に気がついた少年たちは、響の姿を見てビクンと立ち止まった。

「や、ヤバイ...！」

一人の少年が言うと集団は一瞬にして散開し、小さな少年ひとりを残してその場から消えた。

「よお！」

響は小さな少年に声をかけた。

「おはようございます...？」

少年は響が何故中学校の敷地にいるのか不思議に思っている様子だ。目を丸くして響を見つめている。

「俺？俺たち今日の出演者。あとで素晴らしい劇を見せてやっから楽しみに待ってろな！」

響は立ち尽くす少年の背中をポンと押した。

「はあ...」

少年は何が何やら分からずにポカンとしたまま、昇降口の中に入っていった。

「先輩、今の子知り合いなんですか？」

「ああ。まあね」

響はにやりと笑う。その時、

「ヒーねえ！」

今、登校してきた久美子が校門から手を振りながらヒカルの元に走って来た。

「朝早くからご苦労様です！」

久美子はヒカルと響の前に立つとペコリと頭を下げた。

「あっ、ヒビク先輩、これ妹の久美子です」

久美子は遠慮なしに響の顔をじろじろ見つめ、

「この方が噂のヒビク先輩なんだ？うわ～っ！超カッコイイんだ！」

と、無邪気に叫んだ。噂のヒビク先輩？と、響はヒカルを見下ろして首をかしげた。

「前に熱出したヒーねえを送ってくれたんですよね？お母さんもカッコイイって言ってたし、ヒーねえはいつもヒビク先輩の話をしてるし、あたしもいっぺん会いたいなーってずっと思ってたんです！」

「へえ～、ヒカルが俺のこと話してるんだあ？何言われてるんだかなあ？」

「ちょっと久美子！あんた何べらべら喋ってんのよ、早く行きなさいって！」

ヒカルはうろたえて久美子の背中を押した。響の話は確かにしている。一日一回以上は必ず、ヒビク先輩という名を家でも口に出す。それをこんな風に久美子に暴露されて、ヒカルは真っ赤になっていた。

「アハハハ！失礼しました！劇、楽しみにしてまーす！」

久美子はペロッと舌を出した。姉にそっくりなその仕草に思わず響が笑ったとき、

「おはよう、浅倉さん」

久美子の横を三人の女子生徒がスッと通り過ぎていった。

「おはよう…」

久美子はやや牽制しながら言い返した。一瞬の間でも分かったその空気の変化に、ヒカルと響は顔を見合わせ、それから久美子に声をかけた三人の女子に目を向けた。

「今日の送別会で劇をやってくれる高校生たち、浅倉さんの知り合いなの？」

「まあね…」

ふ～ん…と、三人は顔を見合わせながら意地悪な目で久美子を睨むと昇降口に消えて行った。

「何？あの子たち」

「あいつらだよ、ずっと私が戦っている相手。これで教室に行くとまたなんだかんだと…。毎日の日課が始まるんだ…」

久美子はいんざりといった調子で言う。だが、ため息は吐かない。

「ちょっとあたしが文句言ってきてやる！」

鼻の穴を膨らませて意気込んだヒカルの手を、響はガチッとつかまえた。

「ヒカル、今はいい」

響は静かに言う。

「今は…？」

「そうだ。とにかく早く荷物を運んじまおう」

響はヒカルの手をつかんだまま中学の校門を出ようとする。

「そ、そうですね…。じゃ、久美子、またあとでね！」

ヒカルはそのまま響に引っ張られ、道に向かい側へ横断して行った。

「ヒーねえにはもったいないぐらいの美男だったなあ…」

ふたりの様子を見守っていた久美子は、思わずポツリとつぶやいた。

◇

そして、体育館に続々と中学生たちが集まり出した。わいわいがやがやと行儀悪く騒ぎふざけ

る中学生たちは、いつまで経っても静まる様子がない。幕の後ろから客席の様子を伺っている小夜子たちは肩を落とした。どう見ても中学生たちはこれから始まる高校生の演劇を真面目に観劇しようとする態度ではない。ある程度の予想はしていたことでも、ここまで収拾がつかない状態を目にするとやはりショックだ。

「何だか嫌な雰囲気だな…」

スタンバイの態勢に入ったあかねがベソをかいた。小夜子たちも半分やる気をなくしているようだ。

「中学生なんてみんなこんなもんだよ。だけど、みんながみんなふざけているわけじゃないよ」

久美子やさっきの小さい少年は絶対に幕が開くのを待ってくれているはずだ、とヒカルはくじけそうな気持ちを精一杯持ち上げた。

「ヒカルの言う通りだぜ」

響が後ろから皆に声をかけた。

「俺たちの『みにくいあひるの子』はそんじょそこらのみにくいあひるの子とはワケが違うんだぜ？」

ニヤリ、と笑う響の目が怪しく輝いた。

「いつもどおりにやりましょう？お客さんがどうであっても私たちは私たちがいいんですよ、小夜子先輩！」

「うん。そうだよな」

小夜子たちは気合を入れなおして頷く。そしてヒカルは文化祭の時と同じように隣のあかねと気合を入れ合い、振り返って響と目を合わせた。

「大丈夫、心配すんな」

響の力強い言い方と笑顔でヒカルの緊張も一気にほぐれた。

そして開幕――。

だが、劇中もざわつきはおさまらなかった。おもむろに`ガキクセエ、`、`つまんねえ、`といったヤジを飛ばす者がいる。それでもヒカルや響たちは、自分たちの演技や演奏に手を抜かず真剣に舞台を進めた。一幕が終了する頃には野次はなくなり舞台に注目する視線も少しずつ感じられるようになったが、幕が下りた途端にまた中学生たちはざわつき出した。

「…まったくガキは持たねえなあ。一分と黙っちゃいられねえんだから」

幕が下りた中で太郎が毒ついた。

「ヤツらが『ライジングサン』をどう聴くか見ものだな」

田村が次の展開のスタンバイをとり、袖で待機するヒカルは幕の開閉を担当している教師に開幕の合図を出した。

開幕の最中から真っ暗なステージに徐々に明かりか灯り、響が唄う『ライジングサン』が流れ出す。張りのある歌声と完璧な演奏、そしてその中を舞う主人公エミーの演技に生徒たちはシンと静まり返った。そして二幕が進む間、客席のその状態は保たれた。

『みにくかったのはエミーではなく私の心でした』

『みにくい心も美しい心も全部自分の中にあるのよ。私もあなたたちもそれをしっかり見つめて

生きていきましょう。自分の心を自分で監視しながら』

『エミーが教えてくれたんだね。きっとエミーは神様のお使いだったんだ！』

本来ならここでゆっくりと幕が閉まる。舞台の袖で幕を操作する教師が閉幕の作業を始めようとしたとき、響がそれを手で制した。

「え？」

舞台の中央で演技したまま閉幕を待っていたヒカルたちは、予定外の響の行動に目を丸くした。響は後方から舞台の中央に歩み出ると、いきなり叫んだ。

「お前らぁっ！」

腹の底から出た叫び声に生徒たちは静まり返った。

「自分の隣にいる人間をよく見てしろ！」

中学生たちは言われた通りに周りを見回した。そして、響が次の言葉を放った時、その場の空気はそれまでとは一変したのだ。

「もしも自分の隣にいる奴がイジメをやってる人間なら、お前らはそいつのことを心から軽蔑しろ！」

「君、何を勝手なことを...！」

ざわつく場内。慌てだす中学の教師たち。だが、響はそれらに動じることなく続きの言葉を投げた。

「イジメをする人間は、てめへの愚かさをちっともわかつちゃいない！人の痛みを知らないアホだ！そういうアホは自分じゃそのアホに気がつかないのさ！お前たち、いつも一緒にいるんだ。誰がそのアホかよ〜く知っているだろう？！軽蔑してやれ！」

やがて、中学生たちの間で悶着がおこりはじめた。響の号令によって、今までいじめられたりそれを傍観していた生徒たちが、ある一部の生徒たちに冷たい鋭い視線を送り始めたからだ。小さな少年をいじめていたグループ、久美子をいじめていたグループ、それ以外にも冷たい視線を浴びる生徒たちの周囲から人が退き彼らは孤立しはじめた。

「先輩、どういうつもりなんですか？！こんなことはよくないと思います！」

ヒカルが響に抗議した。だが、響はニマツと笑うだけだ。

「どうだ、いじめっ子のお前ら！みんなにつるし上げられる気分は最高だろう？そんな最高の気分をおめーらはオトモダチにいつもさせてやってるんだぜ？感謝でもされてえか？！」

「やめたまえ、君！」

とうとう教師たちが舞台に駆け上がってきて響をとりかこんだ。

「こんなことをさせるために君たちを呼んだわけじゃないんだぞ！」

「わかってますよ。でも先生たちはイジメの現状を把握してるんすか？イジメは現にこの場でも起こってるんだ。ヤツらはいつだって命がけなんです。んで、アイツも真剣ですから黙って見ててもらえますか？」

田村が響と教師の間に入った。

「ヒビク先輩！こんなのはヒドイと思います！確かにイジメをしている人たちはいるけれど、こんなことしたら私たちみんな同罪になります！」

会場の中から勇敢に立ち上がったのは久美子だった。響は満足気にニンマリと笑った。そして、

「そうだな。これも立派なイジメだな。偉いぞ久美子！お前が一番正しいんだ！いいか！いじめる奴といじめられる奴がいてイジメは発生する。それはどんな理由があったとしても、いじめる奴が百パーセント悪い！オマケもオツリも割引もねえんだぞ？わかってっか？！」

生徒たちはまたいっそうざわついた。

「まあ、苛めて軽蔑されるか、見てみぬふりをする卑怯者になるか、絶対に苛めない人間になるか、どこに自分の立場を置きたいかよく考えて自分で決めるんだな！」

響はそこまで言うところまで踵を返した。そして、

「さっ、帰るか！」

と、楽器やセットの片付けをはじめた。田村たちもそれに続いて楽器を運び出し始めた。

「幕をお願いします...！」

ヒカルは閉幕作業の途中で呆然と立ち尽くしていた教師に向かって言った。

演劇部と軽音楽部の一同が揃って墨中の校門を出ようとする小さな少年が後ろから追いかけて来た。

「待ってください、先輩！」

少年に袖をつかまれて響は立ち止まった。ヒカルや田村たちも一斉に立ち止まり、少年を見つめた。

「よお、少年」

「僕の名前は綾瀬です」

綾瀬は一同にペコリとお辞儀をした。そこへ、

「ヒーねえ、ヒビク先輩！」

久美子も走って来た。

「ヒビク先輩、さっきはすみませんでした！私、先輩の意図がわからなくてたてついてしまいました！」

久美子も響にペコッと頭を下げた。中学生ふたりに同じように頭を下げられ、響はやや照れくさそうに鼻の頭をポリポリかく。そんな響を田村たちはニヤニヤ笑いながら見ている。

「いや、あそこで立ち上がったのが久美子で俺は嬉しかったぜ？さすがヒカルの妹だな！」

響が久美子の頭を撫でると、久美子は嬉しそうに自分の頭上を眺めた。そして、これが噂のよしよしと小声で呟く。その横を、例の三人女子が無言で通り過ぎて行った。彼女たちは久美子にも響たちにも一切目を合わさずに、スタスタと足早に去っていく。

「ヒビク先輩の一喝のおかげで明日から変われます」

「そうか？そんなに甘かあねえだろ…」

三人女子の後姿を顎で指し、響は言った。今時の中学生があれぐらいのことで変わるはずもない。下手すれば逆恨みの対象になり、ますますイジメはエスカレートするかもしれない。

「いいんですよ、あんなの。放っておきますから。あたしは自分を絶対に苛めない人間って場所に置くことにするし、苛める人を軽蔑しますから」

サッパリと久美子が言い切ったとき、僕もです、と綾瀬が控え目に言った。

「イジメはなくならないと思いますけど。僕は百パーセント悪くないですから！」

「そうだぜ？お前は自分に誇りを持てよ？」

「はい！先輩、ありがとうございます！」

「でも、牛乳は飲め！」

えっ？！と綾瀬は詰まった。

「お前、牛乳嫌いなんだろ？給食の牛乳には全く手をつけないで、そのまま食缶に捨てちまったり返しちまったりしてねえか？」

綾瀬はうう…と唸った。まったくもって響の言う通りだったからだ。

「苦手を克服すると自分が一個成長できるぜ？まずは牛乳だな！」

「はい。頑張ってみます」

よし！と響は綾瀬の頭も撫でた。あらら男女無差別にするんだ...、と久美子はまた小声で呟いてから、

「カッコイイなあ、ヒビク先輩っ。惚れちゃいそうです！」

と叫んだ。

「久美子、何言ってんのよっ！」

まんざら冗談でもないような久美子の様子に、ヒカルはややうろたえた。妹と恋敵になるなんてまっぴらごめんだ。

「なーんてね！勝ち目の無い戦いには挑みませんから安心してください」

ヒカルと響、ふたりに向かってサッパリという久美子だが、

「もう帰んなよ、久美子！あんたがいると心臓に悪い...」

久美子の発言には朝からハラハラしっぱなしのヒカルだ。

「わかったわかった！」

じゃ、お先に！と手を上げて久美子は校門から駆け出して行った。久美子を見送った視線を少し横にずらしたところに、五人の男子生徒が立っていた。彼らは無言でじっとこちらを見ていたようだ。ヒカルは響の袖をクイツと引いて、彼らの存在を目で報せた。

「ああ。分かってる...」

響も気づいていたらしい。そして、

「何だ、お前ら。仕返しに来たのか？」

わざと明るい調子で少年たちに声をかけた。

「そんなんじゃありません...」

リーダー格の少年がうつむいた。

「じゃあ何だ？まさか謝りに来たってわけでもねえだろう？」

少年たちは顔を見合わせてから言った。

「謝りに...来ました」

えっ？！とそこにいた一同全員が同じリアクションを返した。

「マジで？お前らコイツに謝りに来たわけ？」

はい、と頷く少年たち一。

「.....素直なヤツら...と取っていいのだろうか？」

田村の呟きに皆が首をかしげた。だが、少年たちが嘘をついている様子でもない。

「綾瀬...」

少年たちが綾瀬の元やってきて声をかけると、綾瀬はしばらく少年たちを睨んでいたがやがて笑ってうなずいた。少年たちの顔に安堵の表情が浮かんだ。その様子を見て、響やヒカルたちもホッと息をつく。

「じゃあな、少年たち！何かあったらそこの本城高校に来いな！」

響が叫ぶと、

「はい！僕たち、四月から本城高校生ですから！」

と、綾瀬が応えた。

何？！

一同は目が点になる。

「お前ら三年だったのか？！」

響はすっとなきょうな声を上げた。

「はい！」

「やること幼稚すぎだろ…」

体操着袋を取り上げたり小学校に戻れ中学に来るなど言ってみたり、いったいどんな頭の構造してんだよと響は心底呆れた顔を少年たちに向けた。

「まっ、いいか…。それじゃ、お前ら来年まとめて軽音楽部に入れ！」

「ええっ？！」

綾瀬一同が叫んだ。

「これは命令だ！いいな！いち、にい、さん…、あかね、来年度の新入部員、六人確保で問題ないでしょう？」

響は啞然としているあかねに振る。

「はい、もちろんです…けど…」

「じゃ、これで軽音楽部の心配はなくなったな。お前ら、いいな！」

「はい…」

少年たちは渋々うなずきながら、密かに「これもイジメじゃないのか…？、とつぶやきあう。

「…ん？何か文句あるか？」

響が睨むと、いえ別に、と少年たちはうつむきながら答えるしかなかった。

「…出た出た、ヒビクの暴走…」

「ほんと…ヒビク先輩って暴走魔だったんですね…」

ヒカルは田村に向かい小声で言った。でも心の中では、

——ヒビク先輩、カッコよかったよ…。

と、つぶやく。

——先輩がああ場で叫びたかった想いがわかるから…。

「んじゃ、行こうぜ！」

校門の前で固まっていたメンバーたちに号令をかけ、響は最初に門を出る。そのあとをヒカルたちは綾瀬らに見送られ墨川中学を後にした。

ヒカルたちが本城高校に戻ると、終了式だった学校にはもう誰も残っておらず、両部員たちは手早く荷物や衣装を片付けた。そして、響や田村は音楽室で、小夜子たちは演劇部の部室でしばらくの間それぞれの思いにふけた。二年生が終了した今日をもって、彼らの部活動も終了したことになる。

「浅倉さんと水沢さんのおかげで楽しい一年間を過ごすことが出来たわ」

部室を出る前に小夜子が言った。

「発声練習と台本読みしか出来なかった我が演劇部だったのに、最後までこんなふうに演劇をす

ることが出来て幸せよ」

「小夜子先輩…」

「来年はまた厳しくなると思うけど、歩いたところに道は出来るんだもんね。だから頑張ってね。私たちも陰ながら応援するから」

「はい！小夜子先輩、ありがとうございました！」

ヒカルは小夜子に抱きついた。するとあかねもそこへ飛び込んできて、その上に絹江や真美も重なり、五人の演劇部員たちは最後の最後に全員で抱き合って泣いた。

ひとつの時代が終わり、新たな時代がまたやってくる――。

今日はひとつの時代の集大成のような一日だった。演劇部と軽音楽部を掛け持ちして、発声やマラカスを同時にやって、合同制作、合同合宿…、めまぐるしく一年という時間が駆け抜けて行った。来年はもう、小夜子や響たちと一緒に部活をすることはない。それだけではなく、ヒカルとあかねもそれぞれ演劇部、軽音楽部に専念すると決め、別の道を歩くことになっている。新しいことに胸は膨らむが、今は今年歩いて来た道の上でこのみんなと同じ時間を分かち合っていたと思った。

さんざん泣いて目を腫らしたヒカルたちが昇降口に行くと、ちょうど響たちも音楽室から下りて来た。そして一緒に校門を出たところで、

「ヒビク先輩…」

ヒカルは響の袖口を引っ張った。

「ん？どうした？しおらしい顔をして」

「先輩、いろいろとありがとうございました。新学期からもまたよろしくお願いします」

「そんなうるうるした目で言われると、こっちもうるうるしちゃうぜ」

響はまだ涙の跡が乾いていないヒカルの瞼を人差し指でサーッと撫でた。演劇部員全員が同じように目を腫らしていることで、最後に涙の別れをしてきたということは分かるが、それでもヒカルの涙には胸にくるものがある響だ。思わずじっとその目を見つめてしまう。

「おいおい、何だよヒカル、ヒビクにだけかぁ？」

田村が口をとがらせた。

「ち、違いますよ！先輩たちみなさんにです！」

ヒカルは真っ赤になって言い訳をした。本城高校は明日から春休み。新学期になるまで響とも会えなくなる。桜が咲くまでにはまだまだ時間がかかりそうなのに、その同じ時間、響の顔が見られないのかと思うと寂しくて、つい響に限定した挨拶をしてしまったのだ。

「ヒカル、明日、俺とデートしようぜ！」

突然、何の前触れもなく響が言った。

「ええっ？！」

ヒカルは耳を疑った。

「デ、デートおお？風間とヒカルがあ～？！」

田村や双子たちも叫んだ。

「十時にヒカルんちに迎えに行くよ」

「ヒビク先輩?!」

「朝寝坊するなよ!じゃあな!」

響はヒカルの肩をポンとたたくと田村たちを引き連れて行ってしまった。

「ちょっ、ちょっと先輩!？」

響はサーッと右手を上に向けて応えただけ。ヒカルはその場で呆然とするしかなかった。

——デートって...?!ヒビク先輩とデートって...!

「ヒカルちゃん!」

呆然と立つヒカルにあかねが嬉しそうに声をかける。

「あかねちゃん、あたし、どうしよう...?」

ヒカルはいつになく情けない声を出し、すがりつくような目であかねを見た。

「ヒビク先輩がうちに迎えに来るって...」

心臓が今にも口から飛び出して来そうな勢いで打ちまくっている。

「いいじゃない。ヒカルちゃんは風間先輩が好きなんでしょう?」

「うん...。好き...」

あかねは嬉しそうに笑った。

「でも、あんなふうにみんなの前でデートに誘うなんて、きっとヒビク先輩は何かをたくらんでるんだよ。いつものようにあたしのことをからかっているだけなんだ...」

ヒカルはトボトボと歩きだした。

——そんなことないよ、ヒカルちゃん。風間先輩は、もうずっと前からヒカルちゃんだけを見つめていたよ...。

あかねはヒカルの後ろ姿に向かって心の中で言った。颯土が写した二人の写真を見た時、あかねには響のせつなさが直球を受けたように伝わってきた。響がヒカルを見る目は寂し気だった。それがどうしてなのかあかねにはよく分かる。ヒカルという素敵な女の子を独り占めしたい、けどそんなことは出来るはずない、というジレンマの気持ちに苦しんで自分の想いをどこかに封じ込めて...。それは以前、あかねの中にも少なからず存在した気持ちだったから——。

「あかねちゃん、どうしたの?みんな待ってるから早く行こうよ!」

ヒカルがずいぶん先の方から叫んだ。一年F組のいつものメンバーはこれから学年終了記念パーティーを颯土の家でおこなうことになっていた。颯土の家を提案したのは勇斗だ。もちろん颯土は凄くイヤがったが、もうそんなわがままを通してあげる仲間たちではない。

『オイラの家は遠いし、ゆうちゃんの家には猫がいる』

勇斗は猫が大の苦手なのだ。

『麻耶ちゃんちもあかねちゃんちも親がうるさいみたいだし、ヒカルちゃんちは兄弟が多くて大変だろ?群竹ちゃんちが一番いいんだよ。学校近いしおふくろさんも優しいし!』

ということで全員がそれに賛成して颯土の家になったというわけだ。

「早く行こう、あかねちゃん」

「うん」

あかねがヒカルに追いつき、ふたりはみんなよりも一足遅れで颯土の家に向かったのだった。

「あ、ヒカルちゃん！みんな颯土の部屋に集まっているわよ」

颯土の家のチャイムを鳴らすと、母親がまるで少女のように顔を輝かせて飛び出してきた。

「おばちゃん、みんなで押しかけちゃってすみません！」

「いいの、いいの！颯土が友達を連れてくるなんて嬉しいんだから！」

母親はヒカルとあかねを二階の颯土の部屋まで案内してくれた。

「やあ、おかえり！」

勇斗が部屋から飛び出して来た。

「すごかったんだって？今日！」

と、麻耶も少し興奮ぎみに言った。

「風間先輩、吼えたんだって？」

「どうして知ってるの？」

麻耶たちは終了式に出ていたはずだから、墨中での一件を普通なら知るはずもない。

「ヒカルちゃんの妹さんが群竹くんに報告に来たの聞いちゃったんだ～」

「久美子が群竹くんによ！」

ヒカルが驚いて颯土に目を向けると、颯土の方はやや呆けた調子で、

「なんだか知らないけど言いに来たぜ？そこでまくし立てて帰った」

と、窓の下を指差した。下から久美子が颯土に向かって大声で話すのを麻耶たちがそのまま聞いていたらしい。哲平にしても久美子にしても、どういうわけか颯土にえらく懐いているようだ。この無愛想な隣人は、本人の意志に関わらずちゃんとご近所づきあいをしているらしい。ヒカルは思わずくすっと笑ってから、

「あの子ったらベラベラと……」

と、自分の部屋の窓に目を向けた。

「いいじゃないの。よっぽど嬉しかったんだよ！」

「カッコイイよなあ、風間先輩！どこに自分の立場を置きたいかよく考えて自分で決めろ！な～んてさ！」

ヒカルは、うん、とうなずいた。

――ただカッコイイだけじゃないよ…。ヒビク先輩はあの叫びで自分の過去からのいろんなことを許して抹消したんだ。そして、綾瀬くんや久美子を救ってくれた――。

あれは、響の魂の叫びだ。中学生たちに向かって叫んでいたが、本当は自分の過去全てに対して声を発していたのだとヒカルは思った。

「とにかくよかったじゃん！ヒカルちゃんもあかねちゃんも忙しい一年だったよな！」

「それはみんなも同じでしょ？」

と、あかね。

「来年はもっと忙しくなるね。麻耶ちゃんも大久保くんもあかねちゃんも部長さんになるわけだし、群竹くんだって、ね？」

いきなり振られて颯土は、ん？とヒカルを見た。そして、にこにこ顔中を笑顔にしているヒカルにややギョツとした。

『ピクチャーライフ』で取った大賞の賞金が送られて来た時のこと。初めて颯土は隣のヒカルの家を訪ねた。そして、

『これ、お前にやる...』

賞金の書留をヒカルにそっくりそのまま手渡した。

『もらえるわけじゃない！この間あたしが言ったことは冗談なんだからね！』

賞金が入ったらモデル代をよこせと、ヒカルは颯土に言っていたが、そんなのはもちろん本気で言ったわけではない。

『いいんだ。これはお前と風間先輩でどうにかしろよ。俺はもらえないから』

颯土は本当にそう思っていた。自分はただ写真を撮った、というだけで投稿したのは純平でまったく自分の意志ではない。大賞に輝いたのは自分ではなく被写体のヒカルと響だ。

『浅倉と風間先輩に与えられた大賞だろ、あれは...』

『何言ってるのよ！群竹くんが写した写真が評価されたんじゃないの！』

颯土は居心地が悪そうにうつむいた。そうじゃない。被写体がヒカルと響じゃなければ、あんな写真は撮れていないはずだ。それは、もう一本のフィルムに写っていた写真を見れば一目瞭然――。

『だから...、俺に対する評価じゃないんだって...』

どういう意味？とヒカルは首をかしげたが、そこら辺のことを上手く説明する自信がなかったから答えなかった。

『麻耶ちゃんから聞いたよ。群竹くん、麻耶ちゃんのお兄さんのところで写真の勉強することにしたんだって？』

『そんな大げさなものじゃないよ...』

自分が耳まで赤くなっているのが分かり、颯土は俯いた。

『だって、夏には一緒に沖縄にも行くんでしょ？それってやっぱり写真のためなんでしょ？』

『だから、そなんじゃないんだって。俺はただ...、』

なんて言えばいいのか分からなかった。沖縄に行くのは写真のためでもあるが、それだけじゃないし、だが、そこまで沖縄に惹き付けられたのは純平が撮影した写真を見たからだし、そもそもあの写真の何にこれほど惹かれるのかが分からない。

『.....』

答えられない颯土にヒカルは言った。

『新しいことをはじめるのって勇気がいるよね』

『浅倉...、』

颯土はまた赤くなる。

『沖縄に行くのだってタダじゃ行けないでしょ？この賞金はその為にとっておきなよ。あたしとヒビク先輩に気兼ねをするんなら、沖縄のお土産でも奮発して！』

『だけど...』

ヒカルの気持ちは素直にありがたいと思った。だが、男が一度出したものを引っ込めるというのもカッコがつかない。そう思い躊躇していると、

『じゃ、一応もらっておくよそれ。ありがとう』

ヒカルは颯土の手から書留を取った。そして、

『ちょっと待っててよ！』

と、二階に走りしばらくしてからまた玄関に戻ってきた。

『はい、これ。あたしとヒビク先輩からのお餞別！奮発しちゃったよ！』

ヒカルが颯土の手の中に入れたのは、かわいい封筒に押し込んださっきの書留だった。

『浅倉...』

ヒカルはにっこり笑っていた。

『サンキュー...』

颯土はヒカルの気持ちをありがたく受け取った――。

「来年は群竹くん、挑戦の年だもんね！」

寡黙で自分を表に出すことをしなかった颯土が、自分の中の可能性を少しずつ試そうとしている。まだ颯土自身も無自覚の域から出ていないのだろうし、新しいことに一歩を踏み出す気恥ずかしさもあるのだろう。ヒカルはいつか、颯土に一歩を踏み出す勇気が無い臆病者だと言ってしまったことを思い出した。だが、人は皆同じ歩幅で歩いているわけではない。歩く速度も違う。今なら分かる。

――群竹くんの一歩はすごく重かったんだね...。

でも、颯土は確実にその一歩を踏み出そうとしている。今、颯土は大いに困惑した顔で目をあちこちに泳がせている。だが、そんな颯土が少し羨ましくもあり素敵に思うヒカルだ。

「そういえば群竹ちゃん、バイトは始めるんだって？」

「もうやってるよ」

「何のバイト？」

「.....朝刊配り」

颯土がボソッと言うと、一同は一瞬静まった。それから、

「うそだろ~~~~~？！」

「うそ~~~~~！」

皆が一斉に声をあげた。

「何時に起きるんだよ？大丈夫なのか？！」

朝にはめっちゃくちゃ弱い寝癖男の颯土だ。朝刊配達なんて過酷な仕事が勤まるはずがない。

「哲平だってそんなに早くは起こせないよ！起きられてるの？！」

「...まあ、今の所は...」

一同が颯土のベッドを見ると、目覚まし時計が七つもおいてあった。

「もっと別のバイトなかったのかよ～」

「部活あるし、早朝しかバイトをする時間が取れないんだ...」

颯土はふてくされながら言い返した。

颯土が麻耶の兄の純平に会い、写真の勉強をすることになったいきさつはみなが了解していることだった。夏に沖縄のロケについて行くためにアルバイトをはじめるということもみな承知だった。だが、それがよりによって朝刊配達だなんて、もちろん誰ひとりとして想像していなかった。

「自分で決めたことだから、たぶん大丈夫さ...」

「自分で決めたこと、か...。群竹ちゃんもいつの間にか大人になったな〜」

勇斗の言葉にはヒカルも大いにうなずき、颯土はふたりにムツとした目を向ける。

「やりたいことが見つけられて羨ましいよ」

祐輔がしみじみ言うが、そんなオーバーなものじゃない、と颯土は思った。自分はただ単純に、憧れていた沖縄に行きたいだけだ。その為にアルバイトをして旅費をかせぐだけだ。まだ写真の勉強を真剣にやってみようなどとは思っていない。純平と付き合っていくことにも大きな不安を抱いている。

「僕は将来、何をする人間なんだろう...」

「そんなの〜、まだわからなくたっていいんじゃない？オイラたちはやっと高校一年が終わったばかりなんだぜ〜」

真剣な祐輔に対して勇斗は呑気だ。

「そうだけどさ、焦るよな。仲間が自分の行く道を見つけていると僕も何かをやらなくっちゃってさ！」

「俺はべつに自分の行く道を見つけたわけじゃない...。そんなんじゃない...」

颯土は苦しそうに呟いた。これが自分の道だと決めてしまうにはまだまだ全然覚悟はないし、皆にそう思われるのも困る。

「そうだよ。色々なことをやりながらそれぞれの道を探して行くんだもん。まだまだこれからだって。群竹くんも、あたしたちも！」

ヒカルが颯土の顔を読んでフォローした。だが――。

――もう、一步が出たんだね...。

哲平を貸し出さなければ毎日遅刻の颯土にとって、朝刊配りがその一步だ。ヒカルは入学式の日に寝癖をつけて遅刻してきた颯土を思い出し、こっそりと笑った。

「そんじゃここで来年度の目標でも言い合っちゃおうぜ？」

勇斗が半分ふざけながら提案すると、

「へえ〜、大久保くんにしちゃ、まともな意見ですね〜。いいじゃない、それ」

と、ヒカルは賛成した。だが、颯土はまだこういったノリにはついていけない。だから早々にサークルの外側に引っ込む態勢を整えた。

「駄目だよ、群竹くん。最後に群竹くんにもちゃんと発言してもらおうからね」

そんな颯土の態度をいち早く察知したヒカルが最初に釘をさした。

「な、何で...っ」

「あたしたちは六人で一個のにぎやか組なの。だからみんな平等！特別待遇はナシです」
にぎやか組なんかに入った覚えはないんだけど...、と颯土は思うが口には出さなかった。
「それじゃあ、言い出しっぺの大久保くんからどうぞ！」
「オイラ？オイラの目標は...、来年こそかわいい彼女を作る！これでどうだ！」
「だ〜め！」

女子三人は速攻で却下。
「あっそう...。じゃあ...、空手道を極める！」
「極めてるでしょう、もう。黒帯なんだから」
あっさりと祐輔。

「日々精進！...うう...勘弁！こんなことしか思いつかないよ〜」
言い出しっぺのくせに自分の目標定めに失敗した勇斗は頭を抱え込んでしまった。
「ま、大久保くんだしね。いいわ、それで！」
「大久保くんだしねって、麻耶ちゃ〜ん...」
次は伊藤くん、とヒカルは祐輔を指名した。

「僕の目標は...、結野だな」
「ええ？！あたし？！」
麻耶は目を見開いて仰天した。祐輔は真っ直ぐに麻耶を見ている。

「お前にはいつも負けっぱなしだったけど、来年こそは絶対に勝利してやるぜ！」
同じ剣道部の祐輔と麻耶はよく練習試合をする。だが、祐輔は未だかつて一度も麻耶に勝利をしたことがない。

「麻耶ちゃん、そんなに強いんだ...」
「強い！悔しいけどね！」
「じゃ、私の目標は伊藤くんに抜かされないように腕を磨くことだ！」
麻耶は腕まくりをしながら、ふふん、と祐輔を鼻であしらった。

「そりゃないぜ〜。少しは手を抜けよ〜」
「いーえ。私も来年は部長ですから、ガンガン行きます！」
「シビアだな...。でも、なお更闘志が沸くよ！見てろよ、結野〜！」

祐輔はひとり過剰に気合を入れた。目標にされた麻耶は、やや困惑しながらあかねに次の発言を促した。あかねは、うーん...、と小さく唸ってから、
「私の目標は...、軽音楽部を廃部にしないことかな...」
と、小声でつぶやいた。

「随分と消極的な目標ですなあ」
と、勇斗。

「だって...、田村先輩たちが抜けたら私、どうしていいかわからないもん。バンドはもう出来ないし、何とか人数を確保して細々と活動していくしかないじゃない？」
「まだ、わからないじゃない？墨中の子たちも入ってくるし、今年とは違った活動がきっとできるよ！」

と、ヒカルが励ますが、あの子たちでしょう...、とあかねはさっきの少年たちを思い浮かべた。

「風間先輩が誘ってくれたのは嬉しいんだけど...」

あんなやんちゃな子たちが六人も来てしまったらどう対応すればいいのだろう、とあかねは今から不安でいっぱいだ。

「大丈夫だよ、あかねちゃん！田村先輩たちだって学校からいなくなっちゃうわけじゃないんだから、何かあったら相談に乗ってくれるよ。だから、今からそんな顔しないの！」

そうだね、とあかねは笑った。

「問題はあたし...。演劇部の存続はかなり厳しいわ...」

ヒカルは、あはは...、と乾いた笑いをこぼした。

「えっ?! あんなに凄い劇を作ったのに？」

「いい劇を作っても演じる人がいなければ仕方がないでしょう？それに、『みにくいあひるの子』はヒビク先輩たちがいたから出来たものだし...」

「そうだよな〜。『ライジングサン』は風間先輩が歌わなくちゃな〜」

「小夜子先輩たちは部に残留はしてくれるけど活動はもう出来ないし、現時点で来年度の実働部員はあたしだけなんだよ。でも、あたしはやる！一人でも絶対に何かやる！部室を守ってみせる！」

そう言ってヒカルは瞳を輝かした。

「何かってなに？」

「まだそれはわからない。それを決めて実行するのがあたしの目標です！」

「あかねは演劇部には残らないの？」

「うん...。軽音のほうで手一杯になっちゃうと思うから...」

「あたしだってバンドがなくなったらマラカス振ってられないし、悲しいけどあたしとあかねちゃんは二年生になったら別々の道を進むのです」

と、ヒカルは仰々しく言い終え、

「はい、群竹くんどうぞ！」

と、颯土にバトンを渡した。

「俺...は...」

颯土はひたすら困惑した。目標と言われても何をどう言っているかわからない。しかも、皆が一斉に注目している。居心地が悪い。逃げ出したいぐらいだ。だが、

「.....目の前にあることを一個一個クリアしていくこと...かな」

と、呟いた。

「当面は朝刊配りのバイトだな〜」

「その前に早起きだ！」

勇斗とヒカルが順番に突っ込んだ。

「まあ...、そうだし、色々と...」

と、颯土は素直に認めて照れくさそうに皆から目をそらした。

「これで勘弁してくれ…」

無愛想で無口な颯土。仲間を拒絶していた颯土。その颯土が、今ではみんなの前で自分の目標を話している。颯土にとって、この変化は凄いことなのかもしれない、とヒカルは思った。颯土の言う目の前にあることというのは具体的なものばかりではなく、颯土の中身のものなのかもしれない。颯土にしかわからない、色々な…。

「それじゃあみんな、自分の目標に向かって頑張ろう。来年はきっとクラスもバラバラになっちゃうと思うけど、二年生が終わった時にはまたこのメンバーでここに集まろうね！」

と、ヒカルが言うと、

「またここか？」

颯土が抗議した。

「そうだよ？来年になったって大久保くんの家が遠いこととか伊藤くんの家に猫がいることとかうちに兄弟がたくさんいることとかは変わらないじゃない」

「それはそうだけど…」

「ここがいいの！」

ヒカルがいつものようにニマツと笑うと、颯土も、まあいいか…、と承諾した。

「何かオイラ、すご〜く嬉しい感じ〜！」

勇斗は颯土の肩に手を回した。その言葉は皆の心を代弁していた。一年前、偶然にクラスメートになった仲間たちがホームルーム合宿の実行委員を一緒にやったことをきっかけにして様々なことを巻き起こし、巻き込まれてここまで来た。はじめはいびつだったサークルが、一年経てば少しだけまともな円を描いている。

——こんな俺をみんなはよく放り出さずにいたな。

颯土はひとりひとりの顔をチラチラと眺める。まだまだ不器用な仲間づきあいだが、もしかしたらずっと昔に失くしてしまったものを取り戻せるかもしれない。

——こいつらと一緒になら…。

颯土は視線を感じて目の前に座るあかねを見た。あかねはふんわりと微笑みながら颯土を見つめていた。その横で、ヒカルが麻耶が勇斗が祐輔が眩しい笑顔を輝かせていた。

翌日、ヒカルは朝早くからソワソワしていた。響が昨日の帰りがけに言った、朝十時に迎えに来るというのは本当なのだろうか。

――ヒビク先輩は私をからかっているだけだ。

そう思うと身支度をするのがバカバカしくなる。

――でも、ヒビク先輩は嘘は言わない、本当に迎えに来るんだ。

こう思うとやっぱり身支度を始める。そんなことを繰り返して時間はとうとう十時になろうとしていた。あんまりおしゃれをして、もしも響が来なかったら空しいし、本当に来た時にジャージ姿でいるわけにもいかないからと、ヒカルは普段着のジーンズにお気に入りの白いセーターを着込んだ。

十時を少し過ぎた頃、一台のバイクが通りの方からやって来て家の前で停まる音がした。

「バイク...？」

ヒカルはそっと窓の外を見た。バイクにまたがったままサイドスタンドをかけたその人が、フルフェイスのヘルメットを取ると、

「うそっ！」

春の光の中に金色の髪が鮮やかに照らされた。

響が呼び鈴を鳴らそうとした時、玄関がバタンと開き、真っ赤な顔をしたヒカルが飛び出して来た。

「うわっ、ビックリした！何だよ、ヒカル、そんなに慌てて...」

「あ、慌ててなんかないです。ヒビク先輩本当に来たんですか？」

「当たり前じゃないか。俺が嘘ついたことあるか？」

響は憮然とした。昨日、ヒカルの返事を聞かないまま言っぱなしの約束をしたことを帰り道で田村たちに責められもしたが――。

「本当に来たんですかって...ちょっとイジケるかも、俺...」

「わー！そういう意味じゃないんです！どうしよう？先輩、いじけないでください！」

ヒカルは響の周りをちょろちょろ動き回り、一生懸命慰める。そんなヒカルを俯きながら観察している響は、とうとう、ぶはっと吹き出した。

「ヒカル、面白すぎ！」

「機嫌、直りました...？」

ヒカルは響の顔を覗き込む。春風がヒカルの髪をふわふわと躍らせた。

「最初からイジケてなんかないぜ？ちょっとからかっただけ！」

「うう～、先輩っ！」

思わず上げた手を素早く響につかまれたヒカルは、そのままバランスを崩して響の胸に飛び込む形になった。

――うわわっ。どうしよう！

すぐさまヒカルは真っ赤になって響から離れ、大暴れの胸をごまかすためか、
「バ、バイクなんて派手ですね。先輩、やっぱり不良だったんだ！校則違反の常習犯だし！」
自分でも何が言いたいのか分からないことが勝手に口から出てしまう。響はそんなヒカルを面白そうに眺めていたが、
「まったく、バンドやってりゃ不良バイク乗ってりゃ不良じゃ、世の中どんな奴が真面目なんだよ。さっ、行こうぜ。これ！」

ヒカルに自分と同じデザインのヘルメットを渡した。
「え？後ろに乗るんですか？！」
前に乗る？と茶化す響も、照れる気持ちを隠している。
「ヒカルがスカートはいてなくてよかったよ！」
「ど、どこに行くんですか？」
「それはついてからの楽しみ！」

響はエンジンをかけアクセルをふかす。
——うるせえなあ！
朝刊配達から帰って二度寝していた颯土は、窓の下から響いてくるバイクの音で目を覚ました。
。

——どこのどいつだあ？！
カーテンを開いて下を見ると、ヒカルがヘルメットをかぶろうとしていた。ヒカルと一緒にいるのは....、
「風間先輩か...？」
バイクにまたがる男のヘルメットの下から金色の髪がのぞいている。
「よしヒカル、乗れよ！」
「失礼しますっ」

ヒカルはバイクの後ろにまたがり、響の背中にしっかりとしがみついた。
「こんな朝っぱらから何処に行くんだか...」
颯土はひとりつぶやいて再びカーテンを閉めようとしてやめた。時計の針はもう十時を回っている。
「浅倉と風間先輩か...」

ベッドに腰掛け、颯土は意味もなく机の上に無造作に投げてあった『ピクチャーライフ』を開いた。そして写真を見つめながら文化祭での光景を脳裏に再現させる。
——言葉...か。
純平が言ったこの写真の中にある言葉たち。それは——。
考えようとして面倒くさくなり、颯土は雑誌を元の机に投げてまたベッドに転がった。

◇
ヒカルの家から渋滞の道路を避けて三十分ほど走り、響がバイクを止めた場所は大きなコンサートホールの前だった。
「コンサートですか...？」

バイクから降りたヒカルはホールを見つめてポカンとしている。会場の入り口に、
[――ジャック・ベリーとジャジーなひととき――]

という幕がかかっていた。

「ヒカルはジャック・ベリーを知ってるか？」

「名前だけは聞いたことがありますよ。ジャズピアニストでしょう？」

「俺の親父らしい...」

響はそう言いながらヘルメットを取った。

「本当なんですか？！」

ジャック・ベリーといえばジャズピアニストとして世界的に有名なピアニストだ。ヒカルのような音痴の人間にもその名声は届いている。

「いつかヒカルには話したよな。親父のこと」

ヒカルは即座に夏の湖での響との会話を思い出して頷いた。

「でもあの時は先輩、お父さんのことは何も知らないって...」

「ああ。あの時までは知らなかった。知ろうとしなかったんだよ。別に知りたいとも思わなかったし。でも、あれから俺は初めておふくろに自分から親父のことを訊いてみたんだ...」

――なあ、おふくろ。俺の親父ってどんな奴だったんだ？

『え...？』

目を丸くしている母の顔を見て同じことを言うのにためらいを感じ、

『やっぱ...いい...』

と、呟くと、ちょっと待っててね、と母は奥の部屋に飛び込んだ。しばらくして戻ってきた母の手には古いアルバムがあった。その時、開かれたアルバムの中に父の姿を初めて見た。

『これが、親父...？』

『そう。十八年前の響のお父さん。素敵でしょ？』

母は嬉しそうに笑った。

『...優しそうだ』

本当にそう思った。今の自分と同じぐらいか、もう少し年上か――。金色の髪のアメ리카青年は穏やかな眼差しでこちらを見つめて笑っている。それはずっと憎しみを抱きながら想像していた人物とはまったく違っていた。

『...コイツ...いや、このヒトは今何やってんだよ？』

『ずっとピアニストよ？』

――ピアニスト...。

十九年前、ジャック・ベリーは都内のジャズクラブでピアノを弾くかけだしのピアニストで、響の母ユリは同じクラブで歌うジャズシンガーだった。二人は恋人同士であったが、ジャックは故国で成功する夢を抱いて帰国した。

『...でも、いくら素敵でも優しくても、コイツは俺たちを捨てた奴だ』

初めて見る父の顔に湧き上がる憧れが無性に照れくさくて口に出した言葉だったが、

『そうじゃないよ、響。お父さんは響が生まれたことを知らないんだもん...。今もずっと、知ら

ないままよ』

母は少し寂し気な顔をして真実を語った。

『...何だって？』

ジャックが帰国を決めた時、ユリには響が宿っていたが、ユリはジャックの将来を思いそのことをジャックには告げずに一人で子どもを育てる決意をした。

『今の響はあの頃のジャックにそっくりで時々ドキドキしちゃうんだあ』

夢見るような顔をして母は言った。

『ジャック...？まさか、親父って...』

響はもう一度アルバムの写真に見入った。この顔、知っている。今、世界中の人間にその名と楽曲が知られている.....、

『ん？ジャック・ベリーよ？』

『マ、マジ！？』

響はこの時まで父親がジャック・ベリーだということは知らなかった。ヒカルに話をした時は、父親はピアニストであったということしか知らなかったし、聞く必要もないと思っていた。母と自分を捨てた父親のことなど知りたいとも思わなかったからだ。

「ヒカルは俺の`響、はヒビクだって言ってくれただろ？俺らしく響いているってさ」

「はい。本当にそう思ったから」

「だから決着をつけたかったんだ。俺の中にずっと根付いていた親父への恨みを。もっと俺らしく響いていくためにさ」

「決着.....？」

ああ、と響は頷いた。

「先月、ジャック・ベリーの来日コンサートが今日ここであるって知ったんだ...。ずいぶん迷って、そして決めた。息子だと名乗り出て、もしもジャックが俺に会おうとしなかったり、嘘だなんだと面倒なことを言ったらきっぱり忘れて父親のことはそういう奴だと諦めようってさ」

今やジャックは世界のジャック・ベリーだ。十九年前にその存在すら知らずに別れた響が、今更息子だと名乗り出たところでジャックがそれを信じるという保証はない。それどころか自分の名声を利用しようとしているのだろう、と思われるかもしれない。それならそれでもいい。今更何が変わるわけではない。

「俺はジャックに息子だと名を告げて手紙を書いた」

「先輩...」

「ジャック本人から返事が来たよ」

「それで...？」

「だから今日ここに来たんじゃないか」

と、響は笑った。

「ヒビク先輩っ！」

ヒカルは思わず口に手を当てて涙をこらえた。

「帰国までスケジュールが詰まってるらしいからゆっくり会うことは出来ないけど、リハーサル

の前なら少しだけ時間が取れるから会場に来てくれ、と返事にあったんだ」

「そんな大事な時間に私なんかがついて行ったら駄目ですよ！私、帰ります！」

踵を返すヒカルを腕を、響はしっかりとつかんだ。

「ヒカルと一緒にいてもらいたいんだ！ヒカルに俺を見ていて欲しい！ちゃんと俺らしく響いているか！」

「ヒビク先輩…」

「行こう、ジャックが待っているから…」

響はヒカルの手を引いてホールの楽屋口に向かって歩き出した。

楽屋の受付に名前を告げると、ジャックから話が通っているという。楽屋の場所を教えてもらい、響はヒカルの手を引いたままジャックの元へと進んで行った。一步一步、踏みしめるように歩く響は堂々としていて誇りに満ちていた。生まれてから十八年間、一度も会ったことのない、そしてずっと恨み続けていた父親に初めて会うというのに何も臆するところがない。やがてジャックの楽屋にたどり着いた響は、そこでしばしたたずんだ。それからフーッと息をひとつ吐いてからドアをノックした。

「イエス！」

快活な声で返事があり、しばらくしてドアが開いた。

「……っ」

敷居を挟んで響とジャックは向かい合った。金色の髪に金色の口ひげをはやし、まなざしの優しい紳士は響に面差しがよく似ていた。どちらもしばらく言葉を出さずに見つめ合う。

「Oh...、My Son...！」

突然ジャックが響を抱きしめた。

「先輩…っ！」

ヒカルは涙が止まらなくなる。Sorry、Sorry...と何度も言いながらジャックは響を抱きしめる。上を向いて涙をこらえていた響の瞳から一筋の雫がこぼれ落ちた。

ジャックは二人を部屋に招き入れ、自らコーヒーを淹れてくれた。そして響と英語で会話を始めた。英語が苦手なヒカルには二人が何を話しているのか理解出来なかったが、二人のその表情から出会いを喜び合っていることがうかがい知れた。響は顔を少し紅潮させ瞳を輝かせながらジャックと話している。ジャックも響と同じ瞳で初めて会う息子を見つめていた。その目が時々ヒカルを見て微笑む。ヒカルも嬉しくて微笑み返した。

しばらくするとスタッフがジャックを呼びに来た。どうやらリハーサルの時間らしい。ジャックは名残り惜しそうに立ち上がると、デスクの引き出しから封筒を出して響に手渡した。そして、自分のバックの中から一枚のチケットを出し、それも響に手渡した。封筒の方は響の為に用意しておいたチケットで、バックから出したのはヒカルの分のチケットだということを二人のやりとりからヒカルは理解した。どちらも今夜のコンサートのチケットだった。

「親父…」

響が言うと、ジャックは嬉しそうに微笑んで響を抱きしめた。

「See you Kyo」

ジャックは笑顔で部屋を出て行く。その後ろ姿を響はしばらく見つめていた。

「素敵な人...」

ヒカルがつぶやくと、響は静かにうなずいた。

「ありがとう、ヒカル」

「どうして私に？」

「ヒカルのおかげなんだ。ヒカルが俺の荷物を下ろしてくれた...」

響はヒカルを見つめる。

「私は何もしていません...。でも、本当によかったですね。凄く嬉しい...！」

「かわいいお嬢さんと一緒に聴きにきてくれってさ」

響はヒカルにチケットを渡した。

「いいえ。このチケットはヒビク先輩のお母さんに...。お母さんと一緒にお父さんのピアノ、聴いてください」

ヒカルはチケットを響の手にそっと返す。

「ヒカル...」

「先輩、響いていましたよ。先輩らしく、堂々と誇らしげに！」

ヒカルはニッコリと笑った。

——ヒカルッ...！

響はそっとヒカルを抱きしめた。

「せ、先輩...？」

「...嬉しいんだ俺。本当に嬉しいんだよ...」

ヒカルを抱きしめる響の腕が静かに震えていた。ジャックと交わした言葉が何度も繰り返し響の胸に浮かび上がった。

『この可愛らしいお嬢さんはキョウの恋人かい？』

『いや...、まだ駄目なんだ。まだ俺が未熟だから今のままの俺じゃ...コイツの恋人だなんて言えない...』

『それは残念だ。キョウにピッタリの可愛らしいお嬢さんなのに』

『うん...。コイツは最高に可愛い...後輩だ』

『そうか』

『俺もやりたいことがわかってきたんだ。だから一人前になったらヒカルに打ち明ける...』

『私の若い頃によく似ているな。私もそんなふうにキミの母を想っていたよ...』

『——親子だからね...』

『そうだ。私たちは間違いなく親子だ...』

ヒカルに響の想いが伝わってくる。響はきっと今この瞬間から本当の意味での出発が出来たのだ。今までの響は明るく豪快な顔の下で、想像もつかない苦しみを背負っていたに違いない。父親の顔を知らず温もりも知らず、周りの人間からは蔑まれ、そんな中でも自分を見失わずに生

きていくことにはどれだけのエネルギーがいったことだろうか。自分を抱きしめ、声を殺して泣く響の胸にヒカルはためらわずに顔をうずめて響の想いを全部受け止めた。

◇

コンサートホールの前で響と別れ、ヒカルはひとり帰り道をたどった。途中、CDショップに立ち寄りジャック・ベリーのCDを買った。

午後七時――。今ごろ、響は母親と共にジャックのピアノを聴いているだろうか。十九年ぶりに親子三人の再会が果たせていればいいな、と思う。

ヒカルは自分の部屋で、買ってきたCDを聴いていた。優しくてどこかせつないようなこの曲は、どこかで聴いたことがある。きっと、有名な曲なのだろう。

「スイートラヴ...っていうんだ...」

曲名の通り、甘い砂糖菓子のような愛が溢れるメロディだった。目を閉じると、ジャックがピアノを弾いている姿が浮かんでくる。それが響の姿とオーバーラップしていく。

――ヒビク先輩のピアノが聴きたいな...。

ふと、思った。その瞬間、ほんの一瞬ではあったが、響がどこか遠くに行ってしまうような不安がヒカルの心によぎったのだ。

きみにとどくまで～Vivace 後編に続く

トラックがバックする音が窓の下で聞こえた。太陽はもう高いところまで昇っているというのに、まだベッドの中で夢と現を行ったり来たりしていた颯土は耳につく、プープー、という音でようやく目を開けた。

――…んだよ、早く止めろよ。

トラックはしばらく音を鳴らしていたが、やがてそれは自宅の前で止まった。

「うわぁ～、随分こじんまりとした家だねえ。家族みんな入りきるかなぁ？」

「ね～お母さん、もしかして久美子と共同部屋なのぉ？あたし、来週から高校生になるのにい」

「仕方ないでしょ？長野の田舎とは違うんだから。しばらくの間我慢しなさい」

「そうそう、ここは東京！都会なのよ、都会！都会の家は狭くて当たり前なのだ！」

「だってさぁ～、久美子いびきがうるさいんだもんっ！寝言で叫ぶし」

「そんなことしないよぉ！」

――…っるせえなぁ。こんな朝っぱらからデカイ声で騒いでんじゃねえよ。

颯土は毛布にくるまる。

「隣んちとの間がこんなちょっとしかないよ」

「うちのドタバタ、絶対響くねこれじゃ。おしとやかにしなきゃいけないのかなぁ？」

「あ～、なんか先が思いやられるう…」

――…隣んち？

毛布を蹴飛ばし、颯土はベッドからのっそりと起き上がった。時計を見ると午前11時。休日の颯土にとっては、まだまだ`朝っぱら、だ。

「空気が変な匂い」

「きっと土がないからだよ。全部コンクリートだもん」

「ココロがキカイになっちゃわないかなぁ？」

――…なんつう会話だ。

窓の側まで行き、まだしっかり閉まっていたカーテンをほんの少しだけ開いて下を見ると、大きなトラックの屋根がすぐそこに見えた。その陰にふたりの少女が立っている。ここからは頭しか見えないけれど。

「ほらほら、あんたたち荷物を運ぶのに邪魔よ。そこをどきなさい」

「ねえねえお母さん、あそこが私たちの部屋？」

ひとりが二階の窓を指差した。それはちょうど真向かいの、ここから二メートルほど先の窓。

「そうよ」

「見てきていい？」

「じゃ、窓を開けて換気してきて」

「うん！」

トラックの陰からふたりの少女の姿が消え、しばらくすると向かいの窓の向こうに人影が見えた。カーテンを閉じて再びベッドに転がった時、ガラッと窓が開く音がした。

「ヒー姉見てよ！隣んちがこんなに近い！これじゃ、カーテン開けらんないね」

「なんで？」

「覗かれるう～」

——覗くかよっ！

「ねえ、久美子、桜が満開！あの公園は何ていう公園だろ？」

「墨田公園ってお父さん言ってたよ？」

「は～るのー うらあら～のー すーみーだーがーわぁ～～～、だね」

「...ヒー姉、どーでもいいけど音程になってない歌はやめて...」

——...確かに...。

「だって気分いいんだもん！川も流れてるし公園の近くの家でよかった！」

「ちょっと臭いけどねえ～」

「住めば都ってよく言うじゃない？きっと私たちもここが好きになるよ！荷物を運び終わったら桜を見に行こう！」

しばらくすると、隣家ではドタバタと引越しの荷物運びが始まったらしい。大きなあくびが出て颯土は目を閉じた。

けれど.....、

は～るのー うらあら～のー すーみーだーがーわぁ～～～

音程をかなり無視したさっきの歌が耳についてとてもじゃないが眠れない。

は～るのー うらあら～のー すーみーだーがーわぁ～～～

——勘弁してくれ...。

頭から毛布をスッポリと被ったとき、

「颯土、春休みだからっていつまで寝てるつもりなの？早く起きないと朝ごはんあげないわよ」

高校生になってもこうなのかしらまったく...、と、母親が階段の下で文句を言ってる声がした。

——どいつもこいつもうるせえなあ...。

颯土は渋々と起き上がった。

墨田公園の桜が花を満開につけたいつもと同じ春。早く起きろと母親が文句を言ういつもと同じ休日。そんな春休みのある日、しばらく閉まったままだった向かいの部屋の窓が開き、新しい住人は音痴な少女に決定したようだ。

は～るのー うらあら～のー すーみーだーがーわぁ～～～

耳についたその歌がまだ聞こえている。しばらく離れてくれそうもない。

——はあ...、参った...。

深いため息を吐きながら階下に下りる颯土だった。

いつもより早く目覚めた朝――。小鳥のさえずる声が淡いピンク色のカーテンの向こうから聞こえてくる。カーテンを開けばきっと春の柔らかい光が待っている。窓を開ければ菜の花や桜の薫りを風が運んできてくれる。それはとても魅力的なこと。

でも、ふっくらとしたこの暖かさも捨てがたい。もう少し、このままこうしていたい――。
...と、ベッドの中でまどろんでいるのは浅倉ヒカル。今日から高校生になる。

枕もとの目覚まし時計を手にとって見ると六時二十分。

――そろそろ来るころね...。

ヒカルはドアの方に寝起きの目を向けた。すると、階段をトン、トン、とおぼつかない足音を立てながら上がってくる音が聞こえた。

――来た！

ヒカルは布団を頭からかぶりやがて来るものに備えた。いつもは不意打ちをくらうが今日は幸い目が覚めている。バタン！と部屋のドアが乱暴に開き、ドタドタと駆け込んで来た足音がベッドのそばで止まった。`敵、はまず、二段ベットのはしごを上りはじめた。上にいる人間から攻めるつもりらしい。

「くーねえ、おきろ！」

甲高い叫び声とともにズドン！という地響きが鳴り、それから、パーンと痾癪玉が弾けるような炸裂音が部屋中に響いた。極めつけは、

「うぎゃあ〜！」

上で寝ていたヒカルの妹、久美子の悲鳴だ。その間、敵ははしごを下り攻撃の的はヒカルになる。

「ヒーねえ、おきろ！」

声と同時に体にズシンとかかる重み。布団を乱暴にめくられ、こめかみに突きつけられた鉄砲。

「わ〜、それはやめて〜！起きてる！起きてるから！！」

懇願しても通じない。やはりさっきと同じ炸裂音が耳元で弾けた。

「うわあ！」

「うわっはっはっ！」

敵は得意気に腰に手を当てて笑うと、ベッドから飛び降り次なる標的の元へ去って行った。しばらくすると隣の部屋から、パーンという鉄砲の音と、`うわあ〜っ！、という叫び声と、`うわっはっはっ！、という笑い声が聞こえ、廊下をパタパタ走る音に続き、階段をトタントタン下りる音を最後にしてようやく静かになったのだ。

「まいるよ〜」

上の段から久美子がそろそろと下りて来た。

「毎朝これじゃ身が持たない...。お母さんがあんなおもちゃを買い与えるから悪いんだ。すっかりヒーローになりきってるよ、あいつ...」

久美子はクロゼットから自分の制服を取り出しながらぼやいた。

「しょうがないよ。敵はまだチビなんだし。これが楽しみであたしたちよりも早起きしてるんだもん」

「お母さんったらさ、チビがかわいくってしょうがないんだよ。甘やかしてばかり！」

「そりゃそうでしょう。年いってから生まれた子供はかわいって言うじゃない。久美子だってかわいがってたじゃない？ちょっと前まではさ！」

ヒカルはたった今癪癪玉がはじけたこめかみをさすり、今朝は目が覚めてたのになぁ...、とこぼしながら真新しい制服に着替えをはじめた。今日はこれから入学式。早起きが出来て良かったと思うけれど――。

「毎朝のこれが始まってからはかわいくなかった！だからあたしはお子様は嫌いなのだ！」

着替えが済んだ久美子はカーテンをサーッと開いた。

「ちょっと待って！あたしはまだ着替えの途中なんだよ！」

「別にいいじゃない。ヒーねえのペタンコなんか見ても誰も興奮しないって！」

「ここは田舎と違うんだからね！どこで誰が覗いているかわかんないんだよっ！」

「大丈夫だって。ほら、隣んちのカーテンも閉まってるよ」

久美子は二メートルほど先の、向かい合っている隣家の窓を指差した。引っ越してきた日から、朝のこの時間にあのカーテンが開いているところを見たことがない。昼近くになってからか、昼を過ぎてから時々開いてはいるけれど...

「あの部屋...、よっぽどの寝ぼすけか明るい光が苦手なネクラさんが住んでいるんだろうね...」

向かいの窓を眺めながらヒカルはさっさとブラウスのボタンをはめた。

「あそこにたんぽぽが咲いている」

「どれどれ？」

ヒカルは最後のブレザーを羽織りながら窓辺に寄る。軒下のわずかなスペースに黄色いたんぽぽが三つ四つまとまって咲いていた。

「こんな土のない街でもたんぽぽは咲くんだね。桜の香りもする」

空気をいっぱい吸い込むと、春の匂いと桜の香りで体中が満たされ今日一日分の幸せをいっぱい手に入れた気持ちになる。

「いい匂い」

爽やかな気分になり、ヒカルが思わず、

はーるのーうらーらーのーすーみーだーがーわー

と、唄い出すと、久美子がおもいきり顔を歪め耳まで塞いだ。

「またそれ...。音程になってない歌はやめてよ...。朝から調子が狂う。どうやったらそんなふう曲を改ざんして歌えるんだか...」

ヒカルは筋金入りの音痴なのだ。

「うるさいなぁ...。せっかくいい気分で唄っていたのに...」

「いい気分なのはヒーねえだけだよ。聴かされた方はそのまま気絶できちゃうから」

そこまで言わなくても...、とヒカルはしょぼくれたが、すぐに立ち直って言った。

「でも、家がここでよかったね。たんぽぽが咲かない春なんて寂しいしさ。お父さん、いい家を見つけてくれたよ」

「ヒカル、久美子、早くしなさい！」

階下から母親の呼ぶ声が聞こえた。

「ヤバイ！せっかく哲平に起こされたのにいつまでも喋ってちゃ朝メシ食いっぱぐれる！ヒーねえ、先に下りるよ！」

久美子は真新しい学生カバンをサッと手に取り慌てて部屋を飛び出した。

「痛えっ！」

「痛ーいっ！」

その途端に廊下でまたひと悶着。

「このおてんば！朝からドタドタ走るな！」

ヒカルが廊下に出ると、尻餅をついた兄の剛が怒鳴っていた。

「お兄こそ、狭い廊下ででっかい図体さらすな！」

「なんだと」

「やるか」

これは毎度のこと。哲平の目覚ましと同じ、浅倉家の朝の決まった行事と言ってもいい。ヒカルはちいさく息をつき、戦闘態勢が整っている兄と妹を鮮やかに無視して、そのまま階下に下りた。

食卓にはパンとサラダが用意されていた。

「ヒーねえ、いっちはーんっ！」

首にエプロンを巻き、フォークで刺しても刺しても逃げていくうずらの卵と格闘していた哲平が、口のまわりにマヨネーズをいっぱいつけた顔を上げて笑った。毎朝の鉄砲目覚ましには困ったものだが、こんな哲平は可愛い弟だ。ヒカルは哲平の頭を、おはよう、と撫でながら食卓に着いた。

「剛と久美子は？」

「二階でプロレスごっこやってる」

「また？もう...、剛もいい年して何をしてるんだか...」

「ぷろれす〜！ボクもやる〜っ！」

哲平は椅子からひょいと飛び下りるとテーブルにあった鉄砲をつかみ、タターッと駆け出した。ごはんを食べちゃいなさい！という、母親の制止など聞くはずもない。

「ヒカル、お願い」

「ああ〜っ。いっつもあたし〜！」

たった今食卓に着いたばかりなのに、ヒカルは渋々哲平のあとを追った。

二階は大変な騒ぎになっていた。床に転がる剛、その上にまたがって暴れる久美子と哲平。

「いいかげんにしろっ！」

ヒカルが一喝すると、一同の動きがピタリと止まった。

「兄貴、あんたは大学生！年を考えなさい！久美子！もっと女らしく！パンツが丸見えだよ！

哲平、キミはごはんを食べちゃいましょうね～、さあ、いらっしゃい」

ヒカルは哲平を、ひょい、と抱き上げ、廊下に座り込んだまま呆けている兄と妹を置いて階段を下りる。

――まったく。今日は大事な入学式だっていうのに、みんなちょっとはあたしのことも考えてよねっ。

盆だろうが正月だろうが入学式だろうが、こんなふうに兄妹たちのフォローを任されるのは毎度のこと。哲平を元の椅子に戻し、ヒカルは無言で朝食に手をつけた。そこへ、へろへろになった剛と久美子が揃って二階から下りて来た。

「おふくろ、哲平の目覚ましは勘弁してくれよ。俺は大学生なんだぜ。何もこんなに朝早く起きなくたっていいんだからさあ」

食卓につくと剛が哲平の鉄砲を取り上げながら訴えた。

「いいの。あんたたちはそろいもそろって朝に弱いんだから。てっちゃんのおかげでスッキリ目が覚めるでしょ？」

「スッキリ？とんでもない！見て！俺、あざだらけだぜ。明日には鼓膜も破れそうだ」

あざは哲平の目覚ましじゃなく廊下のプロレス大会のせいでしょうが、とヒカル。

「情けないわねえ。四才の子に負けてるなんて。もっとしっかりしてくれなきゃ困るわ」

母は剛と久美子を交互に見てから、マヨネーズだらけの哲平の口元をぬぐってやった。にまぁ～と笑う哲平は、天使と悪魔を顔の中に同座させた未知の生命体のようだ。

「哲平なんか大嫌いだ！」

剛と久美子は声をそろえて叫んだ。

「いーもん！ボクはママとヒーねえが大好きだもんっ！」

「哲平くん、ありがとう。じゃあ明日からヒーねえにだけは鉄砲パーンをやらないでくれる？」

ヒカルが哲平をぎゅうっと抱きしめると、哲平は「ヒーねえ、には天使の顔で微笑んだ。

「わかったよ。ヒーねえにはやらないで子分にしてみせる！」

「ありがとう！」

「ヒカル、お前、自分だけ点取りしやがって！」

「そーだ！ヒーねえはずるい！」

「何を言うか愚か者！哲平に大嫌いなどと言うあんたらが悪いの。自業ジゴクというものよ！さてと、もう行かなきゃ！」

朝食を済ませたヒカルはバタバタと支度をはじめた。

「久美子、お先！」

「待ってよ！自転車の後ろ乗せてってよ。学校、隣なんだからさあ！」

「あまい！中学生は徒歩で行きなさい！」

ヒカルが今日から通う本城高校と、昨日久美子が入学した墨川中学は道路を挟み向かい合っ

て建っている。家からは徒歩でも通える距離で中学生はもちろん徒歩通学だが、高校生のヒカルは自転車通学をすることに決めていた。

「それじゃお母さん、哲平くん、行ってくるね！」

「ヒーねえ、行ってらっしゃーい！」

哲平に見送られて家を出ると、満開を過ぎた墨田公園の桜は春の風に花びらをひらひら泳がせている。ヒカルは麗らかな風の中に颯爽と自転車を走らせるのだった。

剣道部合宿、那須高原――。

「……結野、強すぎ」

合宿が始まって三日目。勝負三回目。そして、三敗目の祐輔は思わず呟いた。

「伊藤くんが弱すぎ」

面を取らないままの麻耶がサラリと言り返す。

――う…。

表情が見えないだけに、麻耶の言葉は祐輔の心の奥にグサリと突き刺さった。入部以来、麻耶とは何度も試合をしているがまだ一勝も出来ない。麻耶は中学時代に都大会で個人優勝、また関東大会でも上位成績をおさめている達人。自分はというと、関東大会はおろか都大会までも勝ち進んだ経験なしだ。

「結野には勝てなくて当たり前だよ」

と、部員たちは言うけれど…。

――はあ…。

面を外し、道場の窓から外を眺めて祐輔はため息をついた。遠くに裾野を大きく広げた茶臼山がそびえていた。

――勝てなくて当たり前…。そうかもしれないけど、それでいいのか？

続けて二年生と試合をしている麻耶。少しも無駄がないその振る舞いは凛々しく優美としか言いようがなかった。

◇

翌朝のこと。早朝ランニングは五時半から始まるため、剣道部員たちは五時起床となっている。だが、部員のほとんどがギリギリまで布団から出てこない。生活態度が優秀な祐輔は、五時にはキッチリと目覚め身支度も早い。目が開かない部員たちを横目に見ながら剣道着に着替え、顔を洗いに部屋を出た。

廊下に出て部屋のドアを閉めようとしたとき、ひとつ間をおいた向こうの部屋から麻耶が出てきた。麻耶はまだスエットのパジャマを着たままで、たった今起きたばかり、ということが一目でわかるくらいにぼうっとしている。廊下に出たところでしばらく立ち止まり、大きなあくびをして立ち尽くす麻耶がそこにいるので、祐輔はその先の洗面室に行くに行けずに、そのまま様子を見守った。

しばらくして麻耶はようやく歩き出した。どうやらこっちに向かってくるようだ。だが、目をこすりながらの麻耶は目の前に祐輔が立っていることにも気がつかない様子で、足元もふらつきながら歩いてくる。

「…結野、おはよう」

自分の目の前まで来た麻耶に、部屋の前で突っ立ったままの祐輔は声をかけた。

「…おはよ」

麻耶から返事は返って来たが、どうも様子が変わる。

――僕だってわかってないんじゃない...？

祐輔の横をそのまま通り過ぎて麻耶はさらに廊下の先まで歩いていくが...

――この先は突き当たりだけど...

祐輔がそのまま様子を見守っていると、麻耶もようやく行き先にもう道がないことに気がついたようで、またしばらくそこで考えるようにして立ち止まり、今度はくるっと回れ右して戻って来る。だいぶん身体も目覚めたのか、さっきまでとは違い足取りもしっかりとしていた。廊下に立ち、自分を見ている祐輔に気がついた麻耶は、

「...おはよう」

と、もう一度早口で言って、そのままスタスタと横を通り過ぎて行った。顔が少し赤くなっていたように見えた。麻耶の目的地は祐輔が行こうとしていた洗面室だったようだ。

――...ずいぶん無駄な動きをしてたな。

思わず顔がほころんだ。同時に本能の底から沸いてくるような胸の高鳴りを感じた祐輔だ。

――なんだ、なんだ、なんなんだ？！

麻耶が入った女子用洗面室の隣りに飛び込み冷たい水で顔を洗う。鏡に映った自分の顔が真っ赤にほてっていた。

◇

夏の高原の朝――。ひんやりとした空気に身も心も引き締まる。宿舍の前に剣道着の部員たちが集まり、これから茶臼山までの一時間のランニングが始まる。パジャマを脱ぎ、黒髪をひとつに結んだ麻耶はもう剣士の顔をしていた。

「それじゃ出発！ホンジョー――ウ！」

先輩の号令を合図にして、部員たちは一斉に、「ファイト、オー！」と、掛け声を合わせて走り始めた。祐輔の目の前で麻耶の黒髪が可憐に揺れる。

――強くなる、結野より。絶対に強くなる...！

前方にはそびえる雄大な茶臼山。その、大きな懐に向かい祐輔は心の中で言い切った。

秋の日の日曜の昼下がり。いつものコンビニで雑誌を立ち読みしていた颯土は、
「おばちゃん、こんにちは！」

聞き覚えのある声にギョッとしてそっとカウンターを見た。

――げ、浅倉…。

見つかったらやっかいだ。颯土はそっと雑誌を戻し、ヒカルの死角に移動する。

「ヒカルちゃん、あんまんがいいあんばいにあったまってるよ！」

「へへ！それを見計らって買いに来たの！」

――普通、コンビニのおばちゃんと仲良くなるか？名前まで覚えられてるし、自己紹介でもしたのかよ…。

ヒカルが越してくるはるか前からこのコンビニは利用している颯土だが、カウンターのおばちゃんに名前など呼ばれたことは一度もない。

「じゃ、おばちゃん、またね！」

ヒカルが退場したので、颯土はほっとして元の位置に戻った。が、

――なに！？

今度はガラスの向こう、颯土の目の前で掃き掃除をしていたアルバイトのおに一ちゃんと立ち話をしているヒカルだ。

――なんなんだ、あいつ。従業員みんなとオトモダチなのか？

颯土はまた死角に移動した。ヒカルはしばらくおに一ちゃんと話をしていたが、やがて手を振って歩き出した。今度こそ本当に帰ったらしい。

――ふう…。

ため息をひとつ吐いて、颯土もコンビニを出た。だがこのままいくとヒカルの帰り道と同じになる。あの調子で話しかけられるのも面倒だし、無視して喚かれるのもやっかいだと思った颯土は、自転車を墨田公園に向かわせ、川べりの道に行くことにした。ところが…。

――ああ！？

前を歩いているのは紛れもなくヒカルだった。足取りも軽やかに、セミロングの髪をふわふわと躍らせて楽しそうに。颯土は自転車を降りて転がし、ヒカルの数メートル後ろを見つからないようにそっと歩くことにした。

「わあ！可愛い赤ちゃんですね！何ヶ月なんですか？」

ベビーカーを押しながら散歩している若い夫婦に声をかけたり、ユニフォームを着たスポーツ少年団の小学生に、

「あ、野球の試合だったの？勝負は何対何だった？」

と聞いてみたり、しまいには、

「ねえねえ、キミはどこの子？」

しゃがみこんで野良猫にまで言葉をかけるヒカル。ヒカルが立ち止まる度に颯土も追いつかないように止まらなくてはならなくて、

――ずいぶん家が遠い…。

と、大きなため息が出た。だが、制服を着ていない普段着のヒカルは昔馴染みの`隣のヒカルちゃん、といった感じでどこか親しみがわく。

――まあ、本当に隣だけど…。

そのうちに、次はヒカルがどんな行動をするかと楽しみながら見ている自分に気がついた颯土だ。

――やべ。俺はそーゆーキャラじゃねえし…。

居心地のいい場所にはあえて行かないようにしている自分がブレーキをかける声がどこかで聞こえてくる。けれど……。

「あ、おばちゃん！」

ヒカルが次に声をかけた相手は…、

――お、おふくろっ！

瞬間、颯土はくるっと方向転換をした。だが時既に遅しで、

「あら？颯土じゃない？あんた何やってるの？」

母は自分の息子を素早く見つけたようだ。

「え？群竹くん？」

とうとうヒカルにも見つかってしまった。母とヒカルのダブルでは、下手に逃げたり無視したりすると後が非常にやっかいだ、ということを颯土は知っていた。

「散歩…」

颯土はぶっきらぼうに答えた。

「自転車転がして？変な子ねえ」

――どうせ変だよ。

心の中で文句を言った時、

「今、そこのコンビニであんまん買って来たんだあ〜。天気もいいしちょうどみつつあるからおばちゃんも群竹くんも一緒に食べようよ？ほら、そこのベンチに座って！」

ヒカルは母と颯土にあんまんをひとつずつ手渡した。

「お、俺はいいよ…」

手渡されたほかほかのあんまんをそのままヒカルに返そうとした颯土だが、

「あら、せっかくだからいただきなさいよ。颯土もそこに座って」

母親に押し切られて渋々ベンチに座る。

晴れた日曜の昼下がりの墨田公園。ヒカルを真ん中にして横に並んでベンチに座り…、

――何で俺、浅倉とおふくろと一緒にあんまん食ってんだろ…。

と、思う颯土だった。

――ところでこいつ、俺たちに会わなかったら、ひとりでみつつ食うつもりだったのだろうか――？

ふと、そんな疑問が湧いたらなんだか可笑しくなって、あんまんを口に運びながら、颯土はこっそりと笑った。

文化祭も終わり、十二月に入って外は木枯らしー。そんなある日の三時間目の最中にあかねは貧血をおこした。養護の沢渡先生は忙しいらしく保健室を出たり入ったりしている。良くなるまでベッドで休んでいなさいという先生の言葉に甘え、あかねは温かい毛布の中ですっきり寝入ってしまった。

終業のチャイムの音でぼんやりと目覚めた時、ガラッとドアが開く音がした。

「なんだよ、沢渡センセイねぇじゃん…。自分から呼びつけといて」

カーテンの向こうでする男子の声を知っているような気がするが、ぼうっとした頭ではそれが誰なのかまでたどりつくことができなかった。

「しばらく待ってようぜ？そのうち戻って来るだろ」

――沢渡先生、まだ帰ってきてないのか…。

誰だろう？と心の片隅で思いながら、目はまだ閉じたままのあかねだ。ふたりいるらしい男子は、ベッドのカーテンのすぐ向こうにある長椅子に座ったようだ。カーテンがサラッと揺れた。しばらくの間ふたりは無言でいたが、

「なんか、居心地悪いなあ…」

と、低い声が言ったあとに、

「…そういえばお前、あの後お宝はゲットしたんだろ？」

と、もうひとりが言った。

――低い声と優しい声…。

あかねは自分の知っている男子たちの声を思い出そうとするが、頭はしっかりと働かない。

「…やめた。言わないことにした」

「やめた？」

しばらくの沈黙。

「俺が独り占め出来るあいつじゃないってことがわかったし…」

「お前らしくもない。惚れてんなら何も気にすることねえだろ。独り占めしちまえばいいじゃないか」

「…したいさ、もちろん。でも、それをやったら俺はきっと、自分の嫌なところを思いっきりさらけ出しちまう」

「嫌なところ？」

「そ。何となくわかるだろ？」

「…まあ、わかるかもな。相手が相手だけにちと辛いかもしれないな」

ハッと低い声が笑った。

「独り占めしたいけど出来ないジレンマに悶々としてさ、大切なものを傷つけるのはやだから…、しまっておくことにしたってわけ」

――何だかせつない。

聞こうとしているわけじゃないが、耳に入ってくるふたりの男子の話と声が、あかねの胸を

じわっと締め付ける。独り占めしたいけれど出来ないジレンマの中にいるその低い声の男子の気持ちがよくわかるあかねだった。

――きっと、とっても輝いている女の子に恋をしているんだね…。いつも誰かに囲まれていて、みんなが彼女を大好きで、一番近くにいます。なのにどこか遠い気がして……。そんなとっても輝いている女の子を私も知ってるよ…。

独り占めしたくても出来ないジレンマ――。少し前までのあかねもそんな想いをしていたから。

「まあ、急ぐことはないかもしれないな」

もうひとりの優しい声が言った。

「そ。お前と同じ」

「俺？」

「人様のものになっちゃったお宝を、じーっと見守り続けるお前を真似してみることにした」

ハッと今度は優しい声が笑う。

――そっか。こっちの人もせつない恋をしてるんだね…。じっと誰かを見守り続けているんだね。何だか素敵だな。

あまりにもせつなくて、でもとても優しい恋を語り合っているこの男子たちの顔が見たいと思った。そっと起き上がってカーテンの隙間から覗こうとしたその時、

「あ～、ごめんごめん、ふたりとも！」

戻ってきた沢渡先生が急ぎ足でふたりの男子に近づいたので、あかねは慌てて毛布の中に戻った。

「ひでえよ、センセ。休み時間がパーだ」

優しい声が言う。

「ごめん～！今日は何だかバタバタしててさ！」

「で、用は何？」

と、低い声。

「ふたり仲良く健康調査票の記入漏れよ。でも今ここは病人が寝ているから職員室に来てくれる？」

「え？！誰かいたのか？！」

と、ふたりは同時に声を上げた。あかねはとっさに毛布の中に頭ごと隠れた。

「ん？何？」

沢渡先生がふたりに向かって言う。

「いや、何でもないっす…。じゃ、とっとと行こうぜ、職員室」

沢渡先生とふたりの男子は保健室を出て行ったようだ。あかねはそっと起き上がってカーテンを開いてみた。

「…誰だったのかな、あのふたり…」

ふたりが座っていた椅子を見つめながら呟く。

――ふたりとも、いつかその恋が実るといいね。

もう貧血もだいぶんおさまったようだ。四時間目は大嫌いな数学。本当はこのままあと一時間寝ていたいところだが、今はなんだかとても颯土に会いたい。颯土の顔が見たい。教室に向かって歩き出した時、始業のチャイムが鳴った。

今年の本城高校はサッカー部の活躍が目覚しかった。都大会を勝ち進み、本城高校始まって以来の全国大会出場も夢じゃなくなりそうな勢いのサッカー部が、いよいよ決勝トーナメント出場を賭けての試合に挑むという一週間前に有志応援団が結成されることになり、その募集時に麻耶はヒカルたちと一緒に参加した。

だが、サッカー部はそのトーナメント一回戦で敗退。前半後半を0－0で戦い、PK戦でのミスがその敗因だった。悔し涙に暮れて立ち上がれない部員たちに、

「そんなに悔しいなら、負けないように強くなりなさいよっ！」

応援団席から叱咤を飛ばしたのは麻耶だった。

「悔し涙なんて誰だって流せるんだから！泣いてる暇があったら修行しなさい！」

.....麻耶ちゃん、何もそこまで言わなくても....

.....よく頑張ったねって言ってあげるのが応援団じゃない？

そう、ヒカルやあかねがなだめても、

「甘い！勝負の世界は厳しいのよ！」

シビアに跳ね除けた麻耶だ。それからのサッカー部は主将の山本を中心にして今まで以上の厳しい練習に励んでいる。

「麻耶ちゃんの喝が効いたみたい...」

ヒカルたちは感心するしかない。剣道部では男子にも負けない麻耶の叱咤激励は、サッカー部員たちの胸にグサリと突き刺さったようだ。そんなある日の放課後のこと。

「サッカー部の山本先輩に呼び出されちゃったよ...」

麻耶がヒカルや祐輔たちのいる教室で困ったように呟いた。

「呼び出されたってどういうこと？」

「わかんない。後輩のくせに生意気なこと言っちゃったから文句言われるのかもしれないなあ...。とりあえず行ってくるね」

麻耶が教室を出ようとする、

「ひとりで大丈夫？」

「ひとりで大丈夫か？」

ヒカルと祐輔が同時に声をかけた。

「うん、大丈夫」

麻耶が出て行った先を心配そうに見つめるのは祐輔だ。

「なんだろう、気になるね...」

と、言い合うのはヒカルとあかね。勇斗と颯土は既に部活に行ったあとで、もしもここに勇斗がいたとしたらさらに大騒ぎになっていただろう。

「まあ、帰ってくるのを待ってよう？」

ヒカルの言葉にあかねと祐輔は頷くしかなかった。

麻耶が呼び出されたのは校庭のサッカーゴールの後ろだった。サッカー部はこれから部活が始まるようで、グラウンドにポツリポツリと部員たちが集まって来る。だらだらと歩いている一年部員たちが、麻耶を見たたん背中に定規を押し込められたように背筋をピンと伸ばす。

――な、なんなのよ…。

部員たちのそんな態度にやや面くらいながらゴールの後ろまで行くと、山本はすでにそこにいてウォーミングアップをしていた。

「やあ、麻耶ちゃん！」

「………私に話ってなんですか？」

山本の馴れ馴れしい呼び方に、ちょっとムツとした麻耶だ。

◇

しばらくして麻耶は教室に帰って来た。

「麻耶ちゃん」

「結野」

「山本先輩、なんだって？」

麻耶の周りを三人が囲む。

「付き合ってくれって言われた」

えっ！？――と、絶句したのは祐輔だ。

「やっぱりね…。そうじゃないかと思ってた」

ヒカルやあかねは驚きもしない。

「君のような凛々しい彼女が側にいてくれたら強くなれると思う、だって」

麻耶はサラリと言う。

「君が俺の彼女なら、きっと部員たちの励みにもなる、だって」

馬鹿にしたように。

「で？返事は？」

祐輔がゴクリと生唾を飲み込む音が教室中に響いた。麻耶は祐輔をジロリと睨んでから、もちろん断ったと、当たり前のように答えた。

ほっと安堵のため息でいかっていた肩が下りたのは祐輔だ。その様子を麻耶はまたジロリと睨み、

「先輩だから言えなかったんだけど…、ちょっとここで叫んでもいい？」

と、深呼吸。

「どーぞ！」

三人が麻耶を促すと――。すーっと深呼吸をしたあとに、

「冗談じゃないわよ！！強くなってから言ってよね！弱い男は大嫌い！女の力に頼ろうとする男も大っきライ！！なよなよ男は大っきライ！！」

一気に叫んだ麻耶は、`は一、スッキリした～っ！、と息を吐き、あかねを伴って帰って行った。

「…麻耶ちゃん、たくましい…」

山本は爽やかで女子受けもいいし、それなりに常識もわきまえているしサッカーもマジメにやっている、サッカー部の主将としてはたぶん申し分のない男じゃないか、とヒカルは思っていた。それを、`弱いなよなよ男、'と言い切ってしまう麻耶だ。

「結野にとっちゃ今の僕なんか眼中にもないんだろうなあ...」

「言いにくいけど、たぶんそうだろうねえ...。山本先輩もえらい子に惚れちゃったもんだね。これからのサッカー部が見ものだわ...」

――磨く...！

密かに改めて決意をする祐輔だった。

窓の外をチラチラと雪が舞いだしたのは四時間目の途中だった。まだ十二月も半ばだというのに、東京で雪が舞うなんてめずらしい。

「キレイだなあ...」

真ッ白なじゅうたんが敷かれたような校庭と、粉砂糖をまぶしたようなフェンスや梅の木を見てあかねはうっとりと呟いた。ところが、はじめは`舞って、いた十二月の雪も、次第に`吹雪く、に変わっていき、六時間目が終わった頃にはあたり一面の銀世界。部活動も全て中止になり生徒たちは早めの下校を促され、あかねと麻耶もザックザックと雪の上を滑らないように歩きながらやっとの思いで駅に到着した。

改札の前に大勢の人たちが集まっていた。

「積雪の為、ただ今電車の運転を見合わせています。運転再開は未定です」

ハンドマイクを持った駅員がどよめきの利用客たちに説明をしていた。

「運転見合わせだって。どうしよう...」

あかねが泣きそうな顔をする。凍える寒さの雪の上を革靴で歩いて来たものだから足は濡れて感覚がなくなっている。いつ再開になるかわからない電車をこの状態でずっと待っているなんて耐えられそうもない。さっき、キレイだなんてうっとりしていた自分に心底腹が立った。

「麻耶ちゃん...」

「どうしようかねえ...」

麻耶は腕を組んで考える。自宅まではどうしたって電車を使わなければ帰れない。タクシー乗り場は長蛇の列だし、第一タクシーに乗れるほどのお金も持っていない。

「しょうがない。ヒカルちゃんちに行こう！」

言うが早いか、麻耶はスタスタと公衆電話に向かった。その間にやって来たのは勇斗と祐輔だった。

「あれ？電車止まってるの？」

祐輔が改札の前で寒さにカタカタ震えているあかねに訊いた。

「うん...。いつ動くかわからないんだって...」

「結野は？」

「今、ヒカルちゃんに電話をかけている」

ちょうどその時、電話でヒカルと話をつけた麻耶が戻ってきた。

「あったかいおしるこを作って待っててくれるって！」

「じゃあ、オイラたちも！」

勇斗が嬉しそうに雪の中に飛び出した。

「ヒカルちゃんちがあってよかった...」

と、あかねはほっとした。

四人が今来た道を再びザックザックと足を雪に濡らしながら歩いていると、向こうから響たち

一同がぞろぞろとやって来た。

「あれ、あかね？みんなもどうした？」

「...電車が止まってるんです」

「えー?!」

響一同は顔を見合わせた。

「参ったねえ...」

「どうするよ？」

「電車止まんなよ...」

あたりはもう薄暗くなっているし雪はまだまだ止みそうもない。

「で、お前たちはどうするんだ？」

「オイラたちはこれからヒカルちゃんちに行っておしるこ食べます！」

勇斗にとっては十二月の大雪も電車が止まっていることさえもお祭りだ。

「ヒカルんちでおしるこかぁ～。いいなぁそれ！俺たちも便乗しようぜ？」

と、響が言うと、田村たちも、いいね、いいねと同意する。

「...あたし知らないよぉ」

電話ではあかねとふたりで行くと言っただけなのにまさか九人で押しかけて行くなんてヒカルは夢にも思っていないだろう。

「ヒカルちゃんのことだから電車が動くまで家にはいさせてくれるだろうけど、おしるこはあたしとあかねの分しかないからね」

麻耶はしっかりと釘をさした。

「ヒカルちゃんちにみんなあがれるかな...」

あかねはそっちを心配する。

「入れなかったら隣に流れればいいじゃん！」

「そっか。群竹んちもあったんだ！」

と、勇斗と祐輔。

――あ。群竹くんに会えるかな...。

あかねの胸はときめく。

「群竹ちゃんも呼ぼう！みんなでおしるこパーティーだ！」

「だから、おしるこはあたしとあかねの分だけしかないよ！」

「麻耶ちゃんの食いしん坊...」

「そーゆー問題じゃなくて！」

「...まぁまぁ、何でもいいからとにかく行こうぜ？寒くて凍えそうだぜ」

もめる麻耶と勇斗を促して響が先頭をきって歩き出した。

◇

呼び鈴を押すとすぐにドアが開き、

「麻耶ちゃん、あかねちゃん、寒かったでしょう！！」

赤い半纏を着たヒカルが飛び出して来た。

「ヒカルちゃん、あのさあ...」

と、麻耶が言っているドアの影から、「よっ！」「やあ！」「ども！」と、響や田村、祐輔たちが次々と顔を出す。

「やっぱり...」

と、ヒカルは笑った。

「え？やっぱり？」

「電車が動かなくて帰れないのは麻耶ちゃんたちだけじゃないと思ったから、こうなるんじゃないかなあと予想してました！」

さすがヒカルちゃんだ...、とあかねは感心した。

「おしるこは？」

すかさず訊いたのはもちろん勇斗。

「いっぱい作ったから大丈夫。みんなの分あるよ！」

「じゃ、オイラ群竹ちゃんを呼んでくるね〜！」

勇斗はそのまま颯土の家に向かい、他の一同はヒカルの家に上がりこんだ。もう、外は黒と白の世界。しんしんと降り続く雪。電車はいつ動くかわからないけど、こういうのってちょっと楽しい。ここに颯土がいればもっと楽しい。

——群竹くん、来るかな...。

あかねは明かりがついている颯土の部屋をそっと見上げた。

紅白歌合戦の大トリが終わり、野鳥の会のみなさんがカチカチとカウントを始めた頃、ヒカルと母はコートを着込んで外出の準備を始めた。これから除夜の鐘を近くのお寺に突きに行く。

さっきまでは哲平も久美子も張り切っていたのに、紅白が演歌のオンパレードになった頃にはふたりとも沈没。本当はヒカルも眠くて目が開けてられない状態だったが、母から聞いた、「人間の百八つの煩惱を消すために百八つの鐘を鳴らすのよ」

という鐘を鳴らす意味に心が動き、参拝者に鐘を突かせてくれるそのお寺に行く気になったわけだ。

「いってら～」

剛がコタツに寝転がってやる気なさそうに手を振った。

「兄貴も一緒に行こうよ」

「俺はいいよ。煩惱なんてねえし」

――納得。

あまりにも説得力のある一言に大きく頷いたヒカルと母が星空の下に出て行くと、隣の家から颯土の両親が出てきた。

「あら、ヒカルちゃんも除夜の鐘？」

「うん。おばちゃんたちも？」

「そうよ。毎年行ってるの」

「群竹くんは？」

「あの子はどうせ行かないから...」

颯土の母はため息をつく。ヒカルが颯土の部屋を見上げると、まだ明かりはついていた。

「百八つの煩惱だよね？」

ヒカルは颯土の母に言った。

「そう。一年を過ごすには四苦八苦するでしょ？四苦の四×九=三六と八苦の八×九=七二の合計で百八なんだって」

「百八つの除夜の鐘で煩惱を消しながら年を越すんだよね？」

「そう」

「じゃ、群竹くんも行かなきゃダメだ！いつだって煩惱の塊なんだから！」

ヒカルの言葉に、颯土の両親は目を丸くして顔を見合わせ、プッと吹き出した。

「ヒカル、失礼よ！」

母が慌てる側で、ヒカルは颯土の部屋の真下まで行き、

「群竹くん、行くよー！」

と、叫んだ。

ガラッと窓が開き、明らかに、うるせえなあ...、という顔の颯土が現れた。

「除夜の鐘、突きに行くよ！早く降りてきなよ～」

「ああ？」

行こうではなく行くよと勝手に決めているヒカルに颯土はいつものように呆れる。

「早くしないと突けなくなっちゃうよ！ほら、早く！」

答えに迷っている颯土に父が、

「行くぞ」

と、一言促すと颯土は渋々窓を閉めブルゾンを羽織って下りてきた。

「わ、颯土が行く気になった…。ヒカルちゃん凄い…」

颯土の母は嬉しそうに笑った。

◇

低い階段を上り、お寺の境内に着くと鐘突き堂の周りには順番を待つ長蛇の列が出来ていた。

「ほら、群竹くんがぐずぐずしてるからこんな後ろになっちゃったよ…」

ヒカルは颯土に文句を言う。俺のせいだよ…？と、颯土は心で反論し、ふん、と顔を背ける。

「ほらほら、喧嘩してないで並びましょう」

颯土の母はさっきからとてもにこやかだ。

――何で俺が親父とおふくろと浅倉と除夜の鐘を突かなきゃなんねえんだよ…。

勢いで連れてこられてしまったが、さっきからどうも腑に落ちない颯土だ。その懨然たる思いは顔にしっかりと表れている。

「それが、煩惱ってやつだよ！」

「はあ？」

「小さいのも大きいのも今日で全部消して、空いた場所にぼだい（菩提）を埋め込みなさいな！」

「はあ！？」

煩惱とか菩提とか、何言ってんだこいつ？

「…悟りでもひらいたのか？」

「あそこに書いてある」

ヒカルは鐘突き堂の横に立つ看板を指差して笑った。

――あほらし…。

百一、百二、百三…。人々が順番に鐘を鳴らし、「次で終わりです」と、お坊さんが言ったのはちょうど颯土のところ。

「え～？」

颯土の後ろに並んでいたヒカルが思わず落胆の声を出したので、颯土はプッと笑った。

「百九鳴らしちゃダメなんですかぁ？」

お坊さんは無言で頷いた。

「はあ…。せっかく来たのに…」

「そんなに突きたいんなら譲ってやるよ。俺は別にいいから…」

「ダメ！群竹くんは絶対に突かないと！」

ヒカルは間髪を入れずに言い切った。

――何でだよ…。

「じゃあ、ヒカルちゃんも颯土と一緒に突いたら？そうしなさいよ？」

颯土の母が、お坊さんに促されて渋々鐘突き堂に入っていた颯土の元にヒカルを押した。

「うん。いい？群竹くん？」

――俺は別に突かなくてもいいんだけど....。

「せーの！」

ごーーん.....

都会の夜空に二人分の大きな低い鐘の音が響き渡った。

――何か俺....、

馬鹿みてえ、と続けたい言葉を颯土は意識の下に無理やり沈めた。

「これで煩悩は消えたね！」

と、ヒカルは無邪気に笑う。

「よかったわね、颯土」

と、母。

「うんうん」

と、父。

「.....」

――わけわかんねえ...？

一年の初めに新たな煩悩が生まれそうな颯土は、満天の星空を眺めたため息をつきながらも、わけもなくほころんでくる顔を必死に隠していた。

三が日はとうに過ぎ、六日の朝。

「げ...、またおせちかよ...」

食卓に並んだ重箱のおせち料理を見て勇斗はいいかげんうんざり、といった具合に呟いた。大晦日の夜から六日連続、朝も昼も夜もにしんや昆布巻きやきんとんや黒豆ばかり食べさせられそろそろ見るのもいやになってきた。

「普通の食べ物ないの？おせちもいいけどカレーもね？とか...」

「正月に食うものはおせちって決まってるんだ」

上座に座る父親がギロツと勇斗を睨む。さすがの勇斗もその殺気立った睨みには足がすくんでしまう。

——いったいか一ちゃんどれだけのおせちを作ったんだよ。食っても食っても補充されるってどーゆーわけ？

食べればそのうち無くなるだろうと思い、昨日まではせっせと口に運んでようやく重箱の中もキレイになったと思っていたのに。文句を言いたいのは山々だけど、父の睨みが怖いので勇斗はおとなしく座った。母は最初からそんな勇斗の文句は聞かない、といった具合で無言で小皿を勇斗の前に置き、それからもうひとつ...

「がっ！また酒かよ！？」

当たり前のように差し出された杯を見て、勇斗は叫んだ。

「正月は酒って決まってるんだ！」

父がまた睨む。大晦日の夜から昨日まで、水の代わりに酒を飲まされた勇斗だ。お猪口でおとそを一杯とか甘酒なんていう生ぬるいもんじゃない。しっかりとした杯になみなみと注がれる日本酒だ。

——と一ちゃんもか一ちゃんもオレを殺す気かよ...。

高校一年の勇斗にしてみれば、まだ酒よりジュースやコーラの方が美味しいと思うわけで。

「あのさ、オレまだ未成年だよ？酒は飲んじゃいけないって法律で決まってるんだよ？」

目の前で注がれる酒を見つめながら勇斗が訴えると、

「ハウリツ？何を今更そんなことを」

父に鼻で笑われた。

——マジかよ...。

「あのさ、明日は七草がゆだしさ、明後日からオレ新学期だしさ、酒漬けはちょっとマズイって...」

「つべこべ言うなっ！しばくぞ！」

酒が入っているせいか素なのか、突如鬼と化した父親が着物の袂からおみ足をおっぴろげてお膳の上にどん！と置いた。

——ひえ～、こええ～...。

内心はビビりまくりな勇斗だったが、

「冗談じゃねえぞ、親父っ！」

と、勢いだけは負けずにお膳に足を乗せて啖呵を切った。

◇

正月早々しこたま殴られた勇斗。こんな親子喧嘩は日常茶飯事である。だが、今日は飲み食い外出禁止令発動というおまけまでついてしまったために朝から、いや、朝食を食いっぱぐれたわけだから昨夜から飲まず食わずでそろそろお腹と背中がくっつきそうだった。さっき、そう〜っと台所に行って盗み食いを試みたが、

「とーちゃんにバレたら殺されるよ」

母の背後からの冷たい呟きに背筋が凍り、すごすごと引き下がってきた。

――かーちゃんひでえよ。とーちゃんにバレないようにこっそりおにぎりでも持って来てくれるのがニッポンのかーちゃんじゃねえの...？

あまりもの空腹と情けなさに涙が出そうになった。

――こーなったら脱出するしかない！

幸いあたりはもう闇。こっそり窓から木に飛び移れば...

そっと窓を開けて木から木へ渡りようやく塀の外に脱出した時、

「あっ！財布持ってくるの忘れたじゃん！！」

文字通り呆然と立ち尽くした勇斗だ。また木から木へ渡って部屋に戻り、財布を持って木から木へ、なんてことをやるには体力も気力も消耗しきっていた。

「フランダースの犬だな...。ネロだな...。ああ、あれはクリスマスだったか...。まあ正月だってたいして変わんないや...。オイラの一生はここで終わるのか...。パトラッシュ、もう疲れたよ、オイラ...」

ぶつぶつとうわごとのように独り言を呟きながら、裸足の勇斗はふらふらと凍えそうな寒さの街をさまよう。もう、足の感覚もなくなってきた頃だ。

「あら？勇斗くんじゃない？」

優しい声で名前を呼ばれ、勇斗は振り返った。

マッチ売りの少女になったのかと思った。買い物籠を持った婦人が優しく微笑んでいる。その人はよく知っている....、

「ゆうちゃんちのおばさん...」

「こんなところで、しかも裸足でどうしたの？空手の修行？」

「...え？あ、まあ...」

勇斗はとっさにランニング足踏みをした。

「祐輔、家にいるわよ？寄っていく？」

「はい！！」

――ああ、女神さま〜！

祐輔の母が本当の女神に思えた。

◇

「大久保、どうしたの？」

祐輔の顔を見た途端、勇斗はくたぁ〜っと脱力した。

「おい？もしかしてまた親父さんとバトル？」

祐輔は勇斗の事情をよく知っている。勇斗は答える気力もなく、ただうんうんと頷いた。

「...新年早々大変だなぁ。まぁ、これでも飲んで一息つけよ」

祐輔が差し出してくれたのは、カップに注がれた温かいコーンポタージュスープ。大晦日以来の普通の飲み物は、勇斗の身体と心を芯から温めてくれた。

「うまいよこれ〜。世界一うまい...」

「大げさだなぁ...。お湯を注いだだけのインスタントだぜ？」

「それでも世界一うまいんだよ。一生忘れられない味だね」

勇斗はみるみるうちに元気を取り戻した。

——ちっきしょう親父め！覚えてろよ！いつか必ず.....、必ず.....、えっと、どーすんの？

正月早々、面倒くさいことは考えないでおこう。今は、美味しいコーンポタージュと祐輔の温かさに包まれていようと思う勇斗だった。

「...それじゃ、先輩。私はこれで帰りますね」

腕の中から放した時、ヒカルはいつもと変わらない笑顔で言った。

「ああ...。今日はありがとうヒカル」

泣き顔を見せてしまうなんて格好悪かったけれど、そして本当はいつまでも抱きしめていたかったけれど...

「お母さん、来るといいですね」

「...ああ。絶対に来るさ」

――俺を見て昔のジャックに似てるからドキドキしちゃうんだあ、なんて言ってるおふくろだからな...

「ヒビク先輩」

「...ん？」

「...いえ、ヒビク先輩の響って、すごくいい名前ですね！」

明るい笑顔を下としてひとりで歩き出したヒカルの背中を、ずっと見えなくなるまで見送ってから響は電話ボックスに飛び込んだ。

今夜は父、ジャック・ベリーの来日コンサート。

ついさっき、生まれて初めて会った父から二枚のチケットを預かった。一枚は自分に、もう一枚は一緒にいたヒカルにだ。だが、ヒカルはチケットを受け取らず、「お母さんと一緒にお父さんのピアノ、聴いてください」と、笑った。

「...おふくろ？俺だけど...、いまからNホールまで来てくれる...？」

母は即座にその意味を察したようだ。一瞬息を飲んだ後に、

「響...？」

と、呟いた。

「チケットはあるんだ。親父にも...さっき会った」

母は沈黙する。

「...勝手なことして...ごめん」

「...ううん。わかった。今から行くね」

いつもの弾む声は何処へやら、母の声は震えていた。

◇

午後7時開演――。弾むような心地よいジャズピアノ。ステージの上でスポットライトを浴び、サクソとのコラボでピアノを弾く人は、さっき楽屋で自分を力強く抱きしめてくれた人。父親だと知る前からその名前は随分昔から知っていた世界のジャック・ベリーだ。

初めてなのにそうは思えない温かさがある人。この人と親子であるという繋がりをいのちの底から感じた。懐かしくて嬉しくて...、ステージを見つめているだけでまた涙が溢れてくる。そんな自分に照れくさくてしょうがなかった。

軽やかなジャズから一転、しっとりとした優しいバラードが流れた時、会場はため息に包ま

れた。甘く優しい、砂糖菓子のような言葉を持っているメロディは、響もどこかで耳にしたことがある曲だ。

「あ...」

母が隣で声を出した。瞬きもせずにジャックを見つめている母の横顔はまるで恋する少女のようだった。

◇

十九年ぶりの母と父の再会――。

言葉もなく見つめ合う二人の目は、互いを捉えたままいつまでも放そうとしない。側で見ていると痒くなるほどに甘い空気に包まれた夜のラウンジだった。こんな風に三人で再会をしているのが信じられなかった。父が母と自分を見つめる眼差しはどこまでも澄んでいて優しくて。

「ありがとう、ユリ...」

父は言った。

「キョウに出会うことが出来て僕は嬉しいよ」

「そういうジャックのままでいてくれて私は嬉しい」

にっこり笑う母の顔は、いつも自分に向ける笑顔と同じだった。

「...今から三人でやり直せないだろうか？僕ときみとキョウで...。僕のところに来られないだろうか...」

母は嬉しそうに微笑んだ。だが、その微笑を消さないまま首を横に振った。

「私は今の暮らしと響を育ててきたこの場所が好き」

柔らかに、だがハッキリと言った母に響は少しだけ驚いた。

「同じ場所で生きなくてもいつもあなたのことは想っている。今の時間とこの場所と、そのまあのあなたが大切なの」

「そうか...」

父は自分と母を交互に見つめて頷いた。

「僕にも大切なものがひとつ増えたよ。とても大切な...ね」

自分を真っ直ぐに見つめて笑った父に、また涙が出そうになってとっさに天井を見上げた。

――大切なもの。

母も寝静まったリビングでひとり、響はピアノを開けてみた。昔、母が買ってくれたピアノ。今まで、誰にも言わずに密かに弾いてきたピアノだ。

さっき、ジャックが弾いた甘い砂糖菓子のような曲はきっと、遠い昔に母に贈ったメロディーに違いない。ふたりにしかわからない旋律がそこにあって、その絆は今までもこれからもずっと、別々の人生を生きるふたりの間で大切にされていくのだろう。

自分もそんな想いを奏でてみたい。大切なものを永遠に抱きしめられるようなメロディーを...

。

――ヒビク先輩の響って、すごくいい名前ですね！

「大切なものを永遠に...」

いつもと同じピアノだが、いつもと違う輝きがある――。響のどこかでひとつの決意が固まった、春の夜だった。

きみにとどくまで 1 Vivace -前編-

<http://p.booklog.jp/book/77023>

著者：笹竹颯夜

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/souya610/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77023>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77023>

著者ブログ

<http://kimit.blog57.fc2.com/>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ